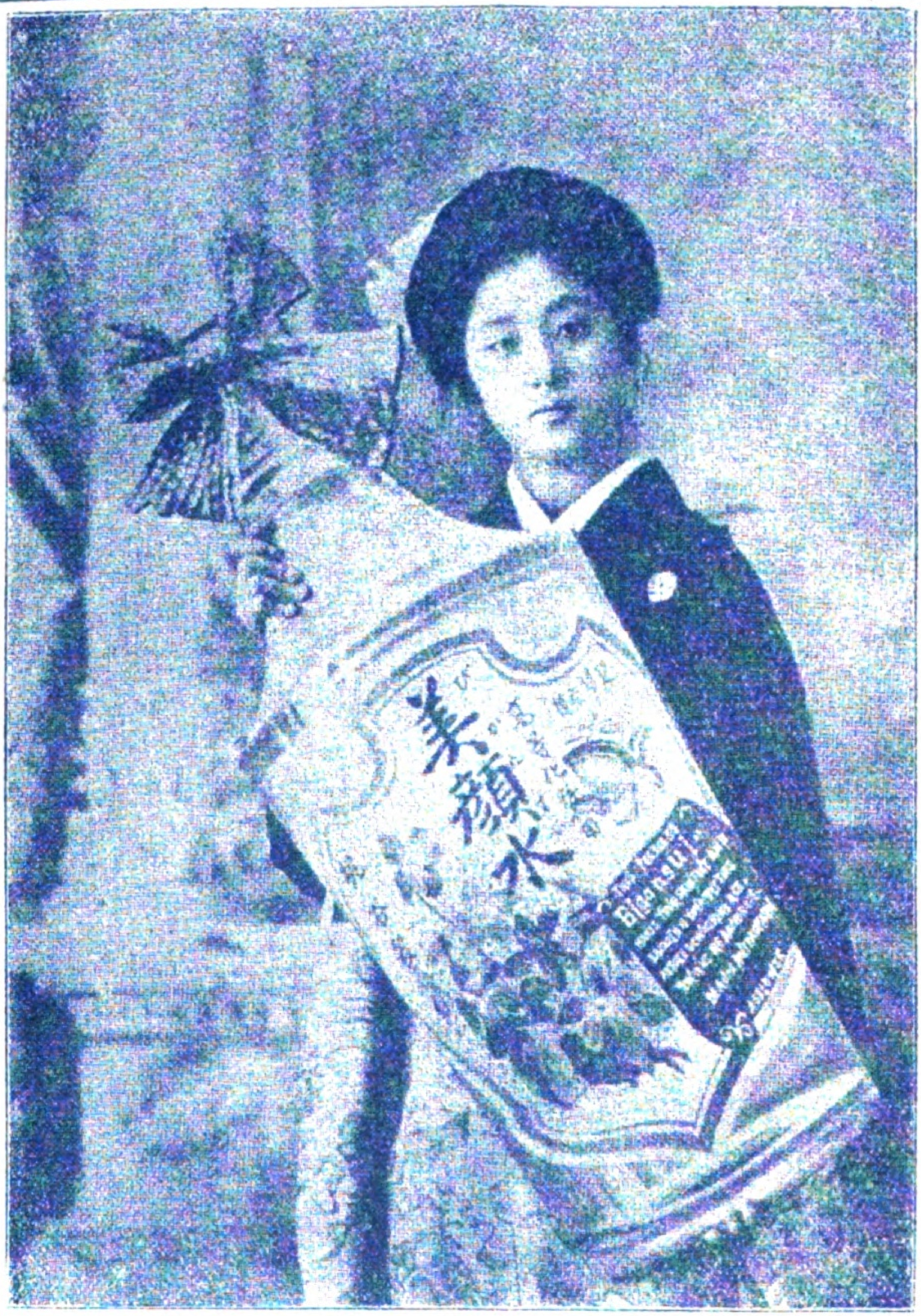
明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可
明治四十二年二月一日發行
（毎月一回一日發行）

女學世界

第九巻
第三號





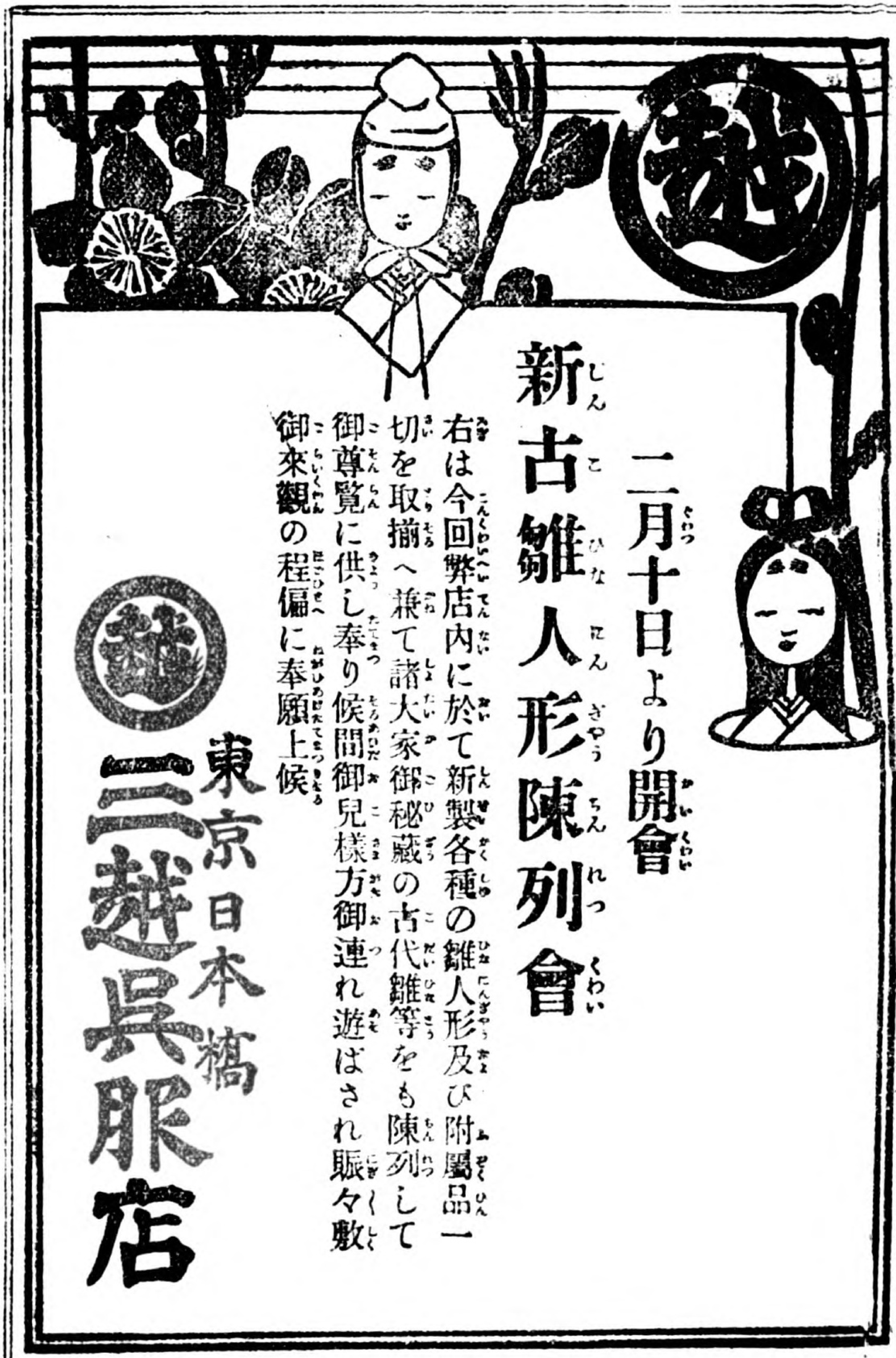
美顔水と冬季の化粧

多年の經驗と最新の學理により精製せる化粧用美顔水は畏くも、九重の雲深き貴顯を始め顯門名家の貴婦人令嬢紳士淑女の方々に召され今や最新流行の化粧水として其名世界に嘖嘖たり

●常に之を愛用すれば、色白くきめを細かにし艶美しく、又化粧下に用ふれば巧妙なる作用にて白粉濃く薄く意のまゝにのび、亦あれ性の方には最もよく、美しき姿は玉を欺き花を羞しむ

●本品御購求の節は化粧用美顔水と御指名を乞ふ

▲東京市内は勿論日本全國各地到る所の有名なる小間物店にて販賣す


越
二月十日より開會
新古雛人形陳列會
右は今回弊店内に於て新製各種の雛人形及び附屬品一切を取揃へ兼て諸大家御秘藏の古代雛等をも陳列して御尊覧に供し奉り候間御兒様方御連れ遊ばされ賑々敷御來觀の程偏に奉願上候
越
東京日本橋
三越呉服店

女學世界第九巻

第參號目次

新製

御料たつた

純無鉛白粉

◉此白粉出でゝことしの冬こそ



◉お顔の荒る氣遣ひ御無用に候

東京京橋南傳馬町

流行の指輪　大西白牡丹



(1) ダイヤモンド七個入
五拾八圓



(2) ダイヤモンド二個入
壹百貳拾圓



(3) ダイヤモンド及眞珠入
壹百圓



(4) ダイヤモンド及眞珠入
七拾五圓



(5) 廿金櫻花形ルビー入
拾壹圓



(6) 廿金牡丹彫ルビー入
貳拾貳圓



(7) 廿二金石入スミレ彫刻
拾八圓半



(8) 二十金菊花彫刻
拾參圓



(9) ルビー二個及眞珠入
拾五圓



(10) 眞珠五個入西洋花透し
拾參圓



(11) ルビー眞珠入月星形
拾六圓



(12) ルビー四個中心眞珠入
拾五圓

女（いの一）

醸造元

千葉縣野田町

茂木佐平治

天下一品

最上醤油

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に有之候



瓊姿(けいし)香油は愛すべきバラ、スミレの芳香があつて束髪散髪に適し誠に時世に應じたい、香油です

東京日本橋區通二丁目

柳屋本舗

電話本局二〇一番

本麝香入

柳清香油は充分の精製と芳香の永く保つ点に付他に其比類がありません



女(いの二)

速成書法講義續篇

侯爵 松方正義君自筆紹介序文添
天知 星野愼之輔君新習字法
本阿彌光悦、松花堂瀧本坊書翰寫眞版

新刊 書翰文字之部

書翰用字各種
手本くづし方等入

正價九十錢
送費十錢

僞り成らぬ星野氏速成法は忽ち社會の好評を得て其門下に入る者多く『假名之部』は忽ち再版成りて今や三版に着手せんとし爰に又此書成る、文字筆法、母字變體、書翰文字、手紙及び**草書のへんと作のくづし方**等親切を極む其書談の如き秘事を曝露して撥鐙法の新說、大師筆法と永字八法、死活の文字、本傳系圖、筆、墨の細論等大に世を益する者多し、家庭、學生、諸店員の必ず購ふべき書たり

正價九十五錢
送費十錢

再版 速成書法講義 かな書きの部 成る

● 日用經濟 **家庭問答**（完） 無代進呈

はがきにて東京丸ノ内報知社へ申込まるゝ方三千人を限り一部宛進呈す

發賣元 東京丸ノ内 **報知社出版部**（振替口座七三八番）大賣捌 東京堂 新橋堂 至誠堂 上田屋 東海堂 北隆館

注意 星野書法會申込所●本部相州鎌倉町笹目谷星野書法會●支部東京芝區車町八五實修會

女（いの三）


THE GEM
ゼム
衛生家必携
懐中良藥
梅咲ひ鶯歌ふ今日此頃
日影暖かなる南窓の下に
ゼムの一二粒を味ひ給へ
果して如何なる感かある
煙霞濃かなる郊外の遊に
ゼムの二三粒を試み給へ
探春の興は更に深からむ
主効
◎消化を能くし○胸傷○宿酔○頭痛
◎気分を爽にし○眩暈○傷○喉嗝
◎音聲を美くす○舟車酔○時候傷
ゼム定價
七十五粒入十錢
容器入ゼム二十錢
日本一手發賣 東京馬喰町二丁目 愛國堂 山崎榮三郎
支舗 大阪高麗橋二丁目 山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり

女(いの四)

花簪



●婦人の涙（其原因は男子の罪なり）

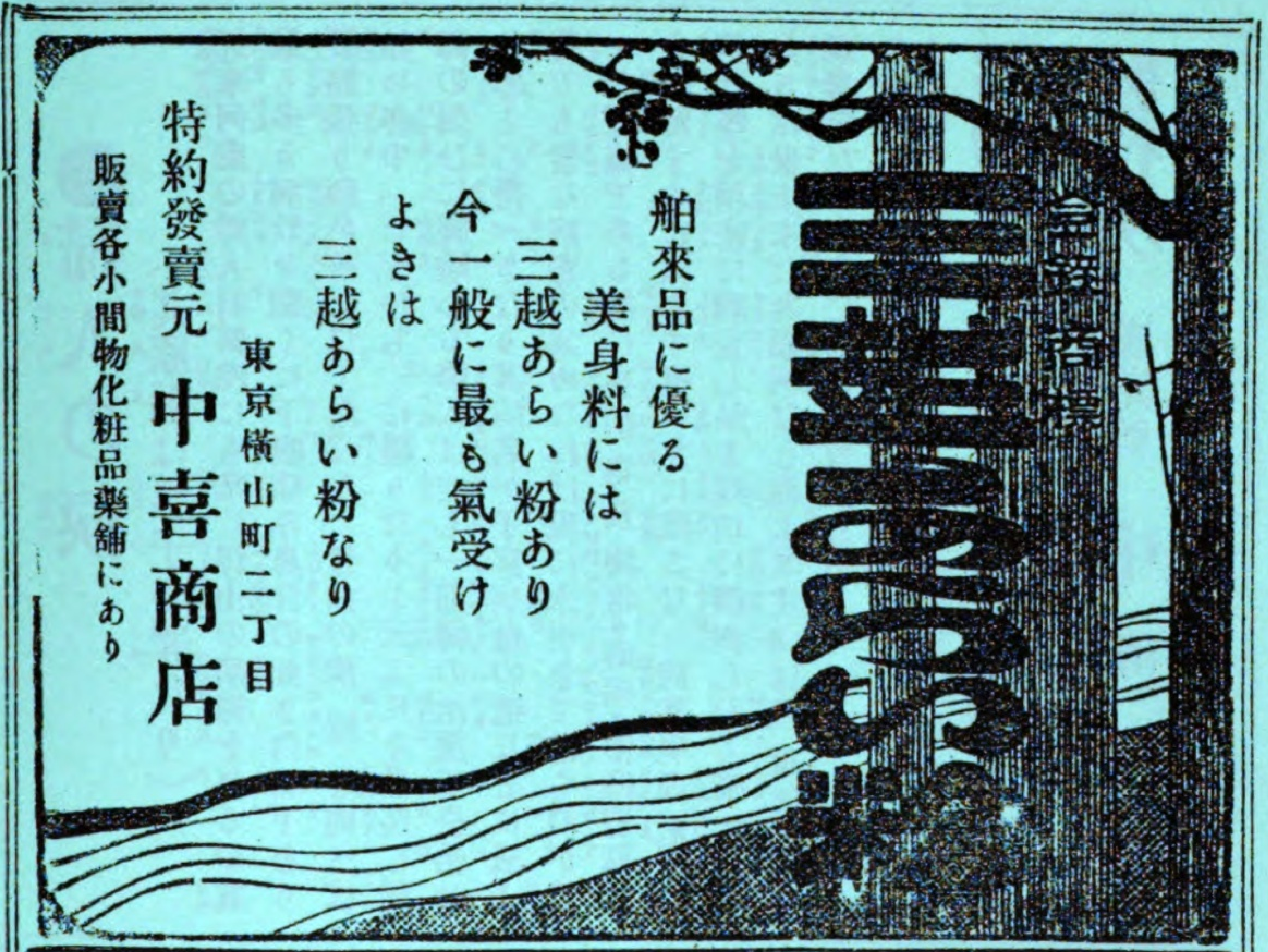
近來何處の婦人科醫院にも常に澤山の病婦を見るが其最も多き病狀を聞くに下腹痛み鼻汁の如き白帶下あり腰筋張り顏色蒼白にて白澤なく從前の病歴を問へば始め必ず「せうかち」に罹りたりと云ふ凡そ是迄に局部の煩ひに經驗ある婦人は迚も一筋繩の治療で全治せぬ事と心得べきなり其病名か子宮病血の道などに云ふ程でも皆な病毒の爲めなれば現に永引きて治らぬが第一の證據である故に本病毒及梅毒・痳病・僂麻質斯等を根治するには必ず唯一丸に限るなり尚其病理、原因、病狀等を精密に調査し最も親切に調劑したる唯一丸の如きは世上未だ其類例なし而も其主藥は現世唯一の驅毒藥なれば實に面白き程効力あり

●根治完能唯一丸藥價三日分四十錢●七日分八十錢
●十四日分一圓五十錢●三十日分三圓（內地遞送無料）
●本病患者の爲に其病理養生及治療法親切に詳述せる冊子無代施本送料三錢要す

東京市本郷區湯島天神表門中坂上
發行所 藥劑師 中西莊吉
（振替貯金口座千五百番）



女（ろの一）


登録商標
三越あらい粉
舶來品に優る
美身料には
三越あらい粉あり
今一般に最も氣受け
よきは
三越あらい粉なり
東京横山町二丁目
特約發賣元
中喜商店
販賣各小間物化粧品薬舗にあり


髪あらい粉
嶋椿
毛髪の清潔及其保護發育には椿の實
より製したる髪洗粉島椿が唯一なり
袋入五錢　罐入拾貳錢
發賣元　東京横山町　脇田盛眞堂
仝　人形町通り　三宅堂

女(ろの二)

女(ろの三)

明石



澪標



一條成美画
三宅花圃筆



煉香油
PEARL CREAM
パール
煉香油パールは毛髮の營養として多大の特效を有す
故に發育の完全毛髮の黑美及衛生上唯一の逸品也
スミレ香水發賣元
東京 平尾分店 橫山町三
（はの一）

藥科大學藥學專攻　藥學得業士金澤巖著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學説に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本

●東京市下谷區上根岸町　衛生書院

ちゞれもくせもはへうけあい

一大奇法

妾の手がけた方で此病にて諸種の買藥して癒えぬ人悉く治りし故夫れで皆様の勸めにより世間に廣く御披露せし處一人として御喜び遊ばさぬ方なし御問合せ往復はがき

東京麹町區飯田町四の十六

女髪結師　安部歌子



●佛國土産の最新白色新劑

色黒き、にきび、そばかす等にて困悶の士女よ本院特得の文明的新秘法により速に圓滿なる幸福を得られよ如何に其効能の神秘なる論より證據郵券二錢送れ美容のしるべ呈て敎ゆ

東京市東兩國小泉町二十七番地　愛隣藥院

見よ●月經なき女子●病める婦人

▲勿驚……藥力最精實…効能確保…有効無害…

●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の月經閉止月經滯り月經不順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歳になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す



博士賞賛良藥

改良 月ぎらく 女月丸

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛

●肥滿病新藥（米國新輸入）

小供の折美愛と賞せられし人も年頃になりてよりぶと〳〵肉太りたる爲め上圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑は米國パークデビス會社の模範製劑にて脂肪多き人●ぶと〳〵ふとり●血太り●肉太り●酒太り●水太り●顏赤●にきび●ふき出物多き等輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は艶白となり誓て美顏窈窕たる美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

諸嬢姉の福音

美人となる



やせる藥

藥價			送料
一劑一圓五十錢	二劑二圓九十錢	三劑四圓卅錢	十錢
		四劑五圓半	

發賣元　東京々橋中橋和泉町　振替第壹〇六七七七番

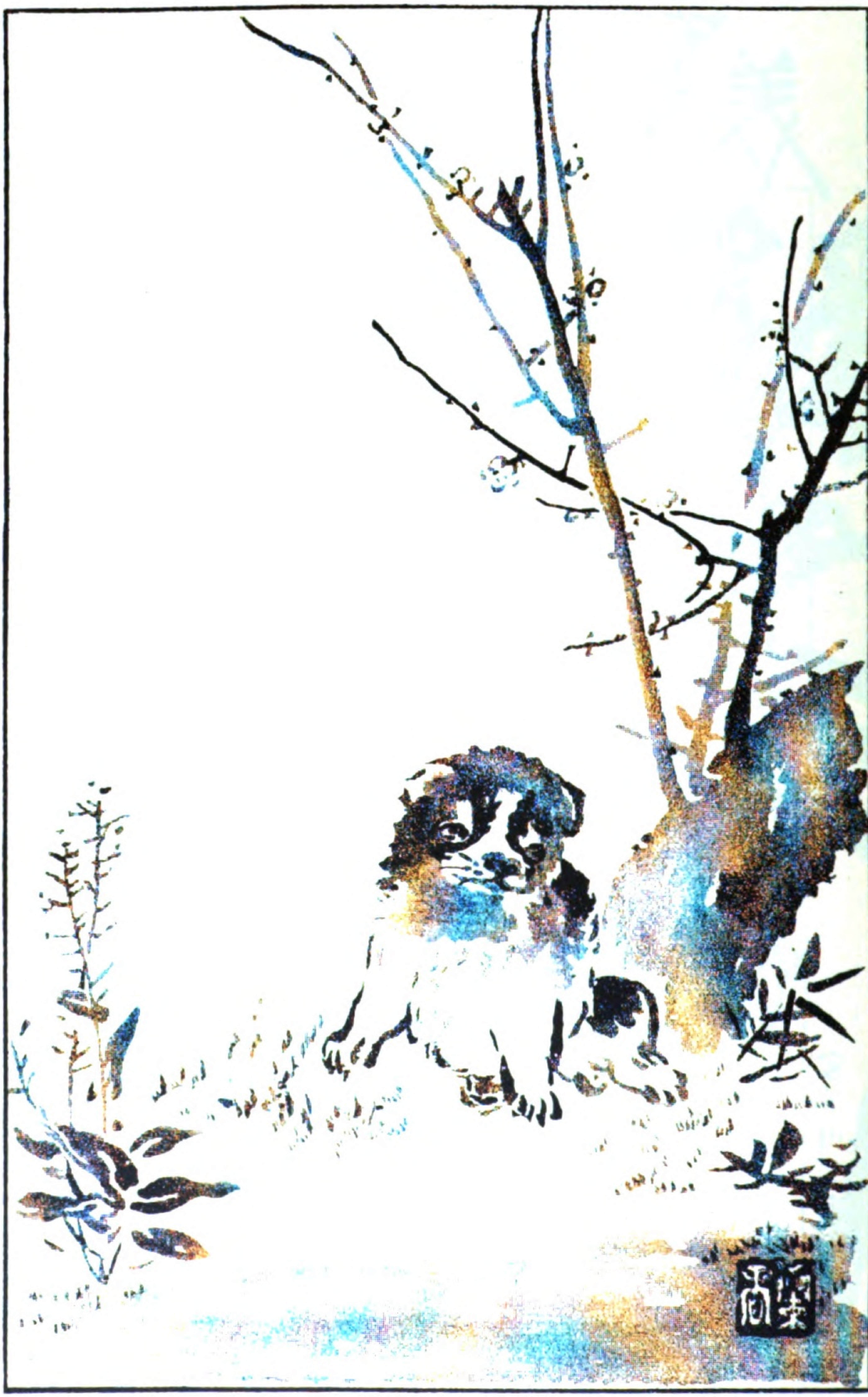
小宮愛生堂

女（はの三）


新輸入の樂器
新輸入の樂器
弊店の販賣品目……
山葉オルガン。山葉ピアノ
鈴木ヴァイオリン。鈴木マンドリン
舶來ピアノ。オルガン。ヴァイオリン
樂隊用吹奏樂器。譜面臺各種
オーケストラ、ホーン
新年各種の餘興には尤も適當なり賃貸の御需めに應ず
手風琴。フラジオレット。ハーモニカ各種
各樂器附屬品。和洋音樂書。樂譜用紙
樂器の月賦販賣及賃貸應需
ピアノ。オルガン調律。修繕應需
弊店の營業課目……
郵券弐錢御送附あれ目錄進呈
東京市京橋區竹川町十三番地
合資會社
共益商社樂器店
電話新橋五二九●四八〇番
振替貯金口座一五八〇番

女(はの四)

早春



河崎蘭香筆

鷄群



宮川安信筆

美形隆鼻術

施術 毎日午後

本術は唯一回の注射に依て低き鼻を隆くし見事美形ならしめ終身凹むことなく身體に害を及ぼさゞる安全確實の文明的手術なることを保証す

大學醫院辭職 和田昌訓

神田區今川小路二丁目十一番地（九段坂下御獄教會裏通）

和田耳鼻咽喉醫院

らい病

●醫師は癩病者を診察せば届出る規則なれど藥劑師には其規則無れば決して他へ知れることなし安心服用あれ

ザノサール　一ヶ月分　貳圓

複方ザノサール　一ヶ月分　參圓

此のらい病藥は世界の有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分拆し其主成分に更に最近の發見に係る治癩新藥を加へ且つ當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる新藥なれば一度使用して其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむる事は難事なれども其病勢の甚しからざる中に參圓分を四ヶ月服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても二藥を六ヶ月併用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陷れんとする瞞着主義の賣藥に非ず

本舖　醫科大學卒業藥劑士　從七位勲六等　三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主

中島龜之丞鑑製

美髪療法

本會々長石原ドクトル多年の研究と實驗せる學理に基き左の毛髪變常症に對する最新有効の自宅治療法を教ゆ

▲ちゞれ髪 ▲くせ髪 ▲薄き髪 ▲赤髪 ▲白髪 ▲禿髪症 ▲染髪藥 ▲毛生藥 ▲脱毛藥

◎通信手續は返信料添へ照會あれ

横濱市山田町二丁目十四番地

治療研究會



女（にの二）

女（にの三）


婦人の最大なる幸福は美しき容色にあり
毫も鉛毒のない伸びの良い芳香の高尚な大學白粉は婦人の美しき容色の友なり
大學白粉
東京 大阪
矢野芳香園

(たの四)

カイゼルの家庭



獨逸皇太子殿下并に妃、第二皇孫殿下

獨逸皇帝陛下并に皇后、第一皇孫殿下

獅子に寄る女神

泰西名彫刻

ダン子ツケル作大理石像



毛髮を黑く長くふさ／＼する
椿油にて精製したる

女學世界愛讀者に限り本店は一割引

ランラン香油

毛髮の營養には椿油ほど好い者はありませぬこれは衛生大家及び毛髮を大切にせらるゝ御婦人方の實驗證明せらるゝ處でありますが此普通の椿油は厭らしき臭氣がありますから之を除去せねばなりませんランラン香油は最も純良なる椿油に毛髮の營養に必要なる藥劑を加へローズバイオレットの高貴なる香料を以て彼の惡臭を防ぎ毛髮の助育を專一としたる香油也

發賣元 大阪西區新町通三丁目 福田源次郎商店 電話西千六百壹番 振替口座六〇八六番



東京販賣所
日本橋區通鹽町 佐野大和屋
日本橋區横山町 森本支店
日本橋區横山町 脇田盛眞堂
神田區橋本町 松井號支店

皮膚の營養には牛乳に勝るものなきことは皆樣の御承知のことでありますが近頃亦レモン液の肌を純白ならしめ殺菌の效あることを發見せられましたランラン化粧水は牛乳とレモン液とを調配したる最新最良の美顏劑を加へて色を白くし小皺を伸し吹き出ものを除き夏季の日燒け冬季のあれを防ぐ特效ある化粧水なり

色を白く肌を艶麗ならしむる
レモン牛乳にて製せる

兩種共一瓶定價各廿五錢送料八錢づゝ

ランラン化粧水

女（ほの一）

發行部數東洋第一の本誌の大文字を見よ

婦人世界

二月一日發行 四卷二號 一冊拾五錢 郵税一錢五厘 半年分郵税共一圓五錢 一年分二圓五錢

◎自ら進で盲目い法學士に嫁し日夜良人を慰藉せる貞女の鑑（一記者）

◎舅を感服させたる新渡戸夫人の話（一記者）

◎私の見た千代田奥女中の生活眞相（村田一鷲）

◎十二人の子供を教育した苦心（松山棟庵）

◎弦齋夫人の料理談

◎姙婦が看護婦を選ぶ時の注意……（榊博士）

◎京都女……學生の風俗……（小山生）

◎斯くの如き婦人は妻君檢定試驗に及第す……山脇房子

◎士族の娘が昔風の商家に嫁して驚いたこと……靜間千香子

◎夫婦の情愛には度合が肝要なり……村井弦齋

◎私の今日あるは母と妻と婢僕のお蔭なり……三輪田元道

◎雙生兒を産みて母の手一つで育てし實驗……與謝野晶子

◎婦人の毛髮を美しくする法……（博士岡村龍彥）

◎名流婦人十八歲當時の回顧

◎新說歷史講談 節婦の最期 刀水漁郎

◎古今文藝談 渡邊白水

◎貴婦人新年會

◎懸賞 文藝◎笑話◎口繪 習字◎寫眞その他

◎田舍から東京に出て來て墮落した婦人の小說的實例 東京出獄人保護事務主管 原胤昭

東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 （郵便振替貯金口座參六番）（電話新橋八七四番） 賣捌全國書店

女（ほの三）

暖風麗日の冬遊び場



冬季数ヶ月間欧洲の遊客を以て充満せる佛國南部メントンの避寒地

花見ころも



井上華仙筆

紀元節祝賀式と男女小供洋服

紀元節は近く來らんとす各學校は例年の如く莊嚴なる祝賀の儀式を擧ぐべく生徒諸君は今日を晴れと盛裝して參列せらるべし此場合に於て優美高尚にして而かも經濟的なる洋裝が如何に愛兒をして一層可愛らしく且つ勇ましからしむるかを父兄諸君は推想せよ如何に國粹を唱ふる人も如何に舊習を重んずる人も時代の變遷に勝つ能はざるを知る既に諸君が朝に夕に街上に見る洋裝の男女少年の風采が如何に東洋文明國の少年たる態度に適應するかは吾儕の注言を要せずして諸君の熟知する所なりと信ず

當店には澤山出來合が揃へてありますから御來店御一覽下されたく又東京市内御注文のお方は電話本局二一九〇一番端書ならば神田鍛冶町廿七番地へ御申越し下さらば畫形と切れ地見本とを持參早速御伺ひ御容姿に恰好いたすやう調進いたすべく候



注意

地方の御方は御年齡と豫算とを御知らせ下さいますれば最も流行なる形で作つて御送り致します

中野屋洋服店

(本　店)…横濱市辨天通り四丁目八十番地(電話三四四番)
(東京出張所)…神田鍛冶町廿七番地(電話本局二九〇一番)
(韓國出張所)…韓國京城……

女(の一)

女(への二)

東洋婦人画報

二月一日發行　毎月一回

二月の巻

定價金廿五錢　郵税二錢

◎暗香（彩色石版美人畫）……………鏑木清方畫
◎閑院宮御邸御庭園に於ける四妃殿下
◎梨本宮妃殿下の御渡歐
◎愛國婦人會新年會に於ける東伏見宮妃殿下
◎婦人衞生會新年會の餘興と會員
◎伯爵夫人と子爵夫人

▲意氣地なき婦人界の傾向　伯爵 土方久元

◎松平子爵令孃と相馬子爵令孃
◎三井男爵家の大廣間と四季の間
◎富士見軒に於ける婦人年始會
◎東京女學館同窓會員一同
◎盆景と生花
◎秋元子爵一家の觀角

▲日本婦人は無比の長所を有す　子爵 金子堅太郎

◎男爵家の新造庭園
◎横濱に於ける村雲婦人會
◎未開人の弄ぶ人形（奇なるイデアンの人形）
◎竹柏會小集と證書授與（職業學校）
◎雪中の女琵琶師と侯爵家の鴨獵
◎茶室山雪床と鎌倉時代風の客間

▲女は何故に結婚を悲しむか　文學士 三輪田元道

◎ゆかしき集り（愛隣社にて養成されし人々）
◎寫眞に現れたる色の濃淡
◎可愛らしき少女の集り
◎富山授産場の刺繡とミシン
◎新作水引結び
◎英國女學生の學校生活

▲大罪を知らずに犯す親……醫學博士 片山國嘉
▲失敗の結婚と成功の結婚……東京女學館の學 西田敬止
▲壽命の話……………ドクトル 富士川游
▲予が祖母鴒子と姉景子………佐々木信綱
▲流行に就いて…………梶田半古

▲旅館の女中に依て多くの教訓を得し避寒中の經驗　安井哲子

▲訪問日記（東郷鐵子夫人）……ゆき子
▲職業を求むる婦人の苦心談……秋香女史
▲若き妻の正月日記……古乃久麗女史
▲女事務員の休日……かなる女
▲女が見たる男の缺點……須磨子
▲和洋料理の栞……龜井まき子

▲許嫁の實例……………遠山稻子

▲少女對話占ひ婆……水野葉舟
▲小說お榮……齋藤弔花
▲美文二月……太田水穗
▲詞藻浪の音……竹柏會同人
▲女官の生活……横田東民
▲衣服の紋……水口薇陽

▲未婚時代の樂み……秋元春潮

▲出產前後……醫學博士 木下正中
▲育兒の手引……女醫 鷲山彌生
▲鶯の妙音……理學士 紫風山人
▲結婚の習俗に就いて目に觸れた事……G R 生
▲人相より觀たる美人……中山石庭

女（への三）


御料
畏き邊りの
御料に召させ給ふ
高貴御化粧料
御園白粉
製造本舗
東京芝
胡蝶園
發賣元
東京日本橋區橘町四丁目
丸見屋商店
ねり製
御園白粉
水製
御園白粉
こな製
御園白粉
洋風化粧クレーム
御園の蕾
高等化粧水
御園とき水
御顔ふきこうち白粉
御園なでしこ
濃厚化粧水
御園四季の花
御園香油
御園香水
高等はみがき
御園歯磨

(八の四)

名家の令嬢



井上子爵(勝氏)令嬢辰子



徳川家達公令姫綾子



毛利子爵令嬢三穂子


享和元年創業
日本ニ於ケル時計商之元祖
宮内省
御用達
卸小賣
營業品概目
時計附屬品、指環、簪、帯留、ブローチ、手釦
紀念品一式
最新の流行品目録郵券六銭封入御申越次第進呈す
D.K.
東京市京橋區八官町九番地
小林時計店
電話新橋 一〇〇三
電信略語
振替口座 七八〇七
紀念品
賞牌メタル
迅速廉價

(その一)

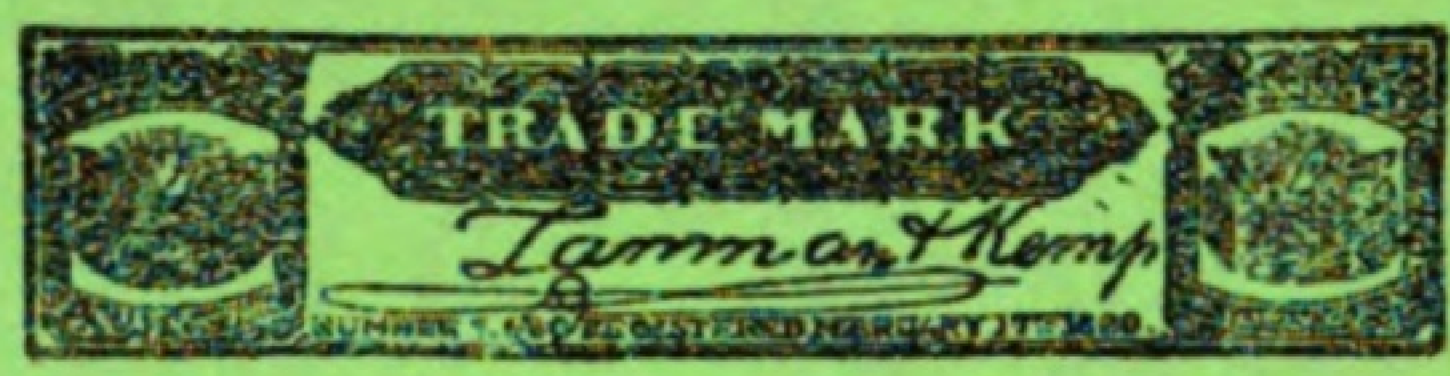
ムレー及ランマン製「フロリダ、ウオーター」はハンカーチーフに撒らし又は化粧、沐浴等の使用に向つて最も高尚適當なる上品にして香氣優雅當に心身爽快を感ずるを以て洽く世界各國に高評を博せる香水なり



本品は芳香馥郁なる花卉及薫氣を蒸溜して採取せる純粹の原料を精選して鑿造せるものなれば四時其香氣を變ずるの憂あることなし、是れ本品が殆ど過去一百年間貴紳淑女間に其聲名を認識せられ世界的流行の高等化粧品として賞讃愛用せられし所以にして決して偶然に非るなり

近時本品の成効を羨み粗惡品を僞造し廉價を以て之を市場に販賣せんとする奸商簇出し本社が古來貼用し來れるレッテル即ち蝶と小鳥とが花の飾環に息ひ中央の花壇上に噴水奔騰し右方には一青年の音樂を奏し左方には一少女の小鳥と遊べる等の繪畫を僞造し且つ英文にて印刷しある「フロリダ、ウオーター」、ムレー及ランマン、紐育市ランマン及びケンプ特製」等の文字の配置を巧みに摸倣するに至れり

之に依つて本社は前記の弊害を防がんが爲め玆に圖を以て示せる如く「ランマン及ケンプ登錄商標」と記せる白色のレッテルを各瓶毎に貼付せり御購求の際は深く御注意あらんことを希望す



本社製造の「フロリダ、ウオーター」は日本帝國の各都市に於ける化粧品販賣店及び西洋小間物店等にて販賣す

實用浮石鹼

英國 ボヅソン、ヱンドシンプソン會社 特製品
千九百〇八年八月最新輸入品

會社の自慢本品特點

香氣の高きは
本品特點なり
價格の低きは
本品の特點なり
實用に適するは
本品の特點なり
上流界に好評を博すは
會社の自慢とする所也

レックス



論より證據實地御使用を乞ふ

東洋輸入元 東京 ヱスシー

賣捌所は全國到る處の信用アル
舶來小間物店及ビ化粧品店ニ有

ケーバー石鹼

舶來石鹼界の覇王と稱せらるゝ本品は本國にて品質に一大改良を計りし爲め一月元日より値上げ仕り従來の直段より

大形壹個に付 五錢增し
小形壹個に付 三錢增し
と相成申候

(との四)

東洋一手代理店 竹間商店

名流婦人



女官 奧村てつ子



藤田平太郎氏（大阪の豪商）夫人とみ子（芳川顯正伯令孃）



山座圓次郎氏（英國大使官參事官）夫人 賤香子

本品は

全國有數の同種類中其の質最も佳良にして又實用に適せるが故に世人の賛辭と需用益々多大なり

本品を以て

赤毛を染むる時は優に半ケ年以上を保つと云ふ奏効禮狀日日到着せり

使用法

手輕にして實用と安全とを兼備す



少年世界 第十五巻第三號 増刊

入學案内

洋装菊判紙數百卅六頁　美麗寫眞版挿入

正價金拾錢　郵税壹錢五厘

全一冊

二月十五日發行

學年試験の時期漸く切迫して、少年社會は玆に新たに中等學校入學の準備に着手すべき事とはなりぬ、入るべき學校は多く、受験の科目又決して易からず、千百人の志望者を凌駕して、名譽の桂冠を戴くは難事と云ふべし、即ち本誌はこゝに入學受験者の好資料たらしむべく、其春期増刊として、入學案内の一冊を提供するもの、深く諸君の前途を思へば也來れ天下の少年諸卿、速に此書に問ふて進むべき也。

◎口繪……尾竹國觀畫　◎表紙……中村不折案

お伽講話 一の谷……巖谷小波作

懸賞 和歌俳句披露……佳作數千篇

▲本文記事大要　◎戊申詔書略解◎光榮ある卒業式◎出京者の心得◎我が志望◎實業學校入學の目的◎出郷の一夜◎中學一覧◎受験準備◎受験答案◎其他十數篇……

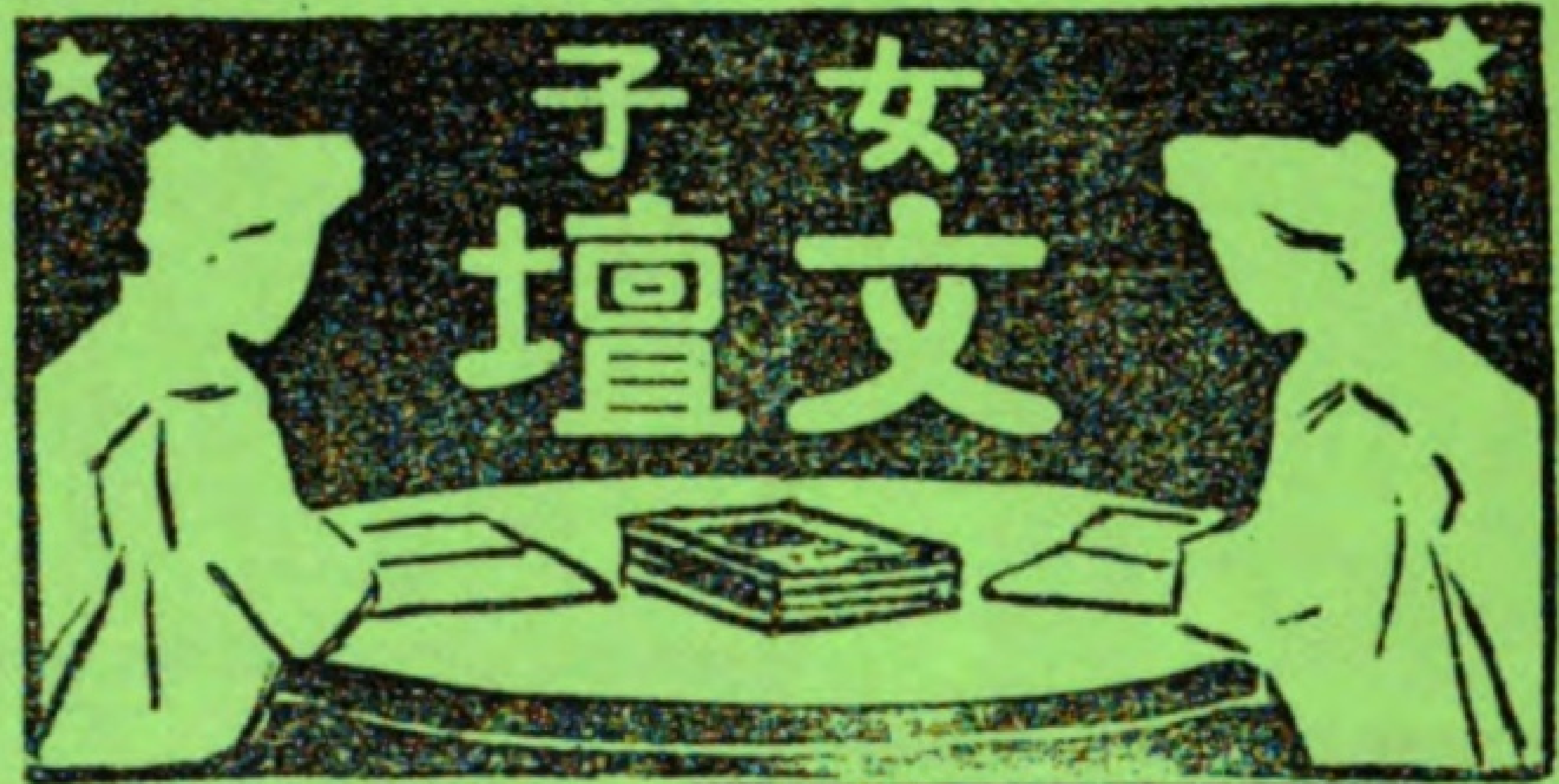
東京本町
博文館
發行



(ちの二)

子女の品格を高めたい父兄は本誌を讀ませよ、家庭と文學を調和せる無類の最好雜誌

本誌新年號は驚べき好評を以て世に迎へられたり更に二月號の新粧を見よ



女子文學雜誌としては天下一品・花も實もある評判の雜誌也

二月一日發行（毎月一回）五卷第二號 一冊拾五錢 郵税壹錢五厘 半年（八冊）壹圓三十四錢

增刷出來 **新年號**
最寄書店にては發行所へ注文あれ
附錄共二百頁 定價拾五錢 郵税壹錢五厘

口繪
○名畫（原色刷）鶯籠…雪女（美麗）三隅筆（石版着色）○御題入選歌人○在米の日本婦人會合○誌友諸孃寫眞○女學生の活人畫他數葉鮮麗

現代の閨秀作家（大塚楠緒子 岡田八千代子 與謝野晶子 肖像）文士の夫人（有明、葉舟、御風 三氏夫人）

○家事見習ひの大切なる年頃…羽仁もと子女史

◉作家としての女子…夏目漱石

◉見た處の西洋婦人…上田敏
（附り世界各國の美人相）

◉新しき意味の寫生文 高濱虛子

◉米國婦人の結婚前 最近歸朝者 山田靜三

○群…島崎藤村

◉これらを歌ひて…岩野泡鳴

◉山桔梗…横瀨夜雨

◉新派和歌の趣味…窪田通治

◉美文の作り方…西村醉夢

◉花言葉…水野葉舟

◉文壇時言…服部嘉香

◉作家の住居…紫火生

◉英文（第二）…河井道子女史

懸賞作物
○小說○美文○散文詩○お伽噺○和歌○俳句○新體詩○書簡文○短文○家庭日記○敎庭○歌謠○論文○餘興○笑話○スケッチ

投稿自由懸賞確實

衛生問答 產婦科專門醫學士應荅

臨時增刊 **新美文**
二百卌頁入賞作家肖像入
定價貳拾錢 郵稅二錢
（二月十五日發兌）

東京京橋區大鋸町 女子文壇社 發行（振替口座壹七貳九番〇 電話本局六七番）賣捌所全國到る處にあり

女（ちの三）

消化新藥 タカヂアスターゼ

本品は毎瓶強度一定効力永久不變なりこれ高峯博士發見の新法式に從ふ特長なり

澱粉不消化の一般徴候

醫學博士谷口長雄氏曰く『…澱粉不消化に因する重なる徴候は胃の膨大、疼痛、溜飲、腸内瓦斯蓄積便秘若くは下痢等にして甚く營養の障害を來す是等の疾病に對しタカヂアスターゼの頗る有効なるを信ず』(説明書は直接發賣元に請求せよ郵呈す)

東京市日本橋區南茅場町貳番地

三共合資會社

滋養新劑 グリコナール錠

本品は各地有名藥舗にあり本品の説明書は直接發賣元に要求せられよ無代郵呈す

醫學博士 北里柴三郎氏指導の下に化學者佐伯矩氏が牡蠣の滋養成分に就き研究創製せる本劑は滋養劑として肺病及一般病者虚弱者に必適なるのみならず之を用れば自から心臟を強め盜汗を制止し速かに體力を恢復して元氣を旺盛ならしむる特異の効顯あり

東京市日本橋區南茅場町貳番地

三共合資會社

女(ちの四)

ミシン裁縫實習



加古川小學校に於けるシンガーミシン裁縫學院の講習

●臼田式寫生造花術は從來の造花術の道具の高い事道具の數多い事手間の係る事寫生の出來ぬ事其造花の最洗滌の出來ぬ事此等缺點を補はん爲め廿有餘年の研究を積今日初て其發明を成効し直に特許允請をなしたる最も嶄新なる則ち廿世紀の造花術なり▲ポーレート型は一種の練物型にして其材料は最も廉價にて最も取扱ひ安き薬料を以てし之れを實物の葉又は花瓣に添はしめ後は人爲を加へず一の化學作用に依賴して僅か六時間の間に造らるゝ所の寫生型である故に從來の五圓の押湯を使ふ所が僅二三錢のポーレート型にて事足るなり▲外に又堪水法の發明ありて其造花に塵の積りたる時水霧を吹懸け之を流し去る事を得る故に其美観を永久に保つ事が出來る▲當所は此等の秘訣をも最も平易に且出來得る限仕事の雜大を退け娯樂を旨として製作し得る樣敎授▲束修金參圓月謝毎期前金壹圓五拾錢▲修了三ヶ月▲但學生諸氏は其學校の證明書に依り各金額の二割を低減す▲右講習期間を三期に分ち毎期に講習書壹部を交附す不明の點は郵券參錢添え問合せあれば即時叮嚀に回答す▲郵券六錢を送らるれば『ポーレート型』と絹布紙葉と寫生堪水造花との寫眞三枚及趣意書明細書等を送呈す▲大阪市北區西野田龜甲南町九十三番地臼田式寫生造花術講習所

特許允請二件

ポーレート型 臼田式堪水 寫生造花術

通信教授

●別に當所に通學御企望の方は御來所の上諸規則御熟覽の後に入門御申込の事●

造花原料

東京九段坂

吉住商店

電話番町二〇五六番
振替口座六六七九番

●營業目錄●＝御入用ノ方ハ二錢切手封入東京九段坂＝吉住商店宛申込マルベシ直ニ進呈可仕候

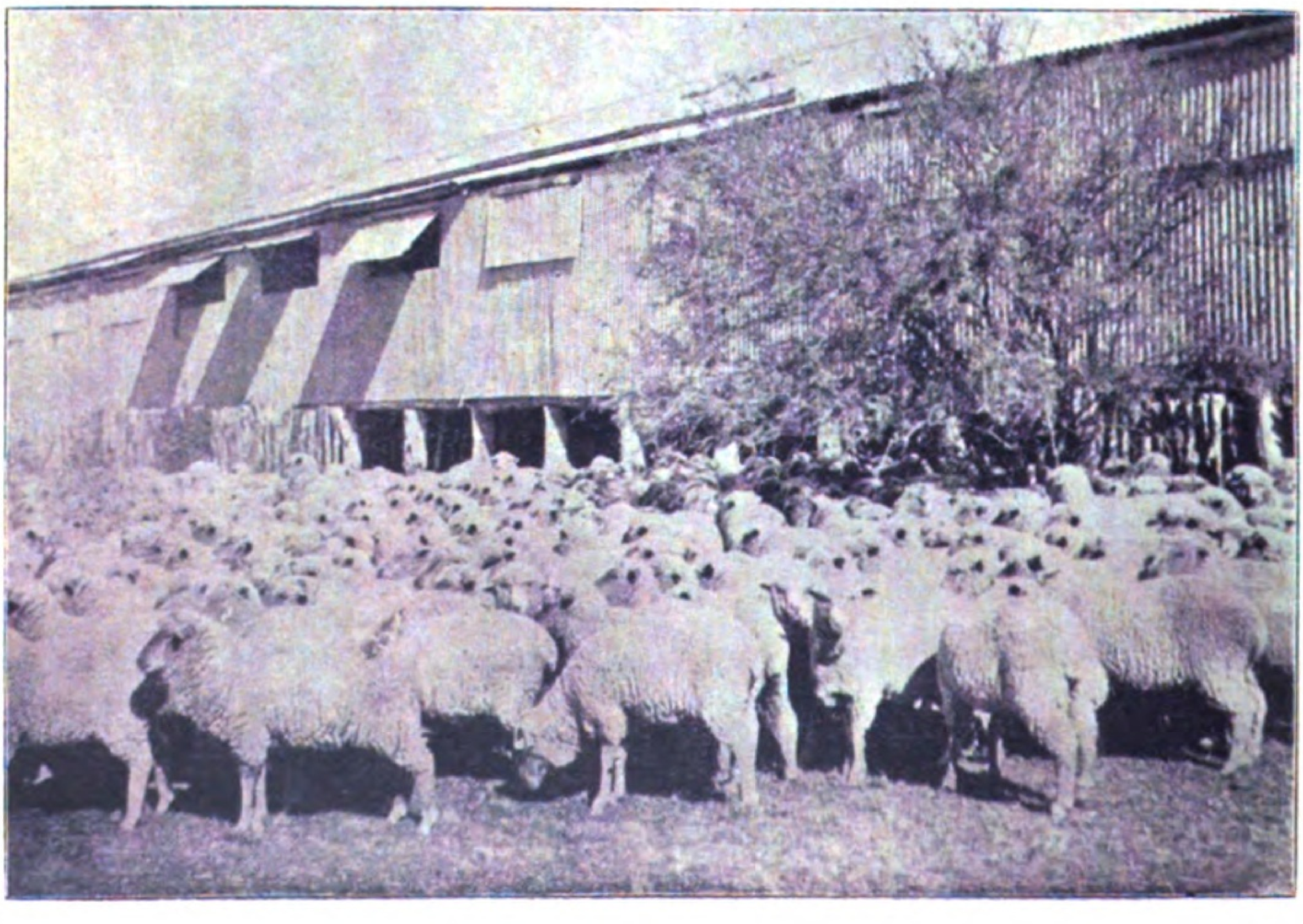
女(りの一)

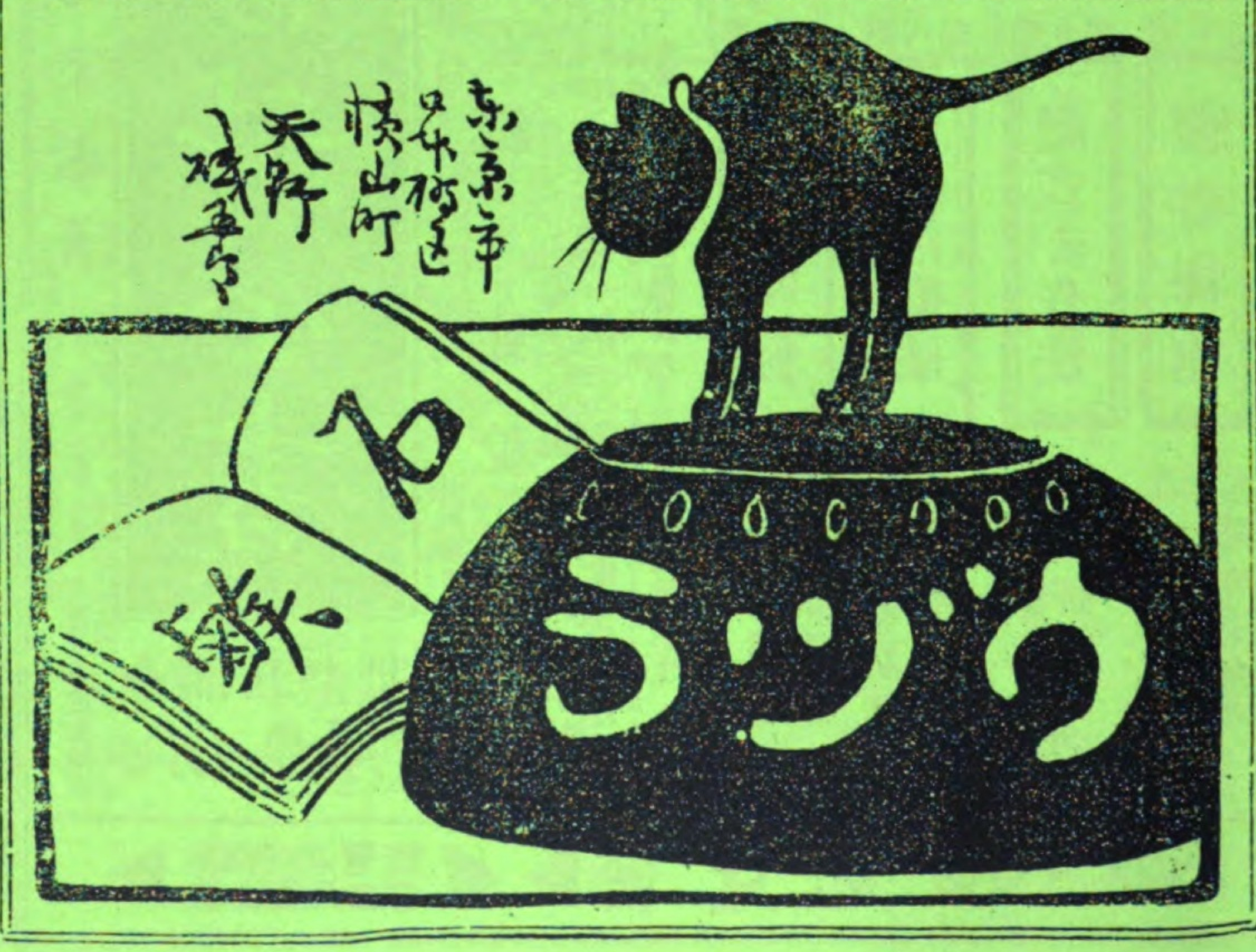
女(りの四)

乳牛と綿羊

濠洲クインスランドに於ける日本人の牧畜事業







東京市
日本橋区
天野

女(ぬの二)

女（ぬの三）

女學部新設

實用女學講義錄 發行

▲本會は中學講義錄の發行に從ふこと既に五ケ年通信教授に於ける甚深の經驗を基礎となし今回更に女學部を新設して『實用女學講義錄』を發行せり。

▲講習期一ケ年半、此間に於いて高等女學校程度の學課は勿論、本邦家庭の事情に照らし女子必須の諸科目を講說し圓滿なる主婦を作る事を目的とす

▲講義錄は毎月二回發行とし講師は教育に經驗深き斯道專門の名家のみ也講述極めて平易、總ふり假名の談話體なれば何人も解し難き憂なかる可し。

▲毎月機關雜誌『新國民』を發行して會員に限り毎號無料進呈す『新國民』は現代知名の專門教育家及び斯道大家の訓話學說創作及び會員の投稿を揭ぐ

▲會長尾崎行雄親しく本部を監せらる。組織整頓し取扱最も懇切也。且つ會費極めて低廉都會一ケ月の遊學費を以て優に全學科を修了する事を得べし

◉新學期開始‖至急入會者に限り入會金全免すべし◉

大日本國民中學會女學部

東京駿河臺

電話本局三千〇四番
振替口座四千二百番

見本つき規則 無料進呈

君、勝ち給ひしや。

今日よりこそ。と勇ある言葉が、元旦の試筆に輝かせ給ひし大文字は、今も尚、健全なる生命を保てりや。

然り。と涼に答ふる君あらば幸なり。有らば、真實の勇者なり、強者なり、勝者なり。さるを茲にふたゝび、繰り返さん日の来りしを悲しむ。

世界の大半が婦人によりて、動きつゝある事を自覚せし日、婦人等は初めて、尊く崇き我れなるを悟りぬ。

然れども、徒らに口にのみ、筆にのみ、婦人の自由、婦人の開放を叫ばん前、先づ囚らへられたる己れの心を、清き自由の境に脱せしめよ。

虚栄、利己、逸楽の自由の強敵と闘つて、意義あり、光輝あり、價値ある分時を千載に積まば、明けて暮るゝ永久無限の時に向つて、我れ等は常に、光明に生き得られん。

強者は自ら運命を支配すべきもの。

記憶す可し。絶えず婦人等が望む處の、婦人の自由は、必ず、斯かる幾多の強者、勇者によつて、自から開らかるゝものなる事を。

萩花





人間萬事に應用して行くところの働らき

女子大學學監　麻生正藏

△何故に今の女に活用が出來ぬか

私が米國に行つた折、紐育で一婦人に恁ういふ事を聽いた。「どうも日本人は來る人も〳〵皆how（如何に）ばかり尋ねてゐて、更にwhy（何故）を聽く人が無い貴女の國では是々の事は何麼風にしますか、といふ事は頻りに聽くけれども、「何故さういふ風にするか」といふ事を更に聽かない。あれで日本人は果して活用が出來るだらうか？　疑はしく思つてゐる」と。

處が近來愈〻どうも「如何にして」が流行るやうに思ふ。敎育上其他に於て頻りに「如何に」ばかりが繰返され、同時に又それが婦人一般の傾向のやうに思ふ。處が私も彼の紐育の一婦人の言うた事を夙に感じてゐたので、單に「どうすればよいか」といふ表面の方法だけを注意してゐて、その奧の道理といふものを一向知らないでは、到底活用の利くものではない。看護とか育兒とか料理裁縫とか、皆恁ういふ時は如彼する、如彼いふ時は恁うすると聞いたのみでは、その他の場合には直ぐ困つて了ふ。今の女學校卒業生が役に立たない〳〵と非難されるのも、この原理――卽ち腹が出來てゐないからであらう。それといふが婦人自からが注入されることを喜び、模倣することばかりに走つてゐて、自分で考へる事をしないからである。私は日本の女子に一番缺けてゐるのが此の點だと思ふ。

△頭腦を使ふて工風する

心理學上から申しても婦人に一番缺けてゐるのは思慮的動作、即ち考へる事である。處が新時代の風潮といふものは總ての人が「考へ」「思慮する」やうに益々なつて行くので、婦人ひとり唯無考に動いてゐる譯にはゆかない。

さりながら唯「考へる」と言つても漠然としてゐるが、つまる所例へば學校で物理や化學の話を聴いても、唯「ハ、ア」と言ふだけでなくてそれを彼處へ應用したらと考へて見る。地理の本を讀んでも地方や臺灣さては滿洲朝鮮へ行つてる緣邊、知人の上などを考へ合せて見て、それで眞正に了解もし、應用もする。歴史の話を聴いても同じこと。自分がその時その塲合に立つたらといふ風に考へてゆく。恁うすると所謂人事の處置にも見識が立つてゆく。

すべて恁ういふ風に考へて學び、考へて行つて行くことが肝要で、さうすれば自然と新らしい見解も新らしい頭腦も出來てくる。頭腦を練るといふと直きに數學の必要を持ち出すのが習はしになつてゐるが、決して數學だけでゆくものぢやない。恰ど碁打が盤に向はせれば上手でも、人事上の判斷は必ずしも上手でないやうな——むしろ人事上には却つて迂濶な人もあるやうなもので、すべて交際でも應對でも作法でも家事、經濟でも、何でも皆考へて見ねばなりません。

△一生の仕事は皆疑問とおもへ

これは話が飛ぶやうだが總べて天地自然の事、人生人事は疑問を以て滿ち〳〵て居る。そして日に月に問題は殖えてゆく。この問題の幾部分でも解釋し實現してゆく所が即ち人間社會の進歩である。例へば航海にしても、天文學を研究し地理學を應用し、又器械の利用を研究して初めて解決してゆくので、一つでも解決すればしただけの文明が進んでゆくわけ。一個人の上でもその通りである。

女が家庭の人として——又社會の人として立派な、

光榮ある婦人となるといふのも、つまり家庭（社交）に於ける問題解釋を善くする事なので、婦人一生の仕事は矢張自分の負擔する方面での問題の解釋なのである兩親をば何ういふ風に、取扱つたら可いか。夫には何ういふ風に事へたら可いか。家政は何う取つたら可いか。社交は何うしたら可いかと、婦人の身の周邊にも問題は滿ち〳〵てゐるので、その解釋實現が婦人一生の職分で、その他に別に婦人の仕事はないわけである。

この點から見ても婦人は「考へる婦人」にならねば何うしてもだめである。處が賢母良妻は恁うせねばならぬ如彼せねばならぬと、「如何に」といふ方法ばかりを注ぎ込まれて、少しも「何故」といふ所からして自分で考へ出して見る事をしない。これでは、一生自から問題を解釋する力は無くて終つて了ふ。そして目的の賢母良妻にも眞になられず、又進歩せる立派な婦人には到底なられぬ。又常識といふものもつまりは問題解釋力なので、何方から見ても此の力ほど婦人に大切なものは無からうと思ふ。

△向上心の泉

人が常に進歩しよう〳〵といふ向上的精神といふものは、恰ど脊髓のやうなもので、これこそ人の根本であるが、これが又今の日本婦人に大變缺けてゐると思ふ。

よく私の方の學校へ新に來た教師が、「此校の生徒は何うもいろ〳〵な質問をする。先生恁ういふ事を讀みましたが何ういふ意味ですかとか、是々の事を調べたいと思ひますが、何ういふ方法が可いかとか、何ういふ參考書があるかとか、何うもいろ〳〵な事を尋ねられて、中には原書にでも據らねば答へられぬ事もあるし、何う指示したものだらう？」と言ふ事がある。つまり私の方では總べての學科を成るべく問題として與へて考へさせるので、そして自ら解釋し得ると非常な興味を覺えるので、勢ひ恁ういふ姿になるのだと思ふ。

およそ自力で問題を解釋し得たほど嬉しいものはない。それこそ己れの誇りで光榮で功績である。だから

何事も自分で考へるやうにして、問題解釋をやつてゆく間には、おのづと其の内から無限の興味を感じて來て、思はず知らず向上心の泉は迸り出づるのである。

だから向上心を高める上から言つても、「考へる」こと、自から問題解釋を努めてゆくことが、非常に大切な事だと思ふ。

若き婦人の世帯振り

日本の家庭では、生活に對する經濟が殆んど其主婦の腦にないので、中流以上の所では一ヶ月幾程で暮して居るのかさへ主婦自身が知らない計りでなく、却つて其れ等の事に携はらないのを上品として居るやうな有樣です。殊に東京では一般の家庭に宵越しの錢を持たないと云ふ惡弊があつて、有れば有りつたけを使つて終ひ、いざ病氣になつた時には身動きも出來ないやうになります。又中流即ち重に女學校卒業生が作る家庭では、近來漸く經濟と云ふ事に重きを置くやうになりましたが、未だ浪費が多くつて、卑近な例ですが、一つの御料理をこしらへるにしても、態々高貴な材料を使ひながら、藥品でも調合するやうな風に教へられて居るものですから、少しも應用の智識がなくつて、常に單調な生活をすると云ふ事になります、其他日用の細い事などでは隨分之れに似たるが多くつて、生活難を感じなくつてもよいだけの收入を有しながら、斯う云ふ譯でいつでも費用の足りない所から、御主人の苦い顏を見なければならない始末に陷り、女學生上りを妻にすると家計が保てないなどゝ云ふ世評が持上るのだと思ひます。（川島芳子女史談片）

時勢の進歩に伴はねばならぬ女の姿勢

女子の姿勢の見悪いのを直す方法

井口あぐり

▲裁縫時の二分間▼

日本の家庭で何が一番身體の爲に惡く又姿勢を醜くするものかと言へば、それは裁縫で御座いませう。長く坐つてゐて腰から下の血の循環を惡くし、胸は壓す首は下る背骨は屈がるといふのですから、申分のない非衛生的、非美容的なものです――。然し日本の家庭では裁縫は女の一大要件ですから、これを彼是申す事は出來ません。せめて西洋風に卓子椅子でゞも出來るやうにか、何とか改良法があると善いのですが、それも容易に現はれさうにもありません。まづ當分の間日本婦人は從來の裁縫を務める他はありますまい。

處が茲に諸姉にお勧めしたい事があります。それはあの横山(榮次)さんが獨逸から持つて被來した方法で獨逸では廣く行はれてゐるのです。殊に小學校に施したもので、教場で授業中一寸二分間だけ一齊に運動をやらせるのです。これを二分間體操といふので、欝した氣血を循環させて非常に効果があると申します。僅つた二分間ですがそれで全身一體に運動させるやうに巧く出來てゐるので、國民一般に此の二分體操を行はせたら非常に利益だらうと獨逸では奬勵してゐるさうです。

裁縫中、氣の詰まつたと思ふ時に一寸立つて之を爲さるのは大層衛生上にも姿勢上にも善い事だらうと思ひます。氣が疲れて思はず欠伸(即ち深呼吸)をなさる、思はず胸を張つて兩手をお伸しになる、といふ代りに科學的に組織した此の二分運動を爲すつて、何も手間暇の要る譯ではなし、徒手ですから道具の要る譯ではなし、ホンの簡單に一寸出來る運動で、それで美容術

生の効は度々するに従つて著しいのです。

▲起居動作と科學的注意▼

運動事を申すと御婦人方よりも先づ男子方が「飛んでもない事だ、家で一二などやり出されて堪るものか」と直ぐ反對なさるでせう。けれど何も一人でやるのに一二を叫ぶ必要はないのです。と申すと又『でも手を突張つたり足を擧げたり、俯んだり仰向いたりされては堪らぬ』と被仰るに違ひ無い。

然し考へて見れば御自分はサンダウの體操を爲さつて、俯向きに寢たり仰向に起返つたり、いろ／＼不思議な形體をして運動を爲さるではありませんか、何も此方はそれ程の妙な形體をする譯ぢやなし、御主人がサンダウ體操を爲さる精神と同じ精神でするのですから、其處をお考へになれば格別苦情を被仰る方もない譯と思ひます。

それに食物お料理などになると、材料が何うとか、成分が何うとか、化學的の變化が何うとかいふ風に、隨分科學風の研究が盛んになつて行くのが今の姿で、臺所へは科學を入れて應用する事を力めてゐて、肝心の身體の起居振舞の上には科學的の注意を更にしないと言ふのは妙な譯ではありませんか。

▲姿勢運動▼

けれども身體の事も一概に放任されてゐるのぢやなくて、近來は看護、醫療の心得などが追々注意されて來て居ります。至極結構な事で大贊成ですが、然し然ういふ特別な場合の事ばかり注意して、毎日々々寢るにも起きるにも放れぬ姿勢運動の注意を怠つてゐるのはどうでせう、むしろ病氣の場合は醫者看護婦に任せるとしても、平生の姿勢運動を注意する方が本ではありますまいか。

ですから醫者でも心ある者は平生の用意を嚴ましく申します。机へ頰杖を突いては不可、殊に片肱を突いて凭りかゝるのが大毒で長年それをやつてゐると背骨が其の方へ曲つて了ふ。學生や文筆に關係る患者を裸

にして見ると、然ういふ背骨の人が幾干もある。その他、讀書に見臺を用ふること、字を書くのに出來るだけ胸を眞直にして、首を下げないことなど皆肝要で、若し既に胸が狭窄したり前屈みになつたり、又は背骨の曲つた人などは、醫者の手でも何うにも仕様はない藥の力で急に直しようはないと申します。

實際その通りに違ひありません。處が男子方からして餘まり其邊を注意なさいません。奥様の運動に賛成のお方でも、『ナアニ女はハタキや箒の運動が第一等だ立働いて見るがいゝ。胃の惡いなんぞは何處へか飛んで行つて了ふ』と恁う被仰る。けれど其れでは背骨の曲つたのは直りません。不規則な運動で却つて姿勢の頽れる事さへある。下女の姿勢が餘まり美的でないのを見ても分りませう。

處が西洋は大變違ひます。婦人自から體操教師の處へ出かけて行つて、自分の缺點を話して相當の體操術を聞いて來て、熱心に姿勢や體格の矯正を努めます。現に私の居つた家の婦人も熱心なものだつた。毎朝朧も起きない内に一人自分の寢室の戸だけ明けて、襯衣の儘で——襯衣のまゝの方が廣く緩くて善いのですから——二十分なり三十分間なり時間を定めて、頻りにやつて居ました。

日本でも既に醫療體操の教授を開いてをる方があります。なか〳〵有望だといふ事です。まあ世間も漸々と傾いて行つては居るのです。

▲疊一疊の運動場▼

けれど日本の家屋は西洋のやうに室毎に區劃が確乎してをりませんから、『何うも人の見てゐる處で、二分體操にせよ何にせよ……困る』といふ方が多いでせうですから家庭全體の思想が然う傾いて來ねばなりません。奥様ばかり爲さるのぢやなくて、旦那様も氣がお疲れになると立つて爲さる、御子息は勿論お孃さんも爲さるといふ風になれば、何も人が見てゐたからとて『ハア又初まつたな』位のものでせう、ナニもお轉婆に跳ね廻るぢやなし、廣い場所が要る譯でもありません

ですから私は始終言ふのです。『疊一疊あれば澤山だ』と。ホントに自分の立つてる疊一疊の天地で可いのですもの。考次第のものでせう。食物や藥は覿面に利くので人が注意しますが空氣の良否などは目の前の影響を認めないので、兎角注意を等閑にしがちです、處が長い月日となると濁つた空氣を吸つてゐれは血色が青ざめて光澤が無く、顔がポツポツになつて來て、折角の御美貌も榮えなくなる。それを新鮮な清らかな空氣中に長く起伏した御婦人は、後々までも顔色が澤々しくて、美はしくて居られるのです。體操の効能も恰ど同じやうなもの。のみならず姿勢の美まで保てるのです。西洋の名女優などは悉皆體操で姿態を美しく養ふので、這麼事を知らない方は無い程でせう。處が健康や美容は望みながらも氣を長くして運動の上からその利益を受けようとなさらぬのは矢張空氣を忽せにすると同じではありますまいか。



▲正しい習慣をつけよ▼

何でも皮切一つでせう。女學生の姿勢や歩き振だつて、今日は最う非難する人は

ありません。誰が見てもお姉婢の歩き振と女學生の歩き振とでは、學生の方がずつと正しくて美はしく見えませうけれど、彼れも其の初めは隨分非難されたもので、學校の方の精神は何うかまあ身體に無理のない樣に、●●●くの字形なんぞにならずに胸も正しく張つて、足取も正しく踏む樣にといふのですが、『どうも女が彼麽歩き振をしては大變だ、胸を突き出してポン〳〵ポン、何と言ふ事だらう』と隨分の非難。學校の內でさへ然ういふ論者がある姿でした。實際又その初めは拙ですから、胸を突き出し過ぎたり大股をし過ぎたりしたでせう。然し直きに慣れて恰好と出來ると共に、世間の非難もおのづと消えて了ひます。家庭の二分間運動なども同じでせう。皮切だけが臆劫なのです。

少し味つて見ると滿更空氣ほど効驗の目に立たないものぢやありません。妙なもので、あれを行つてゐる間は恰ど音樂を聽いてる瞬間と同じで、外の事は最う何にも頭腦になくなります。ですから疲れた時に全然氣が變つて、非常に心持の良いものです。

お正月に私の處で歌留多を致しました。八疊二室續いてる處でしたが、あまり戰つて一同疲れて了つたのです。すると一人のお孃さんが、『一つ運動でも致しませうか』と言ひ出すと忽ち滿場一致。で、樂器に合せて少時運動致しました。それで最う全然元氣を恢復して、又盛んに遊んだ事がありました。

▲時勢の進歩に伴ふて行く人▼

若い學校出の婦人たちには申さずとも御希望の方があります。卒業後學校（女子大學）へ被在して、在學生の調子を揃へて行つてる所などを見て『先生、ほんとに私も行つて見たい……在學生の方が羨ましい』などゝ言はれます。中には最う一歩進んで、『ほんとに行つて見たくて堪りません。豈夫學校へ來ても變だし、先生の處なら行らせて戴けるから、今度伺ひますから是非行らせて頂戴』などゝ言はれる方もあります。せめてトタン張の屋根でもいゝから、然ういふ場處を拵へたいと私も非常に望んでをるのです。

若い方々には最う恁ういふ傾向もあるのですから、家庭の父兄の方々が然ういふ芽を壓へて毟つて了はない樣にして戴きたいのです。が、どうも今はまだ壓へる方らしく思はれます。

けれど一方から見れば料理の講習とか洗濯染物の講習とか、漸々と科學的に行はれてゆく狀況ですから、身體の擧止や姿勢などを科學的にして見ようといふ思想も、決とやがては行はれて參りませう。その手初めとしては、先づ二分間運動などが、一番簡單で入り易い方法だと思ひます。

前方家庭教師として去る令夫人に姿勢矯正の體操をお教へ申した事があります。處が遂々二月ばかりでお止めになりました。到底堪へないのです。腕を一本突出しても、一直線には何うしても出ません。突出した形が勢の無い弓形です。學校で少しも運動したことが無くて、そして長く身體を怠けさせて了つた方は、實に何うも驚くほど弱々しいものです。

かういふ方には止むを得ませんから、まあ成るべく立働きを爲さつて、或は自分の室だけはお掃きになるとか、或はお庭の花へ水を灌ぐとか、葉を透かすとか、又は一日に三十分でも可いから、定めて御散歩なさるとか。恁ういふ事をお勸めする外はありませんが、ここに一つ大抵な女のお尋ねにお答へ申上げるのは、深呼吸です。特別に呼吸器等に故障のない限り、これは大變利益になります、餘り平凡のやうですが、深呼吸だけは殆どあらゆる女にお勸めしてをるのです。是非これは諸姉にやつて頂きたいので、深呼吸をやれば自然と胸を張るやうになつて、例の前屈みの姿勢を矯める助けにもなります。



婦人が一人前となるべき能力を試驗する機關

婦人記者

▲英語科　D氏

◎準備に就いて

私は試驗に就いて別段これと申上げるやうな勉强の方法をとりませんでした。一體私は友達に勸められて初めて受驗の事を思ひ立つたので御座いますが、それにしてもまだ在學中でもあり實際は何うしたものかと餘程長いこと思ひ迷つて居りました。たゞ高等女學校の卒業生でないものは本年限り受驗資格がなくなるといふので——私は高等女學校出ではありませんから——申さば餘儀なく決心いたしまして愈ゝ願書を出したのが五月の末、もう期限がおしつまつての事でしたそれに其後も種々事情がありまして勉强が出來ませず試驗のために讀んだ書物と申しては僅かに二册位のもので御座います、其の讀んだ書物は文學的のものを避けて、普通說話體の文章を撰びました。

兎も角こんな風で御座いましたから試驗は受けても無論落つることゝ覺悟いたして居りました、試驗場に出ては落ちつく事が大切だと人からいはれた事もありましたが、私は初めから駄目だと思ひ切りをつけて居つたゝめ、却つて少しの心配もなく更に周章るといふやうな事はありませんでした。

◎試驗の問題

試驗の問題は左の通り、

英文和譯

1. If a man succeeds in any attempt, though undertook with never so much rashness, his success shall vouch him a politician, and good luck shall pass for deep contrivance: for give any one fortune,

and he shall be thought a wise man.

2. Pride is so unsociable a vice, and does all things with so ill a grace, that there is no closing with it. A proud man will be sure to challenge more than belongs to him. You must expect him stiff in his conversation, fulsome in commending himself, and bitter in his reproofs.

3 I know no mortification so severe as that which accompanies the evinced inefficacy in one's own conduct of a virtuous conviction so decisive that it can receive no additional cogency from the resources of either the judgment or the heart.

△和文英譯

(一)暑中の休暇を利用して實社會に接觸することは學生に取りて最も有益、最も適當、且最も興味あるべきことゝ信ず

(二)世に立つて事を爲さんとするには精神の基礎を鞏固にする必要がある然らざれば如何に學問や才智能があつても無益である

(三)昨日午前十時三十分總理大臣は自邸より馬車を宮中に驅り天顏に咫尺し奉り骸骨を乞ひたりとぞ

注意
- a. 字書を用ふることを許さず
- b. 英文和譯、和文英譯を通じて四時間
- c. 答案は問題毎に用紙を改むべし
- d. 姓名は毎葉に記載すべし
- e. 答案は總て「ペン」にて書すべし
- f. 高等女學校のみの教員志願者は和文英譯英文和譯、各三問題中二問題を選ぶべし

◎答案の書き方

譯の仕方は何んなに致せばよいのかわかりませんけれど、私は單語の譯に骨を折りませんで、大體の意味をとることに努めました、そして英文は普通日本らしく意味をとるには或は後のセンテンスを先にしたり、或は中頃から譯をつけ初めたりするのですけれど、一體文章の首に最も意味の強い語やセンテンスを用ゐてある譯ですから、私は成る丈け原文の順序を變更せずに譯して參りました尤も果してそれがよいか何うかはわかりません。其他には特別に注意した事も困つた事

もなく、答案を書く時間は四時間與へられたのですけれど、二時間で十分で御座いました。

▲手藝科　E氏

◎國語が大切

私は手藝の中で袋物と刺繍とを受けました。一體手藝科には袋物、刺繍、編物、組糸、造花、この五つがありまして、受験者はこの内二つ以上を撰ばなければならないのです。それは二つ以上なれば三つでも四つでも或は五つとも皆受けてもかまひません、そして手藝の方を受ける人は第一國語を勉強することが必要です。何うも國語は實科よりも重んじられて居るやうに思はれます、今度などは手藝科の受驗者は百廿人もあつたのですが、國語でとれたものは僅に十二人、丁度一割丈で、あとは實科の方の如何にかゝはらず落されたやうでした。其の國語の問題は、

講讀

一、左の文章を正しく口語文にて解釋せよ

吾人が特に二宮尊徳翁に推服する所は其人格の偉大なる點にあり翁が獨得の學識はもとよりその一要素たるに相違なけれども吾人は翁の自信力を以て主たる要素となさゞるを得ず翁の自信力とは何ぞ荒蕪を開くに荒蕪の力を以てし貧窮を救ふに貧窮の力を以てすといふこと即ち是なり翁曰く荒田一反を開きその産米一石あらんに五斗を以て食となし五斗を以て本年の開田料となしかくの如くにして止まずんば他の財を用ゐずして何億萬町の荒蕪と雖も開き得べしわが神州開闢以來幾億萬の田畝を開拓したるも始より異國の金銀を借りて然りしにあらず必ず一鍬よりしてかくの如くに開けたるなりと何ぞその意氣の壯なる

二、左の語句の中（甲）は其の意義を解釋し（乙）は其の讀み方を示せ

（甲）利益均霑、世襲財産、空前絶後、權謀術數、盤根錯節、

（乙）雙六、生憎、蝶番、衣桁、敵愾心、謎、依怙贔負、

文法

一、いろは歌を片假名にて記せ

二、左の文はいかなる意義に解せらるゝか若し文意に曖昧なるところあらばこれを明晰ならしめんがためには如何に改むべきか

君は富士山に登らるゝか

大阪府は和泉及攝津の一部を管す

作文

わが家（普通文體）

右五時間

▲袋　物　同　上

◎その準備

私は職業學校を出たのですが、近頃でこそ學校にも袋物といふ科目があるやうになりましたけれど私共の時分には無論なかつたのですから、今度試驗を受けますに就いては新にお稽古したので御座います。と申してもそれはほんの一寸丈けで、暑中休暇に出京いたしまして——私は田舍の女學校に教鞭をとつて居りますのです——十日許りと、今度出て參つて二週間程もいたしましたでせうか。一方には職業學校の先生の御宅へ上つて敎へて頂き、一方には淺草へ參つて眞の職人に就いて習ひました、何しろ袋物が學校教育として流行り出したのは至つて近頃の事で、檢定試驗の科目には今年初めて加へられたやうな譯ですからまだ教科書などいふものも一向出來て居りませず、試驗の準備をいたしますには誠に不便を感ずるので御座います、職人などは技術は上手でも教授法といふことを知りません、何ういふ譯で斯うするといふ事を敎へずに、たゞ斯うするものだと心得させるといふ風ですから數を重ねる内には自然呑み込まれるのですけれど、私共のやうに少しの時日で其の方法を知らうとするものにとつては實に不都合で御座います。ことに裁方などは秘傳といふ風で職人の方では敎へることを餘り好みませんが縫方と裁方とは是非重ねて習つて置かなければなりません。

一體袋物は大變難しいものゝやうに申して居りますが私にはそれ程とも思はれません。種類に就いても或る人は百ありといひ、或る人は三百ありといひ、或る人はまた三百や五百ではないと申しますが、それとても根本の形から申しましたならさう種類の多いものではありますまい。つまり名稱のつけ方で種類が殖えて參るのです。例へば今度お正月の御題が雪中の松と決定ると職人はそれを袋の繪に出すとか形に表はすとかしてそれに何とか名を附けて賣り出しますから、それがま

た一つの種類と數へられるやうになる譯です。ですから受験者はまあ大體に就いて一通りの仕方を呑み込めばよいと思ひます、ホック付の銀貨入だとか、蟇口だとか、紙入だとかいふものゝ種類を一通り學んで置けば、あとの細いものは皆自分で應用が出來るだらうと考へられます。

◎豫備試驗

豫備試驗の問題は次のやうなものでした。

一、袋物の教授に必要なる器具の名稱を列記すべし

二、信玄袋の仕立方に就き左記の事項を明記すべし

1. 寸法割り出し方
2. 表裏用布の地質
3. 仕立方順序
4. 紐の寸法

三、婦人持紙入(一つ襠)形紙の裁方を圖解し且つ縫方の順序方法を明記すべし

但し形體の寸法は圖中に記入するものとす

右二時間で答案を出すので御座いましたがこのうち一番の問題に就いて私は袋物をするに就いて入用な器具を一切書き並べて出したのです、けれど後で考へて見ますと教授をするに就いてといふ處に注意することが必要であつたらうと思はれます、學校では何れ丈けの器具を備へて置き、生徒にはどれ丈けのものを調へさせ何んなものは、學校から生徒に貸し與へるといふ風に、つまり自分が袋物の教授をする場合に考へて見て書くべき問題であつたらうと思はれます、それから二番の問題で私は寸法の割出し方を存じませんでした信玄袋の寸法は底の巾の二倍が側の丈の寸法になるといふ割合なさうですが、私はたゞ見はからひで底は此位だから丈はこの位でよからうといふ思ひ付きで書きました處それが幸にも丁度合つて居りました。

◎本試驗

本試驗は實地で

深口付四つ襠の婦人用紙入

を五時間でこしらへるので御座いました。

この深口と申ますのは普通にドンブリといはれて居るものですが、名稱の異るといふことは受驗者にとつては困ることで御座います實際職人同士の間でも勝手に名前をつけて呼んで居りますから仕方が御座いません。然し是等は追々敎科書でも出來ましたなら自然一定することでせうが、襠の事が前後の試驗で一定してなかつたのには、まごついた人も少くないやうでした。



豫備試驗の問題に一つ襠といふ事が御座いますが、紙入の襠は一方ばかり付けるといふのがありませんから一つと申しても兩方で二つつくのです、處がこの理屈で參りますと本試驗に四つ襠とあるのは八つ付けなければならない譯ですが、これは片方を一つづゝに數へての事なのでした。私は渡された布の寸法で實は二つ襠の事であると覺りましたけれど、全體ならば前に一つ襠と書いたなら後は二つ襠としなければならず、後を四つ襠とするな

らば前が二つ襠とあらねばならぬ筈で御座います。

袋物の仕方には新式と舊式と二樣あるのですが、委員方の仕方は舊式のやうで御座います。袋物をこしらへますにはヒメ糊とパンジヤク糊とが要るのですが、新式の方はパンジヤク糊を多く用つて縫ふ處を少くするのです。處が今度の試驗には全然パンジヤク糊が出ませんでしたから、是非舊式によらなければならなかつたのです、何うも舊式をとるといふ主意でなければ斯ういふ事のある筈がないと思はれます。よしあしは新舊何方がどういふものか存じませんが私は兩方とも習つて置く方がよいと思ひます。

▲刺繍　　同　　上

◎試驗問題

豫備試驗の問題は

一、すがぬひを教授するに就きての要項を擧ぐべし

二、ハンカチーフに刺繍を施さんとするに就き左の諸點を明記すべし

1. 形狀及び圖樣の圖解
2. 刺繍の種類方法
3. 用布並に用糸の種類色合

と申すので、本試驗は矢張實地。一つの半衿圖案が出まして――檜扇に松がかゝつて上から下へと紐を曳いた圖――

この半衿圖案により左に示す縫方を應用して刺繍すべし

但し十六七歳用

1. 平ぬひ
2. 菅ぬひ
3. よつりぬひ
4. しぼりぬひ

この時間は朝の九時から午後の四時まで與へられました。地は一樣に白羽二重でしたが糸はいろ〳〵種類が出てこのうち何れでも好みに依つて使用するやうにとの事。

要するに縫ひ方がよくても色彩がわるくては不可、

色どりが美しくても半衿らしくなくては不可です。

◎受驗者に必要なるべき準備

まあこの方の試驗を受けようと思ふものは第一に繡方の種類を凡て心得て置くことが必要でせう、次には色の配合に就いての考がなければなりますまい。それと同時に圖畫を一通り學んで置くことが大切です。それから物によつて繡方を變へなければならないこと、例へば半衿には何のやうな糸を使用つて、何ういふ繡方をするとか、裾模樣には主に何ういふ繡方をするとかいふ事をよく〳〵心得て居らなければならないと思ひます。

貴婦人の餘興

赤十字社本部篤志看護婦會の新年會には東伏見宮妃、久邇宮妃の兩殿下を始め奉り毛利公母堂、德川公夫人、三條公夫人、大山公夫人、松方侯夫人、鍋島侯夫人、伊達侯夫人、德川侯夫人、其他百數十名の出席あり、鍋島會長の挨拶に次で專任幹事平山成信氏の新任披露あり、次に大森醫學士の腦病に關する講話あり、終りて餘興に移りしが、鍋島侯還暦祝の際大隈伯が送りし赤緞子製の大達磨を會場の中央に持ち出し、達磨に綱を附け貴婦人一同にて之を引き倒し、引きたる綱にて福引となるの趣向なりしはいと興ある事なりける此日紫色紋縮緬に五つの紋を刺し、裾には白絹糸にて尾花の模樣を刺せる御洋服を召させ、卵色博多帶に黑色大形竹模樣の配しあるを結せられし東伏見宮妃殿下、水色小紋縮緬に黑糸刺紋の御召物に濃淡黄縮珍の帶を結せられし久邇宮妃殿下を始め奉り毛利公母堂まで悉く此の綱を引く樣の美しさは一面の花壇の眞中に巨巖の動くが如かりし、斯て引きたる圖には殿下の猿、老いたる人の花簪、さては若き人の地味な襟を取り、ハイカラ式の人が丸髷の形や手柄を取りてオヤ〳〵と笑ひ轉げるもあり、丸髷の細君が燃えるばかりのリボンを取り「奥樣一寸其れを丸髷にお掛け遊ばしては」と勸められて顏を赤めるもありて、一時は却々の賑ひなりき。

小供に對する父母教師の感化

飯田百合子

女教師のかいた六年間の「ノート」の拔きがき
世の父母と一般の家庭の反省を求む

▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲

花を愛するものは花に對して身の煩ひを忘ると、私は無邪氣で愛すべき兒童が先生々々と傍へよつて來る其顏を見るばかりで、もうつらい事も悲しい思ひも忘れてしまつて、繊弱い此身を彼方のために捧げる心になるのである。出勤の途中、多くの兒童にとりまかれまとひつかれて、足もとも覺束なう歩みながら、高ばなしに、道行く人の足をとめる事も度々だ。人々は何と思つて見るのであらう？　獅子の子の樣にぞろ〳〵子供をつれて見つともない、あれで得意さうにすまして行く氣が知れないあれだから、女に學問はさせたくないなどゝきつと笑つて居るのであらう。よしそれ程ではなくとも、人格を認め尊敬を拂つて與れる人がいくらあらう、其れも其筈だ。私がまだ女學校に居た時分、海老茶袴の師範の生徒や、筒袖めした女教師さんを見るたびに何とはなしに一種いやな感じがして、哀れな哀れな思ひが浮ぶのであつた。そして私は假令どんな逆境に陷つても、決して〳〵女教師などにはなるものかと思つたもの、それが今では自分が其の身の上となつて居るではないか、實に人の運命ほどはかりしられぬものはない。アヽ私が此職を奉じてからもはや六年になる。忘れもしない中村先生に連れられて始めて此校門をくゞつた時、よく〳〵覺悟はしながら口惜しいやうな情ないやうな感がして思はず立ちすくんで泣いた事がある。

　それから一年ばかりは毎日出勤はするものゝ全く夢中で、授業の終るのを待ちかねては歸るといふしまつ、

こんな事で愛だの趣味だの起りさうな筈がないそれでどうして兒童を近づける事が出來よう。よくもあれで勤つたもの、又其間に他人の愛子を損つた事は幾何だらう、今更思つても背に汗する事ばかりだつた。

二年目に擔任の生徒を卒業させて更に新入生を受持つことになつて、始めて無邪氣なまじり氣のない兒童に接する樣になつて、漸く自分のものとの心もおこり、幾分か愛がわかつて來た。學校の敎育でさへ後入りはこれだもの、山口さんが後妻にいらつしてお子達の養育に困ると仰つたのは、決して御無理ではないと思ひました。

だん／＼日を經るまゝに兒童はよく／＼なついて來る、校下の母姉とも心安くなる、授業の方法も稍わかつて來た。朋輩の女先生も四人になつて周圍がすべてにぎやかになつた。

斯うなると今迄つらかつた務も樂しくなる、朝は早くから出勤する、放課後は殘つていろ／＼の研究をする、時々は四人が音樂の合奏をして樂しむといふ風になつて、今ではもう學校をうちの樣に思つて居るきれいな花が咲くと「學校へ持て行かう」珍らしい繪があると「兒童に見せてやらう」と云つては『またか』と父樣に笑はれる『お前が學校に出た當時は毎日々々泣き顔を見せられるので病氣が出やしないかと思つてどんなに心配したかしれないでもよく其れだけ變れたもの』と二言目には母樣仰しやる。ほんとうに自分ながら不思議な位だ。今の私の心には只兒童あるばかり……この樂しみは迚も門外の方々には味ひ得られぬ妙所であらう。

▲朋　輩▼

三人の朋輩は若い娘さんが二人とあとはお年を召した奥樣とがある。まことにお優しい方もあれば却々すみへ置けぬ方もある面の異なるやうにそれ／＼特性のあるものだそれに一樣の交際を仕樣とおもふのだからなか／＼むづかしい、世間知らずの私には隨分意外の事も少なくない。奥樣は二人のお子持ちで一人は去年

生れの赤ちやんであるおうちにはおむづかしい姑さんがあつて却々お氣苦勞の御様子は毎日のおはなしで十分わかる。あゝもしたい斯うもせねばならぬと思ふばかりで家事に逐はれて出來ないと仰しやる。其のお心さへあれば十分ですと私はいつも慰める。實にお氣の毒なので出來得る丈けはお助け申すのである。娘さんは又丁度私が就職した時のやうで、何と考へもなくただもう御自分の召ものやお帶の數の增すのを樂しみにして居らつしやるばかり、しかもお二人が同年輩だものだから何の事はない衣服の競爭だ、私はこれを見て常に他山の石として自ら反省するのである。

みがゝずば光りなからん光りなき
玉のいかでか尊かるべき

注意に注意を加へて居てさへ極微細な事が目につく、兒童の前に毎日々々白いものを纏ふたり、はでな召物をとり替へ引きかへ飾られるお心持が私にはどうしてもわからぬ、それはもうお若い方は其れが何よりのお樂みでもあらうから、一個人としてのお遊山なら決して悪るいとは云はぬが、何にを云ふにも未だ心の定まらぬ兒童の活模範とならねばならぬ私共は、常に一擧手一投足の些細な事にも注意をしなければ、九仞の功を一簣にかくの悔となるのである。教師が赤い草履をはけば直に兒童がそれをまねるのでもわかる。此間も私が階段を降りる時、終りの一二段を足を揃へずに降りたのを一生徒が見て居て『あら先生は足をお揃へなさらぬ』と云つたのでハッと當惑した事があつた、子供といふものは實に少しの油斷もならぬものである。しかし私は自分の敎へた事がかくまで深く彼等の腦裡に植ゑられたかとまことに嬉しく思つた。先生を神樣のやうに信じて居る彼等としては尤もな言葉で、此の心があつてこそ敎育を施し得るのである。それだのに口には儉約をときながら、敎師が華美をてらふとなると、自然訓練が出來なくなる。校長さんや男先生方の思召も如何、すこし氣をつけて下さればよいにとハラハラ思ひながら扨口へは說出さずに過ごして居ると蔭には批難の聲も聞えて來る、あまり高くならぬうちと、

そつと御忠告申したつもりが、却で悪くとられたものか、何だか大そう氣まづくなつてしまつた。けれどそれは私が行届かぬからだ、永いうちにはお心のとける時もあるだらうと、成る丈け自分をつめて辛抱をしては居るが、實につらい事がある。誤解されたほど心外なものはない。女といふものは實に淺ましいものだ。得意の時は波風なしに治まつて行くが、さて少し旗色がわるくでもならうものなら、己れの悪いのは棚に上げて、讒誣やら嫉妬やら、いろ／＼の伏兵でもつて正正堂々の陣を破らうとするのだもの、女子と小人養ひ難しと云はれるのも尤だと思ふ、永く朋輩にあこがれた私は今更後悔の臍をかむのである。

▲卒業生▼

一年から擔任して此組はと思つて骨折た甲斐あつて、大そう成績がよく、校長にも賞められて、卒業式をすました時は、張りつめた氣も俄かにゆるんで重荷をおろした樣であつた。

つちかひし花は咲きけりけふよりは
心のどけき春の玉の緒

けれども何だか手放すのが惜しい樣な氣持もした。つらつら彼等の前途を考へるとなか／＼安心しては居られない。卒業さしたからよいではすまぬ。今後に於ける彼等の保護が一等大切なので、少女を墮落させるのも成効に導くのもこゝ數年間が最も注意を要する時機である。然るに此地方の父兄達は義務教育さへ終れば、其れでおつとめがすんだものとして、卒業するのを待ちうけて直につかふ事ばかり考へて、我が子の前途の幸福のためと、先きのさき迄思ふて居る人はまことに少い。現に此の間も卒業後の方針につき懇談會を開いた時、常ならば三分の二以上は出席者があつたのに、もう卒業前となると何時もの半分も出席しない。以上の學校へでも出さうといふ人の外は、もう學校へのお務めの必要がないと思ふのであらう、父兄にしてこれだから兒童が卒業するとはや學校を顧みない、二三年もたつと途中で教師に遇つても挨拶さへしない樣にな

つてしまふ、實に歎かはしい事である。全體家庭が敬遠主義をとつて學校と打ちとけぬのが敎育上の缺點であらう、どうかしてうまく結びつけたいものだ。望みのある優等生が此の儘うもれ木になつてしまふのを可哀さうに思つて、其家を訪問して、せめては高等小學校丈へでも入れてやつてはとすゝめて見たが、イエイエ私共の子供はこれ丈け學問をさせて頂けば澤山です、お向のお孃さんでさへどこへもいらつしやらないと申します、どうして〳〵私共などの娘はこれでさへすぎる位です、と何といつても受附けぬ、自分の子のことだのに、他人のまねをしないでもよからうにと思ひながら、餘りしつこくも云ひ兼ねて、將來の事など何彼と話して泣いて歸つた。

嗚呼せつかく丹精して育て上げたものを、是ではなして仕舞つては今迄の苦心が水の泡だ、これだから卒業後の保護が大切なのである。小學校の先生は卒業生が嫁入りをして落ち着く迄、よく〳〵見てやらねばならぬ。若し夫婦喧嘩でもするやうなら仲裁の勞もとつて、末始終相談相手になつてやる様でなければならぬものだと思ふ。

▲煩　悶▼

同窓生の廻し手紙が來た。同窓の方々は大抵もう立派な奥様におなりなので、お手紙はいつもお家庭の事や、育兒のはなしや、扨ては料理の失敗談等で、何れもおもしろく拜見する。しかし私はいつもそれ等を後にして松井さんのと田村さんのとを先きに拜見する、お二人共私とおなじ敎職に居られて、而かも獨身生活の同境遇であるからだ。今日もまづ第一にとそれを見て思はず胸を波立たせた。お二人共に多年のお望みがかなつて、一人は音樂學校へ、一人は高等師範へ御入學とのお報し、さぞお嬉しい事であらう。お手紙を見ても其様があり〳〵見える。今迄姉とも思つて力にしたお二人に別れて、私はどうしよう。數年の後には立派な敎育者となつて歸られる、其時分の私は……と考へると云ひしれぬ淋しさを覺える。

くらべ來し年も四年を呉竹の
友にはなれて枯るゝはかなさ

おなじ敎師をするのなら……いつそ私も父樣に願つて見ようか。いや／＼父樣母樣は女學校を卒業する間でさへ待ち遠く思はれた位だもの、今更お許しの出よう筈がない、そんな事を云ひ出したら、又々御心配をさせるばかりだ、といつて此儘ではあまり生氣地がないではないか、ア、兄弟でもあつたなら少しは自由に動かれやうに……一夜を悶へにもだへて明かしての翌日頭の重いのをおして出勤はしたものゝ、いろ／＼の煩悶のために兒童の愛らしい容貌も無邪氣な態度も却てうるさく思はれて、運動場に出ても何時もの樣に遊んでやらぬ。子供心にも變に思つたのか、

「先生おあんばいが惡るいのですかお肩をうつて上げませうか」

と後から二三人が打ちにかゝる、ア、何といふ優しい心でせう、是れが八つや九つの子供のする事でせうか、全く天の使です！、天の使が神樣に命せられて、私の「此の弱い心を鞭うたれるのであるまいかと氣がつくと何處からか、分に安せよ獻身々々とさゝやくのが聞える、嗚呼自分はこれが運命なのである。はじめから其れを覺悟して居ながら、まだ名譽や虛榮にそゝのかされて、此の美しい天職をはなれ、少しの間でもこの愛らしい子供等を捨てようとしたかと氣がつくと、大罪を犯した樣な心地がした。

ア、私はまだ／＼修養が足りないのだ。よし自分は名もなき小學敎師で終らうともまいた種にはより以上の收穫があるであらう、一人の私が幾人かの閨秀をつくる事が出來たなら、それが何よりの名譽なのだ、父母も亦それで滿足して居らつしやる、されば孝の道も盡せるのだ。あ、もうこれからは人の事を羨んだりしますまい。つとめ大事に働きませう。漸く思ひ返して廻はし手紙を書いて、終りにとぢつけた。

草々におもひの花は咲きぬれど
一つこゝろのにほひなりけり

老婆心

人の子を敎育する樣になつてから九六年、何の得る處もないが、私は子供を見て大抵其家庭の樣を想像しうる位の事は出來る。子供の容姿や擧動を見ると、その母樣の人爲りが大抵わかる。學用品の整不整も母樣の人格をあらはして居る。子を持つ親はまことに晴がましいものだと思ふ。私は女生を訓練する一大要項として常に儉約を獎勵するので、手習をさせるのにも白紙を使はせず、成るべく半紙大の新聞紙を用ゐさせるのである。すると一生徒は每日きまつて朝日新聞の京都附錄を持參する、幾日たつても異らない。其紙は丁度半紙大なので、二つに折つて使へば、切る世話なしで最も便利なのだ。よい所へ氣づかれたものだ、これを每日ちやんと揃へて置かれる、母樣はどんな方だらうとつひ慕はしくなつて訪問して見ると、果して規律の正しい人格の高い婦人であつた。かういふ風に觀察すると多くの中には隨分種々さま〴〵の家庭がある、其の中常に私が遺憾におもふのは、

社會の模範となるべき中流以上の家庭の子女と、一家の大黒柱ともいふべき獨り兒の性格が、どうも危險な性質を帶ぶることである。

先づ彼等の容姿はと見ると、實によく整て居る、携帶品もよく揃て居て、成績もあまり不良なのは少なく、過半は佳良の方である、通常性ともいふべきは人なつこい物恐ぢをせぬ、何となくのどやかで、こせつかぬ所がある、ちよつと見るとまことによいお孃さまだ。かういふ長所のあるかはり又其れに伴ふ短所もまた少なくない。無性で、忍耐力のない怠けるものが多いまた依賴心が強くて、何事でも直人にさせるといふ風で、而かも己れが頭でなければ承知せぬといふ、つまり我のつよいけんそんの德を缺いた、女としては大變な難物である。考へるのに、これは體

力の弱いのから來る事も多いだらうが、多くは家庭教育の誤りであらう、大切な子だといふので荒い風にも當てまいとの心づかひから、蝶よ花よと愛しすぎて、あれも下女、これも丁稚と、自分でなし得る事に迄人手を借りるとなる。それがつひ〳〵習ひ性となつて仕舞ふのであらうと思ふ。これを見ても姑息の愛は愛に似て非なるものと恐ろしく感じる。

扨て斯ういふ我の強い其反對に、意志の弱い娘が成長して、社會に出ると、どうなるであらう。彼等は井底の痴蛙で、世の中の事が皆己の意の如くなるものと思つて居る。出て見ると萬事思ふた樣でない。世間の人は我が兩親のやうに親切でない、下女や下男のやうに仕侍するものは無論ない、不平が起る。ひがみ根性が出る。人には嫌はれる世の中がいやになる厭世の極……となる。或はまたたより少ない弱點を見すかされて、甘言を以て誘はれ、知らず〳〵一生を誤るとなる樣なのは、此の種の婦人に多いであらう。私は其の獨り兒の一人である。幼少から我儘に育たので父母の膝下をはなれて遊學して以來習ひ性となつた不良の性癖のために、どんなに苦しめられたか知れない。まことに人の知らない苦勞をせねばならぬものである。幸ひにして私の今日あるのは全く教育其のもの丶力であると常に感謝するので。こゝに私は極力此の種の兒童を研究してまだ浮世の味を知らない可憐の兒童をこの難から救濟しようとの老婆心を起したのだ。爾來日々其方面の注意を怠らないがどうも思ふ樣の効果を得ぬしかしおそく〳〵とも行きてやまずば志ざす岸にいつしかつきやしぬらむと思つて自ら慰めて居るのである。

▲座右の銘▼

私が教職についての二年目は最も苦痛を感じた時であつた。夢中に過ぎた時は兎に角、幾分か責任を感じる樣になると、生徒がうまくなつかなかつたり、教授



の効果が意のやうになかつたりして、煩へては躊し怒つては亂れ、する所益々當を失し、兒童は益々遠ざかるといふ有様になつて非常に苦んだ。遂に思ひあまつて或日の事、先輩の先生を尋ねて敎を乞ふた。すると先生は微笑してナーニそれ程の熱心があつたらきつと成効する、敎授法も敎授法だが百術あらんよりは一誠に如かずだ、もつと〳〵忍耐してやるべし〳〵と勵まして下さつた。なる程至誠は人を動かす事を知つて居る、まことは人の道ぞかしとは、日々唱歌で敎て居るではないか、どうしてそこへ氣が附かなかつたらう。今迄の私は只理屈一片で兒童を壓迫しようとして居つた、其所に少しの溫情もなかつた。畏服しようとした畏服の裏には必ず反抗があるものだ、どうしてそれで完全に敎育する事ができよう。私は全く道を誤つて居つたのだと悟り得て始めて雲霧はれて、大なる希望の光明を認めた。即ち此の一句を座右の銘として日々之れに向つて修養をつとめて居る。

うつし見る心の鏡くもらずは
なにまとふべき人のゆく道

ために今日では幾分の安きがある。

頭腦洗濯の必要

苟も二十世紀の文明の空氣を呼吸し、蒸氣力や、電氣力の間に棲息し瓦斯で飯を炊き、自働車で走る者の神經は彼の帆前船や乘合馬車に乘つて悠々寛々たりし當時の人の神經とは大いなる相違があるに違ひない。今日は實に活動の時代である、急進の時代である、飯食の暇もなきほど多忙な時代であるから、起きて居る間の我々の神經は瞬間も休息はしないのである。

されば今日の所謂事務家といふものは丁度首を長くして電報を待つてゐる樣なものである、そして其の電報の文句の如何に依つて自分の運命が支配される事が多い、故にその擧動は常にそは〳〵として安心を得ず、何事にか手足を働らかせ或は談話の最中にも常に鉛筆で以て何か書いて居なければならぬ樣に、始終緊張と注意を張つてゐなければならぬ。

即ち俗に所謂きよろ〳〵眼をして四圍の事に心を配つてゐる樣な態度、これが即ち文明生活の現象である。

此の文明生活は、直ちに神經の過勞といふ事になつて、人間に餘裕がなく、ゆつたりとした處ろが段々と消滅して仕舞つて、昔しの人のやうに優長に遊び、優長に食ひ、又優長に寢るといふ樣な事がどうしても出來なくなる。

そこで、其結果は、所謂神經の衰弱となり、鳥が梢に囀つても、日光が暗室に射し込んでも、窓戸にそよ風がおとづれても、人語が微かに耳に觸れても、一寸した事に驚いて、眼を覺し、耳を聳て、腦髓を働らかして追究せれば氣が濟まぬ樣になるのである。

併し斯樣な有樣では價値のあるべき文明生活も甚だ以てつまらぬ事になるのであるが、果して然らば、どうしてこの弊害を除くべきかといふに文明的に生活する人は、なるべく丈け無用の時間を省いて、其の省いた時間を遊ぶ事に使用しなければならぬ、而してこの遊ぶといふ事は、徒らに、飲食し、徒らに睡眠するのでなくて文明的に虐使された頭腦を洗滌する目的を以ていろ〳〵と工風しなければならぬ文藝美術に遊ぶのは勿論の事であるがなるべくは文明生活と趣きを異にせる方法を以て自然的野生的の生活に歸るの工風を採らればならぬ斯くして一時的の自然一時的の野生に歸り、そしてこの頭腦を洗ふのは文明生活をして益々價値あらしむる方便である。



新教育を受けたる新奥様の面かげ

秋雨

或は女大學風に、或は新教育の主義のもとに育て上げられた女子が時あつて新たなる家庭を形造りましたとき、家風に由て境遇に由てそれ〴〵采配の振り方も違ひませう、上手下手も御座いませうが、とにかく、其處に何ともいへない新らしい精神と希望を持つて事にあたりますので御座います。然るにこゝにどうしても調和しないものがひとつある、申す迄もなく、只年來の功から僅かに無意識に得た經驗を楯に執つて、しきりに舊時の夢をふりまはす所謂姑　その人であります。これが古い頭ひとつの爲めに折角揃ふた春の若草は霞にへだてられ、輝やく淸新の抱負も打ち壞されてしまふ、これでは、如何に爲す有らむとする新時代の敎育をうけた者でも、大抵のことでは低きに流るゝ水とおなじ、直きに境遇といふ色に染められてしまひます。またそんなに染められてしまふ迄に何等なす所もないといふのも餘り賴もしくない技倆ですが、それでもより進み、より新たなる家庭をなしてゆくには、どうしても此の若い新らしいものに俟つ外はないのですもの、從來圓く治まつて居るといふ家庭でも、それは遠慮といふ綱に由てからくもつなぎとめられて風波が起らぬといふに過ぎない其處でどうしても望みを屬する所は新家庭にあるといふので御座います。然らば此新家庭を主宰する新主婦が如何なる抱負を常に持ち、どれ丈けの腕を以て那邊にどれ丈けの覺悟を

して居るか、とにかく新時代の教育をうけた新奥樣は所謂封建の遺風に育てられ舊時の奥樣とそこに何等かの相違がなくてはなりません、一得一失は勿論免かれ得ぬ所としても、時代思想の新生面は幾分なりとも開かれて居る筈と存じます、私が知り度いとおもひますのは此の點なので御座います、獨り自分が知り度い爲めのみならず、各新主婦の長所とする處を披攊し合ふことに由てお互が裨益する所多きをおもふからで御座いますこの理由のもとに、興味多き新家庭を訪問し、或は書狀を以てうかゞひ、斯くして成つたのが此の一篇で御座います。

▲掃き溜にでも甘んじて

在横濱　K　T　夫人

夫人は今年二十二歳、昨年の春、某學府を卒業遊ばしてから閑靜なる房總地方の山川を詩の友として、家事の御手傳をして居られたのが聞昨年の菊の頃良縁あつて今のお住居に移られました。御主人は赤門理工科出の秀才、二年を歐米に學んで昨年おかへりになつたばかり、洋行歸りの方に似合はず可成蠻骨な所がおありになる、それが何よりT夫人の御氣に入つたらしいとか。

「まあ、おや〳〵、さあ、どうぞ」と、澤山な感歎詞をあの可愛らしいお口から連發なすつて奇麗に水の打つてあるお庭からお座敷に請せられました。

一別以來の御挨拶がすんで、扨夫人はかたられます樣。

暢氣と申さば、こんな暢氣な家もありませんでせうよ、家の者と申しても年若い下婢が一人と遠縁の者が行儀見習に參つて居るのと僅か四人限りなのですもの主人で御座いますか？　此四五日東京の方に往つて居ります、はあ會社の用務で、平生でも朝出ましたら夕方迄は留守なので御座いますから、その間に隨分暇が

なければなりませんのですけれど、月々の雜誌も末迄かゝらぬと見通さないといふ仕末ですし、矢張り時間の使ひかたが拙いので御座いませうね讀書の時間で御座いますか、大抵夜の七時頃から一時間はとることが出來ます、どんなものつて新刊ものでは「女學世界」「趣味」「早稻田文學」それ位で御座います、これも近頃はヅッとかけはなれた、今迄は目にも留らなかつた化學の本や、理學の書も努めてのぞく樣にして居ります、何分主人はあゝいふ純粹の科學者ですから、日常の會話にも自然學術上の話しが出ないとも限りませんそんなときに聞く耳もなくて失望させる樣なことがあつては心苦しう御座いますから。すると妙なもので主人も出來るかぎり文學趣味をいれるやうにして居ります素々淨瑠璃などは非常に好きなものですからこうして近松なども私のは實家へ置いて參りましたので、また求めました。あとで書齋に御案内致しませう。

「貴女今日は御ゆるりなすつて居らして下さいませんか、留守中は女ばかりで寂しう御座いますしね

いゝえ歳暮といつても平生より暇なのですもの……

……」

といひながら一寸次の間にお立ちになりました。その間に四邊の御裝飾などを拜見しますと、すべて夫人の趣味らしく、一言に云へば淡雅とつくりなされてあります、違棚のかざりつけ、床の正面の掛軸、立てかけてあるお琴、長押に横たはる額の文字、何れも奥ゆかしいといふ感じに打たれました。お庭は廣くはありませんが御門を這入るとすぐ右手に粹な妻戸があつてそこから庭に通る樣になつて居ますそして盆栽の可愛いのが幾つも並んで居りました。

やがて襖が開いたと見ますとこれはしたりお夜食のおもてなしにあづかるのでこゝを食堂にする間書齋へ參りませうと導かれるのでした、書齋は新築の三疊、梅鼠色に塗られた壁も、雲齋の縁を取つた疊も、御主人が御考案に成つた桐の据ゑ付け机も、夫人がお好みの紫檀のお机も、皆新らしい匂ひのしないものはないので、拜見する私は思はず會心の笑みをもらさずに

は居られませんでした。殊に夫人の机の前の掛軸は少年易老學は成りがたしの七言絶句、そゞろに我身の省みらるゝ心地がいたした。

偶然お机の上のノートが目に入りましたので日記はおつけになります？　とうか・ひますと、

日記と會計はどんなことがあつてもその夜必らず書きつける樣にして居ります、學校に居ります時から此習慣丈けは絶えず守つて參りましたから一日つけぬと氣持ちが惡う御座います。



と仰しやるとき小さい下婢が「奥樣もう宜しう御座います」と大きい聲で報げに參りました思はずホヽヽ、ホヽと顔見あはせて、

「あれですからほんとに罪がありませんのよ今年でた

しか十四になります、只今の間は別に手も要りませぬから、あゝいふ小さいのを馴らし込んだ方がよからうと存じましてわざと主人の故郷から寄越して貰ひました。エ、音樂がまことに好きで夕食が濟み、かたづけが終りますと何時も唱歌が初まりますが、かれが感心に讃美歌を歌へて呉れと申しますのですよ、私もどうしても子供氣が抜けないものですから一緒になつて騒いで居ります。家庭の趣味を高め、娯樂の上乗をと望むならば、音樂ほど美くしい、また樂しいものは御座いますまい、幸に家内そろうて音樂が好きなものですから、ほんとうに嬉しいとおもひます、一番何がつて仰しやられますと困りますが、まあ三味線ものが結構で御座いますね、殊に長唄が聞いて一番氣持ちがすつきりいたします、しかし身にしみるのは歌澤なんかの方がよい様におもはれます」。

これから夫人の快舌を振はれようといふ時「では失禮ですが」とまたもとのお座敷に参りました。中央のテーブルには雪白のクロックスを懸けお料理は純粋の日本料理でありました。毎日の食物上の件について御注意をうけたまはり度いと申しますと、

イエ格別異つたことも御座いません、ハイ献立は三日分づゝ作ります一週間分にして置きますと季節物の不便などが御座いますから、それに朝はパンと牛乳とお味噌汁とより頂だきませんし、午餐は會社の方で濟しますから晩にはせめて力かぎりの御馳走をいたし度いと苦心することも度々御座います、それでも食物ごのみを致しませんからまことに樂で御座いますよ。献立表ですか、さうですねえ、ではをかしいのですけれど最近三日分のをおめにかけませうか、とわざ／＼帳面をおとりになつて見せて下さいましたが、そのとり合せのお手際なことには感心せずに居られませんでした、よくも學校でなすつた位の割烹をこんなに應用せられたものだとおもふと、どうしても女が今少し頭がうごく様にならなければとの感じが痛切に起りました近々三ヶ月間のお世帶でこれほどお家が整つて居るのも當然であると心から敬服いたしました、其の時のは

重に西洋料理が多く、これは御主人が他郷で洋食になれてお出になりましたので急に變つた食物がその體質に影響するとの家内の御注意からであつたことゝおもはれます。

食後の果物を頂だいし乍ら、今日訪問の眼目である「新生涯第一年の歳暮の感」を何氣なくお尋ねいたし度いと思ひましたが、かかることは、よしお考が出來て居ても口先きでは仰しやり難いことゝお察し申して、只お願ひ申して欠け置きました。

時計を見ればもう六時、時刻時分から上つておもはぬ長話、東京への汽車の時間も切迫しましたので、まだうかゞひ度いお話しも盡きませなんだが、さ迄はと辭して……。



仰げば闇夜の星寒く、まだ宵ながらここらは東京の夜半の様、天も地も只寂として聲なしといつた淋しさで御座います夫人は愛犬を伴れてわざわざ停車塲迄お送り下さいました、一聲の汽笛と共に車が動き出し「御機嫌よう」とかたく握つた手をはなして、烟りのうづまくプラットホームをへだゝつてゆくとき、クッ

キツとゆるかに白い御頬をすこしうつぶせて此方を見まもつて下すつた淸楚な御姿は、かの畫で見た伊太利フイーンチエさながらの平沼河の岸の景を門にして居られる閑雅なお住居と共に今も腦裡に深く刻まれて忘れることが出來ません、思ひ出る每に、この幸な、春の樣な御境遇の永久にと祈つて止まないので御座います。

其の翌日の夕刻、私が出したお禮狀と引きたがへに御願ひして置いた歲暮の感が屆きました。全文では却て煩はしう御座いますから左に抄錄して。

昨日は遠路態々御出たまはり候ひしに、留守中の事とて慮外の失禮致し候、何卒あしからず御ゆるし下され度候、扨その節御質問下され候件、話れしも省みねばならぬ事に候へど、改まつて筆とらむとすれば何やらむ心臆しておもひに文字がともなはず、必ならずもうかびしまゝの二三にて御免を被り申候

先第一に、去年も今年も極月には相違なく候心せわしさにも去年今年かはりこれなく候さり乍ら境遇はもはや世紀を異にせるを如何にせむ去年の境遇に於ける今頃は、とにかく有形の學校を卒る可き最後の歲暮に候事とて、理想と憧憬を生命なる處女時代のわれ等はひたすら前途の光明をのみみとめ居り候ひしなりき。明けて暮れて今年の境遇に於ける感は餘りに多く、餘りにくるしく候。

學校の窓よりながめし社會はまだ〳〵單純なるものにて候ひき、愈〻今年より眞の社會學校に入りたるわが身を省みれば今更乍ら尋常一年の豆細工と實質に於て異ならぬ樣おぼえ候。

文字、地圖のうへにこれ西と東を學びつれ、何の目標もなき原中に立たせられて何れを西や東やと問はれたりとて、もとより分る可き道理もなくや候らむ、即はち社會の學校に入りてまだ三月四月なるわれ等は功名しても眞の功名に

あらず、過失ありても罪にあらずと許さるゝ間の腑甲斐なさ、蓋しこれも人世の階梯と諦らむるより外はなく候可きか。

淺くとも新時代の教育をうけし身なり何んぞ只徒らに舊來の習慣に低頭せんやと威張つて見ても、經濟の頭はまるでそなはらず、裁縫の道にもさまで明るからず、まして世間の交際には我不關焉の態度が多しといふに至つては、何といはれても辯明のなき次第に候。とにかく藏めたる世の寶を開く鍵は手にしたるなれば、何れをあけんか何れを閉さんかは鍵の主が技倆に待つより詮もなかる可くと存じ候。

此理由のもとに私が今年開きし倉は何？即ち「夫に對する務め」として、「或時は文庫に」「或時は掃溜に甘んじて成らむ」と期せし覺悟それにて候ひき呵々(下略)

▲繪具皿で解く浮世の膠

在東京　L　M　夫人

「其處のお蕎麥屋さんの路次を這入ると突き當りのうちがさうだよ」と通りに凧を揚げて居た十一位の男の子に敎へられて往つたのがLM夫人のお住居、格子をあける前に先づ胸を衝かれたのはまだ松のうちの五日といふのに注連も輪かざりも皆とれて只門松丈けがションボリと兩側に背中あはせに立つて居るばかりであつたことです。

案内を乞ひますと返事もなく三度目に漸やく出て來られたのを見ますとまあ夫人が直接にお取次下さいましたのでした。

「子供が只今漸やく寢つきましたばかりなのでつひ失禮いたしました」と座蒲團を薦めて、お茶か何か取りにお立ちになりましたが、そのお後姿を見上げてホッと溜息をつかずには居られませんでしたと申すのは

夫人は今年二十三歳、今で一昨年の秋、當家に嫁られてからまだまる一年半、それに何といふこと、學校時代には窈窕花の如きと誰れしらぬ者もなかつた美くしき御姿が見る影もなくおやつれになつて、嘗て演奏會のピヤノに衆人からおうらやまれになつた、鉄の様なお指も柴かと疑がはれるばかりになつて居られました、これは差控へた方が宜かつたかと思ひましたが今更どうすることも出來ないのでそのまゝになつて居りました、御主人は世間に知られた畫伯で入らつしやるのですが、非常に癇癪強い方なので夫人の御心勞は察するに餘りあるといふわけなのですしかし夫人が望むで嫁かれたお人丈けに技術は天才的、人物は白蓮の様なお人、表のかざりも昨日畫がかけぬとて燒いてしまはれたとか。

「折角御足勞をかけまして、何にもお話し申すほどのことも御座いませんが、御覧の通りのあばら屋に親子三人が水入らずといふ世帶、これが何より心安いことなのですよ、主人ですかエ、もう怒り出したら手がつけられません、けれども人は極く美くしい柔しい人なので御座いますからちきに平常の態度にかへりますのですよ。

私ですか、いゝえもう畫のことに口は餘り出なさい様にして居ります、主人から畫題の相談でもありました時は、多少相手にもなりますがうつかりしたことなんど申さうものなら忽まち癇癪を起しますから成る可く口は出さぬ様にして居ります、何にしてもうき世は繪の具皿一枚に縮められた物にすぎませんものね」

斯る境に在て一言不滿の聲をもらさず、しかも變物なる夫畫伯を扶け慰めて、夫人自らは思ひ切つた此哲學觀を持つて居られるのには驚きの外言葉も出ませんでした、お子さんがおめざめになつたらしいので、此の突然の訪問の餘りに無躾なのをお詫申上て御當家を辭しました。

（つゞく）

名流談片

德義的避姙法

三輪田元道氏

私は夕方砲兵工廠の職工が、其日の業を終へてぞろ〳〵と歸り行く姿を見て、覺えず落淚するのである。職工といふからには筋骨逞ましく頑丈の體格であるべき筈だのに、之は又何たる哀れな樣だらう。痩せて蒼白めて吹けば飛ぶやうな其姿。これが子供を産んだら、其子はどうなることか。直ぐ胸に浮ぶのは低能兒—白痴—養育院向き—いづれ國家の厄介になる代物も、鮮なくなからうと思うて。

凡そ國力の發展は健全なる中等社會即ち活動社會の力に依る。無能力の人間が幾ら繁殖したとて、決して國力を增すものではない。殷鑑遠からず暹羅を見ても解かる。暹羅の國力の振はないのは、上流の遊民と下流の勞働者のみ多くて、最も大切なる中等社會が無いからである。

獨逸は之に鑑みて、其貴族の多くを軍人となして中等社會の活動界に引入れて居る。佛蘭西は生兒の制限を行ふて、人口は年に二萬人づつ減少するといふが、無能力の人間を無暗に繁殖さして國家の厄介者を作るよりも、强健なる人間を作つて粒選りにした方が、或は國家の得策かも知れぬ。私は佛蘭西の此傾向を一概に笑ふべきものとは思はぬ。

日本の人口は年々二十萬づゝ增加すると誇するも實は四十萬づゝの增加である。而して二十年前の調査に據れば、男子一人を丁年まで育つるには八百圓を要した。物價騰貴の今日に於ては千五百圓は掛かる。故に若し一家に五人の子供があるとすれば六七千圓要る事になる。此費用を負擔し得る者は兎も角、し得ない者は非常の困難を感ずるに違ひない。

要するに或程度迄の避姙は寧ろ必要である、私は浮田博士の如き品性高き學者が、俗に阿らず、眞面目に其說を發表するのを見て多大の敬意を表する。何となれば彼の左視右顧、世間の批評に戰々兢々たる曲學阿世の徒の爲し得ざる所であるからである。但し正面より避姙の必要を說くは、稍もすれば誤解を招くの恐れがあるから、私は世の無實力者や肺病、癩病、其他甚しき花柳患者が、國家の前途を思うて、德義的に結婚を見合せ、若くは避姙を斷行せんことを希望する。これ實に國家の爲めである。人類社會の爲めである。(每日電報)

食卓上の教訓

醫學博士　高木兼寬氏

食物の事には我儘を申してはならぬが、左りとて身體の榮養にも適せぬ粗食をなせよとの事ではありませぬ。世人よりは粗食と認められて居る食物の中にも、頗る滋味營養に富んで日本人の身體に適當したの

が澤山あります。假令ば御飯に味噌汁と云ふやうな食物で濟ませて居ると人は粗食だと云つて嘲笑する者もありませう。佳肴美味に較べては如何にも甚だしき粗食に相違無いが、滋養の點に於いては敢て遜色はありません。夫れ故滋養さへ充分ならば假令粗食なりとて夫れに堪へられる丈日常の鍛錬を經る事が必要です。併し斯く申しても、「夫れでは肉も喰べるな、魚も買ふな」と云ふやうに穿き違へては困ります。肉も魚も喰べて充分滋養分を取る事は必要である。私は此點に於ては家内一同に對して少しも容赦なく之れを實行させ、偏食物に對して好嫌は一切申させません。次男が未だ十一二歳の頃でした。或日魚の味噌汁を膳に添へてあつた處、嫌ひだと云つて何うしても箸を下さなかつたが、私も側に喰べて居たから其様我儘は許しません。「お前は何故其の汁を喰べませんか、滋養があつて身體の爲にもなり、又味ひも美く料理してある、不爲になる副食物は誰のお膳にも上せてありません、サア喰べてお仕舞ひなさい」と嚴酷に申し渡しましたが、首を掉つて却々箸を執りません。併し懇々諭した結果、漸く幼心にも理解したと見え、一椀の魚汁を遂に咽喉を通しました。「何うだ子美味かつたか子」「ハイ美味う御座いました」と答へました。此の主義の下に子供を養成する場合は隨分嚴格な態度で遵守させますが、時を經ると共に遂に之れが習慣となつて、今は此の家庭に背くものは一人もなくなりました。最初私が此主義を妻に話しました處が、喜んで賛成して呉れ、且つ妻の云ふには「私も幼少の頃から喰物の事に父から嚴しく申され、眞一自分の嫌ひな物が膳に附いて居たら、默つて膳の傍へ卸して置き、決して此れは嫌ひ那れは厭と、膳に向つて一言も申す事はならぬと教訓を受けて居りましたから、至極結構な仰せと存じます」と全く私と妻との意見が一致したので、夫れから後今に至る迄亡き母の精神は家憲となつて子孫に實行されて居ます。（報知新聞）

讀書談片

津田梅子女史

書物を讀むには二種類あらうと思ひます。（一）娯しく〱讀む書と（二）大體に通ずる爲の通讀とでありますが、ドンな書物を一般に讀ませて宜しいか、其邊は私はお答が出來ません。

私は塾の學生に就てお話し申しますが、塾には獨習の質問時間と云ふがありまして、此時間には只教師が貴女は何を讀んだかと訊くばかりです。

道徳とか、宗教とかの物はどうも生徒が倦んで來ますからいけません小說ではデッケンスやスコット等のシンプルの作を讀ませます。生徒は最初はチョッと解りかれる樣ですが、其中に面白くなつて來て善く讀むやうになります。

何せい西洋と東洋とは全然狀態が違ひますから、最近の新しい作は到底十分に解るものではありません。私には十八世紀から十九世紀邊の

作が結構です。

誰にも向くやうな書物とは、さあ何で御座いませう。私は最近の書物で「ダイアナ、メロリ」を讀みました。之はメンフリ、ワオード嬢の作で昨年十二月の出版で御座います。私には大層面白う御座いますが、生徒にはどうでせうか。(毎日新聞)

年齢と壽命

ドクトル 富士川游氏

人體は蒸氣機關と酷似して居る。蒸氣機關の動くのは熱で、人間の生命も亦熱である。今日の生理學者が食物を研究するには、一は此熱を起す分量に據るのであるが、體温を製造する爲には必ずしも肉食を必要としない。米もよし、豆腐もよし、要は腹に慣れた物を食ふにある。斯して製造したる熱を無用に消費するは大變な損で、適當に之を保存せねばならぬ。諸動物中如何なるものが長命であるかを研究するに、各々養ひ來りたる勢力を早く使つてしまつたものは早く死し、少しづつ使つたものは長命である。

	發育期	若年期	生理的年齢
馬	三百四十日	五年	三十五年
牛	二百九十日	四年	三十年
人	二百八十日	二十年	八十年
犬	六十三日	二年	十年

即ち體内に長く養成したる勢力を長くかゝつて使つた者は長命である。婦人が男子に比して一體に長命なるも、蓋し此理由である。次に生命の事を云ふと、赤坊は割合に死なないが、誕生前後から二年位迄に多く死んでしまふ。此關門を通過すれば又死なくなる。斯の如く年齢と死の關係を統計すれば次の様になつて居る。

十歳の人は	今後の壽命	四十五年五ヶ月
廿歳の人は	今後の壽命	三十八年三ヶ月
卅歳の人は	今後の壽命	三十一年八ヶ月
四十歳の人は	今後の壽命	二十五年三ヶ月
五十歳の人は	今後の壽命	十九年
六十歳の人は	今後の壽命	十三年一ヶ月
七十歳の人は	今後の壽命	八年一ヶ月

即ち生延ぶれば生延ぶる程壽命は長くなるのである。又子供の發育には自から順序があつて、風船玉を膨らす如く一體に發育するものではない。即ち二歳より四歳までは横に成長し、五歳より七八歳迄は竪に伸び、九歳より十四歳までは又横に太り、十六歳以上は竪に伸びる。即ち横竪横竪と發育するのである。故に或時代に肥つて居た子供が、或時代に痩せたとて、必ずしも憂ふべき事ではない。寧ろ當然の順序に發育しつゝあるのである。只前に述べた通り此四期に依つて死亡率を異にするは注意すべき事である。(毎日電報)

女學校評判記（一）

御茶の水評判記

河岡潮風

△茗溪の女地主▽

東京電車の乘換切符を御覽なさい。五十有餘の乘換場は悉く地名、町名である。中に唯一つ師範校前と記してあるでないか。金でも貰はなければ、メッタにその前に停留場を設けぬ東鐵が、頼みもせぬに、切符に迄書くとは、以て如何に師範が、世に認められてるか解るでせう。師範とは、わが東京女子高等師範學校たる事は云ふ迄もない。

かの相棒たりし、男子の高等師範が宿換したる後は茗溪を領するもの、本校のみとなつたのである。表通りは舊外濠電車が徂徠し、お濠の水の緑波を見こして甲武電車の飛ぶも見える。更に眼を擧げよ、左に巍々たるは、ニコライの鐘樓、落日、紅なる夕は、塔尖の黄金十字架、血汐に染みし如く、その光は目を射て、人をして、そゞろに、幾萬の老若が、十字遠征軍を起して、ゼルサレムの空に高く振りかざした十字架を想はしめる。さてこゝにとりまはす木柵、土塀、數町の長きに及んで、敷地總面積約一萬坪、總建坪三千一百坪で、千五百名の大海老茶、小海老茶を收容したる一大學府である。シカシ東京の男學生間の評判は凄まじく惡いもので、或ひはオチヤッピー女史の本場と罵り、牧場の豚を連想すると嘲り、あんな妻君を頂戴する位なら、一と思ひに自殺する！と迄極言するさへあるが悉く是れ當らざると遠き下馬評で、本校は決して出過女の養成所や、醜婦保護所でない。以下に少しくその眞相を述べて見よう。

△歴史と各分科▽

まづ本校の歴史を語れば最も古い女學校の一つでも

る。明治七年三月「廣く世局の進運に鑑み、女子教育の忽にすべからざるを察して」時の文部少輔、田中不二麿子が三條太政大臣の裁可を得て、本郷湯島三丁目に東京女子師範學校なるものを創建したのが起りであつた。皇后陛下からは御内庫金五千圓を賜り、行啓すらあつて、九年二月には、

みがゝずば玉もかゞみもなにかせん
　學びの道をかくこそありけれ

と御詠を下された。是が今の校歌となつてゐる。

爾來幾變遷の後、十八年に及んでは、東京師範學校女子部となり、高嶺秀夫氏校長に任せられた。廿三年三月に漸く一本となつて、女子高等師範學校と改稱し時運と共に推移して今日に至つたのだ。

本校には研究科、專修科（是は目下生徒募集中で、家事專修科、國語、體操專修科ともに三十名づゝは入學を許す由。來三月十日迄に到達の日取で願書差出すべしといふ）保育實習科、本科に別つ。更に本科は文科、理科、技藝科とし、修業年限は四年、是が本校の中堅となるのである。

右の外、附屬として高等女學校、小學校、幼稚園等あるが、後にくはしく云ふとせう。先づ眼目たる本科にはどうして入るか、其の

△入學に至る迄の手續▽

は、左の通りである。

一、生徒募集は毎年十二月にして、入學は翌年四月。
一、左の資格の者を地方長官推薦し、學校長その中より選拔す。
イ、身體健全、品行方正、教員に適すと認めし者。
ロ、女子師範學校、修業年限四年以上の官公私　高等女學校卒業生。
ハ、專門學校入學者檢定試驗に合格したる者。
ニ、同上規定第八條一號に該當する者。
ホ、年齡十七年以上廿二年未滿にして夫を有せざるもの。

薦擧狀に身體檢査書を添へて差出し、次に入學試驗を受ける一段であるが、近來は神田あたりの私塾で、その豫備教育を施す處が出來た位、競爭が劇しくなつた。

かくして入學を許されたものは、體格と云ひ、學力と云ひ、揃ひも揃つた剛の者。めい〳〵理想と勇氣と

自惚れとを持つて、西より東より集つてくる。郷國を尋ぬれば、臺灣を除く外の各府縣から出て來てるとは御旺んな事也。

處がこれらの中には私費の者あり。官費の者もあり官費を甲乙二種に區別し、甲を全支給とて一ヶ月七圓乙は一部支給とて一ヶ月四圓を補助されるのだ。自費生とても授業料を收めずともよいから、大いに經費は少くてすむ。其代り卒業生服務規則なる、餘計な文部省令が發布になつてゐて、卒業證書受領の日より基算して、全支給は五ヶ年、一部は三ヶ年、自給は二ヶ年間は、育英の業に從事する義務がある。それから尙官費生は特別の事情なき限り寄宿舍に入る義務を負ふ‖無論、私費生とても下宿住ひは許されぬ。

△弓を射て腕力の養成▽

入學試驗の名におびえて、圓々した顏が、少しは瘦せた、それも夢の樣に過ぎ去つて、身は女子最高學府(本校は女子大學より一ヶ年長い)の一員となつた嬉しさ！多年願ひし戀の叶ふた心地で、校門をくゞる‖

始業式は四月十一日。大講堂で行はれる。二百數十坪の大廣間、柱一本もない立派さ、恐れ多い事ではあるが、かしこきあたりの何やらの廣間も是ほどはないさうなと聞いて、無闇矢鱈と感心する。寄宿舍へ入つてウロ〳〵食堂で下トをやつて、眼鏡が曇つたとか、舍監の何子女史が、いやにシンチリムツクリと奥歯にモノが挾まつた樣な人だとか、入學早々の兩三日、日記は細字でゴチヤ〳〵つけても追ひつかぬ程だ。

夕暮になると、音に聞きし、ニコライの鐘がゴガンゴガンと八ヶ間敷、響きわたるにつれても、故郷戀しくなつかしく、殘照あかい西の空を望んで、袂を嚙むヒステリー孃もあらう。

少し居つくと暇には市内見物に出かけたり、運動遊戲にふけつたりするのであるが、上野、隅田の櫻が美しかつた事やら、商賣がたき？の女子大學が、私立の癖に堂々たる建物で、いさゝか癪にさはつた事や、上級生が廣庭で、大弓を引いてるを見て、オツ魂消た事

や、自分も眞似してやつたら、口の悪い、味噌ッ齒さんが、貴女のはユミでなくて、ユメだわと冷かした。いづれ其内に仇を取つてやらうだのと、永く忘れがたき思ひ出なるべし。何しろ暑中休暇迄は多事な時節である。

新涼九月からは、益〻女子師範化される。何しろ大抵の人が充分に學費がないのだから、贅澤な眞似は出來ぬ。かの某々學校生のやうに遊び半分に婚嫁の資格を作るために學ぶのではなく、露骨に申せば、將來のメシの種に學ぶのだもの、職業的になるのは勢ひの然らしむる處であらう。ジミであるのも、世話女房的であるのも境遇の生む處だ。

△女豪傑井口あくり女史▽

四十年六月の勅令に據れば、職員定員は九十名で、内教授廿六名、助教授八名とある。現在では無論男子の教授が多い。數多き間にも有力で、專用の研究室を持つてるのが六人、第一は地理の野口保興氏で、つねに自慢して「何々について知る處を記せ」と云ふ風の問題の出し方は吾輩が開祖だと、ニコつかれる無邪氣な方なり。動物生理の岩川友太郎氏、ズングリムックリ肥つてはゐるが毒氣はコレつばかりもなさゝうなる地理學者佐藤傳藏學士、化學の平田敏雄氏、歴史の下村三四吉氏、ドクトルフキロソフキーで物理の大家、飯森挺造氏など、みな一方に覇を稱へてゐる。

女子で異彩を放てるは、外國語擔任の武田錦子女史作法の佐方鎭子女史、家事の喜多見宮川兩女史、以下岡田、谷田部、なんどの數女史が居られる。世人が遍ねく知つてるは、生理體操敎授の正七位井口あくり女史（註曰、女史はキジチアグリと訓まれるを嫌ひ、キノクチアクリと呼ばれたいのださうな。いづれにしても美しい名では御座らぬ）であらう。その主張するスエーデン式の體操は、敏捷なる猿の飛ぶが如く、日本婦人には過劇に過ぐるにや、本校出身者は體軀頑健なるにかゝはらず（註曰、醫科大學や理科大學の卒業生の一割は死亡せるに反し、本校卒業生中の死亡者は五

分限にすぎず）その代り石女が多いと云ふこれは人の噂だの

以上の諸學者を統べてゐるのは、楠正成卿と同じ正四位の高徹秀夫氏である。東京府士族と區役所についてるが、、、モトを洗へば、白虎隊で有名な會津藩士、安政元年八月十五日に呱々の聲を擧げたと云ふからには本年とつて五十六歳の筈だ。シカシ元氣な人で、生徒が小笠原式に、馬鹿丁寧に腰を折つてお辭儀するのを握り拳で失敬の眞似をしながら（實は帽子に手をかけてるヌムリなので……）ヅン〳〵行つちまふなど、壯者の意氣があつて敬服の至りである。

△お阿父さんはヨカ〳〵飴屋▽

米國の悧巧男ワナメーカーが、一度デパートメントストーアーを創設してより、此事世界の流行となつたが、本校の如き、幼稚園小學、高等女學校、專修科、本科の諸科あり、敎育界のデパートメントストアーと申してもよからう。

幼稚園の入口は本郷宮本町の電車通りで、丁度裏門に當つてゐる。二百七十坪ばかりの平家の建物、「幼兒保育の方法の研究に資し、並に本校生徒をして幼兒保育の練習をなさしめんが爲めに出來たものだ。定員は百五十名で男女混合の三組に分たれ、課目は遊戯、唱歌、談話、手技としてある、妙齢の保姆オルガンを彈けば、これにつれて、未來のアドミラルもナインチングール女史も、無意識に、手をつなぎあつて、兎の樣にピョン〳〵跳ねながら、

あがる〳〵、お日樣あがる。東の海にまアばゆく――
照るわ〳〵、お日樣照るわ。高かい空にキイラ〳〵――
入る〳〵、お日樣入る。西の山にサヽすく入る――
さよならお日樣、明日復たお目に――

なんかと出來るだけ大きな口をあけて歌ふ。これが十數年を經ずして、角帽をかぶり、或はひさし髮をゆひ、星菫宗門に歸依し、神聖だわとゴタクをならべる樣になるのだ―。冷やかに觀ずれば人生五十年は畢竟するに滑稽の連續である。

男生は大抵洋服なれど、女生は和服で、胸から大きな前垂をかけてゐる。辷べつてころんでも、前が捲れたりして不體裁のない樣にださうな。つねに嬉戯する處は高さ一間あまりの緩い傾斜をなせる小山の上か、乃至はゆかりの色匂はしき藤棚の下だ、一寸申しておくが、不時の天災あつた折の、避難所は此の二た處ぢやさうで、規則書にも明記されてある、さう聞けば、一つ鯰にでも生れ變つて、破天荒の大地震を揺らせ、靑ストッキング連が泡食ひ給ふて、ハヂ出る實況が見たくもあるテ。

こゝの保育料は一圓五十錢——少しお高い樣だ、ソレが出せなきや分園の御厄介となるがよろしい。病院で云へば、施療患者室である、無料の代り、本園よりは、ヨリ多く師範生——即ち敎生の手習草紙にされるを我慢せねばならぬ。父兄は車夫、井戸職、砲兵工廠職工、ヨカ〳〵飴屋などで、萬年町に御親類筋のありさうなのばかりだ。本園の兒童に較べて、品性が一枚下なのは勿論、金錢、食物の話をしたがる事。ヒガミ根性のある事。觀察力の鈍い事など著しいさうな。たゞ取り柄は、貧家に成長したものだから、年少者の世話を燒く事だけは慣れたものである。

これらの相違は、參觀すれば明白に感ぜられる。本園は何から何まで坊ちやんや孃つちやんの作り、分園には、白雲頭あり、靑洟たらしあり、服裝も大いに劣つてゐる。たま〳〵、小ザッパリしたのもないではないが、一寸口を利かすと、スグお里が現はれる。

「オランとこの向ひの家は子、昨夕、ツー走ちやつたんだとサ。今朝までゐればお巡りが來てくゝつてくつて父ちやんが話てたよ！」と孟子の母に聽かせから機織臺からコロげ落ちるであらう。

あゝ素性は恐ろしいものである！

△ユーブツ多き女學校▽

附屬小學校は三つに別れてゝ、其一部は、幼稚園の本園と連絡あるもの。良家の子弟で成績よき者二百八十名ばかり收容す。月謝二圓とは高い。第二部は良家

の子弟であるが、成績のよろしからぬを百名ばかり敎へてる。是は無月謝だ。第三部に到つては、幼稚園の分園的のもので、貧民部落より驅り集められた六十名を敎へてる。三ッとも共通の點は改正小學令に基ゐて尋常六年生迄ある一事のみだ。

高等女學校に至つては九分通り迄良家のお孃樣――中にはお姬さまと呼んでも怪しうないのがある――で隨分「ユープツ」に富むでるせとは、どこやらで小耳に挾んだ評判なれど、武骨の筆者には何の意味やらわからない。たゞ、日々の昇校退校の時刻に、お茶の水驛の甲武電車に胡蝶の如くあどけなくヒヨ〳〵入り込み來る、一群を見て、成程是がユープツかと感ずるのみ幅廣のバチンの金具を前に見せてゐるが其の徽章代用ださうな。

本科は五ヶ年制度で、現員二百七十六名、別に三ヶ年の專攻科が百名の小式部を有す。此以上を知りたければ、郵劵封入で問ひ合すか、さなくば、電話下谷千二百五番へ懸けて頂きたい。

△體量十六貫二百目▽

女子大學を參觀してスグ本校へ來ると、銀座の大通りから、裏通へ入つた樣な心地がするは何故であらうか、同じ京橋區であるが差が甚だしいを思はざるを得ないと同じく、等しく最高學府でも、調子が異なるを覺えるのだ。特に寄宿などさうである。

寮の呼び方一つにも、目白の方は、何々寮、何々寮と、優にやさしき物語り風な名だが、コッチは、第一の側、第二の側と沒風流である、又た目白の自修室は二人に六疊一室位の割になつてるが、師範のは二百五十坪の大講堂を以て是にあて、三百の舍生一とからげに詰め込むである。從つて、皆な一樣の木机に、テーブルクロースもかけず金ピカの本も飾らず。無用のものを一切置かぬ樣にして、晝間は肱を張し、ひさし髮をツキ合せていそしむシステムである。服裝なんかもジミのが多く、目白風のハイカラは殆んど無い。要するに坐臥進退、用を辨ずれば、願ひ足るといふ具合な

太陽 第十五卷第三號 增刊

明治史第七編
文藝史
附錄 明治四十一年史

全一册

洋裝四六二倍判
紙數二百六十頁
寫眞版依例豐富
正價金三十錢
郵稅（本號に限）八錢

◎明治時代は如何なる文藝を以て後裔に誇るべきか
◎如何にして明治文藝は發展したる乎。
◎如何なる文士が如何なる苦境に在りて文壇に貢献せし乎。
◎今日に非ずんば明治文藝の歴史を編輯すると困難也
◎本書を繙けば過去四十年間の文藝はパノラマの如し。
◎附錄には昨年間に於ける社會各方面の出來事を最も公平精細に論述す。

（二月二十日發行）

振替貯金口座 東京二四〇番
東京 博文館 本町
販賣用電話 本局二六二〇番

（その二）



マツニホン
ウメニホン
改良醬油
お臺所の改良を念とせらるゝ奥様方は皆日本醬油の愛用者なり
市内及び全國各酒醬油店にて販賣致居候
日本醬油釀造
株式會社
東京深川
小名木川通
ヒシニホン
フジニホン

女（るの三）

簡易複寫インキ

器械不要

蒟蒻版寒天版及び其他の印類又は器械いらず此インキ一品にて簡便迅速座上立どころに文書圖版數十百枚を印刷し得べし本品は既に諸官衙及び郡區町村役塲等の採用品たり

●定價 二オンス堅裝 壜入送料共 金參拾錢 郵券代用壹割增

下谷坂本町二の廿四

中村屋商店

引風一切 太陽散 速治剤楽

藥價 桐箱四十包入金五十錢。十五包入廿錢。七包入十錢。送料各二錢。

各地有名藥店に有り、若最寄藥店に無時は直接註文を乞ふ即送す。

東京日本橋區本町三丁目

本舖 藥種問屋 博愛堂

美術造花 通信教授

二ヶ月卒業▲遠國の自宅で老幼男女誰にても造り花▲和洋花かんざし等美麗に出來る卒業後は就職の便あり▲案内書附製品見本は郵稅十二錢送れば直に呈す

東京麻布笄町百二十二番地 美術造花傳習所

●新案特許 一〇三六二一號 衛生的なる改良かもじ發賣●



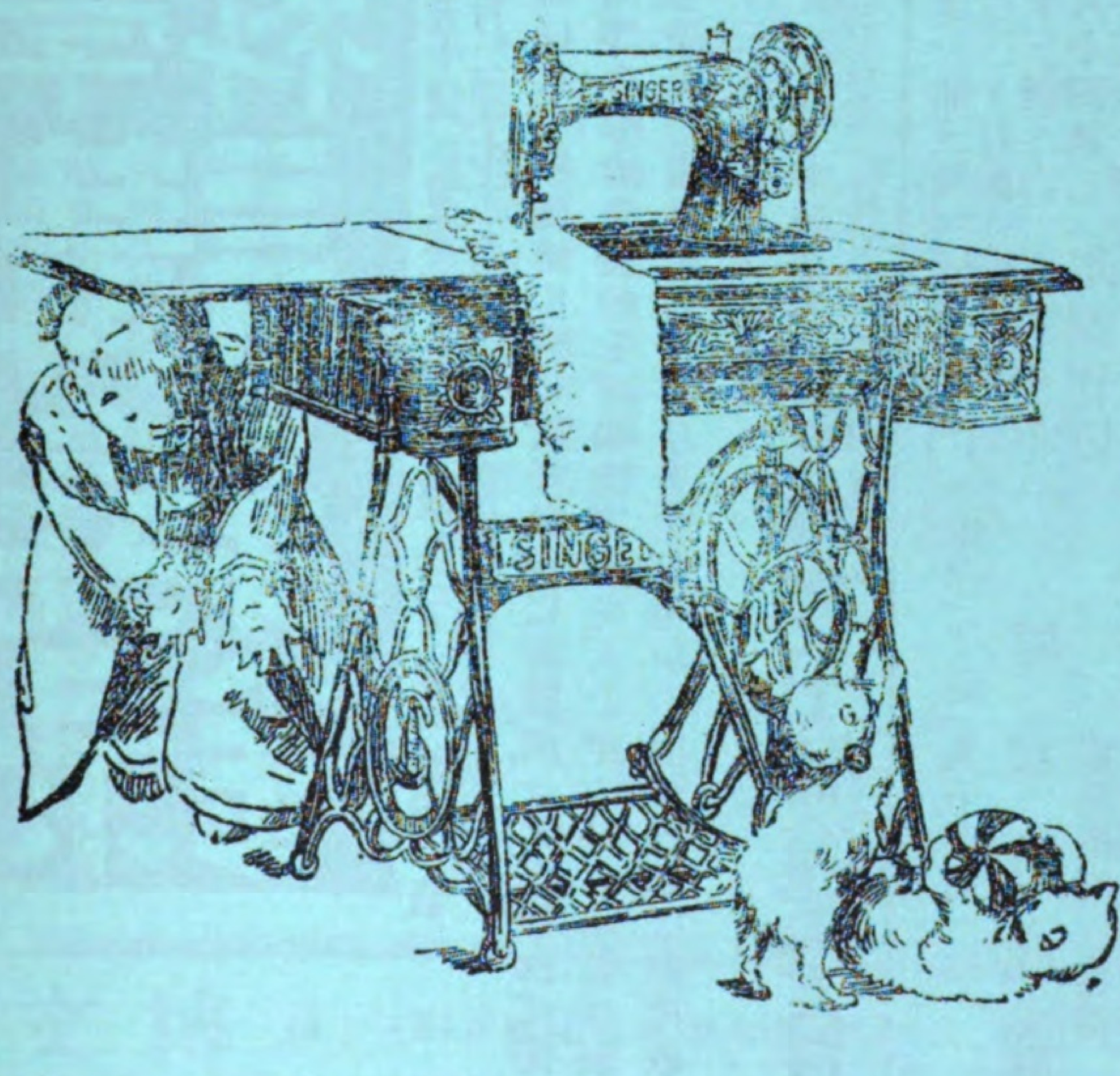
種類 丸髷 島田髷 銀杏髷 其外

本品の特長 一、根元にコロップを裝置せるにより舊式のもの丶如く硬からず腐ざわり軟らかなり。二、皮膚を摩擦する事少なき故禿頭の憂なし。三、頭痛癖ある婦人に用ゐて爽快を覺えしむ。四、二百度の熱蒸氣にて消毒しあれば毛髮の傳染病を媒介する憂なし

◉諸かもじ製造販賣 東京市神田區豐島町十七番地（振替貯金口座一八一八八番） 田中金三郎

◉小賣特約店 京橋中橋 大西白牡丹 本郷三丁目 兼康 淺草駒形 百助商店 神田區須田町 三井屋 日本橋通二丁目 柳屋 外到る處の小間物店化粧品店にあり

女（るの五）



女(ろの八)

のだ。

シカシ又た衛生などには十二分の注意を拂つてあつて、寢室には一室十五人の割で、ベットがつねにならび、晝間は白いシーツで掩ふてある。かの自修室も寢室も談話室も共通なる、女子大學の及ばぬ點なのである。何しろ寄宿舍の建物は寢室の集合なのだから參觀人には示さぬ。其代り「リソー室」なるものを見せる。大方十二分に調度が完備されたる部屋なれば、理想室と呼ぶものなりと、早呑込して、ノコ〱ついて行くに豈圖らんや廣い〱洗面所だ！四方八面の壁に上等舶來の大姿鏡がハメ込まれて、下手な水晶宮へ迷ひ入つた樣、聞けば、こゝで髮を洗ひ、容儀を整へるとかや、バ、ン、さては理裝室と書くのだなーと、初めて思ひついて御座る。

風呂は毎日沸つて、午後三時より五時の間に全員が浴するのだ　町の洗湯よりは無論大きいが、二時間に三百は入れまい、さぞかし芋を洗ふ樣に臂肩相摩し、湯瀧のお湯が溢れるでありませう。

脫衣棚のあたりには、身長を計る器械と、カン〱とが置かる。衛生に注意せらるゝ諸姉は裸になる度に自ら瘦肥を驗すると推察す。試しにカン〱に近づいて見たら、分銅は十六貫二百で止つてゐた。ハテナ、誰の重さであらうか？

食堂は浴室の横にあり。オナカを減らして馳け込めとの謎かも知れぬ。いでや、御馳走のお話に移らう。

△豚の刺身とドラヤキの御馳走▽

人はパンのみにて生きずとは、ズント昔、ナザレの聖者の言なれど、其のパンがなくては猶の事生活を續ける事は出來まい、わが師範生諸孃の頭を惱まし給ふも亦パン問題である。

御規則に據つて一ヶ月の食費は金六圓（女子大學などは十圓）と定められてあるが、十五人の賄女の給金、皿、茶碗の補給費、寄宿の入浴費迄も含んでるのだから、お口に入るのは一日十七錢の小額――ヘボ洋食店の一品料理にも及ばぬ値である、安からう、惡か

らうの喩に洩れず、お米も一圓に五升三合の、汽車の赤切符に相當するもの、お菜も『あゝ、うまかつてよ』と賛辭を奉る事の出來にくい品だ。今、試みに本年松の内の獻立表を掲げれば、

	△朝	△晝	△夜	△備考
一日（金）	雜煮（とり、あをな、大根）屠蘇（黒豆、ごまめ、數の子、酢のもの）	望まばさつまいも甘煮	すまし汁	
二日（土）	雜煮（椎たけ、大根、菜）	牛肉（ねぎ、いも、煮つけ）	八つがしら煮つけ、きんぴら	
三日（日）	雜煮（すまし）	燒肴（さんま、おろし）	潮汁（鯛）なます（大根、菜）	きんつば、あまから、つくばね
四日（月）	味噌汁、わさびつけ（おさつ）	オムレツ	煮もの（むきみ、青菜）	
五日（火）	すまし（昆こんぶ）	口取（燒肴、椎たけ、玉子巻）	フロフキ（大根、いも）	（あべ川、みかん）
六日（水）	味噌汁（千切大根、油揚）漬菜	豚のさしみ	すまし汁（はんぺん、菜）	
七日（木）	七草かゆ（ごまめ、數の子、なます）	煮つけ（ひらめ、ぜんまい）	おさつ甘煮、きんぴらごぼう	

（註曰。豚のさしみとは頗る珍食會員の注目する處であらうが實は何の事もない。豚肉をアッサリうでゝ、キャベツと共に賞味するのだ。）

兎も角も見た處旨さうに作成したゞけでもまづ以て多とすべきであらう。備考とは夜食の卓に附録としてつける、お茶菓子で、一週二回は缺かさぬ。磯松風、芋羊羹及びバナ、ドロップなどゝ上等のものから、下つては、大福二つ、どらやき、やきいも、白砂糖の様なものもある。初秋、仲秋の頃には果實が多く、柿一つさては桃太郎ならなくに、夏みかん半分などの折もなきに非ず、夫れでも不平も云はずに頂戴して仕舞ふさうである。

△わかれ〲の身の成行▽

幼稚園から小學、小學から高等女學校、高等女學校から師範學校と、順を追ふて記述するだけでさへも、二三度息をつく位だもの、實地にやる當人と、引き伸す樣にして待つ親の心はどうあらうか、病氣にもならず、落第もせず、虫もつかず、腐りもせず首尾よく卒業して、低い鼻を高くして、歸省したのを迎へる時、親子相擁してうれし泣きに泣いたのもあるといふ。シカシ本舞臺はこれからだ。青天に昇るよりも骨が折れ

る、人生の行路難を排除して進むのはこれからだ。すナどうなる事か？

かつては同じ學の窓に、机ならべて努め、いそしんだ友も、卒業するが最後、別れ〳〵に散る空の雲の様に世界の表に活動すべき身の上である。尤も當座の兩三はそんなでもあるまいが、相反しての一寸の差は千里にも及ぶもの、五年、七年、十年と經つてから、見かへつたなら、今更に、運命の神の戯れの甚だしきに驚かれるであらう。地方の女學校の平教師で、昔、口癖の様に繰り返した不退轉の向上心とやらも紫めりんすの辨當包さげて、登校する時に穿く下駄の前齒と共に消磨し去つて、月末のお手あてゝ、あれ買はう、是買はうの外餘念なき人もある。或は運よく、よき手づるを傳はつて、尻から二番の及第でも、今は學習院教授と肩書いかめしう、小公子に君が代授けて榮ゆるもあり。教授はフッゝリ思ひ止まつて、奥様となつて、丸髷姿つゝましう、その昔の切口上、猫なで聲に換へしもあらう。野心家は何とかグール女史とやらに劣らぬ才媛にならうとて、渡米したきり、梨のつぶて、返り言一つ寄せず、校友會誌上の名簿にも、たゞ在米國とばかりなのもなきにしもあらじ、あるひは旅順に、京城に、大和撫子育つる務、負びて赴けるもあり。あの世へ去つて、何週忌、今頃は墓の苔、さぞ蒸したらんと想はるゝも少なからず。さても世はさま〴〵、水の流れと人の身の喩も想ひ合されて、六ケ敷云へば、撫然、やさしく申せば、ホッと息ついて、何とはなしに涙さしぐまるゝ様な折もあるさうな。流石は女、小生如きは個中の消息を解せず、たゞ理屈づくに統計で見ねば合點參らぬ。沒風流の數字の整列、先づ大目に見のがし給へや。

本校卒業生は、ヤンヤ〳〵と數多の學校から引つぱり凧になつてゐる。需要が供給に足らぬかして、月給も二十五圓から三十五圓迄で、四方八面へ散逸する。昨年迄の本科卒業生六百九十六人の中で、五百二十三人は社會に或る椅子を占めてゐるのだ。然らば他の百七十三人はどうかと尋ねるに、三十五人は死亡、百二十

四人は結婚せしため職を抛つたものであるから、眞に職なきはタツタ十四名のみである。夫れも一人々々調べればキツト他に事情が存してるので、決して職なきが故にあらざるは、太鼓の樣な印を捺して、保證する迄もない。まことに本校は自活せんとする婦人にとつては、命の親糧米びつである。更に一歩を進めて、

△卒業生の行末▽

と究めて見よう。

その若き日には、嫁して世話女房じみた先輩？を見て、オヽ、いやだ〳〵。妾は生涯、奥樣になんかならないからいゝ――と心に叫むだ才媛原も、寄る年波――と云つては語弊があるが――に今更に驚かされ、他に色々の事情に壓迫せられ、かつは、最初は天職と信じた敎師も、年が年中紋切形で、幕なしにやつてゐてはウンザリする事なきにあらず。さう〳〵いつ迄も面白まはゆき敎場で、白墨の粉にまみれながら、「皆さん。わかつた方は手をお上げなさい」なんかと云つても居れぬ。こゝに誘ふ水あらば、運ぶに任せておさらば、さらばと、學校から足を洗ふて、家庭の人となるのである。この數が前記の百二十四人なので、中には結婚しても夫婦共稼ぎで、卿は四十圓取り給へ妾は三十圓戴き侍るかしと、車輪になつて努めるもあり。此數百八十一とは、一寸面白い。

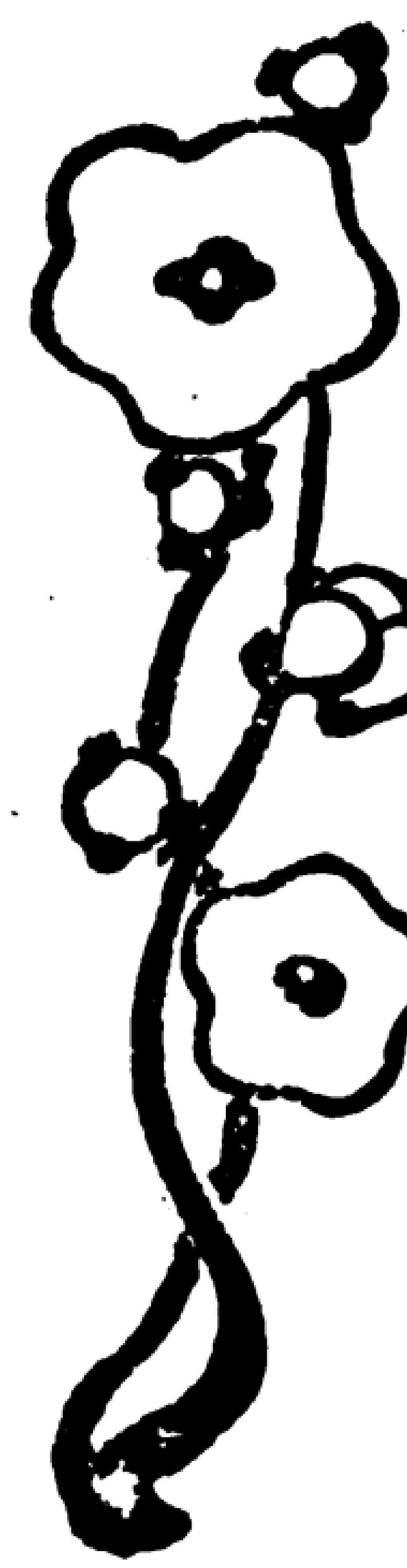
又た同じ敎員と申しても一から六まで等級があるものにて、上は學習院の敎授から、下小學校の訓導に至るまで、澤山なものだ。風變りのは前記のあくり女史や、又かの近頃メキ〳〵と賣り出した、私立シンガーミシン女學校長の秦リン子の如き其一人で「世には無用の著述をする女ありとても、ありあまる程シヤツを縫ふ女は少し」と喝破したシユレーゲル夫人の眞似をして、一ヤマ當てたのだ。又た女子大學の敎師中にも本校出身者は多くある。されば、本校の一生徒は「女子大學なんて威張つたつて、ウチの出店みたいのなものですわ」と薄い唇を翻へした位だ。シカシ世界の水が共通なる如く、敎に官私の別ある筈なし。最高學府

の本元爭ひするよりも、その暇に英語の一字でも覺えたらどんなものにや、人事ながら御注意申す。

それから本校の光榮とする處は、皇孫殿下の御養育係を三名迄出した一事で、渥美千代子や坂野すゞ子清水しげ子の記事が新聞に載つたのを御覽であつた方は御記憶であらう。

新聞で思ひ出したが、近頃各紙で見れば、本年四月から奈良にも女子高等師範が開校せられるといふ。シカシ創立の際の事なれば、當分は完全は望みがたいであらう。日本女子大學はやゝ虛榮の分子を含んでゐるし、帝國女子大學は不認可に終つた今日。本校は女子教育界の女王である(尤も此女王チトけちであるが)學問らしい學問をせんとせば、先づ第一に入學せねばならぬ學校なるは、十目の見る處、あへて異存はなからう。シテ見れば此上に提灯を持つ必要もなし、たゞ望むらくば學生諸姉袴の紐を締めなほして、倚ほ一層奮發候へと申す。(一月十八日記)





如菩薩日記

如夜叉女

三日――晴先月八日からのあれつゞけが今朝は不思議にも晴れて居る。

上段の間から書院までズーッと雨戸を繰ると内庭には綿をちぎつた樣な雪がおいてある。蝶のもろ羽に白粉塗りたらん樣の雪とはこんなのだらうと思ふ。御開祖のお手植といふ臥龍梅の古木や柘榴や木蓮の枝に朝日まつ間の時ならぬ花が咲いた。枯草の中の小さい熊笹が四つ五つ何ともいへない雅趣を添へてゐる、恍惚としてると。

何處からか啄木鳥が一羽大きな嘴で本堂の柱をコツコツとつゝいて居る。朝のお勤行がすんだお父樣と禪明（小僧）さんとが鈴をふりながら廊下の方にいらした。手早く庫裏のお掃除をすましてお母樣の御靈膳拵へに御手傳して、それから私のお部屋のお觀音樣に御飯をあげてお回向する。これ丈けは決してかゝさない私のお勤行でこれをしないと大變な罪でも犯した樣で其日一日胸が安まらない。

御飯臺が出ると食事のお經が始まる、これは家内中で讀むことになつてゐる。

お香の煙がいま掃除した許りのところにしづかに棚引いて居ると、私は世の中と全くはなれて何の不安も不滿もなく、あゝ淸い生活だなとおもふ。

盲縞の袖無を着て、モー少しで土をなめる許りのお婆さんが杖を前から後に、輪を描いてはチヨイ〳〵ツと振りながら石段を上つてお詣りに來た。

ホーッと息をついてズーッと腰を伸はすとたんに本堂から庫裏を一目の中に入れる、腰の曲つた人はキツとあゝするものだと思うて、私は微笑んだ。これでも

昔は村中では伊達者でなんの〳〵紅白粉を放した事がないといふ、今は紅顔何所へか去りにし、年寄がをかしいと思つてる中に各々しわもよる、白髮も生える、今更でもないけれど人の一生なんて實に短いものだ、うつかりしてると何も出來ないで終らなければならないなどゝ考へる。(評に曰く一語よく人生を道破す、覺者の言、可欽)

今年のお歳暮には手細工の羽子板を贈物にしようと色々圖案を工夫する。

種々の繪をとり出して、あれかこれかと見れば、見るほど目移りがして定らない、いつそ何にも寄らず獨で考へよう、或は出來は惡くたつて、眞の貴さは自分の赤心で骨折つたのに限るんだから、芝居の繪は顔を描くのが嫌だから全たく當世風のにして、いろ〳〵の下繪をかいて見た。お袈裟や衣のきれはしの錦や、繻珍や、金襴の小切を出して見ると。お客樣ー

誰樣かしらと一寸耳を傾けると先月轉住なすつた○○寺さんである。

去年佛教中學をお出なすつたといふ若い方、此間披露にいらした時は、私坊さんとは思はなかつた、黒紋付のお羽織に飛白のお召、かつ色の裙からは、紺の足袋が遠慮なく出てるのだもの、お父樣が八釜敷僧侶は是非僧侶の風でなければいけないと仰るのを聞いてるので、かう俗人とおなじ風の坊さんを見ると、失禮ながら尊い氣がしない。

お談話は手に取るやうに聞える。先月二十八日に○○寺さんで擧行んなすつたお施餓鬼のことらしい。

「始めて此組内の坊さん達のお揃ひを拜見しましたがどうもみんな堅苦しい方ばかりで、たいそうお八釜敷いから、私見たやうに、形式に重きをおかない者は頗る目にあひましたよ、もつと〳〵簡單で、要領を得るやうに改良せんと、チト時世に……なんですね……ハツハ……一體元氣盛りの長老さんたちがよくあゝしてお在るものと感服でした、學校になど居るものとは比較にならんですね……拙僧も來春になつたら晋山を行らうと檀家とも相談してましたが、ずッと式をかへて

最も簡單式にやらうと計畫中です、どうぞ其時は前日からお取持を願ひます」

時世後れといはぬ許りの御口吻、若いかたのお眼だから、こんな山の中の老僧達の為ることはどんなに歯痒くゐらつしやるのか知れないけど、でももう少し……何とか……と思ふ。――寺々の家庭のことなどもいつてらした。

「寺の女には大に高等の教育を施して、俗家の女よりはズツと學識が博く、容貌だつても大に振つてないといけませんね、御當山のお嬢さんの事は、岡本君（岡寺の長老さん）に聞きましたが……」なんて氣味の悪い程お褒めなさる。

是迄は皆年とつた方々ばかしだから、組内が極々穏かで、縣内でも六號組といへば菩薩の集合とまで云はれて居たが、彼の方も此組のお一人かと思ふと、私などの關した事でないけど、何だか毛色の違つた荒神様でも舞込んだ様な感じがする。

都のハイカラなお嬢さん達は、雜誌の繪で見てさへふるひつきたいほどお美しいんだもの、それと年中埃だらけになつて働いてる山の中の娘とは、如何したつて比べつこになるのぢやない、まして寺に居てはお稽古事だつて檀家の手前があるのだから、容貌の事なんかは、リボン一つだつて氣がねである、直眼について、お寺の女が……と村中の口にのぼるのだもの、容貌の振つてないのは當然である、しかし虚榮心だとか名譽心だとかを滿足させて、所謂紫色の女とならうとおもへばこそ、苦しいかも知れないけど、少しでも尊い佛教をわきまへてるなら、これほど平和な、これほど高尚な生活はあるまいと信じて居る、ことに荒れても枯れてもかういふ田舍の山寺に、靜かに御佛につかへ、變らぬ自然を友として過されるなら此上ない榮華である。

容は深山がくれの朽木で後指さゝれるとも、心の花が匂ふなら、ナニ愧ることがあらう、また風が吹き出した、鐘樓のあたりには櫻の葉が一つぱい落ちて居る。

四日――晴後の峰で雉子が二三羽チヨ〳〵とよびなが

ら、カサコソと落葉の中をさがして居る、あゝして樂し相に暮らしてるものを殺して食べるとは人の心位おそろしいものはなからう。

門前の女どもが、杉の葉拾ひにきた、手ン手に『杉の葉くなンエや』とことわつていく、白地の手拭ではつれた髪をかう前から包んで、たぼの處でグイと一つ結んだのが面白い、みな藁の背中當を日にむけてゆく。

お父樣のお下着やら禪明さんのシャツ足袋などを洗濯する。

お母樣はお買物にお出かけ禪明さんはと見るとわざわざ



ざ玄關へ出て「中學世界」か何か聲高に讀んでる、來年佛教中學に入れるといはれて居ながら、さほど勉强しようとしない。

『禪明さん何御勉强』ときくと『フン己位から入學試驗如きにはコセ〜しない』などゝ可愛い口で高慢らしいことをいつてる。『禪明は頭腦が明晰だから』とお父樣はいつもおほめなさる。

五六年前先住忌の時であつたどつかの内儀さんがお詣りにきて『お小僧さん今日はお寺に何かあるんですか』ときくとやつと十一ば

かりの禪明さんふつくりと色の白かつた可愛い顔をわざとツンとして「お寺には何があるつて佛ばかりさ」とやつてのけたのでみんなが大笑したことがあつたそれを思ひ出して「禪明さん……あなた位皮肉な人もないね」といふと「どうせ骨なしだもの」とぬからない。

五寸ばかりのつゝじの枝を粟田の一輪ざしにチヨツと投挿にして見る小さい葉の濃い緑が花よりも氣に入つてる。

絹子さんと澄子さんとがおそろへでいらして下すつた。

お二人とも眞黑いお髮を廂にして、言ひ合した樣に英語を織り出したリボンで髱をとめてゐらつしやる。絹子さんは萬を單位にして量る豪家のお孃さんだけどちつとも派手な風も高慢らしい風もなさらない、質素な、あつたか味のふかい、今の世にはほんとに珍らしいかたと、常に床しくおもうて居る。今日も地織づくめじみなお召、紅い振からかつ色のお裾までスツクリと揃つて氣持がよい處にかねてのお手際がしのばれる。

什物の粗末な火鉢をあげると、かざしたお手にはしほらしい皺さへ出してゐらつしやる。澄子さんてばお醫者樣だけに、誰樣もきやしやである、殊に澄子さんは色のくつきりと白い、細面の村一の美人、小豆色のお被布が一きは目立つ、私はアノさアツと首を傾けてゐらつしやる所をいつまでも見て居たい。

自分の美にあれこれと浮身をやつすより他人の美を眺めた方がどんなに樂みだか知れない、殊に造化の戯で私のやうに取り處なく生れついたものは（評に曰く眞に修養ある人ならではこの言を成し得ず）

お母樣がお歸宅になつて、お汁粉を拵へて下すつたから隔てのない三人は眞劍に平げた。

お孃樣がいらしてから澄子さんがお琴を敎はつてるので私が、

「すみ子さんは毎日お琴でせう、お羨しいわ」といふと「嫂さんが敎へて下さるからほんの眞似事よ」「すみ子さんてばいゝ嫂さんが居らして御幸福よ」と絹子さ

んも美し相である『あれで眞似事ならたいへんだわ、一昨日ね、私御門の前を通つたら淨房で、いゝ音をさしてゐらつしやるでせう、悪い事とおもひながら、つひ堪らないで暫く立つてうかゞつたのよ』

『マア……』と美しいすみ子さんのお眼が大きくなつた。

お月様の冴え渡つた晩・この障子を開くと、松や楓やどんなに美しい影をこの疊に寫すだらう、それに秋なんかだと、すゝきの株や萩の下でこほろぎや鈴蟲が細い聲で寂しげに鳴く、あんな時、お琴があつて心ゆくまで彈いたら……と考へると、勿體ない事な



から他の方が美しくなる、(評に曰く人事を達觀したるこの少女にこの言あり、感更に深し)お琴位叔父さんにでもいへば、檀家からの收入でなく買つて頂けない事はないが、女が寺に居ておまけに琴など彈いて遊んではあんまりである、門前の人達なんかは、家内中で朝から晩まで精々と藁細工してやつと煙をたてゝるのに。

絹子さんと澄子さんとは夕がた御歸宅になつた。

お葬式があつて二里もある山の中の公葬地にいらしたお父様と禪明さんらは日が暮れてから馬でおくられてお歸り

になつた。
夜は四人炬燵をとりまいてほし栗を頂きながら四方八方のおはなしに時を過す。
六日――また雪が降り出した。
お父様と禪明さんとは御法事が三軒あるのではやくから御出まし。
お道具を揃へてお迎の人に持たしてやる。寒いので何もかもさつさと片付けて、お母様と炬燵に這入つてお父様はずゐぶん御難儀だらうなど語つてると。
「郵便」私にだとえいなと思ひながら出て見ると、一つは佛教雜誌でお父様へ、一つは西洋封で私に、でも何だか見た事のない、而も男のかたのお筆蹟、いぶかりながら裏をかへすと、東京麻布〇〇〇〇地〇〇方中野宗一とある。
「何處つからだえ」とお母様が。……ハテかういふ方はおぼえない。
中野……中野……誰樣かしら、ハアわかつた此夏無錢旅行だつて、お父様の法類のお弟子の方が連れていらした醫科の方だらう。
「アレ子お母様、夏ね、無錢旅行だつて〇〇寺さんのお弟子の方がいらした時、一緒に來た方、中野さんとかいつた樣でしたね」
「ア、何だかそんなやうだつたね」きつとあのかたらしいのよ」といひながら兎も角と開いて見たら、金筆の走りがき、チヨイ〱と英詩の句らしい物も見える。
あやぶみながら讀むと、
夏期旅行の折はお世話になつたといふ事から、其時のお優しいお情は忘れないことの（ナニモ決してやさしくしてあげはしなかつた）漢詩を二つ三つ書いて、これは二三日前得た句だとかいてあるが、東北人の特色の「し」「す」「ち」「つ」をおびたゞしく違へてるので、其都度自分の事は棚にあげて、御飯の中で砂をかんだやうな氣持がした、そして終に都に居るとは名のみ、孤燈の下に書讀むときは、實に名狀しがたい寂寥を感じて、かゝる時、もしやさしき君のおはさばと、たゞ北の空のみながめられる、君よあはれと思はゞ折々は

あたゝかき御言の葉たまはりてよ、なほ、リボンでも、お化粧品でも、お望のものは遠慮なくいつておよこしなさいと甘つたるい結末で、中からヒラ〳〵と落ちた物がある、オリーブに樂譜を染め拔た巾廣のリボン。

何かと思つたら忌々しい、とリボンも何もクル〳〵と圓めてお客用の火鉢の底に埋めてしまうとプス〳〵と燻つてすぐ燃えてしまつた。

「如何おしだえ」と母樣も不思議相に見てゐらつしやるその筈いまゝでいくら手紙が來たつてつひぞこんなことした事はないから。

「馬鹿らしい事ばつかり書いてるから私情なくて人目も惡い」とつひ佛頂面になる。

「そんなにおこつたつてどうなるものかね投つとけばいゝんだよ」と仰る。

蓮は泥中に生えても泥に汚されないといふ、いかに蓮の如き氣高い美しい姿はなくとも、尊い精舍に人となり、朝夕御佛の敎によつて育つた身は仇な露には死んだつて汚されないと誓ふて居たに、たとへ自分の心から出た事でないとはいへこんな甘つたるい言葉に靡くものと見えたかと口惜しい。(釋迦牟尼菩薩も照覽あれ、この少女にしてこの志操あり、遉がに佛家のたしなみを見る、嗚呼今日滔々たる濁世の人これを讀んで慚死せざるもの果して幾人)

これまで垢つかず保つてきた眞白い我心の玉が眠つてる間に魔といふ黑い影がきて身も心も溶かしてしまふ甘い毒をもつたおそろしい矢で傷けようとされた樣な感じがして、鹽井先生の、

世の中はいばらからたち鬼あざみ
心して咲け姬百合の花

のお歌がふかく身にしみる。

すみ子さんや、絹子さんにはこんな手紙なんか來たとがなからうに、なせ私にばかり……お父樣や禪明さんはもうお歸りになつて、お供へのお菓子やら何やらおくられた。お詣りの人がぞろ〳〵來たらしい。

羽子板の押繪を出して見たが今日の樣な胸の晴れない日はない。

夜はお父樣が「淸、久しぶりだから今夜お茶を振舞はないか」と仰るのでお好きの濃茶をたてゝあげる。



美貌を持扱ひし令嬢のくり言

金毛女史

何事でも斷念むべきは運命として斷念めて仕舞ふのが一番好いです。けれどもさて考へて見ると又むしやくしやする事もあります、同じ人間にさほど異ひも無いのに運の好い方はずん／＼出世をなさるし、運の惡い者は何時迄たつてもうだつが揚りません。人格でも學問でも大概は同じ樣なもので皆同じやうに學校を卒業して仕舞へば既う机に用事は無いと云つたやうに、朝夕親んでゐた本や何かは戸棚の奥に投げ込んで仕舞つて、流行だの時好なんかゞ巾をきかしてゐます。

中でもハイカラがつた方は語學の研究でもしたり、音樂の稽古に浮身を窶して居られますけれども、夫れだとてお姫樣藝のどうせ大した事でもありますまいでせう。けれども家にくすぼつて居るよりは大きに世間體が好いかも知れません、で運よく令夫人にならうものなら、極彩色をほどこして出てゝは交際場裡の女王と持て囃され、寄附金次第では名譽會員の列にも加へられる、すると社會の人達は顯微鏡でさがしてまでも自分の長所を見出して褒めたゝえて呉れます、恐しい顏をしてゐれば威嚴があると云ひ、肥つて居れば重々しくつてお立派だと云ふ、乾物のやうに瘦せこけて貧相に見えてもすらりとしてお姿がよくつて、優美だと云ふ、誠に人は運命次第のものであるとつく／＼歎息せずには居られません。

一口に運と申しても是れには餘程親の威光があります、いくら天の成せる麗質でも、勝れた才があつたにしても、賤が伏家にくすぼつてゐた日には誰れも拾ひあげては呉れるものではございません。令孃時代には親の威光を着、夫人になれば夫の權勢を負ふ。されば良家には生れたいものですねえ。

つく／＼考へれば運ほど不公平なものは無い、よく勉强してよく働きさへすれば好い運が馬車で迎ひに來て、一足飛びに貴夫人になれる事が出來るならば、私だつてもどんな辛い事も辛棒しませうけれど……と云つたらば、友達に大變笑はれて奈うせ人間だから甚麽に立身したつて、夫れ相應に苦勞もあるし、外で見る程樂しみなものぢやあ無いと云ひました。けれども私の思ふには飽き／＼するやうな永い人生を花のやうに樂しく送つたらば、嘸ぞ一夜の夢のやうでよからうと思ひます、榮華に送られる事が極つて居れば、どんな苦勞だつてするのは覺悟の上です。

私の遠緣の者で、其頃法科大學に通つてゐた人があります、學資が不足で語學の敎師をしてゐました、金はない人だから洗ひ洒した牛蒡縞の着物に、ポツ／＼所々穴の開いた袴で、後のへつた麻裏下駄を引きずつて町を歩いてゐます、夫れが素足だから堪らない、足跡が油で風靡に

なつて氣味が悪いやうですから私共は此人を馬鹿にしたものです、角帽角帽つて一口に云てもこの人のやうな變人が有るんだから駄目だわなんと内々思つてゐました、で偶々往來で逢つても誰れか見てゐやしまいかとお辭儀一つするにも傘の蔭から見えないやうにしたものです、那麼に此方が苦心して居るとは露知らず後から大きな聲で、此度の日曜日には朝から押かけて行くから、澤山御馳走を拵へて待つてゝ下さいなんて云ふ、實に度し難い人だと冷々する位でした、こんな調子ですから學資位は如何にでもするからと、わたしの兩親もすゝめて見ましたけれども、何有人の世話には成らない、といつて力んで居ました、けれども此の人も遂ひに運命の手から逃がれる事は出來なかつたと見えて、卒業する一年前に故郷の事情もあつたらうが、已む得ず某富豪の令嬢と結婚して其家の若主人となりました。

夫れからは往來で逢つても以前とは打つて變つて、私の方が肩をすぼめたいやうな、全然見違へる程立派な紳士になりました、母はこの人が來る度に着物の美しいのに感心して、やれ柄が好いのお見立がお上手だのと言はれる、而してつく〲眺めて人の運つてものは全く分らないものですねえといつても歎息されます。

此の間派手好きの例の高島未亡人に逢ひました、未亡人まだ若い、却々腕もあるし交際家で何處へ出しても先づ敗けは取らぬ方、分けて佛語を得意として、現今では上流の姫様達の出教授に行つて居られる、しかし内心を伺ふと朝から晩迄毎日働いてゐても漸と一家を支へて行く位なものだと云ふので、夫れぢやあ隨分不満ないでせうと云つたら、だつて餓るよりは好いですからつて笑つてゐられます。で其人の云はれるのに、何でも皆自分の身に備はつた運といふものがあるから我慢はしなくちやなりませんが考へて見れば馬鹿々々しいものです、私なんか兩親が嚴しかつたから是れぞといふ面白い事はせず、お嫁にいつた時に困るからといふので家の事は何から何まで一さいさせられる、それが今になつて又生活に追はれてゐるのですもの、先生々々と云はれて居たつて御姫様なんてものは我儘で、お稽古の厭な時はぐつ〱してるし、本よりも會話にして呉れつて仰るかと思へば、早くどんな本でもずん〱讀めるやうにして下さいなんて、隨分蟲の好い事ばかり仰しやる、考へて見れば馬鹿らしい事です、ときいて私も少からず同情に堪へませんでした。

又お友達の久美子夫人なんかは、毎日御機嫌よく遊んでゐてさへ下さればお姑達は満足して居られるとの事、結構な御身分と云はなければならない、しかし人間に生れながらそれぢや人形のやうで生きてる甲斐がないから私は厭だと仰やるけれども、夫れは全くの負惜しみで心の内では矢張自分の卑怯な自分で羨んで居らつしやるでせう。



嫂の地位に居る者の心掛くべき事柄

朽葉女

六日　朝な〳〵の霜の色、豆腐賣の小僧さんが可哀想な時節が來た。

正午までにやつと靜さんの學校着が出來上つた。靜さんは例の通り三時にお歸宅、用具を置いてすぐお袴を疊んでゐらつしやるので、『明日から之をお召になるのですよ』と持つて行つて上げると、嬉しさうに受取りなすつたが、やがて『私矢張り今迄のを着て行きませう』と仰るのである、『さう仰らずに召して頂戴な新しい方がいゝぢやありませんか』と申すと、『是は大事に仕舞つて置くわ』との御返辭、併し何か御氣に入らぬ處でもあるらしく見えたが、御不斷着の積りで仕立てましたものを仕舞つてお置きなさる事があるものですか、今迄のを續けて召してゐらつしやると、また私が兄樣に叱られますから、どうぞ替へて下さいましな』とお願する樣に申して見ると急に風向が變つて『そんなら着ますわ、姉さん有難う』と改まつたお禮であつた。

考へて見ると、成程無理もない事である、今迄のは此春調へたあの荒つぽい黄縞の紬、今度のは一年丈け地味な藍勝のネル、女といふものは少しでも若い俤をそのみづ〳〵した姿に留めて居たいのが望な者で、私など斯う人の妻となつた今でさへ、兎角、扮裝には赤いものを捨て切り得ないのが我ながら可笑しい程だのに、ましてやつと十六の靜さん、お髪さへまだお下げの可愛い盛りを、召物が一年增に地味になつて行くのは、何となし耻しい樣な心持でもなさるのだらう、是

からまづ四五年の間は、お召物にせよ何にせよ、一倍氣を付けて取り計らはねば、いゝ嫂さんになつては通れ了せさうもないと考へた。

夜は少し英語のお復習のお相手をした、ABCも段々と忘れ勝、顔から火の出さうな事も少くない。

七日　靜さんはとうとう新しい衣で御出掛なすつた。

午前は無精者が珍らしく書棚を整頓して、本田町まで花を買ひに行つて來た、南天と水仙をお床の間へ活け、靜さんのお机の上へは淡紅の薔薇を一輪挿しておいた、お歸りになつてから、あの鍵目の可愛い顔に、無量の笑を湛へてお喜びなさるのを見るが、何より樂で樂でならぬのである。



それにしても、東京へ御出張中の旦那樣は何時お歸りになるのかしら、「經濟界もかう波が亂調子にばかり打つて來てはやり切れない」と獨言の樣に仰るのを度々きいたが、殊にこの夏の事件以來、兎角會社も御用勝のやう、今度も「譯なく濟む仕事だから」と仰つてお出掛になつたけれどもう彼是二週間の御滯在、矢張り急にはお運びのつかない事と見える。

ほんとに社會は千波萬波の立ちつ顛れつ荒れ狂ふ大

海原、その間に滿身の力を揮の手に込めて、今日切り拔けつ明日切り拔けつ、やがて凱歌を擧ぐるまではと奮ひ活動く總ての男子といふ者の健氣さ、わけては旦那樣など御身分が御身分だけ、お骨折は一倍まして大抵な事ではあるまいと思ふに、その御力に依て朝夕を笑つて送る私や靜さんの身の上はまア何に譬へやうか。

昔浦島氏が幾百年を樂しい夢のやうに送つたといふ千尋の底の蓬萊宮、時じくに湯津桂の咲き匂ふその靈境は、唯詩人が空想の影とばかり思つてゐたが、これこそやがて私共の身の上なのであらう、頭の上の荒波は少しも知らず、毎日々々から幸福に暮らすとは女といふ者ほんに仕合なものである、わけては靜さんがお顏もお心もまだ一點の曇りもない尊さは、さしづめあの乙姫に譬へてもよからうか。

乙姫はお茶のお稽古の當り日であつたため四時過ぎておかへり案の定『嫂さん薔薇珍らしいのね』と何遍となく繰り返しなすつた。

八日　旦那樣からお端書、十日か十一日には歸宅致すべく候との事である。

下女の竹は、心持が惡いとか云つて、お夕飯を喰ずに寢んだ、昨日書棚を整頓の時、久しく讀まなかつた夢想兵衛が下段の方から出て來たのを一寸机の上へ出して置いたが、今夜は火鉢に凭れながら、お復習といふ格でその拾ひ讀みをしてゐると、今まであちらで明日の豫習をしてゐらしつた靜さんが、何時の間にか、後へゐらしつて『嫂さんまたお汁粉ね』といひながらペツタリ脇へ坐つたので喫驚した『イヽエ、是はお汁粉程害になるものではなくつてよ』と貪婪國の所を一齣お話すると、靜さんはお腹を抱へてお笑ひなすつた。

學校の先生も大變な事を敎へて下すつたものであるすべて學校の敎科書は面白味はないが、極めて大切なもので食物に譬へればお米の御飯のやうなものである御飯には是といふ味もないけれど、人は之に依つて營養を取らねばならぬ、そこへ行くと小說の類は面白く

て面白くて寐るのも忘れて讀みたい者であるが是は恰度美味お菓子かお汁粉の仲間で味の割合に滋養が少く、あまり食べ過ぎれば健康を害する、その外面白い傳記や紀行文やお伽話のやうなものはお鮓か果物に譬へようか、多くは味のいい上に滋養にも富んでゐるとお教へがあつたとか、靜さんから私にお話のあつたのは一週間程前の事だつたが、今夜は飛んだ處で不意撃にあつたものである。

小說もこの節のには、サツカリン入の蒸菓子の樣なのがあるから猶更注意せねばならぬと思ふ。



靜さんは、それから一時間程、色々のお話をなすつて、しまいに、「何か作文の爲になる本を敎へて頂戴なとの事であつたが固より私に解らう筈もなく「それこそ學校の先生に」と扱けて了つた。

九　日、昨日の事は今日の胸には留てもゐない少女心のおもしろさ靜さんがお歸になつたので「作文の本を伺つて御覧なすつたか」と申せば「ア、忘れて了つた」との事、是だからこそすく〱と成人なさるのである。

夜分は一人淋しく御留守居してゐると勝間田樣の御隱居樣がお越しになつた、靜さ

んはとのお尋ね故、上野樣の孃さんと八雲座の活動寫眞へお出掛けの事を申すと「オヤ〳〵偶ゝ伺ふとこんなもの、私はもう此方へ出る度毎に、あの可愛いお顏を見るのが樂みで〳〵」と仰りながら例のお烟草入を帶の間からお出しなさる被布のお姿に半ば白い切り下げのお髮、折々お口をへの字にお結びなすつて、上品な中にも何處かに負嫌ひのお性質が顯れてゐる、年寄も段々お話相手が少なくなるには困りましてね、つひ貴家へばかりお五月蠅く出るのでございます、どうしても貴女、お同族内でなくつてはお話の合ひやうがありませぬからね」との事、御隱居樣のお同族内も隨分久しいお口癖である、今にまた「腐つても鯛」をおいひなさるに相違ないと思ひながら、その昔江戶の都に德川の流淸く、當家も勝間田樣も共々槍一筋のお家柄としていや生ひ茂る葵の葉陰に三百年の太平を謳つたころ、御隱居樣は上野樣のお祖母と御殿をお勤めなさつた事やら、當家のお祖母樣がお琴の御堪能であつた事やら、何呉伺つてゐる中に、やがてお話は靜さんの御身の上に落ちて、

「何しろ二十歲までが大切でございますよ、マア〳〵貴女のお仕込はよし、その上上野の孃さんなどゝお友達になつてゐらつしやれば決してお間違はありませんがね、此節では四民平等で何の何兵衞の娘でも、皆一人並にやれ學校だお茶だお琴だと騷ぎ立てますが、貴女、鳶の子が鷹になれよう譯がありませうか、根が根なら皆ぢきにふしだらな眞似ばかり仕出かして世間の笑物となるのは多いのでございますよ、論より證據、手前共の隣の娘などは赤襷で店でも手傳つてるのが至當だのに東京くんだり繪の稽古杯に出掛けて……」と女子美術學校へ行つてる角忠の娘の棚下しから始つて女學生といふ女學生を片なめし惡く仰つて御歸宅になつた。

御隱居樣の士族自慢もあまり凝り過ぎては隨分見當違ひの御議論も聞かせられるが、併し烏賊の甲より年の功、その話の底の底を、よく〳〵考へて見る時は、また云ひ知らぬ味を覺えるのである。

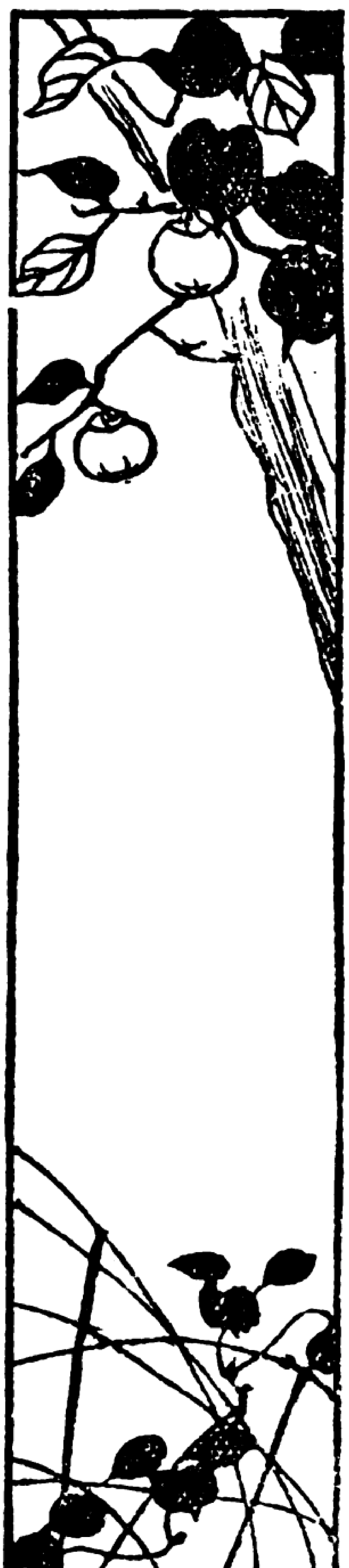
十一時に近く靜さんはお歸り、先の程から頻に舟を漕いでゐた竹が、妙な顔してお迎に出たので、床へ入つてからも、獨りクー〳〵笑つてゐらつしやる。

十日　灰掛つた空から恐ろしい凩が吹き下す、旦那樣を待つ身には、門先を走る俥に幾度か耳聳てた。

土曜日故靜さんは十二時に御歸宅になつた、凩はいよいよ烈しく、僅に梢の端に秋の名殘をとゞめてる楓の葉も、槐の葉もお庭の中に落ち盡してバラ〳〵〳〵バラ縁や障子を打つのでうつかり『おゝ風が木の葉を散らして了ふ』と獨言すると『嫂さん木の葉は風が散らすの』と靜さんが仰る。また何か可愛い揚足取りだらうとは思ひながら『エ、』と申すと『私はさうは思はぬわ、木の葉の方がもう干乾びて了つて枝を離れるばかりになつた處へ風が吹くので、それにつれておつこちる計りだわ』と仰る、無邪氣な人も時々こんな苦しい理屈をいふので猶更可笑しい。

併し是は面白い議論だつた、私はこの時さう思つた社會の惡い風潮が女子を墮落の淵に導くことが多いとは世間一般の通説のやうであるが、之も矢張り「風が木の葉を」といふ筆法ではあるまいか、綠常磐の松や檜が霜にも雪にもめげぬ所を見ると、女子が先づ腐敗して後に社會の惡い風に誘はれるといつた方が當つてゐさうである、この判斷は少し酷かしら。

來週から學期末の試驗といふので、夜分は靜さんはお復習に夢中であつた、旦那樣は實にお歸りがない、それでも十一時の汽車の着くまでは起きてゐねばなるまいか。





女學生儉德の實例

今西桃里

先頃煥發の大詔に對し奉りては、自分はいとゞ畏みて畏き勤儉の美風を起す樣に努力して居る次第ですが此の冬季休暇前に、さる一學級の生徒に就て之れが成績を試みて、色々面白い答を得ました。

▲野菊の花簪▼

或る生徒は斯樣な事を申しました、「此の間叔母の家を訪ねた時、菊の花を簪にして參りましたが、叔母はそれを造花の簪とちがへて大層讃めましたで値段の高い造花よりは、趣味もあり、香もあり、なか〳〵この方が勝つて居ると思ひました」と。

何と美しい心掛ではありませんか。勤儉力行の結果は、多く無趣味に陷りますが、彼女は能く之れを知つて、尙女としての嗜好を忘れない處が頼もしい。恐れ多き事乍ら、彼の「華ヲ去リ實ニ就キ」てふ御言葉は、必ずしも婦容を去つて婦功をのみ收めよと云ふのでは無いでせう。時に沐浴を取り、又服飾を鮮潔にする事は今も古も婦人の大切な嗜好でなければなりませぬ。

▲着古しの晴着▼

又「お母さんが正月の晴着に羽織を買つて上げようと言はれたけれど、まだ其樣に汚れてもゐないから、仕立替して正月の間に合せる事に致しました」と云ふ樣な答が大分あつたが、自分は實に其の可憐なる男氣に感じました。女の生命とも云ふべき衣服を、母の好意を棄てゝ迄も節約するといふは、婦人の身としては非常なる決心と申さねばなりませぬ。

大阪を知らぬ人は、大阪は依然「食倒れ」で、着物なんかには全く趣味が無いものと思ふて居るかも知れぬが、それは昔の話で、今の大阪は三度の食事を一度にしてゞも着物や頭飾に金を費れます。成程「食倒れ」の風は勞働者社會には今も尚殘つて居るが、上流社會、殊に船塲あたりの町娘は、比較的粗食に甘んじて、而かも黄金の指輪を兩方の手から脫す事はありません。これが女子ばかりならば、まだしもなれど、男子でも指輪の一つ位は大抵塡めて居ます。そして例へば東京の學生は小倉袴を平氣で着けて居るが、大阪の學生は綿の服に今なればオーバコート、それに頭髮を七分三分に分けて香水まで匂はせて居る。



斯る環境にあり乍ら、醇厚質素の風を保つと云ふ事は餘程の覺悟が無ければなりませぬ。

△俥、電車の通學▼

大阪も去年の夏頃から梅田、築港、今宮間に電車が通じてゐる。で始めの程は珍らしいのと賃錢の安いのとで、隨分電車で通學する者がありましたが、近頃は雨天か若しくは退校の遲き日の外は決して乘らぬといふやうになりました。一體學生が登校の際俥や電車に乘ると云ふ事は、身分からしても、又教育上から考へても間違つた事と思ひます。

學生は言はゞ無財産無資格の人間でせう。又修養と

は實に讀書算術を習ふのみにあらずして、勇氣忍耐の德を養ひ、體力を錬る等の事も其の一つでなければなりませぬ。之れを思はずして俥や電車で通學するのは甚だ不都合な話です。しかし私は決して俥や電車に乘つては不可いと云ふのではありません。時は寶で、繁劇な都會では、實に一刻千金に價する場合が多いのですから、其樣云ふ時は十分文明の利器を活用して時間の節約をはからねばならぬ。けれども唯學生時代にはかゝる場合は甚だ少ないと思ひます。

▲間食の風習▼

又近頃學校で辨當を食べた後で又餡麪包を加食するといふ風が二三の生徒間に行はれて居る事を知りました。今は全く廢止させましたが、元來何故恁う云ふ事が行はれるかと調べて見ると、畢竟辨當の少量に原因する事が分りました。そして其の少量の原因は實に外見にある事を知つた。腹が減つてもひもじうはないてふ武士氣質とは異つた外見をつくらふての事でした。

多くの婦人は此の風があつて、他人の前だと兎角食事を抑へ目にする。其代りに間食をするといふ癖があつて、それが爲めに往々胃を害する事があります。此等の事は家庭に於ても親たちが十分注意をして頂きたいものです。

▲舊式の肩掛▼

『私はまだ舊式の肩掛で濟して居ます』とは一女生徒の答でした。而かもこの言葉は私の胸に妙に響きました。「舊式」と云ふ事は大阪の禁物です。東京の人も隨分新物食だと聞いて居ますが大阪でも商家は緣喜上から新初物と云ふと大變喜ぶ風があつて、その風が衣服の上にも現はれて、流行を追ふ事がいよ／＼激しくなつて居ます。其の間に在つて『私はまだ舊式の肩掛です』といふ言葉を聞くと何とはなしにいぢらしく、又餘程の勇氣であると云ふ感を起します。

▲自分の仕立た着物▼

又「私は古い袴を取り出して、それを洗つて自分で仕立てゝ穿いて居るのですが、自分で縫つたと思ふと、何んだか嬉しくッて丁寧に取扱ひます」と云ふ風の答も大分ありました。其他肩掛を編むとか、或は手袋を編むとか、靴下を編むとか言ふのもありましたが、自分は此の實習と節約とを兼有する心掛を大變嬉しく思ひました。よく女學生が袴の裾裏の解けたのや、或は靴下の破れたのを平氣で穿いて居るのを見ますが、さう云ふ人は何んの爲めに裁縫や編物を習つて居るのかと疑がはざるを得ません。是れはいづれ下宿屋の二階で古襦袢を洗濯屋に渡すといふ人達でるらう。



▲鉛筆の心▼

「私は何時も鉛筆を削る時に心が折れると自暴を起します。するといよいよ折れるので、徒らに鉛筆を費しましたが、今では此の自暴を固く制して居ます」と云つた人もあります之れも却々の克己かと思ひます。

鉛筆は價の知れた品なれど、女性の特色が此の一本の鉛筆の尖に迄現はれてゐるのです。一寸した事に直ぐ

腹を立てる、或は一寸した事で直ぐ厭になると云ふのが女子の通有性で、而も其の現はれるのは獨り他人の感情に接する時ばかりではありません。何處の學校の生徒でも、雜記帖を終りまで使用する者は少なくて、大抵は書き棄てゝは又新らしいのを購ふといふのが、實際です。これは自棄では無くて、婦人の動搖性から來るのです。

△時間の經濟▼

いかに金錢物品を節約しても、時間を節約する事を知らぬならば、まだ儉約とは言へませぬ。私が調べた中で時間を節約して居ると云ふのは左の一例丈でした「私は從來毎日お湯に一時間を費しましたが、此程それではあまり長すぎて、却つて衛生にも宜しくないと思ふたから、其後時間を三十分と定め、其時間さへ經てばたとへ洗ひ切れぬでも必ず上る事にしました。で初めの程はまだ洗ひきれない内に上る事もあつたけれども、只今では三十分あれば澤山だと思ふやうになりました。何んでも行つて見れば出來ないことはありませぬ」と云ふのでした。實に感ずべき修養の工夫だと思ひました。毎朝髮を梳る時間は何程であるかと訊いて見たいではありませんか。

衣類の地質

ネル若しくは、毛布の類は纎維が疎であるから其間に空氣を含むことが多い、故に體溫を貯蓄する性質を持つて居る、隨つて冬の衣服には最も適當である、又木綿や、フランネルの類はよく水分を吸收し、水分の發散が緩やかであるから體溫の急に奪はれて冷氣を感ずる事が少い、又毛織物は彈力があるから濕氣や壓搾を受けても布目が容易に塞がらない、即ち通氣性に富んで居る、この通氣性に富んで居るといふのが、抑も衣服として缺くべからざる資格のあるものである。若し衣服に此の通氣性が缺けて居たならば恰も密閉された室内のごとく、皮膚の換氣が害されて健康上に不良の結果を持ち來すのである。

通氣性はいづれの地質も備へて居るが、着物に垢のついた時や、濡れた時や、綿引、ゴムびき又は糊を施した時は甚だしくこの通氣の度を減ずるのである。

又毛布類は洗濯の度毎にその彈力を減じて通氣性を失ふものであるが木綿物は割合にその恐れが少いのである。

學校の玻璃窓から覗いた社會と浮世の風に當てられて見る今日の社會

萩花

もう二年前。勇氣と希望に胸躍かせて、今から出でんとする社會を夢想して書いた學窓日記と、荒れすさぶ世に揉まれながら記ける今日の日記とを比較して見ては、そゞろ萬感に堪へられませぬ。

○寄宿舍の窓で書いた二年前記

二月一日、朝から人は大分外出して了つて、いつも乍ら寄宿舍の日曜日は淋しい。

恐ろしい試験が、あさつての處に控へて居るので私は外出の氣も起らず、午前中凝然と我慢して机の前でアンダーラインをつけたり、拔萃したりして一心ノートと親しんで居たが、妙に頭がボツトして來たので、氣にかゝるノートだけは大事に抱へて、校庭の雜木林の下まで出かけて見た。

もう先へ誰れかゞ來て居る。茶色のレースの肩かけ着て、骨だつた樫の木によつ掛つて何か一人で考へて居るらしい、私はフト雪子さんぢやないかと思つた。で「雪子さん？」「雪子さんでせう。」と二度呼んだ時、肩掛は振り向いた。

「矢張り雪子さんだつたわね。ホヽ、何考へて被居つして？煩悶？。」

「まあ隨分ね。」と被仰るから、「だつて今流行してると言ふぢやありませんか。」

雪子さんも矢張り心配だと見えて、右の手にノートを持て被居る。が生き〳〵して元氣が好い。

「もうお出來になつて？。」と問へば、一寸笑つてすぐ聲を低う。

「厭になるわね。試験なんかよさうかと思ふの。」

「まあ厭い勉強に飽いたんでせう？」

「然うぢやないのよ。もう早く社會へ飛び出して華々しく戰つて見たくて仕樣がないんですもの、貴女だつて然うでせう?。心の用意はもう出來てますもの、落第したつて私四月には飛び出して見せるわ。今ね、獨りで色々な事考へてましたのよ。」

何時も無口な雪子さんが怎うした事やら今日は當る可からざる大氣焰、私も遂ひ面白さに引き込まれて、ノート投り出して夕方迄語り合つた。が非常にうれしい氣がして、胸がすいた樣だ。雪子さんは幾度も、「婦人の自由、婦人の維新は私共の手によつて開らかれなきやならないんですもの、一番に私が肉彈になつて犧牲になる覺悟よ。」つて、繰り返して居た。

親もない兄弟もない孤兒なればこそ、あんな堅い決心も出來る。大膽にもなられるのぢやあるまいか。然し清く崇い雪さんを思つて、虛榮の俗境に兎もすれば轉展反側する自分を、餘りに耻しく悲しく思ふ。

二日、今日から五日間お炊事當番、眞つ暗な寒天に、曉の星を數へて起き出なきやならない。然し學校に居るのももう二月だと思ふと、何やら之れも嬉しい氣がする。

八時登校。三時間目の源氏、何時も乍ら面白かつた午後の二時間は不意に先生の欠席だつたので、之れ幸と圖書館へ這入り込んで四時過ぎ迄、冷たい手にインキ壺下げ乍ら寄宿舍の側迄歸つて來ると、生き〳〵と美しい花子さんが二階の窓から首出して、莞爾し乍ら「お歸りなさい。」といふ。

房々とした黑い髮が少し亂れ掛つて、ポツと頰が上氣してる樣だ。

「お湯へもうお這入りなさつたの?。」

「エ、。外は寒いでせう早く此處へ被來しやい。好いお話があるから。」

入口の硝子戶に手をかけて又振り仰ぐと、まだ花子さん此處をながめて居て、華かに莞爾する。

學校を出るとすぐ、新生涯に這入るといふ花子さん此の頃の感は如何であらう、怜悧で謙遜で美しいんだもの、怎んなに優しい奧樣にならう。男の樣な雪子さ

んが『私が男だつたら、花子さんの様な人を貰ふのよ。』つて笑はせるのも無理はない。

三日、雪子さんにかぶれて了つて彼れ以來ノートを見なかつたので、私は聊か心配の様な氣もして試驗場へ這入つたが。問題は案外だつた。ノートからは一つも出ず、ブラツクボードには、「死を恐怖するや否や、其理由」と大書された。

先生はにこ〳〵笑つて被居る、生徒は呆氣に取られて了つた。

が私には非常に嬉しい趣味ある問題だ。其れにまだ此の間、目白の僧園へ午前篭つて「死の疑問」を説いて貰つて來た許りの處だもの。思ふだけ書きつ放して教場を出た。雪さん屹度得意な顔して居るだらうと、獨で考へ乍ら歸りかけると、雪子さんが馳けて來た。

『面白かつたのね。雪子さん巧く書けて！』

と言ふと、

『だつて死を恐れてちや之れから何も出來ないんですもの。』と早口に言つて笑つたが、例の忙し相に圖書館の方へ行つて了ふ。

夜の食卓は死生問題で持ち切つて居た。



○家庭に於ける二十年後の今の日記

二月一日、梅一輪一輪程の暖かさも、もう今だらう、今日は珍らしく山の雪も解け相な暖かさである。斯んな日にこそと、此の間解いて置いた被布の紬を掃除して張物にかゝつた。

何といふ好い天氣だらう、眼がちら〳〵して大きい涙が睫を貫く、斯んな日に堅い梅の蕾がぷつくりするんだらう、鶯が笹籔の方で鳴いてる樣だ。三枚許り張りつけて家内へ這入る。

と南の縁でお父樣が老眼鏡に背を圓くして、何か一心にして被居しやる。

「お父樣、何遊ばして？」

振り返つてお父樣の膝の上には古びたパナマ帽子がのつて居る。ブラツシユがある。

「少し修繕ぢや。」と笑つて被仰つた。

まあ、此の寒空の二月といふのに何をお父樣思ひつきなすつたんだらうと初めは無暗に可笑かつたが、直ぐ悲しい思ひが胸につき上げてホロリとした。そして次には自分の不甲斐なさが一時に全身の血を沸かしめた。

會社がまだ盛だつた二十年前の家はこんなぢやなかつた、パナマの一つや二つが何だつたらう、嗚呼一家の浮沈は今私の若い双肩に掛つて居る。女だつて、女だつて、心一つで出來ない事はないだらう、ヂヤンダークも女だ、神功皇后も女だ、紫式部も女だつた。東西の歷史は意志堅固な眞心の女によつて光輝を放つて居る、茲迄思つた時、私は心の輝きが微笑にあふれた。

二日、今日は昨日よりズツト寒い。

不遇に泣いて北海の果しに身を隱した梅子樣から手紙が來た。此の頃非常に元氣が好いから嬉れしい。斯んな事が書いてある。

「山もなく、河も無く滿目霏々洋々。北海の天地は何時迄雪と氷に凍り附いてるのでせう。五尺の氷柱がもう幾月軒にかゝつて、まだ極寒は薄らぎませぬ。

昨日思ひ附いて雪といふ作文の題を子供に出して見ま

したら、可笑いぢやありませんか『大雪が降つて魂消ました』『毎日の大雪、御無事之れなく候や。』斯んな可愛好いのが有るんですよ。前者は僞はらぬ十二字詩後者の御無事之れなくは振つてませう。之れが私の受持ちの愛する尋常三年です、内地の子供とはずつと頭が遲れて居りますよ、頭から手足の出た人間を畫いて得意がつてる兒、袖や袂にまつはる兒、罪ない兒を相手にして暮して居る昨日今日、もう感謝の外ありませんの、けれどね、茫然と考へ事する夕ぐれなどには、斯んな處に斯んな事してる自分が不思議になりますのよ。」

ほんに儘ならぬ世は様々だ、教育者を以て自任して居た梅子さんは思ひがけない北海の雪にかくれ。優しかつた花子さんは希望多き新生涯に不治の病を得て、落魄の人となつた・非才の自分は言はずもがな、社會に適當な自己を見出す迄には、まだ〳〵多くの努力と時間を要する。幸に雪子さんが自分の趣味、自分の長所自分の願ふ所へ、好い境遇を與へられて這入つて、例の決心を着々實行して居るのが限りなく嬉しい、何時迄もあの元氣と、あの若さであらせたいと私は願ふ。

夜、従妹の幹さんが遊びに來た。まあ今日は島田だ。

「私ね、きまりが惡いわ。初めてなのよ、可笑しいでせう？。』つて白い細い手で一寸鬢をさはつて見て莞爾する。

「まあ、よく似合ふわ。」

母も妹もほめちぎる。一日で好いから幹さんの様な呑氣になつて見たいと。私はつく〴〵然う思ふ。

三日、雪みぞれが窓にさら〳〵と薄暗い。又冬に返つて行く様な寒さである。ふくらんだ軒の梅が氣になつてならない。

人生は凡べて斯んなものなのだ、花が咲かうとすると雪がふる、みぞれがする。浮世の風を呼吸する人間には、涙と悶えは免かれがたいものなのだらうと。何時にない詩人の様な事を思つて見た。

今日は珍らしう一日裁縫して昨日縫ひかけた袷を仕上げた。

夕かた、冷たいみぞれの前の道を、今日も按摩のおきぬが笛吹きながら、杖に縋つてヨボヨボと通つた。暗黒の世界を毎日あゝして杖にすがつて、辿りゆく行衛に果して光りがあるであらうか？。

私は無暗に、彼女の歴史が聞いて見たかつた。

（をはり）



姑の君の見てならぬ文字

若い女

〇名譽の寶物

大抵世間の若い女は、世界中何處のお姑様でも、屹度恐ろしいむつかしい、多少ひがみに曲つた女だと思つてますね。いえ、事實全くさうなので。けれど姑の方から考へて見れば、『今時の若い嫁は、全く始末におへやしない。』と被仰るに相違ありませんよ。

『それぢや、罪は五分五分ぢやないか。』つて？　まあ暫らく第三者の方はお靜かに願ます。生憎私若い女なんですもの。ずつと敗けて、四分五厘と五分五厘の割合位にして置いて頂きませう。

『どちらが？』つて、無論輕いのは若い女の方で御座んすよ。昔から詩や歌や戀物語に若い女は天使の樣だと、ちやんともう消えない樣に記されてありますもの御免遊ばせ、いえね、私だとて末は御多分に洩れない女なんですもの、お姑樣許りを惡者にして、知らぬ顔の半兵衛、と獨りすまして居ようと言ふんぢや御座いませんの。

支那の昔の賢人も餘りに末々迄の考へが足りませんでしたわね。一體姑といふ字からして餘まり好い感じが起らない樣ぢや御座いませんか。古い女、古びた女。埃と塵に灰白う色褪せたこわれ物のガラクタが、不秩序に並んで居る古道具屋の店頭を思ひ出させる樣ですわね。いえ、之れは字の上の事許りですから御氣に止めては下さいますな。

ほんにお姑樣は不運兒ですよ、ズッと昔の其の昔から、不名譽の寶物と、大事の厄介物。といつた按排に若い人からあげられて被居しやつたんですもの。

「之れからもズツト〳〵。その通りに。世界が終る迄。」つて？　まあそんな情ない事は被仰づて下さいますな身ぶるいが致しますよ。エヽ、全く年齢は老りたく御座いませんね。

○僥倖の災難

お轉婆で口の輕いフランスの若い女が、嘗て斯んな事を申しましたつけ。

夏の暑い一日、お姑様と一緒に涼しい海岸を逍遙すると假定する。

俄かにサツト空合が變つて、オヤツと思ふ間もなく逆寄く高浪がドツと一打ち。姑ばかりがサツと渦中に引き込まれて、死んで終つたら恁うでせう？　其れは聊か僥倖の災難である。それが、若し死んだと思つたのは一瞬時で、岩か何かに引つかゝつて居て、自分が助けに狼狽なきやならない事になつたら、其れは不運といふものだ。と。

去りとは勿體ない、あんまり虫の好い口吻ちや御座りませんか。けれど之れは、もと〳〵惡口上手のフランス女がいつた事。日本の小心しいお姑様の御耳へ這入つたつても、まさか御眼の光る樣な事は御座いますまいよ。

○お姑様とは

「姑とは。」と言つた樣な奇拔な問題を、一寸日本の若い奥樣方に、御出し申して見たら恁んなもので御座んせう。

「姑は恰も、谷川の逆流の如し、上らんとする小鮎を落いて、秋瘠せに迄至らしむ。」なんて、大變に詩的ですわね。

と思ふと。

「姑の眼と、猫の眼とは、先天的に光る可き原則なり。」つて、まあ恐ろしい事ちや御座いませんか。

次は、

「舅なき姑は、世界の不用物なり。」

「何處のお轉婆奥樣でせう。斯うなつちやフランスの女も跣足で逃げだしませうよね。」

「好い嫁と、言はれて姑口惜しがり。」

隨分な、斯んなお姑様ばかりでも御座んすまいに、けれど川柳のお叔父さんが能く被仰る圖ですものね。

「かな火箸、嫁、嫁、嫁の文字になれ。」つて、まあ、厭やですよ、火箸にまで告げ口して貰うとは思つてやしませんものに。

終りに斯んなのが出て參りましたよ。

「善良なる姑は、一家擁護の女神なり。」

之れこそ理想のお姑様、こんなに自覺して感謝して被居る若い奧様があると思ふと、嬉しいぢや御座いませんかね。

〇姑矯正所

「姑學校といつた様なものを一つ建てるのも目下の急務ですよ。平凡ぎらひの貴女骨折つて一つやつて御覽遊ばせよ。」つて昨日も、お俠の友達が申しますんでせう。吃驚して、

「姑學校と言いますと？」

「いゝえね、其の矯正所なんですの。」とすましたもの

「まあ、下女讀本といふのは、せーんからもう出來て居りますが。それぢや、また姑讀本といふのをどなたかにお願ひしなきやなりませんね。ホヽヽ。第一課、嫁に對する心得なんかつて。初まりませんわ。校長は誰彼に致しませうかね。」

「能く物の分つた新思想のお姑様に限りますよ。」

「だつて、分り過ぎたお姑様も恐ろしいぢや御座りませんか。」

〇分り過ぎたお姑様

雜誌の初めへ大文字して、

「我子の嫁に何故、彼女を撰びしか？」なんかと。氣の弱い花嫁様なら、魂消げて終いませう。

「仕合せだつたわ、撰ばれなくつて。」と何處かの美しいお嬢様が被仰つてゐらつしやいましたつけ。

運能う撰ばれたお嬢様だつて「有難迷惑」位にはお思し召しましたで御座んせう。などゝ、ほんに要らぬおせつかい申しましたわ、斯なに出しやばるもんで、遂お姑様から睨れるんで御座んすよ。

學問するは憂患の初めつて、もう誰れかゞ言つてま

したね。折角なれど、姑嬌正所の御計畫だけはやめに致しませう。其の代り積極的に此方から馭政策でも考へませうか。

〇姑、新馭政策

『お姑様は眞實に私に親切だ。世界中で一番私はお姑様が好き。』といつた樣な風して被居つしやりませ。乾度お姑様ほくほくもので、嫁を敷いてる氣で被居しやる實は此方でお姑様をのせて居るのにお氣が付かないんですものね。其れでもしも、好い氣になつてお了ひなさる樣な事が有つたら、聊かピンとはねる眞似して御覽遊ばせ。但し、之れは眞似だけですよ。



少し位のお叱言に決して脹れたり遊ばしますな。若い女の脹れ面ほど不景氣な色消しは御座いませんものね。後には直ぐ旦那樣が被居しやいますよ。叱れたより少し餘けいに謝罪れば、まさかお辭儀の多少でさし當り、多大の損失も響いては參りますまい。

それからお姑様の前で暇さうな樣子は大の禁物で御座んすよ。成可く多忙し相に、働く樣に見せかけて被居しやいいえ見せ掛けるといふ譯ぢや御座いませんの。が畢竟はさう言つた樣な風に。

會見と、あくびと、居睡りと、つまみ食ばかりは嚴

れても御自分のお部屋迄、お這入り遊ばせな。
もしお姑様が、茶簞笥か何かの上へ大きい眼鏡を置き忘れでもして外出でも遊ばさうものなら、天の與へた好機會。ソットお伴の竹やの袖へ入れて置き遊ばせ「竹や、眼鏡を。」と仰る時が乾度參りませう。
「いえね、御隱居様、もうちやんと出しなに奧様から頂いて參りました。」
まさか、竹やばかりが好い子にもなりますまい。
如何に旦那様とお仲がよくとも、お姑様の前で、無暗に笑つたり、戯談たり、私語するなんぞはおよし遊ばせよ。見に行く積りで出かけた芝居でも、のべつ幕なしに艶つぽい臺詞ばかり聞かされて御覽遊ばせ、くすぐつたい氣がして、永くは見て居られないでせう—況や少し曲り掛つた(腰の)お姑様に於ておや、で御座んすわ。
一體老人は何によらず物事をくどく聞きたがるものですよ。良人や子供に優しい口をきいて居て俄かに、「何ですつて?」なんかと慳貪な事を被仰つちやいけません。自分からつまらぬ犧牲を拂ふと同じことですから。
煤掃ひや、近火見舞の應接や、猫が戸棚の鯛を持ち出した様な騒ぎの場合、決してお姑様も立ち廻り役の雜兵の中に入れてはなりませぬ。「御老體の御身、何卒御自由に、炬燵番でも。」と仰つて御覽遊ばせ。後には坊ちやんがむづかつて被居しやいますもの。
お茶にお菓子は何時でも用意して置いたが能う御座んすね。「お茶にお菓子お土産につゝら。」と雀でさへちやんと氣をつけましたから。
まあ家中で一番年老つて、苦勞して來た方なんですもの、温い嫁の注意一つで浪も風も立ちますまいよ。
苦しんで拂つたものは、何時かまた同じ形して返されませうよ。さりとは辛う御座んすわね。

○あら、失敗つた

「一寸、御待ち下さい。」
「ハ?」
「一體貴女の被仰る事は不得要領ですね。それぢや姑

は怎うしろ、と仰しやるんですか。」
「まあ、貴女にはお聞かせ申す約束ぢや御座いません
でしたが。」
「随分な、私にだつて眼も耳も御座いますからね。」
「オヤ〳〵、之れは失禮いたしました。御耳は遠く、
御眼鏡が御入用とのみ思ひ込んだが此方の不運。」
「何ですつて？」
「いゝえ、此方のことで御座いますよ。其れではお宅
の花嫁様はお氣に召しましたか？」
「そりや、問題違ひの事。私の身に付いてゝす。兒守
や炬燵番許りして引つこんで居よと被仰るんですね。」
「滅相もない。曲つてお取り遊ばしちや困ります。い
えそれよりももつとお好な事がおありなさいますなら
………。」
「私の身にもなつて考へても御覧下さい。若い時から
むつかしいお姑様に好い程苦勞して、今日までまだか
れこれと言はれましちや………。」
「ハイ〳〵、重々御尤。全く割の惡い御役なんで。」
「まあ、瓢簞で鯰を押へる様な事ばかり被仰います
ね。」
「エヽ。いづれ及ばぬ鯉の瀧のぼりなんで御座んすか
ら。」
「と、仰いますと？」
「いゝえ、少し咽喉が痛み出しました様ですのよ。あ
んまりお饒舌し過ぎました故でね。」
「それで？」
「ハイ御免遊ばせ、おや、また外でも私怒られて居り
ますよ。」
「結論を早く被仰つて下さい。」
「左様。御同情に堪へません。いえ全く、年は老りた
くありませんね。」





お孃さんの手控帳

葉子

七日　晴

洗面後中庭へ廻る。花壇の隱君子相變らず氣高い姿から清香を放つて居る。敢て陶淵明を氣取る譯ではないが私は最も霜に傲れる菊を愛す、「黃菊白菊其外の名はなくもがな、」とは嵐雪の句と覺えてるが黃菊なども無くとも佳い、只白菊は一本でいゝから絕えず咲てゝほしいと思ふ、惜しい氣がせぬでもないが三本手折つた。黃と牡丹色の二本は御佛壇の山茶花と換へて白の一本は文机の一輪挿へさした、愛せらるゝ人に手折られて讀書の友となるのは菊も定めし本望ならん。

例の如くお佛壇へ御線香を立てゝ緩う燃え上る煙を眺めながら合掌して、家內安全息災延命の御守護を希願ふ。何んだか老人のしさうな事だ。此間までは御佛壇の世話は御祖母樣が一切なされたが逝きまして後は老人氣を出して私が後を引き受けたのである。每朝御佛壇を拜むと私を熱愛して下さつたお祖母樣とお話するやうな氣がする。朝の禮拜は樂しみの一ツだ。

級仲間の藤本さんが近々嫁がれるのでお祝ひに何を上げたら宜いでせうと母樣に伺つたら帶上等は如何かと仰有る。帶上も可いが新敎育を受ける人の贈物としてもう少し氣のきいた物はないか知らと云ふと十重さん『ヴアイオリンがいゝわ、蜜月旅行に持つてつて新郞唱ひ新婦彈くなんかいゝぢやありませんか。』なんて氣樂な事計り。彼れかこれかを考へたが結局帶上と書物——婦人の日常生活法——と定める。

午後橫濱の吉田屋が來た。私の欲しい物計り茶の間一杯並べ立てたが何が佳いやら目移りがして分らない

十重さん白茶地に光琳風の紅葉の模様の友禪羽二重を取り上げてツッと母樣のお袖を引いて、「子ーお母樣今度染つて來る羽織の裏に子ー。」つて手から放さない。遂に切らせる。日頃は俗世界の上に超然と解脱したり矣と濟し込んでる十重さんも矢張り女だ這麼物に出會すと超然主義も何時の間にやら引込んで慾界の煩惱が首を出すものと見える。日頃の御持論如何と突ッいて遣つたら言葉はなく笑ふのみ。

私に似合ひさうな一寸柄のいゝ御召が有つたけど三越タイムスにあつた方が未だよさゝうだから御祝ひに上げる帶上げと一緒に取り寄せようと思つて今日は止した。なんぼ私が慾張りでも今茲で買つといて又すぐ買つてとは云へないわ。母樣は高貴織一反壽さんにモス友禪其他は毛布やら文夫坊の帽子やら水彩畫の額やら机掛やら石鹼やら。この中御父樣の御氣に召したものは額丈、お金拂つて頂くのが少々御氣の毒で有つた。

十重さん高貴織を見て「お母樣少しじみですね未だもつと派手でも宜う御座んすよ東京の小母さんなんかお母樣と同い年でもそれあ派手ね。」つて同意を求むるらしく私の方を向く。母樣は「田舍には田舍の風が有るんだか



ら派手な風しちやみつともないよ。』と仰有る。あゝ郷に入りては郷に從へが思ひ出される三年前の卒業の折第二の母君と慕ひまつる山田先生が特に私達郷關を出て學んで居た人々に呉々もお諭し下さつたお言葉である。私は決して忘れる事は出來ない常に座右の銘として居る此村で女學校卒業生と云へば私達姉妹計りだから私達の一擧一動は實に能く村人の注意を索く。村人は私達に就いて少でも多く何か知つてるのを誇つてるのださうな。此間一寸用事で外出したら珍らしさうに野良仕事の手を休めて遠慮もなく見て居る。乾度俥の影の見えなくなる迄見送つて着物が何んだとか髪の形が什麼とか批評して居たらう。私は極内氣で衆目を一身に集めると云ふやうな事は嫌ひだから目立つ身扮裝はしない積り村人にも出來得る丈腰を低く接して居る。お蔭で批難され易い生意氣等の聲を聞かないのは先以て仕合せの至りだ。都のお友達は平和な田園生活が美しいなんて仰るけれど却々どうして都人の目にふれてるやうな詩的な事計りはないわ平和な代りにとんと興味も無い。偶には可惜青春の期をこんな田舍で無教育な村人とゝもに朽ち果てるのは詰らないと思ふ事も有つた。あゝ併し私も後一年程で永久に此村此家を去らねばならぬ。さう思ふと流石に名殘惜しい。學生時代に、花の都に居りながらこの草深い田舍へ歸りたくつて〳〵しかたがなかつたので見ると未開でも何んでも我が郷里は可懷のだ。「江山洵美是れ我郷」と提灯を持つて置かう。

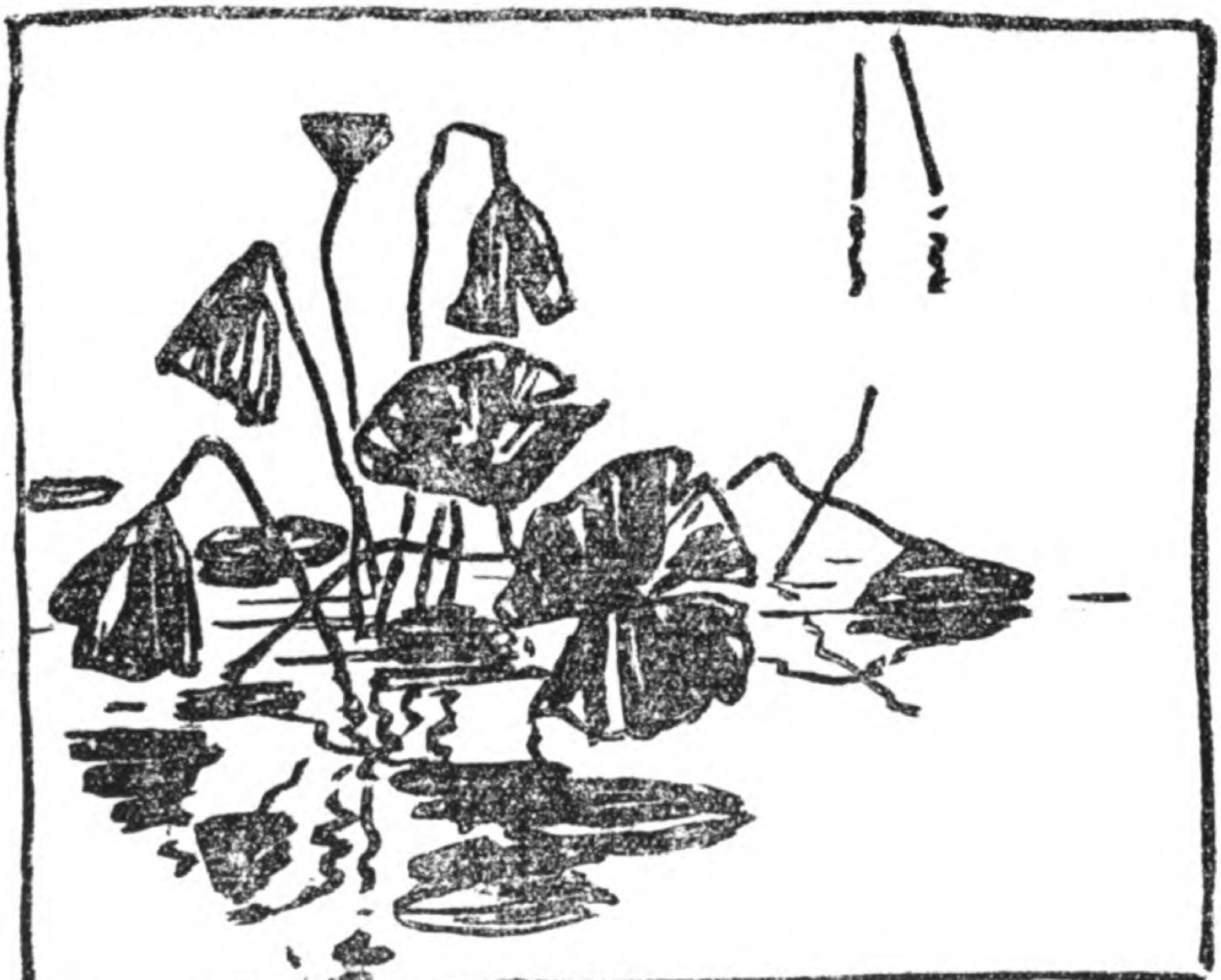
昨日仕立かけた紋羽二重の羽織買物で暇潰したにも係らず夜迄に出來上つた。現金なもの、近頃は自分の計りだから毎も早い。

十四日　晴

朝お隣から『昨夜中屋の作どんが御手長樣の拍子木を聞いたから信心に出よ。』と言次が有た。御手長樣は火難除の御神、いたく拍子木の音を忌ませ給ふとか災の起らうとする時は嫌ひな拍子木を打つて豫め變の有るのを知らせて下さる有難い神樣と村人はどこ迄も信じて居る。神樣が拍子木打つとは誠に不思議千萬、而

も彼人が聞いた此人が聞いたと別な人に依つて度々こんな布告が出る。其度毎に貴重な時間を潰ぶして所謂「信心」なる語の下に大勢寄つて神前を行つ戻つ祈願する。さても田舍人の無邪氣な事よ！

午前新田の小作人が來て今年も不作だから負けて貰ひたいと云ふ。來る小作人も〳〵今年は豐作だと云つた事がない毎年去年の方が良好つた〳〵と云ふ。逃した魚は大きかつたの類の其れとも負けて貰ひたさの口實なのか何れにしても賞めた事では無い。前者は未だ



よし後者に至つては實に憎むべきだ又來年になると去年は良好たを繰り返すのだらう。けれど中には眞實可哀さうなのもある働いても穫れないのに地主から嚴しく督促されて遂に發狂した人が隣村には有るときく。呑氣らしく見える百姓も又辛いかな。去年は東京では財界の不振で會社銀行が大分倒れた今年は田舍へ及んであつちもこつちも不景氣の呼聲が高い。お琴でも出して見ようかと思つても近所の手前餘り呑氣らしくて溫習もされない。吃度忘れてしまつたらう。

今日はいつにない靜かな日藍碧の空は澄み渡つて一片の雲も無い氏神樣の杉の木に百舌が喧しく囀つて居る。

うたが手紙を持つて來てくれた私の分は二通、壽さんと町子さんから。壽さんの葉書には、「大姉樣と小姉樣で祈つて下さつたお蔭で文藝會の英詩暗誦は大喝采であつたと云ふ事やお休みが近いた故お土産の心配で學科の方はそつち除けだなど〻ある。未だ廿日餘りも有のに。すぐ私も矢張りさうだつた歸校した日からもう歸省の日を數へ始めて一日づ〻近づくのが何より樂しみであつた。もう一度あんな時代に返つてさん〴〵お友達と遊んで見たいあ〻あの時代が戀しいなつかしい！　人生の最大愉快時代は學生の蕾の中だ花となり實となつてはもう凋むのを待つ計りだもの。

町子さんのは一度讀んで吃驚して更に讀んで涙が出た。御氣の毒とも何んとも云ひやうもない。御父樣が御歿れになつたさうな。御老人とは云へ未だ其れ程でもないものを。之れも浮世の同情に堪へない。

美人で俊才所謂才色兩全の町子さんだから網の目から手の出る程望み人があるのに其れにも應せず進んで研究したい音樂も斷念して小學校の教師となり纖手只管傾いた一家を起す事に勤めて居られるのだ。町子さんが振り分け髪で幼稚園通なさる頃はお家の全盛時代で御父樣も何々課長とか云つて地方では隨分巾をきかしたものださうな。併しタイムの力は新進氣鋭の士を澤山生み出して老朽者を葬つて仕舞ふので、町子さんの父君も休職後は詰らない所へ僅な俸給で御勤めなさつて居られたのであつた。元が元だからあんまりな生活も出來ないと見えて外面を張るから多少負債のお有りの樣な噂もあつた。其れに御兄樣が神經衰弱で學校も中途退學ブラ〴〵日を暮して被居る。御父君を失はれて後は働き人と云つては町子さん計りかよわい御身で此先どうしてやつて被行るだらう。併し恁う云ふ境遇に人となられた故か御心は實にしつかりして被居る私と同年齡同級の親友で學力も殆んど伯仲の間に有つたが其世態人情に通じて居られるのは世才に乏しい

私などの比ではない私は常に姉視して居る。彼の君も僞の多い女同士の交際中眞に私の知己は貴女一人よと仰有て居られる御手紙の中に「御兩親御揃ひで何不自由ない君がしみじみ羨しいなど私も敎育受けた身だ只徒らに嘆いて計りは居らぬ石に嚙りついても母と兄は守つて行く。」とある健氣なお覺悟天晴御決心其れでこそ私の摯友だ山田先生がお聞き遊したら什麼にお悅び遊すだらう。恁んな境遇の方を見ると始めて我身の安穩なのが分



る。諺にも兩親の有る人は富めるなりと云ふ。私は慈愛深い御兩親がお揃ひでお在す。旣に幸福な部類にあるのだ其上物質的にも不足は無い事はないがあきらめ樣だから此邊で滿足せねばなるまい町子さんに較べて實に勿體ない苦痛を云へば料理の失敗にお叱言頂戴の時とか思ひのまゝに望む物が得られぬ時位のものゝ私に町子さんの境遇は能く分らないかも知れないが、もしも自分がヒヨツとあんな境遇になつたらと思ふと他事ならず身にこたへる。

夜は一人靜な裏のお座敷で淚ながらに御返し書く。充分同情して慰めたり勵したりやう〳〵町子さんの御名を書き終へてホッと息吐いた時茶の間の柱時計が夜の寂寞を破つて十一時を打つた書き始めから約四時間手が疲れて只さへ澁りがちな筆が猶更動かない。讀み返すと金釘流が一きわ目立つ。

先月の十善寶屈一部差上げる積りで帶封にした。この中から少しでも慰安を見出て下さつたら幸と思ふ。

姙娠を避くるの必要

▲世が進むに從つて生存競爭が激げしくなり、一般生活の困難を來たすから、中以下の社會に在ては、今後ます〳〵結婚は六ヶ敷くなつて來る。縱令結婚し得た者でも、從來の如く前後の思慮もなく、無暗に子を儲くることの出來なくなることは、歐米の實情に照らして最も明かである。日本も何時迄も今日の狀態を保持し得ると思うてはならぬ。

▲實際産兒の制限は文明國には免る可からざるもので、單に經濟上の必要に迫まられて然るのみならず、人智が進み、特に飲酒家の子若くは一時の飲酒後の交接より出來た子供が、多く心身薄弱の低能兒であることに氣付く樣になれば、この點からも避姙の必要を感ずるのである。

▲白痴や低能兒の産出を恐るゝ殊勝の飲酒家は素より、生活の困難な上に、子供の多いのに苦しみつゝも、尙且つ節慾する能はざる薄志の徒が、若し自身で能く育てられる丈けの子供を遺つて、その他は凡て避姙の方法を執つたならば、啻に子々孫々の幸福なるのみならず、一家の安樂と國家の富强を增進するに大なる効力があるかと思ふ。

▲然らば何の位まで産兒を制限して宜いかといふに、平均各戸三人宛の子供があれば、日本人の人口は減少しないで、適當の度合を以て增加し行く。所が或家には一人も子供の無いのがあるから、先づ一家五人の子供とすれば、恰度平均三人に當るのである。

▲今日の狀態では、比較的體質の薄弱な上流の子供のみが極みて圓滿に育てられて、國民の中堅となるべき體質强健なる中以下の大多數の子供は、哀れむべき境遇の下に最も不完全に育ちつゝある。これ國家を憂ふる者の大に考究すべき事柄ではあるまいか。

▲要するに避姙の必要なることは最早確定の議論で、殘る所は如何にして避姙すべきやといふ點である。今日內密に行はれて居る器械的方法若くは藥物利用の如きは、果して衞生上害なきや否や、縱令衞生上害なくとも、道德上非難すべき餘地なきや否や、之が最も大切な問題である。私は專門の醫學者達が國家社會の爲めに最も安全なる方法を提供せられんことを望むのである。（法學博士浮田和民氏談片）



煮賣屋の娘としての私の境遇

筑紫磯子

▲

十二疊の室、五尺の床には好きな拜山の山水を掛け紫檀の机に同じ硯箱其中には關の伯母さまから戴た品のよい硯が入つてゐる。

正面の「龜鶴年壽齋」としてある額は桃仁先生の筆右手のは貞徳先生の月夜の油繪、共に通學の餘暇親しく敎を受けた恩師である。

十六燭光の電燈はちと暗いかも知れぬが、紡績物の裁縫や讀書には充分すぎる。

人並よりも健康な私、已に幸福者と思ふ、左手には母樣の下りの指輪ははめてゐるけれど、羽織も着物も木綿ばかりそれで少しも不足は感じぬ、錦繡の裝そした友と逢つても顏を赤くする樣な事はない。

それに兩親は四十に成るかならぬといふ有樣で、至つて丈夫、性質のよい弟も持つて居る、ほんとに多幸な身。

三味に合する小づゝみ、さわぐ聲、二階——、あゝ私は愧づべき醜業者の子であつた。

なまなか女學校を卒業した爲め無敎育の女を相手に朝夕をすごすのが苦しいのか。

多くの友が紳士紳商の令孃としての立派な奥樣ぶりがうらやましいのか、そんなさもしい心は私は持たぬ積りだが。

晝、母樣の代りに立ち働く時は、少しも心にかゝらぬ事が斯うして机にでも向ふと、直ぐ思ひ出されて、つらい淋しい煩悶ばかりする。

未だ自分を買ひかぶて居るのではあるまいか、でも、

何の爲に教育は受けた、恥知らずと先生方の物笑ひにはなつてはゐまいか、帳場格子の前に坐つて、紅白粉にけがれた身をかくした多くの女の振舞を目撃して、私達の衣食の費は、と考へると全く厭になつてしまふ。

　が自分を育てゝ下さつたのは兩親より外になく、矢張り家もこゝ、はづかしい辛らいと云ふて家を捨てゝまで、親を捨てゝまで、自分ばかり高見の見物が出來様か、勿體ない、私にはそんな勇氣や虚榮心は無い、だが何だか立場を失つて迷ふてゐる様でならぬ。

　母様は毎晩帳方や女中を相手に午前三時まで起きてゐらつしやる、かうして居つてはどうも濟まぬ次第、もう半時間もしたら今夜は私が代らうと思ふて其間、忽滑谷快天師の禪學講話を讀むと、十事の心得座右銘として書いてあつたのは、

▲一分の善は九分の惡に勝つ
▲二分の借は八分の貸より怖るべし
▲三分の堪忍に七分の得あり
▲四分々々しては何事も成らず
▲五分々々の智慧は十分に使へ
▲六分の正直に擔保要らず
▲七分の暮しに不足なし
▲八分の腹に醫者いらず
▲九分にて足れば間違なし
▲十分の働きに貧乏追ひつかず

であつた、私はこんな心掛がほしい。

所謂惡錢身につかず、だけども浪費を制する事は正しい道と思ふ。

　どちらかと云ふと、やかましい方私は人からけぶたがられて居る、此間一人の醉漢が酒一杯の無心を帳方に乞ふてゐたが、臺所に居た私を目で知らせた爲、惡魔、けちん坊と罵つて去つた。

　もし花街の地に好んで奉公口を求める者があつたらきつと碌な者でない、夢の様にしてゐるなら、直ぐ大きな穴があく、人を御する力のない私等は隨分苦痛や雜念を感ずる折がある。

　ひよつと思ひ出した、「明日もまた朝とく起きてはげ

まばや窓にうれしき有明の月」の歌は羨ましい限りである。

▲午前肴屋に行くのは私の仕事の一つ。赤鼻は斤四十五錢と云つてゐる、鰯の安いときたら一斤一錢五厘、蒲鉾によいけれども油が多くてよりにくいが私は十斤私は五斤と云ふて人山が出來て居る。



小鯛はないのであいなどのつけ焼、赤鼻のさしみ、烏賊の酢のものと、祖父さんの好物故、べんさしをなんばんづけに買ひ整へて、逆序だから繼子さんの御宅へ伺ふとまち子さんの愛らしい事と云つたら人形の樣だ、一時間ばかり遊んだが新鮮鶴の淋しかつた話や、小官では度々任務が變更されるので困る事や、まち子さ

んが大くなるまで今の通り實家ですごすお積り等承はり、お妹花さんが寄宿舍へ入り度い樣子からお從姉宮川すみ子先生の噂に及んだ。

私はいつも宮川先生の御話をするのが一番樂しい、敢て官途にある人許りを羨仰するではないが先生の御家庭は實に立派なもの、お父樣は宮內省へ出勤、兄樣は軍醫中監として、姉樣も軍醫少監の夫人、先生は家政學研究の爲文部省留學生として洋行歸朝なされた、親しく御目にかゝつた事はないけれど、雜誌等で伺ふ御話はバタ臭いこともなく、充分有難みがある「妹は高等師範へ入學せねばならぬとさわいで居りますがおすみさん等は反對です」とつぎ子さんは云はれた。

午後三時頃時子さんが見えたので琴を出して六段を合せた、私達には表位が手頃、殘月や千鳥になると手がもつれてどうも思ふ樣に彈けぬ。

母樣が一寸と座敷から仰有るので御用をきくと、「今夜例の五百圓口の利子を受取に來るから用意して置けと父樣の御言葉だから、一寸今計算して見てお吳れ」と申さる。

二分三朱の五ヶ月分五十七圓五十錢になる、預金もあまりないのに、手元金も少々ばかり節季も眼前、質受だ、借金拂だと云つて貸金をせまる、裕かでない家の年の暮の苦しさは又大したもの、もし私の力で四十一年を立派に通り越さうとするなら千圓近くの金は要るだらう、私は役に立つ者では無い、父樣や母樣が居らつしやる、けれども何だか心細い、運の惡い時は失敗に失敗が續いて起るから情ない、百二十七圓に賣られた當限の大阪株式株は此頃百四十五圓臺の高價を示して居る、此調子なら隨分及ぼしが來るだらう、諸證券の下落でも大きな損失になつて居る、父樣の心中には人知れぬ浪が立つてゐるだらう、多くとは云はぬ一萬圓ばかりの金が得たい。

▲

亡くなられた祖母さまの實家で佛檀移轉祝があるので手傳に行く。

坊さんが六人と來客が二十人ばかり、儀式めいた事がすんでからの酒宴の席の給仕が私の務めであつた。此春矢張りこゝで催された曾祖父の十七年忌の法會にも手傳つたが、其時は坊さん方許り饗應を別室でされた、場所がらだから墨染の法衣にも愧ぢず急に心が軟化したと見えて、私に向ひ『何所の生れか年はいくつか』と一休禪師の再來でもあるまいに、腹も立ち可笑しくもあつたけれど、『御遠慮なしに澤山召上つて下さいまし』とすゝめたら『精進料理で腹一ぱいになつた鯛のさし身でもあるならまた一杯飲むが』と、大方酒が云はせることゝ思ひながら望みの肴をさし出したら『まあほんとに持つて來て下さつたか』と頗る滿足の態であつた。

今度は一代のもうけ出しで新らしく佛檀が出來たといふ祝にあたるので、殊更に精進物は一つも用ゐてなく、肉に肴ばかり其上三味迄彈かせてにぎやかにされた。

坊さんも至極眞面目で澄してゐられるが、酒に醉ふたおばあさん方は坊さんを丁度藝人でもかゝへた樣にしてさわいでゐられる、此處の伯母さまの自慢話も始まつた。『子供も醫科大學で勉強して居ります出世して孝行すると申しますので嬉しう御座います』『ほんによい御子さんをお持ちになりました』と云ふ聲もきこえる。

丁度其時唐紙を開けてこゝに來たのは俠客を以て自任してゐる出入のもの、餘程飲んでゐるらしい、三味を彈いて居る丸まげの人を見て『冬次舊恩を忘れずによう來て呉れた』と大勢の人をもかへりみず大聲を出す『八十圓取りの立派な奥樣ぞ』と伯母さまは應せらる、席に列してゐられた氣の小さい私の母さまは『こちらに來て給仕してお呉れあちらには行くな』と注意なさる。

散會になつたのは六時過ぎ、歸つて見ると祖父さまは芝居に行つてゐらつしやる、雨も降つて來たので御迎に行かねばなるまいと思つてゐたら、明日數學の試驗があると云ふて、文さんが來たので、四則雜題を

復習してやり時間が遲くれたらしいから、女中を急いでお迎にやつた。

十時頃臥床に入らうとしたが何だか却て寢る氣にならぬので、朝鮮の叔父樣へ手紙を出す、それで猶更目がさえて何や彼や思ひ出す、袖着物で便利がわるい時折々筒袖に着更へて裁縫でもしてゐると、丁度歸省してゐた弟が「姉さんは働くふりをしてゐる」と大變笑つた、女らしからぬ私 弟と仲違ひする事もある、今頃は田舍の中學校の寄宿舍で、どんな夢を見て居るだらうか。

弟は私を好んでも居らぬ、また的にもしてゐない事は私は知つて居る、が私は父樣が御存知ない少々の貯金がある、萬一の時は學費の一部にしてやらうと無いもの丶樣にしてゐる事は弟は知るまい。

私一身はどうなるとも天の意のまゝで厭はぬ、二三人の弟、あゝどうか立派な人になしたい。

世界各國未開土人 身邊裝飾の奇習

△頭髮の裝飾＝暹羅では頭に輪を戴いて居ります、そして其輪を南京玉の如きもので飾り、これを頭の中央部に於てこの輪の中から、慈姑の把手のやうな毛を出すのが盛んに行はれて居ります、樺太のアイノは鉢卷の樣な輪を布でこしらへて、これに刺繡のやうにいろ〱の飾をこしらへて、これを頭に冠ぶる事が裝飾となつて居ります。

△眼の裝飾＝次は眼球に藥をさしてパッチリさせる事がありますが、これは多く文明國でやつて居つて、未開國ではかういふ事はやりません、其代りに墨を眼の縁に塗る事が流行つて居ります、これは埃及、土耳古、阿剌比亞などで盛んに行はれて居ります。

△鼻の裝飾＝當今では鼻の形を直す器械があるといふ事を聞きましたが、未開國では自然の儘で飾りをするのです、それは左りの鼻の孔に小さな輪をはめるので兩方ならばゆしは體裁もよからうが、片方丈けだから隨分見苦しい、それから又輪をはめずに珊瑚の釦をはめる事も行はれて居ります。中には牛の鼻のやうに鼻の孔の境の所に輪をはめてそれを飾りとして居る國もある。南洋のニユーギニーといふ處では鼻の横にまつ直な棒を突き通して飾りとして居ります。この棒は美しい貝殼で飾

りを施したものです。

△口の裝飾＝これは男子に多く婦人には少い樣であるがアフリカ内地の土人や、アメリカの西海岸などでは婦人でもやつて居ります、アフリカのは鼻から口にかけて直徑一寸位の輪をはめるのでこれは小兒の時唇に孔をあけて年を取るに隨つて段々大きくなるのを待ち、これに通すのである、そしてそれを鼻にはめて其の輪の内から鼻が出て居るのを飾りとして居る、アメリカ西海岸のボトキュード人種のは又餘程變つて居る、ボトキューといふのは、鋭利といふ事であるが、それがどうして人種の名前になつて居るかといふに、口唇に孔をあけて瓶のやうなものをさげて飾りとして居るからであります、又同國バンクーバー附近の土人は下唇に皿のやうなものをはめてこれを飾りとして居つて、煮へ立ての熱いものを食べるには唇を一寸廣へしてこれを載せて冷ましてから食べるのであります。

△耳の裝飾＝これは別段珍らしくもないが大別三種になつて居る、即ち耳に棒を通すのと輪をはめるのと、鉤のやうなものを掛けるのとである、西洋でもこの鉤をかける飾りは行はれて居る、併し總じて耳輪のかざりは、衰へたやうであつて耳輪の今日猶盛んに行はれて居るのは印度人、北海道アイノ並びに樺太の土人などでせう、それから南洋のジャバでは、西洋の糸卷のやうなものを耳輪として此の正面には金銀寶石をちりばめて居るのを下げて居る。

△額の裝飾＝額の裝飾として白粉を塗る事は、文明諸國大概何處の國でもやつて居るが南洋のジャバでは黄色の粉を塗るので、同じ南洋の中でも黑いのや赤いのを塗ける處もある、印度の或る地方では額に一種のかざりを兼れた、郵便切手のやうなものを貼て居る、それは日本で方々の家の前に火災保險會社の社標を貼つて居るやうな工合で額の張札を見て、直ぐに宗教の區別がつく樣にしてあつて、これはアラビヤゴムのやうなものが、ついて居て、毎朝顏を洗ふ度にそれを貼りかへるのである。

△鐵漿の風習＝むかし日本では齒に鐵漿をつける事が人の妻たるの證據でそれが又貞操の誓ひであると言ひ傳へたものであるが、一體齒を染める事は南洋諸島、馬來地方でも行はれたもので、これは齒を染めるのが目的ではなく、日本人が食事の後香の物を食ふやうに、檳榔子を食後に噛ぢる事がはやつてこれを噛むと齒が黑くなつて唇が紅をつけたやうになるのである、併しそれでは齒に白い處ろや黑い處が出來て可笑しいから、一體に黑く染めたのである、又檳榔子は隨分高價なもので、これを始終噛んでるやうに見せる事が一種の誇りとなる爲めに始まつたのである、それに今一つ孃時代には贅澤として多く用ゐなかつた檳榔子を人の妻となれば澤山に食べる、それで齒が黑くなる。即ち齒の黑いのは人の妻であるといふ證據になつて居たので日本のも多分この風俗が傳はつて來たのであらうと思はれる。



バラダイスロスト

某會社員の妻

一月二十日晴　祝言を濟ませてから、今日でもう一月餘り、奧樣と呼ばれて。始て樂しいお正月を迎へて、耻かしいやら、嬉しいやら夢心地の内に日が經てしまつた、これからは落付て家事を執りませう、夫婦差むかひの、誰に氣兼も要らぬ身は、理想通りのスヰートホームが作られる、かつては君ならば何惜しからむ此命と思つた身も、かう望みが叶つてみれば、末長く睦まじく添遂げて、華々しい金婚式でも擧げ度と思ふ慾が出てくる、脊の君の厚いお情が身にしみて、もつたいない位におもふ、地位や財產は我意とする處ではない。今の境遇に、私はもう〱滿足して神樣に謝して居る。

いつになく夫は早くお目醒になつて、火鉢の側で新聞を讀んでお出になる、松やは勝手でまごついて居るから、手傳つてお膳立をする、御飯が濟むと夫はじろじろ私を御覽に成てお前も大分世帶じみて來たよとお笑ひなさる、此頃の私の姿が夫の目にどんなに映ずるのであらうと思ふと極りが惡い。

今度の日曜には一しよに白馬會へでも行かうぢやないか、エヽどうぞお供をさせて下さい、歸途には又岡野で澤山仕入れるのだらう甘黨のお附合は眞平だよ。と、じやうだんばかり仰る、今日は送別會へ廻るからとて、洋服もよい方をお召に成て、ネクタイも却々こつたのをお着けになる、漸く生え揃つたばかりのお鬚を、カイゼル式にひねりあげて、高襟のよくお似合になると、殿方でも御仕度に却々手間が取れるのでをかしくて堪らない、定刻御出勤になる、今日はお料理

の世話もなし、縫かけの夫のお羽織を仕立上げてしまはうと、せつせと針を運ばせる、お晝飯を濟ませてから縁側の日向で新聞を讀んで居ると、ガラ〳〵と內の門へ車がとまつて、やさしい足音が聞えて玄關の戸が明く、奥樣はお宅で、と仰るお聲が正しく野崎さん、私は嬉しくつて直ぐ立て出迎へる、縞セルのコートをシユーツとぬいで座敷へお通りになるお姿、いつ見ても此君はお美しくて羨ましい、學校を出ると直ぐに御結婚なさつて、もう三歳のお嬢さんがお在になる、靑竹を割つたやうな、實にサッパリとした御氣性で、私とはよく氣が合ふので、お互に種々の打あけ話をはじ



める、校友會にはいつもかゝさず御出席なさるから、同級のお方の消息がよく分つて、それからそれへとお話がつきない、聞けば此君の旦那樣は、近頃御道樂が始まつて、折々内をおあけなさるとの事しみ〳〵御同情申上る、知らぬ間に時が移つて夕暮方になるお夕飯を御一しよにといくらおとめ申ても、さうはして居

られないとて、あわてゝお歸りになる、何だか殘り惜しい氣がする、一人で淋しいお夕飯を濟ましてから、又先の羽織を出して仕立あげて仕舞ふ、日曜の上野行には、旦那樣に此お羽織をお着せ申さう、さうして私は丸髷にいはせてお召の對の重ねを着て、一つ意氣につくつて見ようかしら、もしや途中でお友達にでも見付けられては極りが惡い、などゝ暢氣な事を考へはじめる、今日も内田さんが仰つた通り、何の苦もない今の私の境遇は實に人生の花も實もある樂しい時代であらう、夫の實家は鄕里（靜岡）で、屈指の資產家、兄樣が立派に家を繼いでお在になる、舅樣は早くに御死去に成て、姑樣はやはり鄕里でお暮し故、手紙で御機嫌伺ふ位のもの、當方の生活費も、夫の月給で尚餘りが有る上に、多少の財產も有るし、大した贅澤をしない限りは、流行の衣類調度は身につけられる、けれ共、世の中は三日見ぬ間の櫻哉、あゝこんな心細い句が有ではないか、今はよくても永い一生、此先どんな悲運に、おちいるかもしれない、野崎さんとても新婚當時は人も羨む睦ましい、御夫婦仲であつたが、今日の御述懷を伺つて驚いてしまつた、ほんとに男の心は變り易くて恐ろしいと、取越苦勞を始めると、今夜の宴會の事が、急に心配に成て來て堪らない、香水までプン〳〵匂はせてお出掛けになつたがもしや……時計はやがて十一時にもなる、あゝこんなつまらぬ苦勞はやめて「女學世界」でも讀まうかしらと、思ふ途端に車が門にとまつて、ほろ醉機嫌でお歸りになる、ホツト胸をなで下した、會の模樣を面白くお話なさるので襖の蔭で、松や迄が笑ひこけてゐる、床に入つたのは十二時。

二月廿一日、晴　夫は昨夜のお疲れで、まだぐつすり寐入つてお出になる、昨日のお洋服の塵をはらつて片付けたりしてゐると電報といふ聲、何となく胸が躍どる、早々夫の枕元へ持て行き開封すると。

　ハ、六ジタツタセワタノム　ヨシダ

鄕里の兄樣からだ、夫は眠い目をこすり乍らもう一度よめと仰る、何度讀んでも間違ひはない、花の時節

には遊びにくると御申越であつたお姑様が急に御上京遊ばすとは、何ぞ變事でも起つたのではないかと、申すと夫は、なあに、キツト嫂と衝突したのだらう、と苦笑なさつて、お前も當分御苦勞だが機嫌を取てあげてくれと仰る、何の子が親に仕へるは、當然の事、及ぶ限りおつくし申ますと、お答へはしたもの丶、かねがね姑様は非常に氣むづかしいお方と聞て居るから、ほんとに心配で〱堪らない、姑様とは結婚當時にほんの一週間ばかり御一しよに暮したばかりで、まだしみじみお物語りもしないでお互に氣心もよく分らない内に郷里に御用事が出來て、お歸國になつてしまつた十一時には新橋へお着だから、私がお迎へに行く事にする、夫は御出勤になる、午餐の仕度を松やにい丶つけて、新橋へ行く、まだ三十分、時間があるので待合室に入る、ほんに思へば夢の様だ、新婚旅行に出掛けた時、丁度此所で夫の君と二人腰を下したではないかあ丶あの時の樂しさ……と逐うつとりと考へこむ、ガランガラン、と鈴の音に氣が付て時計を見るともう十一時急いで開札口の處へ行つて待つて居る、程なく汽車は着た、プラツトホームをわれ先にと歩み來る人波が、しばしとぎれた後の方から、まがふ方なき姑様のお姿ハツト胸がどきつく『よく迎へに來ておくれた、急に上京する事になつての。』

『まあようこそ御機嫌よくて何よりで御座います。』

とお答へして、車夫に手荷物を受取らせて車を續かせて家につく、午後は夫も早くお歸宅になる、かあ様は兄上御夫婦の御仕打が面白くないとて涙さへこぼしてお話になる、よほど衝突も烈しかつたと思はれてほんとにお氣の毒だ、夫と二人で色々お慰め申上る、夜は炬燵をこしらへてあげ、早くにおやすみになる、兄様からのお手紙はまだ屆かない。

三月廿五日、曇　姑様が御上京に成てから數ふれば三十日あまりになる、心を碎いて及ぶ限りお仕へ申て居るが、此頃は何事もお氣に召さず、あまりに無情なお仕打、私は殆であた丶かな春の野から、北國の雪の中へでも放り出された樣な氣がして、毎日涙で暮して

居る郷里の嫂樣もどんなに御辛勞遊ばした事だらうと御察し申上る、自分の至らぬ處をお叱りになるのならどんな事でも辛抱するが、何のとがもない私に向てさつきのお言葉、何とて聞捨にされようぞ郷里一番の豪家の娘を嫁に貰ふ積だつたのに、勝手にお前を極めてしまつたから、あれも出世の道を失つた、との仰せあまりな侮辱の與へやうも甚しい、私とても相當の敎育を受けた身の、皆樣が良緣と喜んで下さつて、立派な式を擧げたのではないか、姑樣が一時の腹立紛れとはいへ、あまりに踏付たお言葉、いつそ里へ逃げ歸つてしまはうか……イヤ／＼そんな輕卒な擧動は出來ない今の身の上だ、どうやら姙娠したらしい此頃の體の工合、夫にソツト打あけた時、非常に喜んで下さつた姑樣とても感付かれた御樣子だのに……もう／＼何事も胸をさすつて辛抱しようと思ひ返しても胸先がつかへた樣な氣がして苦しくて堪らない、夜に入てからお先へ失禮して床に入る、夫は今日のお留守中の出來事を御存知ないから、やつぱり體のかげんだらうといつて、御親切にいたはつて下さる女の道をつくせよとて神樣が得難い賜物を與へて下さつた、責任重い此體氣を大きく持て、末を樂しみに暮しませう、祈らずとても神や守らむ、眞を以ておつくし申て居る内には、いつかはキツト姑樣のお心が解けるであらう、あゝどうかして、お心をやはらげて見たい、さうしたならば夫もどんなに感謝して下さるだらう、やがて安々と可愛いみどり子を擧て、皆樣に喜んで貰ひませう、と思ひつゞけて居る内に、遂うと／＼と眠つてしまつた、ふと氣が付た時はもう夜がしら／＼と明けてゐる、姑樣はもうお目ざめと見えてお部屋の方で灰吹の音がする、ハツト思つて寢亂れ髮を掻きあげ乍ら、夫に知れぬ樣ソツト床を出る。

名流談叢

大山公爵夫人の懷舊談

◎會津籠城の追懷

思ひ廻せばはや四十二年の昔となりました。丁度戊辰の役の時私は僅か九歳で母や姉と共に會津の若松城に三十日間籠城いたしました。父は私の幼少の時に死亡なりまして、當時は兄が代を續いで居つたのですが、敵に城を圍まれて今日は落るか、明日は落ちろかと云ふ危急な場合ですから、男子と云ふ男子は悉く戰に臨んで、城内に居るものはよぼよぼの老人か女子供ばかりです。然し其老人や女子供でも手足の動く限りは誰れでも彈丸運びをしたのですが、夫れが戰の眞最中ですから、彈丸を運んで居る前にも後にも敵彈が雨かあられの樣に飛んで來ると云ふ仕末でした。夫れでも其樣な時は氣が立つて居るものと見えまして、私どもは恐しいとも思ひませず、終ひには慣れてしまつて、敵彈を丁度祝砲でゞもあるかの樣に、今日は二百發つたの三百發つたのと數へながら、平氣で彈丸を運んで居りました。彼う斯うして三十日ばかり籠城して居りましたがいよ／＼落城する事となツて、城中に居ツた女や子供はことごとく近所の百姓家へ御扶持付きで賴んで落してしまひ、終に落城いたしましたが、其籠城中に私の兄嫁が敵彈に當ツて即死致しますし、私も其時側に居つたので少しばかり負傷をいたした位です。

◎落城後の辛酸

落城後の私等の困難と申すものは、並一通りではありません。兄は東京に御あづけになりまして、母と姉二人と私とは一人前三合の御扶持で近所へ小屋の樣な家を持ちましたが、何しろ九合の御米で何も彼もするのですから、迚も足りません。だから二人の姉と私は毎日山へ往つては枯木を拾つたり、田へ往ツては刈入の後に落ておる稻穗を拾ツたりして、家に持つて來て食物や燃料の補助にして、漸く其日を送つて居りました。然し母は武士氣質の非常に悧氣の人でしたから、其困難の中にも少しも泣言や愚痴を云はず、自ら子供を勵まして學問を勉強させました。私は今でも目を閉ると母が薄暗い燈下で頻りに糸を續ぎながら姉に書物を教へて居る有樣がありありと見えます。其間に藩主は御國替になりまして私等は南部へ參りました。それから私どもの困難は一層甚しかつたのです。そして御飯の代りに昆布のお粥を啜つて饑を凌いだ位でした。

◎可憐なる留學生

困難に困難を重ねて居る間に、其年も暮れて私が十歳になりました。其時東京にお預けになつた兄も漸く赦されて歸りましたが、兄は母に向つて、もう時勢が斯うなつては今後の人は是非々々外國語を學ぶ必要があります、幸ひ僕の知る西洋人が函館に居りますから、其所へ末の妹を

あづけて、外國語を學ばせうと申しますと、母は早速承知して僅か十歳の年弱な私を手放して西洋人の所へ頼みました。然し其頃日本に來て居る西洋人はどちらかと云へば教育の無い商人ばかりで、私の預けられた家の主人も其類の商人でしたから、實は何も教へて吳れませんでした。夫れで兄も之れは不可ぬと氣を揉みまして、此度は横濱の西洋人の許にあづけられましたが、此所も前と同樣な家で少しも私の爲にならないので、兄がまた〳〵心を痛めて居ります、と其時丁度文部省で女子の留學生を募られましたから、私は早速志願を致すと、好い工合に採用されまして、十一歳の時遂に米國へ留學する事となつたのです。其時の留學生は、御承知の津田梅子樣に、瓜生中將の奥樣と、私と、外に二人、都合五人でしたが、其内の二人は病氣のため一年ばかりで歸朝し、後に殘つた私どもは、滿十年遊學して歸朝致ました。(中央新聞)

蒙古旅行奇談

鳥居きみ子女史

私どもが北京を出發しましたのは、恰度一昨年の七月の事で、其れから赤峯街(北京より八百里)へ來て越年しましたが、零度以下二十五度位の事は度々なんです。私どもはこゝで蒙古旅行中の宿賃や其他の食物代等にするために交換物品を求めましたが、其の品物は粟煙草や嗅煙草、白砂糖、白木綿、剛鐵の糸及び針、瑪瑙及び其の他の珠類で、それから蒙古人は日本の貨物を非常に歡迎しますから日本のセム、清心丹、寶丹、日藥等の賣藥類、錦繪、小刀類、石版繪、時計等をも取り寄せて、之等の荷物を牛車五臺に乘せて、苦力五人と支那の役人二人と、都合九人で赤峯街を出發してオーニユートに着きましたが、此路は砂漠の中の町です。家は支那風のものと土で造つたのとで、土屋の方は圓るくなつて居つて其周圍を草で包んであります。オーニユートから黄河迄は二日路ですが、一眸千里の廣い處で、其千里が凡て砂ですから、案内者など惡い奴に出會さうものなら、金を食つたりなんか致します。

◎黄河の氷塊

黄河へ着いたのは三月頃で、やうやく解氷期に入つて居りました。何分道を急いだ爲に此砂漠の中を流れてる河を無理にも渡らうとしたものですから、連れてゐた一人の苦力が突然流れて來た氷塊のために押流されて溺死しました。こんな具合で其處から再びオーニユートに引返し、一週間許の後河を渡りましたが、河の深さは私の股迄位で、河幅は五淸里許もあります。

◎興安嶺

興安嶺には澤山の高山植物がありました。此れから北に進で北ウロムチンには鹽湖があります。湖の緣に鹽が自然と山のやうに積つて居て無論湖水で鹽の製造が出來ます。其財權は凡てウロムチン王のもので、

其響は全蒙古に賣出すのですから、大したものです。一臺五十斤位積んでる車が、一日何百輛と云ふ程づゝ八方に出ます。此れから外蒙古に入るのですが、却々入れて吳れません。巧く話が纏つて、やつと外蒙古の旅行を終へました。

◎蒙古の平原

時しも五月頃でしたので、廣い〳〵平原にげんげ、鬼あざみ、あやめ、櫻草、忘れな草などがさき亂れて其の美しい事つたらありません。それにブユルノール湖の畔には、鵝や雁などが何百羽となく飛んで居て、人が近寄つても逃げません。山羊や羊は決して珍しくありません。湖水には三尺もある鯉を土人が小さい獨木舟に乘つて弓や槍で取つて居ります。こんな國はとても西洋では見られません。

◎途中の困難

それから外蒙古を廻つて昨年八月一度北京へ歸り、再び蒙古を東から西に横斷せんと九月北京を出發しましたが。今度は米とメリケン粉とを二三ヶ月分と金を少し許り持つて參りました。物品交換よりは金を持つてる方が餘程都合がよいのです。前の旅行では沙漠の中でサンザ案内者に苛められましたから、今度は磁石を持つて參りました。案内者が例へば嘘の道しるべをしても却々に騙されませんでした。それから土城子へ行きましたが、支那人が種々惡戯をして仕方がありません。勿論私等保護の官兵は居るんですけれど、之を制止しませんので、鳥居が怒つて叱り附けますと、反抗しましたから。鳥居は益々支那人の一人を擲りました。すると三四人の同勢がドカ〳〵と押寄せて鳥居の遊指を取り、右の中指に負傷させるなど大變な事が持上りました。

◎蒙古人の光風霽月

蒙古では婦人が働いて、男子は淸笛を吹いたり、酒を呑んだりして日夜暢氣に遊び暮して居て、中華の風俗とは殆で反對なのです。兎に角女が凡ての事をやつてるので、日常品や衣類の買入など非常に注意が行き屆いて、丈夫なものを喜びますから、蒙古地方に目を注いで居る日本商人などは、此邊の注意が大切だらうと思ひます。蒙古人だから何でもよいと思つてゴマカシ品でもやらうものなら非常な失敗に終ります。

boiling water and boil one minute. Drain again and cover with cold water.

Take from water and dry between towels. Fry in deep fat until light brown, keeping in motion with a skimmer. Drain on brown paper and sprinkle with salt.

シヤドーボテトー
（カラ揚芋）

馬鈴薯を洗ひ、皮をむき、薄く切り、二度水を替へながら冷水の中に二時間つけ置き、扨て水を切りて沸騰湯の中に入れ、一分間位湯煮で、其の湯をきりて更に冷水の中につけ、軈て水より取り出し、布巾の間に入れて乾かし、後ち多量の油の中に入れて杓子を以て攪き混ぜながら薄色になるまで揚げ、後ち其の油をきりて西洋紙の上に載せ、鹽をふりかけます。

POTATO BIRDS.

To two cups of hot mashed potatoes add one tablespoon butter, golks two eggs slightly beaten, one-half teaspoon salt and a few grains pepper. Shape in form of birds fish or eggs, and insert currants to represent eyes. Fry in deep fat and drain on brown paper.

ポテトボイルド

馬鈴薯を湯煮で、其の熱き間に潰したるもの二合の内へ、バタ大匙一杯と、一寸泡立てたる玉子の黄味二個、茶匙半杯の鹽と、胡椒少し加へて、鳥、魚、玉子等の形に作り目には干葡萄を附け、パン粉の中にころがし、其の上に玉子の黄味をつけ、又パン粉の中にころがし、後ち多量の油の中にて揚げ、其薄色になりたる時厚き包紙の上にて油をきります

（注意）フレンチフライド、ポテトーを深き鉢に巣の形に盛り、其中へ此鳥を入れて出すのは一寸面白い趣向です。

POTATO PAN CAKE.

1 cup mashed potatoes.
3 tablespoons flour.
small pinch salt.

1 teaspoon sugar.
1 egg.
½ cup milk.
1 teaspoon baking powder.

Mix all the ingredients togather and bake like any other pan-cakes, allowing a little more lard or butter.

ポテト、パンケイク
（ジヤガ芋鍋燒菓子）

潰したるジャが芋	一合入の茶碗一杯
メリケン粉	大匙三杯
燒粉	茶匙一杯
鹽	少量
砂糖	茶匙一杯
玉子	一個
牛乳	五勺

前記の材料を皆一緒にして能く混ぜ、普通の鍋燒菓子（パンケーク）の如くに鍋にバタ或はラードを溶して其中へ大匙にてたらしこみ、裏表薄色になるまで燒くのです。此菓子は鹽をかくれば御飯の副食物ともなり、砂糖をかくれば茶菓子にもなります。燒く時に普通の鍋燒菓子よりは少しく多量の油を鍋の内に溶かします。

簡易家政術

櫻井ちか子

馬鈴薯料理法六種

馬鈴薯は西洋料理に用ゆる野菜の内の重なる品で、其の料理法も數十種ありますが、其の内重なる料理法六種を紹介致します。此芋は先づ皮のまゝ能く洗ひ、皮をむき、後ち先のとがりたる小刀にて芽を取り去り、冷水に二時間位之をつけ置きて料理致します。

MASHED POTATOES.

To five riced potatoes add two tablespoons butter, one teaspoon salt, few grains pepper, and one-half cup hot milk; beat with fork until creamy, reheat, and pile lightly in hot dish.

マシユドポテトー

(潰ぶし芋)

五個の湯煮たる馬鈴薯を裏ごしになし、其内へバタ大匙二杯、鹽茶匙一杯と、胡椒少量を加へ、よく攪きまぜ、後ち熱き牛乳五勺位を加へ、更に肉叉或は箸にてドロドロになるまでよく混ぜ、之を溫めて熱き皿に盛ります。

POTATOES OMELET.

Prepare mashed potatoes, turn in hot omelet pan greased with one tablespoon butter, spread evenly, cook slowly until browned underneath, and fold as an omelet.

ポテトーオムレット

一匙のバタをオムレット鍋の内に入れ、よく溶けたる時に潰したる馬鈴薯を入れて平らに廣げ、其の下部が褐色になる迄文火で燒きオムレットの如く二つ折にするのです。

FRENCH FRIED POTATOES.

Wash and pare small potatoes, cut in eighths length wise, and soak one hour in cold water. Take from water, dry between towels, and fry in deep fat. Drain on brown paper and sprinkle with salt.

Care must be taken that fat is not too hot, as potatoes must be cooked as well as browned.

フレンチフライドポテトー

小なる馬鈴薯を洗ひ、皮をむき、縱に八切にして冷水の中に一時間位つけ置き、後ち水より取り出し、布巾の間にて水氣をよく取り、多量の油にて揚げ、之を西洋紙の上に置きて油をきり、それに鹽をふりかけるのです。油を餘り強く煮立てると、馬鈴薯が心まで煮へませんから、注意を要します。

SHADOW POTATOES.

Wash and pare potatoes. Slice thinly into a bowl of cold water. Let stand two hours changing water twice. Drain, plunge in a kettle of

分娩時に於ける産婦の心得

産婆　西尾きやう子

▲分娩時の沙汰は成可く早く

何うも大抵の家では分娩の時に産婆を招ぶのが遲過ぎて困ります。之れは一つには餘り早く招んで無駄足でもさせては氣の毒だといふ心遣をするのと、一つには年寄でもある家になりますと早くから騒ぎ過ぎるのは仰山な事だ、辛抱甲斐がないといふやうな事を申すからでせうが、さあ參つて見るともう生れかゝつて居る、消毒を施すことも出來なければ、湯の仕度も間に合はぬといふ騒ぎ、實際これ程困ることはないので御座います、何うしてお産の事は百人百種ですもの丁度よい時分に産婆に通知するといふ事は到底望むべからざる事といつてよいのです。一度や二度無益足をする位のことは産婆の方で充分承知いたして居るべき筈なのですから、もし變つたことでもありましたらば夜中でも夜明でも遠慮をしないで早い位に招ぶことをしなければなりません。私は弟子などにも無益に招ばれたの、早く招ばれたのといつて不足をいふてはならぬ、遲く招ばれて困ることを思へば早過ぎる位に招ばれて仕度が充分に出來る方が何れ丈け仕合か知れないとくれ〴〵も申きけて居るので御座います。

▲月足らずの産は免れうるもの

一體豫定の産期に達して腹部がだん〴〵痛み出し、子宮が固くふくれるやうになれば、最早産氣づいたものと覺悟して、直に産婆を招かなければなりません。ことにまだ豫定の産期前に産氣を催したといふ場合でもありましたならば猶更早く産婆へ沙汰をすることが肝要で御座います。容體によつては少しも早く醫者に診せなければならないのです。世間には月足らずのお産を止むを得ぬ事の樣に心得て居る人が多い樣ですがこれは手當の仕方によつては立派に免れる事の出來る

ものです。實際早くお醫者に診せたゝめ手當が効を奏して一先づ産氣が落ちつき、早産を免れて當る十月に丈夫な子供を産んだ例は幾何も御座います。たゞ手遲れになりましては、もう及びがつかなくなつて、これでは生れた子が到底育つ事が出來まいと承知しながらも、とり上げなければならない事になるのですから、變事のあつた時には片時も早く産婆を招ぶことが大切な務です。それに注意すべきは、普通の産婆やお醫者の中には、早産を防ぐ見込みが充分ある場合にすら、仕方がないといつて其儘とり上げて了ふ人が無いでもありませんから、此の樣な時には是非專門の産科醫に診せる樣にしなければならない事であります。專門の醫者にかゝるとかゝらないとで、生くべき子が死にましたり、死ぬべき子が生きたりするのですから、これは決して忽にすべき事ではありません。

▲醫者にかゝる事が嫌ひで困る

醫者と申せば世間にはまだ醫者にかゝる事を嫌ふ方が多いので、ほと／＼困つてしまひます。尤も私は醫者好きの産婆と綽名がついて居ります位で、一寸變りが見えても直ぐ醫者に診せて下さいと申す方ですから、特にこの事を感ずるのでも御座いませうが、何うも産婆が折角心配して、何うぞ醫者に診て貰つて下さいと申しても、御當人は至つて平氣で、打捨つてお置きになります。中には産婆の方から幾度もお頼みをして辛つと診て貰つて下すつたはよいが、それで事が無作もなく濟みますと、恁んな事に醫者を招ぶといふのは餘りに仰山ではないか、私なんぞは三日も苦んだがそれでも醫者にはかゝらなかつた、といふ風な事を仰しやるお年寄も御座います。然し水氣が來ても、なあに生み落せば癒ると、いふやうな工合で、打捨つて置いたゝめ、お産が重かつたり、産後に病氣を起したりして、飛んでもない恐しい結果を見る事は少くないのです。俗にも案ずるより産むが易いと申まして、お産の事は實際それほど恐しいものでもなければ、心配なものでもありませんが、もし適當な注意や處置を怠れ

ば、それこそ生命に關はる大厄となるので御座います

▲傍のお世話は要らぬ事

要するにお産の事に就きましては、豫て相當の學識經驗を有する産婆を頼み、萬事その言ふ處にさへ從つて居れば、それで間違ひはないので御座いますが、素人方は動もすると在來の習慣などを持出して、傍から種々と世話を燒きたがるので困ります。例へば腹帶、俗に岩田帶と申しますものを、産婆の方では成る丈け輕く卷くやうにと申しましても、傍からは、いや固い方がよい、ゆるく卷くと子供が馬鹿に大きくなつて困るものだといつて、かたく／＼まかせます。又産婆が姙娠中は牛乳でも飲んで滋養を取らなければならぬと申ても、素人は牛乳などを飲むと子供が强過ぎていけないといふて止めさせます、それから産後の枕なども容體に依つては醫者の指圖に從つて高くしなければならない事もありますが、普通はまづ平に臥んで居る方がよいのです。それを素人は産婦の枕は高い方がよいとか申して、夜具蒲團を積み重ねて高く／＼致します素より之等は何れもよかれと思ふからの注意には違ひありませんが、この傍の親切が却つて害となります場合は決して少くないので御座います。

▲産婆が中流以下の家庭を嫌ふ理由

尤も中流以上になりますと、事がよく解つて御座いますから、素人考の攝生法を行つて産婆の申す事を用ゐないと云ふ樣なお家は餘りありませんけれど、中流以下になりますと、何うも傍でお世話をやきすぎるので、實際困つて了ひます。産婆の或る者が、中流以下の家庭に參ることを好まないと申すのは、此の邊の面倒を厭ふからなので、單に汚いからとか、禮物が少いためとかいふばかりではありますまいと思はれます。兎に角良い家庭になれば何んば産婆でも參るので御座いますから、私は成るべく下々の困る家へ往つてやらうと心懸けて居ります。で、頼まれゝば何な處へでも參りますが、其の代り初めに條件を附けて置くの

（その一）

見よ教育界のパノラマを

帝國教育會長 男爵 辻新次題字
法學博士 文學博士 男爵 加藤弘之序文
やまと新聞記者 太田龍東著

秘密の寫眞 男女

學校評判記

修學選定の良師

⊙價金五拾錢 郵税金八錢 發行所 明治敎育會

著者は東都教育言論界に盛名ある學校研究家のオーソリチーなり、本書は輕妙痛快なる麗筆を以て百に近き學校を、教育の實際、社會の裏面より、縱横自在に評下せる珍本なり、巻を開けば蛇乎、鬼乎、龍乎、將た猛虎か天機漏す可らずと雖も、必ずや快哉を連呼せしむるものあるべし、入學志望の令息令嬢及父兄は、本書に依つて學校善惡の良否を決せよ、在學生及教育家は此著に因つて我校の意外なる世評を伺へ、國民は一讀して教育界の眞相を知れ、蓋し、開國以來未だ嘗て見ざる破天荒の一大快著と云ふべし

東京市京橋區柳町（振替口座三〇八九）

大賣捌所 育英舍

勿驚、大膽なる快著に

◎子を持つ親 病人ある家人は必ず讀め

定價 乳兒用九拾五錢 中人用壹圓貳拾錢 大人用壹圓九拾五錢

特別製品各貳拾錢上り

小包料 拾錢 引換 拾五錢

ね小便袋



衛生最良徳用輕便ね小便袋は洗濯の世話なく手數を省き小便は袋の外へ洩れず蒲團を汚す事なく常に清潔なれば小兒病人老人の最も必要にして、ね、をき、たち、すわり等に毫も差支なきは本品の特長なり（男女の區別あれば御注文の節御注意を乞ふ）

發賣元 大阪市東區内久寶寺町四丁 振替貯金口座大阪二二四〇 旭商會

懷妊避妊自由自在

子なき人は本書を讀みて懷妊の法を知るべく又子が出來て困る人は避妊の法を知るべく實に本書は懷妊避妊を望むが儘に自由ならしむる秘訣書なり郵券代用必一割增

全壹册 拾五錢 送料貳錢

大阪市東區和泉町二丁 泉陽堂

本年四月入學セシムベキ當校私費家事國語體操ノ兩專修科生各凡三十名ヲ募集ス志願者ハ來三月十日マデニ當校到達ノ日取ヲ以テ願書ニ履歴書戸籍謄本ヲ添ヘ差出スベシ尚詳細ハ一月十八日ノ官報又ハ當校ニ就キ承知スベシ

一月 東京女子高等師範學校

女（その三）

純粋椿

登録商標

賣捌所は全國各地化粧品店等にあり偽物あり本舗三宅堂製に御注意あれ



◉升賣は本舗のみに御座候

貴婦人御令孃の内に束髮は黄金色のコイルしたに限ると思召す御方様あれど若し黒く長くくせなく老年になりても白髮とならぬ様御望みの御方は當三宅油をおいて世界中他に御意を滿たすに足るもの無之候先づ一瓶御試用ありて普通世間にて販賣致居候廉價にして有害なる輸入油や椿と稱してませ物ある香油などと御同視する勿れ古より百聞一見に不如千言一行に不値と申候諺も候へば善きも悪しきも御試しあれ

●特大 八十五錢 小包料十二錢
●大 四十五錢 小包料同上
●中 廿五錢 小包料八錢
●小 十五錢 小包料同上
（郵券代用一割增）

東京日本橋區人形町通り蠣殼町二丁目十五番地

發賣本舗 三宅堂

電話浪花六二〇番 ● 振替貯金口座八七五一番

根治確証 **わきが** 新治療薬 ラピヨシン

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脱せよ

丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢送料拾五錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を潔清驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用ひよ

毛のはへる 原名ベグネス 毛髮生長液

めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●其他の所に毛なき人用ひよ毛髮增生す◎頭などにはげのあるのは見苦しき者也

試みられよ●ぬけ毛落毛を止

毛をはやしたき人早く

有力なる最新液にてし

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ

化學製品 防ハンドコロン溶液 **色の白くなる**

盛に皮膚を漂白するを以て全身交際に白色艶美

分の力 士性

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十五錢本劑は貴紳淑女粹士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば皮膚は次第に依り新陳代謝をなし男女交際上最とも必用の品なり

月やくさらい

すぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ適に月經不順より起る子宮血の道を治し全古血を一掃す

流經す本劑は効能極て身體に害なくたやすく下る

價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製貳圓參拾錢小包料拾貳錢

メソルビン此藥は局部を痛ず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆれば確實なるもの毫

専賣 東京神田小川町四十番 オリエンタル藥館 電話下谷二五三五

女（その五）

帝國百科全書（最近發行）

特製 正價各五拾五錢 郵稅拾錢宛

並製 正價各四拾錢 郵稅八錢宛

第百八十六七編 日本語學史 上下

文學士 長連恒君著

國語を繰り得ざるもの、孩兒と不具者とを除くの外は極めて尠きも善く之を繰るものは甚だ稀にして語源、沿革、効用等を研究し、知悉せるものに至ては、更に極めて稀なり、是れ豈に照代の一缺陷に非らずや、長連恒氏の此著ある、蓋し慨するところあればなり、著者は、斯學の研鑽に從事すること日久しく、造詣の深き、當代屈指の士なり、之を以て其說くや精、述ぶるや密、而も剪裁宜しきを得て序次整正たり、先づ緒論に筆を起して、言語、國語に及び、其研究の必要、目的、方法より過去に於ける國語研究の缺點を指摘するの點、意見の高邁なるを見るべく、第二編以下に於ては第一、第二、第三の三期に分ち國語學の研究を爲すところ引證該博、叙述穩健、最も傾聽すべし、眞に是れ國語界の明星、國語の研究に志あるものは一讀を怠るべからざるなり。

第百八十八編 應用生理學

ドクトル オヴェルトン君著
醫學士 酒井谷平君譯

本書は、最新の學理に據り、人身の生理作用を說明し、之に關連して、吾人の日常生活に必須なる事項を說明せるものにして、生理學の實用的方面を研究せんと欲する者の爲めに、讀一讀要する良書なり。加之本書は一般家庭に必要なる衣食住等に關する生理事項に就きて、懇說詳解せるを以て、一般家庭の讀物に供すべく、將又學生の爲めに生理學の應用を講說せんとする小中師範三學校教師の爲め殊に最良の參考書なり。

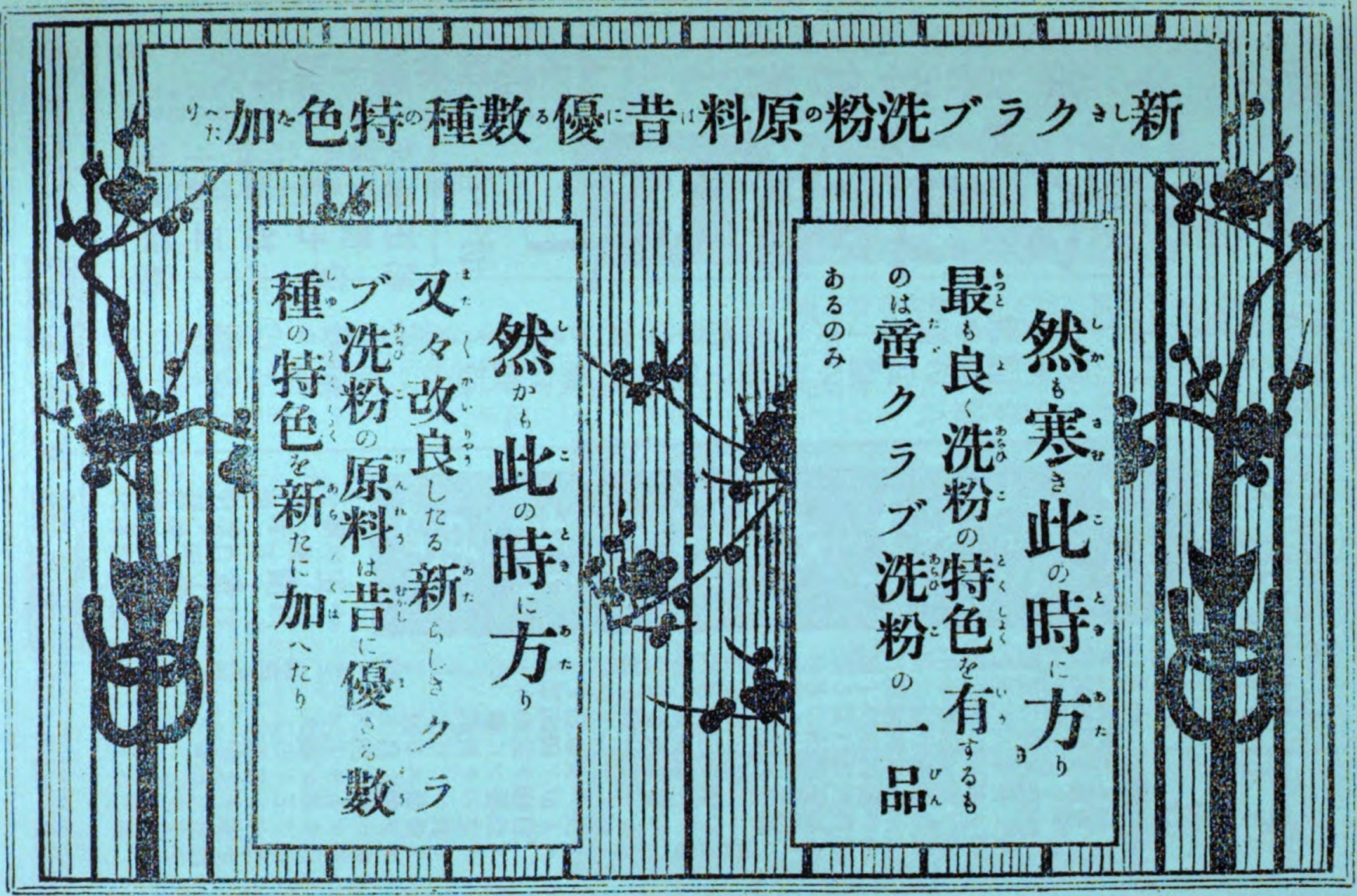
第百八十九編 基督教史

文學士 藤谷深勵君著

將來我が國の精神界を指導せんとする者は基督教の大體に通ぜざる可からず。泰西の倫理思想を悟了せんとする者は基督教の大體に通ぜざる可からず。基督教の大體に通ぜんとする者は先づ基督に關する歷史的事實を觀察して公平無私の眼識を有せざる可からず。基督教を哲學的に解釋せんとする神學者は基督教の精神を害ふ者なり。本書は基督教發生以來二千年間に亘れる基督教殊に教會の歷史的變遷を叙述せる者なり。毫も理論を交へず極めて公平に事實の陳述を試みたるは本書の特色なり。聊か神學的研究の缺陷を補ひ又一般基督教研究者の參考となることもあるべし。

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（其の六）



新しきクラブ洗粉の原料は昔に優る數種の特色を加へたり
然も寒き此の時に方り
最も良く洗粉の特色を有するものは啻クラブ洗粉の一品あるのみ
然かも此の時に方り
又々改良したる新らしきクラブ洗粉の原料は昔に優さる數種の特色を新たに加へたり

で御座います。まづ私はうるさい産婆ですが、それで宜しいかと念を押し、私のいふ事は何でも聞いて貰ひ度いと約束いたし、さて私は無事にお産が出來て、親子丈夫に肥立つのを見れば、それで澤山ですから、別に御禮を頂かなくとも宜しいからといふ事や、お醫者にかゝらなければならぬやうな事があつても、事情によつては、施療にして頂くことも出來るから、もし私が申した時には心配しないで診て頂いて下さいといふやうな事を、くれぐも話して置くので御座います。

▲妾と本妻の比喩

斯ういふ風で私は隨分八ヶ間敷申す方で御座いますが、それでも此方の見廻りますのは月に一二度位のもので、傍は毎日ついて居つて申すのですから、つひ素人考の方が用ゐられるといふ事になり勝で御座います。處が中にはまた産婆さんの仰しやる事はもとよりよいと思ふけれど、年寄や傍の者のいふ處もまんざら捨てられない樣に思はれるから、半分々々に行つて見て居るといふのがあります。實に面白いではありませんか、昔噺に本妻と妾とをもつて居つた人が、本妻からは、あなたのお頭の毛は白い方が多くなつたから一層黑いのを拔いてお了ひなさいといはれ、妾からは白いのがあつては見つともないから、それを拔いてお了ひなさいといはれ、兩方のいふことに從つた處、竟に全然坊主になつたといふ話があります。私はいつもこの譬話をしては、これと同じで、素人の勸めと産婆の指圖と反對な事を何方も行ふならば、つまりは坊主になるやうなものですから、早く何方かに決定なければいけませんと申すので御座います。



如何なる客にても逸らさぬ工夫

藤生貞子

△氣轉の利かぬ人

客のあしらひ方は、昔の婦人の方が、今の若い婦人よりは餘程上手であつたやうです。それは躾け方にも基づいて居るでせうが、お世辭が却々甘くて、氣轉も利いて居りました。一家の主婦の此の客あしらひの善し惡しは實に主人の立身、一家の盛衰に關はりますから、餘程大事で御座いますが、扨て此頃の若い人達を見ると、新しい敎育を受けた丈それ丈話の材料にも富んで居られるやうですが、其の氣轉の利かない、不愛想な事と言つたら、實に興が醒めるやうでございます。

△先方の趣味を知る事

客をあしらふには、第一先方の趣味を知つて、拔目なく、親切に致さなければなりません。これには學問も常識も要りますが、心掛さへあれば誰れにでも相當な事は出來るもので御座います。例へば男子ならば、政事好もあり、文學好もあり、其他商賣ずき、學問ずき、音樂ずき等、色々ありますが、それを彼の人は何好き何趣味の人であるといふ事を篤と合點して、之に應じて話しかけ、又待遇するのです。

△話しの途切れる理由

主人の客なら、自ら男子の人が多いのですが、之を善く待遇するのは主婦たるものゝ一大責任です。其れを爲すには申す迄もなく、客の趣味、客の特色を知ることが肝要で、その趣味、特色は容貌や言語、乃至は動作に依つて、自然に判るもので御座います。若し能

く分らなかつたら之を主人に聞いてもいゝでせう。でその人が、文學者であつたら文學の話、小學教員であつたら初等教育の話、音樂好の人であつたら音樂の話といふ具合に、先方の趣味に合せて話をするのでございます。其れを顧みずして、自分勝手なおきまりの話を繰返して居りましては、兎角厭き易く、途切れ易くて興味を惹かないのみならず、若誤つて商賣好の人に學者向の話でもしようものなら、徒に當座の感興を殺ぎ、却て先方の心地を惡しくすることがございます。

△其の場合を考へる事

客を歡ばせるのは總て此の心掛が根本になるので御座いますが、併し物事は、何時も型に嵌めたやうには行きません。同じ人でも、或時は憂ひ、或時は哀み、或時は忙しく、或時は閑でございますから、能く其の場合を考へて好く取計らはなければなりません。主婦たる者の此の心掛一つで、客を多くも致し、少くも致します。主人は、どうしても仕事が多うございますから、家に來た客丈でも主婦が引受けて、之をあしらはなければなりません。客に取つては、御馳走をどつさり仕て貰ふよりも其の愉快な顔と面白い話を續けて貰つた方が、何れ程嬉しいか知れません。

△主婦の腕の無い結果

主婦たる人にして、客の趣味特色を解せずに、何時でも同じ樣な話、殊に自分の好きな話ばかりを出任せに持ちかけて居るならば、先方は面白くないから、最う再びと來なくなり、僅に、主婦と同趣味の人丈しか來ないといふ寂しい有樣になります。幾ら主人は、腕があり、交際好きな人であつても、主婦の働きの無い爲に、來る人も來ず、三度來る人も一度しか來なくなり、のみならず、主婦の惡口を言つて、主人の出世を妨げるといふことも、世に有勝のことです。英語のエンパンス即ち手持無沙汰と云ふ事は、最も誡むべき事であります。この點に至りますと、西洋婦人は、實に豪い者で御座います。

△歸りし客の品さだめ

世間には客が辭して歸ると、直に其の惡口を始める人があります。例へば、彼の人の言葉は訛つて居るとか、又彼の人の羽織は穢う、あの人の下駄は何う、といふやうに、お客の批評を致します。女中が居れば、女中を相手に、さんぐ\罵られる方がございます。其れ故女中も善い事と思つて、客が歸るや否や、奥樣、今の誰さんは、下着が醜くかつたとか何とか言つて奥樣の御機嫌を伺ふといふやうな惡習がございます。此等も是非愼まねばなりません。

△話材を常に蓄へる事

女同士の客にしても矢張り先方の性質なり、趣味なりを知つて、之に應じた話をしたら宜いのです。誰れはお嫁に往かれたとか、貴女の衣服は好い柄だとか云ふ事で、話が途斷れるやうでは、いけません。常々見聞を廣くし、話の材料に富ませて置いて、いざとなれば、短時間の裡に客の心を滿足させると云ふ事が大切です。どうか日本婦人は、もつと趣味が廣くて、氣轉が利いて欲しいものです。尤も客をあしらふに就て最も大切な事は眞心を以て接するにあると云ふ事を忘れてはなりません。

△手製の菓子と新知識

自分が客に行つても、矢張さうです。一寸菓子が出る。之れはつまらぬ手製のお菓子ですと言はれたならば、おやお上手だこと、何うしてなさいました、材料は何ですか、拵へ方は何うですか、私も習つて見たいものですといふ風にすれば、啻に話の材料を多くするばかりでなく、實際菓子の製法を習つて、他日自分が客の前に出す事が能るのです。此の樣にして、一方に話の材料を豐富にし、他の一方では、新しい知識を得て、知らず識らずの間に、賓客接待法に長ける樣に致したいと思ひます。



ミシン使用の利益

明治母の會々長　菊池峰子

私は豫ねて子供等の衣服を洋服に致したいと思ふて居りましたが、一々それを洋服屋に注文して仕立てさせますのは、却々容易で御座いませんし、かつ日本服の如く手輕に裄丈を伸縮する事も出來ませんので、其れをその都度商賣人の手を煩して居りました日には、不經濟で仕方がありませんから、どうか自分で裁縫の出來る樣にしたいものだと考へて居ります時に、丁度コーツ夫人がミシン裁縫をお敎へ下さるといふ話を聞きまして、使用法を習ひました。

子供等は洋服が着心地が佳て便利なので、非常に喜んで居ります。宅には子供が澤山御座いまして、姉娘に小くなれば、其次へ、其次のは又其次へと讓る樣に致しますから、一着のものを多年用ふることが出來ます。そして毛織物は少々位綴接があつても左程目に立ちませんし、又宅で仕立てますると、共切が殘つて居りますから、補綴などは隨意に致されます。

子供の洋服を自分で仕立てる樣になりましてから、是迄殆んど廢物の樣に思ふて居たものが、意外に調法な物になりました。それは、外でもない古洋服で御座います。洋服は元來其の人々の身體に應じて調製するものですから、他人の身體に合はう筈がないので、宅などで古洋服の處置については、殆んど困つて居りました、書生や出入の者などに遣はしました所で、長し短しで、丁度役に立つと云ふことは稀で御座いました賣り拂ひましても、二束三文、さればと云つて雜巾にもならず、何か良い方法は無いかと考へて居りましたが、洋服を仕立てる樣になつて見ますと、これは日本

服と違つて、大人も小兒も同じ地質を用ゐますから、裏返して小兒服にする事が出來るのです。子供服と違つて素が善い地質ですから、子供には惜しい程の立派なものが出來ます、是迄貰ひ人も無くて放擲かしてあつたものが、天下晴れての御用を務めますので、經濟の上にも誠に好都合で御座います。

特にミシンを扱ふのは、馴れて見ると誠に面白いもので、少し位氣分の惡いのなどは、其れを使つてゐると、直ぐに癒つて了ひます。ミシンを使ひつけて後ち日本風に針を持つて裁縫をするのは、實に迂遠て仕方がありません、其故私は日本服で御座いましても、フランネル類は勿論、單物などまで大概ミシンを用ゐて縫ひますが、一枚位のものは瞬く間に出來上つて仕舞ひます。

ミシンを使用して、非常に便利を感じてゐるのは雑巾で御座います。大概のお家では雑巾は夜女中が刺すものゝ樣になつて居て、又其れをする時は必ず居睡するものゝ樣にきまつてゐるので、二晩も三晩もかゝつて、一枚のものが出來上らない事が御座います。誠に張合ひのない面白くない仕事ですから、居眠するも無理はありません。女中達も雑巾さしは皆嫌がツて居ますから、私は之をミシンで縫ふ事に致しました。ミシンを用ゐれば一時間に十枚や十五枚は作られます。先づざッと三十枚位の仕事が一時間足らずで出來るので御座います。女中等は大喜びです。そして雑巾の代りに木綿ものゝ裁縫でも致させますと、皆居眠もしないで仕事をします。之れは裁縫の方が雑巾よりも興味があるからで御座いませう。ミシン縫ひの雑巾は縫目が細かくて、釘などに引かゝる事が御座いませんから他の手縫ひのものより餘程持がよい樣で御座います。

母の會にて感じたる事柄

娘の躾け方

岩崎あさ子

或る西洋婦人が日本に參つて、女學校に、家政學とか割烹とか云ふものゝあるのを見て、學校で態々敎へずとも自然に識る事の出來るものゝために、何故貴重の時間を費すだらうと、言つたと云ふ談を聞きましたが、日本の女學生の第一に批難を受ける事は、此の家事とか料理とかの智識の乏しい事で御座いませう。私は先きには窃にその西洋人の評を笑つて居りましたが、此頃になつては、全く反對の考を持つ樣になりました。

私がコーツ先生のお宅へ伺ふ每に、何時もお子樣方の温順で、よくお働きなさるのに感心いたします。十歳位の腕白盛りの男のお子が赤坊のお守りをして被居ることもあれば、十四五の男のお子が牛乳の加減を見て被居ることもあります。女のお子なぞは、着物を着換へさせたり、髮を梳いたり、抱いたり負ふたりして、殆で小な母樣の樣です。土曜日に參りますと、お子樣方は各々箒や雜巾を持つて拭掃除をなさつて被居います。私共日本人の子供ですと、十一二歳位のものは何の役にもたちません。却て邪魔になりますので、大掃除の時なぞには成るべく外へ遊びに行く樣に申します。ところが此方のお子樣方は、男のお子まで、上手に敷物をたゝいたり、寢臺を直したりなさいます。或る西洋婦人の考へもつともかと思はれるのです。そして、初めは補助どころか、却つて邪魔になりますが、之れも働くと云ふ習慣を養ふため、かつは讀書や數學を敎ふると同じく一の課業を授くるのだと思ひますから、忍耐して奬勵いたします。するとだん／＼上手になつて、後には立派に働らく樣になりますと夫人が申されました。衣服道具の整理、室内の裝飾等も、皆夫人が監督なさつてお子樣におさせなさるのださうです。赤坊の世話をさせるのも、他日父となり母となつた時に、困らないためだと云つて居られました。

また日曜日には、四人のお子樣を二人づゝにして隔週每に、夕飯を拵へさせなさるのださうです。當番のお子さんは野菜を煮たり、肉を燒いたりして、家族の夕飯を準備なさいます。それ故コークは休んで出ないでも少しも差支へがないと夫人が申されました。十歳から十四歳までのお子樣が料理をなさるのですから、其を監督なさる方は大變でせう又時々は碌な御馳走も出來ませうし、併し御飯も炊く事の御存知のないお孃さんが、學校で、急仕立に割烹を覺えて、お嫁入りなさつたとは違つて、他日どんなにこそお爲めにならうと思ひます。

私は一般の家庭に於ても斯樣な方法を用ゐて、學校の餘暇には子供に絶えず家事の手助をいたさせたならば、學者娘は嫁に貰ふなどゝ云ふ世の譏を確に避れる事が出來ようかと思ひます。

實地料理會

本多[illegible]子

私が樂しく思つて居るものは、實地料理會で御座います。毎月の例會や、料理會の時に屡々お目に懸る方々が、八九人或は拾人位集つて、お葱の皮を剥いたり、卵子を泡立てたり、肉を敲いたりいたしますと、生家歸りか、同窓會へでも行つた様な氣持が致します。扨て先生のお指圖や補助に依つて料理の方が大概出來ますと、食堂の整理、食卓の準備等に取りかゝります。これが濟むと、襷や前垂を取つて、今度は立派な御來客の積りで應接間に控へて居るので　。やがて鈴を相圖に食堂が開かれて、一同は設けの席へ案内せられます。其日は献立に依つて大宴會の時もあれば、小集會の時もあります。其他夫婦同伴の積りの時もあれば、一個人として或は友人として招待せらるゝ事もあるのです。これが却々面白う御座います。席に就くと、かれて調理した種種な食物が出て參ります。これが自分達の手を勞したものだと思ふと、一層氣を留めて味ひます。此間に西洋の作法、交際法、其他育兒衞生等の、面白い訣を伺ひますので、又興味を添へます。

私はまだ五六回しか出席しませぬが、其度に五六種の料理を教へて頂きますので、毎日其れを一種づゝ拵へても一月位は別のものが出來ますから、お總菜に苦むことも無くなつて參りました。

英語會　町野駒子

今日學生が最も頭を惱ますものは、語學だと申しますから、どうか子供等には早くから其の知識を授けて、自然に此の弊から救ひたいと願つて居りました處が、恰度母の會に於て英語會が設立せられ、幼稚園的に子供の腦力を使はないで、遊戯や唱歌、日常の對話の内に、英語をお教へになると伺ひましたから、早速二人の子供をお願ひすることにいたしました。

まだ十歳前後の子供ですから、如何かと心配してなりましたが、子供等は皆樂しみにして參ります。一つは遊び道具などの備はつて居るためでも御座いませうが、又教授のお上手なのと、御熱心なのに依るので御座いませう。

私も時々伺ひまして、御教授の模様を拜見いたしますが、御忍耐の強いには感心致します。そして教へる方は發音が非常に正しくて、かつ日本語も上手ですから、習ふ者も仕合せです。

料理趣味　岡本濟子

私は料理會へ出る様になつてから、料理と云ふものゝ面白さを感ずる様になりました。さうして比較的に經濟でお美味いものを家の中にいたゞかせる事が出來る様になりました。例へば是迄鶏などを買ふには、其日に用へるのを鳥屋から取る様にして居りましたが、會で鳥の丸焼などを拵へられるのを見ると、一羽づゝ求めた方が大變利益の様ですから、宅でも一羽づゝ鳥屋で拵へさせて持參させる事に改しました。初めは其を丸焼にするとか、蒸煮にするとかして、終ひには骨と皮をスープになさるのですが、宅の者はあまりスープを好みませんから、薩摩汁に入れて戴きます。もし其れでも肉の殘があれば、また煮附けて辨當に入れるとか、總菜の附け合せにするとかいふ風に致します。然うすれば毎日鶏肉を用ゐても飽きが來ません。それ故是迄は金を費して其の割合ひに美味いものを食べる事が出來ませんでしたが、此頃は金錢をかけないで却て美味いものをいたゞきます。

白館を去らんとする大統領の夫人

在華盛頓　山村長芳

米國前大統領ルーズヴェルト夫人は、其良人が世界に於て一代の敬慕を享くるだけの大成功を爲せしと同一成功を遂げて今や將さにこの光榮を擔ひつゝ白館を辭せんとす。夫人は前後七年間白館に在りて、內にありては良人を扶け、外に於ては能く交際し、而かもよく其健康を持續せり。實に夫人は白館の女主人公なりき。是れ全く其氣象の勇々しきに因る、されど夫人は其勇氣を表面に現はすほどに淺薄なる人にあらざりし。其外見は尋常一樣の婦人にして、纎細なる女性の特質を備て遺憾なし。

夫人は常に大統領の妻として其義務を果さんには第一に健康ならではかなはずとおもへり。抑も大統領の妻たるべきものは非常なる苦心と、最も多忙なる事務に鞅掌して、其身體に毫も疲勞を覺えず、衰弱を來さざる丈けの健康を保持せざるべからず。而かも夫人が此間に處して能く成功せるは、只僅に二三の簡單なる家憲を自から造りて之を實行したるにあるのみ。

▲新鮮なる空氣▼

夫人が家憲の一として尙ぶ所は、出來得る限り多くの時間を戶外に費して新鮮なる空氣を呼吸するにあり。されど夫人の身は極めて家事に多忙なり。夫人の地位は或る意味に於ては非常に煩はしき一の勞働者なり。況んや良人たる大統領は其閣僚、議員を始め全米國各種の階級にある人々を招きて邸內に食事を共にするの用務あり。故に大統領邸には每日三組以上十二組までの來客ありて、その都度夫人は必らず席に列するを以て、殆んど其家憲なる外出を爲し得ざるなり。而かも是等の來客を歸へし、且つ家事の手際あるや、決して其身の疲勞を意とせず、又如何に極暑極寒の際なればとて一向頓着なく、直ちに外出して新鮮なる空氣

を呼吸し、必ずその家憲を實行するを常とせり。之を平均するに、夫人の外出時間は、一日約三四時間に亘りき。

每年初夏には夫人は良人家族と共に華盛頓の邸に在り。夫人は此時に際し其朝餐を白館のポーチたる南向きの玄關先きに於て爲すを例とし、オイスター灣（大統領の別邸地）に在りては一日中を構内の芝生或はポーチ、若しくは樹間、水邊等必ず屋外に居るを常とし、來客あればポーチに於て接待す。但しその饗應は只々茶を供するのみ。

夫人が理想とする簡易生活の實行は、多くパアーヂニアの別邸に暮らす時にあり。まづ其家屋を見るに中産以下寧ろ小民等の住むべき程の木造の小屋なり。（家と名づけ難きほど）。壯麗なるべき食堂も圖書室も此中にある事なれば、臺所や洗面所と同じ樣な構造なり。

夫人は常にいふ「出來るだけ多くの時間を新鮮なる空氣中に暮らせ」と。

◀簡易生活中の夫人の運動▶

夫人が斯る簡易生活中にありて、運動を怠らぬ事を亦た家憲の一とせり。夫人が運動に就て好むものは、散步、乘馬、幷びに馭者の務を執る事の三なり。夫人の散步は極めて實用的なり。過去四年間その令孃の通學と共に學校まで行き、而して令孃の學校に入るを見るや夫人は大急ぎで白館に歸り來る。未だ甞て一日も此實用的散步を怠りたるとなし。又乘馬は概ね大統領と共にし、白館を出で約二時間位乘り廻すを常とせりき。其乘馬用の服を見るに誠に氣の毒に感ずる程粗末なるものなりき。而して夫人の嗜好色は黑なり。其コートも黑き經濟的の丈夫なる物を採り、冬帽子は黑色の小形ダルビー型、夏帽子は同じく黑の麥藁帽子を戴き、黑きヴエイルを顏に掩ひ、全身黑ならざるはなし。其乘り法は當時流行の男子の如く跨がずに、矢張り女性らしく横乘法に據れり。斯くて雨の日も、雪の日も、決して躊躇せず、乘馬して外出を試む。蓋し粗

服を纏ふ所以の一は斯る雨雪の日を思へばなり。夫人時に或は鞍擦等にて傷所を生ずるや、却て手を以て傷部を摩擦して之れを癒し、將來皮膚を强からしむるの鍛錬を爲す。夫人は常に言ふ『大氣に當つて鍛えたる體軀には風邪なる病魔は襲ふ能はず』と。

▲食物の献立と卓上の器物▼

人若し大統領の邸に入つて其按排されたる食物の献立と、その器物の如何を觀なば、何人も只其の粗末なるに驚かざるを得ざるべし。夫人は常にいへり『粗食は却て健康を增進す』と。斯くの如くにして大統領を初め令孃令息は夫人の意を解して嘗て美食を求めたる事なかりし。

白館の執事は隨時其食料品の買入れに就いて一々夫人の命を待たざるべからざりき。是れ家事に關して驕奢を戒め、經費の嵩むを慮ればなり。而して料理は夫人手づからこれを爲すの外、平素よく夫人の氣心を呑み込める料理番に依つてなされたり。但し大なる宴會を開く場合に在つては、其料理も亦難かしければとて、專門の料理人に任すなりき。而して平生は夫人の命ずるまゝに大統領も馬丁も使丁も同一の材料を以て作られたる食事をなし、菓子果物の如きに至るまで一品も違ふたることなし。而して其食器を見るに一としてこれはと思ふ立派なるもの、若しくは高價なるもののあることなし。人若し夫人にすゝめて立派なる器物を調へしめんとする時、夫人は一言にして斥けていふ『ソレが何の滋養に益あるやもしソレが身體の强壯に補益あらば、直ちに買求めん』と。

▲夫人の服装▼

勿論夫人は虛榮的の舞踏會や、又必要もなき華美の宴會等には出席したる事なし。又大統領夫人として其餘所行着物は定めて美麗を極むるならんと想像するならん。されど是れもまた大違ひなり。夫人の衣服は大抵皆流行遲れたらざるはなかりき。そのスタイルが總べて時流より遙に遲れ居るのみならず、其柄合切地等

も悉く廢り物なりしには、人皆驚き合へり。或人は夫人の正裝せる姿を看て曰く『片田舍から出て來たお婆さんのやうだ』と。蓋し夫人の眼中には虚榮的舞踏會や宴會は無きなり。夫人は此の如き粗末なる正裝を以て社交界に充分足れりと信じつゝありしなり。

扨又夫人の慰みは流石に女性だけに觀劇が大好物なりし。されどこれには決して自分獨り行くが如き事をなさず、第一に友人を誘ひ、二人以上の同伴者を得、更に令孃令息に相談の上且つ其の時の劇題に就ての人人の同意を得たる後ならでは決して行かざるなり。

▲婦人記者との會見時間▼

毎日午後のお茶受け時間を以て夫人は各新聞雜誌の女記者に會見を許すと規定せらる。されど其の談話にして若し公務に亘る事あらば一言半句も口外せず、必らず話題を他に轉せしむ。されば如何に敏腕の記者も未だ嘗て夫人より公務に關する事を聞き得たる者なし。而して平均一日に十二三人の記者と會見す。談は概ね家庭に關する敎訓のみ。尚ほ婦人の社界上に必要なる事柄起らば、記者の訪問を待たず、書記に命じて意見を草さしめ。これを各社に報導せしむるを常とせり。此親切なる注意に對しては各記者のいづれも滿足し感謝して止まざる所なり。

以上の如く夫人は簡易生活を以て唯一の家憲とし、此家憲を實行せば家族一同の壯健疑ひなしと信じたり。故に大統領を始め家族の何人も壯健なるを驚くばかりなり。或人夫人に向ひ『どうして貴方の御家族はアンナに御健康でせう』との問ひに對し『ナアーに、確固たる精神と常識とに依りて簡易生活を實行すればよいのです』と笑ひつゝ答へし由。



非家庭生活の風潮

（女權尊重の反動）

在米　田中收吉

△男子に於て見る獨身の傾向

ヨーロッパ邊では生活の困難な爲に家庭を作ることが出來ずに、獨身で終る者が非常に多いと云ふ事だが、合衆國では、結婚して日々の生計を立て行く位のことは極て樂なので、さういふ悲慘なことは先づ無いと言つて可い位であるが、別に生計上の問題があるでなくして無妻で居る人が非常に多い。その人々の中には、學問とか技術とかいふものゝ研究の爲めに、態と煩累を避けて居るのもあらうし、又た失戀などの爲めに無妻で居るのもあらう、それから又た不身持の爲めに貴婦人社會に信用を失つて、結婚が出來ないと云ふやうなのもあるだらうが、さういふ特殊の事情があるでなく、唯だ『これの方が氣樂だから』といふので、全く家庭を作らずに、ホテルや、高等な下宿屋に住つて居るものがある。これは殊に富豪といはるゝ階級に多いので、近年この風潮が益ゝ盛んになる傾向があるといふことである。

紐育邊なれば、まづアスターホテルの樣な第一流のホテルに、年中泊り込んで居て、召使の一人も使つて、着物の世話でもさせ、其處から毎日自分の事務所へ通つて居る。斯かる生活をしてゐる者には、大金を懸けて競馬をやる樣な者が多くある。そして女俳優などを落籍せ、贅澤な妾宅に暮らさせて置き、競馬場から歸つて來ると、一緒に晩餐を了つてオペラにでも出掛けるといふ風である。その女俳優にしても一人を永くさうして置くといふのでなく、屢ゝ取換へるのだといふ事である。

△此の傾向の源因

一般に此の傾向が滿ちてゐるのである。家庭を最も重んずる此國に於て、どうして斯ういふ風潮があるのであらうか。固より之れは當人の品性如何にも由ること

ではあるが、或は餘まりに女權を尊重した反動ではあるまいかと思はれる。

此國に於て、どうして斯く迄女子の權利を尊重したかと云ふに、これは全く歷史の結果で、國柄が斯くせしめたものと思はれる。いふまでもなく此國は殖民地の發達したものであるから、その開け始めは「女のない國」であつた。されば移住民は家庭の快樂を享くることが出來ないので、どうしても永住的の考にならなかつた。そこでロンドン會社は、これを救ふ爲めに、特に渡航費の補助を爲し、尙試に九十人許の女子を本國から送つて見た。（一千六百十九年）。すると移住民は指折り數へて船の到着するのを待つて居たが、遙にその船影を見るや忽ち波止塲に群集して船を迎へ、爭つて烟草と交換して女を連れて行つたといふことである。此の多數移住民の女子に對する欠乏は、容易に充たすことが出來なかつた。のみならず新開の殖民地のことであるから、折角渡來した女子を慰藉する途が乏しくて、稍もすると懷鄕病を起して、本國に歸へりたがると云ふ樣なことであつたから、有ゆる手段を以て、女子の渡來策、引止策を講じたものである。だから今日法律の規定にしても、州に依つて多少の異同はあるが、離婚とか遺產相續とかいふ點に就ては極めて女子の利益を保護して居るのである。

△許婚に對する牽制運動

斯樣にして殖民政策は確かに成功したが、この爲めに今の所謂合衆國流の女子が出來て、結婚を一種の營業視する樣な者さへあるやうになつて居る。「三度位亭主を持替へて、お了ひに夫の遺產で氣隨氣儘に暮すのが、合衆國の女子の理想だ」とは誰れでも言ふ事である。實際婚約中などにも、晩餐の席にわざと年頃の男を別に招いて、牽制運動見た樣なことをするのを能く見受けるが、之れは殆んど普通に行はれて居ることだといふことである。

そこで、富豪などといふ連中は、別に持參金附きの妻君を貰ひたいといふやうな欲望は無論なし、それに祖先崇拜の念のない此國の人のことだから、子孫などいふ考はなし、女に威張られて面倒臭い思ひをして家庭を作るのが、如何にも馬鹿々々しいといふやうな氣になつて、ホテル生活などやるやうになつて居るので、要するにかういふ不健全な狀態は、殖民地時代に過度に飲用した興奮劑の爲めに、一種の餘病を起して居るものと見て可からうと私は思ふのである。

洗濯の最良法

◎白色木綿類――澤山に垢の付いた物は先づ之を釜に入れて煮るべし。釜は銅又は瀬戸引の大なる鐵にて作りたる物たるべし、普通の銑鐵製の釜にて煮る時は汚れたる色が染付いて落ち難くなるなり。扨て釜の湯が殆ど沸騰し始めて泡が立ち上つたる時に、之を手桶の中に注ぎ入れ、汚れ物を一つ〳〵に取上げて、洗濯板の上に延べて石鹼を擦りつけ、手で揉みて石鹼を布片の中に充分に染み込ますべし。次に之をそつと捲いて再び手桶の中に入れ手桶に一杯になりたる時に他の厚き布片を以て蓋をなし（急に冷えざるやうに）一夜其儘になし置くなり。かくて翌朝再び之を釜に入れて充分に温めて後取出して石鹼を付けつゝ垢の充分に落つる迄洗ふなり但し地の薄き物は靜に揉むべし其より之を搾りて脇に置き更に清水を釜に入れ更へて温め、少量の石鹼を加へ攪き拌はし泡立つたる水となし、先きに搾りて脇に置きたる洗濯物を入れ（此時は一度に澤山入れるべからず）二十分間位煮るべし。其より再び之を取出して冷水に浸し一二時間冷やし置き、最後に普通の水を數度取替へて濯ぎ、搾り上げて干すなり。此際注意すべきは先に之を煮たる時の湯は棄てずに色物を洗ふに用ふべし、色物を洗ふには二十分間煮る事を省略すべし。

又た油、インキ、其他汚點の着きたる洗濯物は先づ最初は其汚點を脱き取り、之を前述の如くして洗ふべし。

次に布は地質を損ずる恐あれば餘り強く揉むべからず、又硬き刷毛は用ゐるべからず。

猶又洗濯物は殆んど乾きたる時（餘り乾き過ぎたる時は霧を吹くべし）之を鏝にて熨すべし。

◎絹物洗濯法――絹物を洗濯するに付心得べき事は強く擦らぬ事、手で強く搾らぬ事、洗ひ刷毛も極めて柔かなるもの丶外は用ゐぬ事等なり。

◎色をけさぬ秘法――木綿にまれ、絹にまれ總て色物の色を落さぬやうに洗ふには、馬鈴薯水を用ゆべし。其法は馬鈴薯の澱粉を三十匁餘り二合の水に溶き攪拌しつゝ文火で焦げ付かぬやうに煮て、どろ〳〵したる糊をつくるなり。かくて此糊を四升の溫水に稀薄めたるものにて石鹼を用ゐて總ての色物を洗へば其物は却て以前よりも鮮明になるものなり。鹿の子色、黄色及諸種の綠色等殊に此法が適するなり。

下女の見たる御主人公

吉子

降つて居た雪は晴れての朝の靜かさ兵隊さんが喇叭をふいて通り過ぎた。

中座敷の大きな時計が八時を鳴つて、大旦那は黒紋附の羽織袴で市會へお出かけ、奥樣は玄關へお見送り若旦那はまだ朝の御飯を召し上つてまご〳〵して被在る。何時も會社の方は人樣より遲いと御自分でお仰つて居ながら此頃は朝起きも遲く、御機嫌もお惡い。

若旦那の奥樣が御心配も一通りではない、でも奥樣にはもうお子供が七人もおありなさる、お子樣方のお世話計りでも一々廻り切れない位。それも朝の中は一番混雜するので、今年二歳になる乳呑子樣を御自分で背負つて、人手を借りずに、私等と一緒になつて起働いて被在る、それは〳〵貞節な奥樣よ。私、こんな方に使はれると、隨分身の敎訓になるので、なんだか行末が賴母しいやうな感じがする。

よく親優りの竹の子と言ひますが、學校へ被行る四人のお子樣達は、何誰も學問がお好で、いつの學期も優等。お兩親はどんなにかお嬉しい事でせう。他人の私までも何となくうれしい。

姉や〳〵あたしも優等よ、あたしもよと、平素御面倒を見て上げる丈けに、眞の母にも優る位に私をお呼びなすつて、一々お賞品をお見せ下さる笑顏のお可愛さ。

今日は日曜なので、掃いた計りの奇麗なお座敷へ、いたづらざかりのお子樣達五六人流石に騷々しい、おまけにお隣りの金ちやんお向ひの市ちやんが混つて、大旦那樣も奥樣も被在らないのを見て、奥座敷で大の字遊びをやつて居る、若しや大旦那がお歸り遊ばしたら、きつとお目玉を頂戴されやうと多忙しい午飯の仕度をしつゝ、奥座敷へ行つて見るとまア大變です。生命の取りつこの樣な遊び方矢張根が武家育ち。まあ十二歳におなりのお坊樣は箪笥の抽出から、旦那樣御秘藏の助廣を拔いで、他の子供衆にも一本づゝ拔かせて

座敷中を振廻して戰事をして被居る。

私は呆氣にとられて、暫しは文句も出ませんでした、すると刀の齒と齒が打ッ付かつて、ピカ〱青火が發るので御座いますその中勝手の方では頻りに私を呼んで居らつしやるから、坊様もうお爺様がお歸り遊ばしますから、早く〱お逃げ遊ばせと言ふ。隣りの小座敷に居られた十五歳の坊様は棚探しをして得たと見えて、ビスケットを口にしながら、お爺様と聞いてあはて〻お逃げなすつたのは可笑しかッたが、後の子供衆はそこへ拔身の儘を置去りにして逃げて行ッて了ッた。私は手早く恐は〱で簞笥の中へしまつて置いて勝手へ參つてお膳を拵らへて居る果して大旦那様のお歸り、入り換りに若旦那様はやうやう午餐を召し上ッて、會社へお出掛けになるところ、今日は會社の當番とかで、午後の御出勤。



若奥様がお手料理になつた大旦那様のお膳も出來たから、それをお居間へ運んで行くのですが、何だか、氣づまりなので、お芳どんに代ッて頂かうと思つたら合憎今朝から、大根洗ひをして居る相で餘儀なく私が運んで行くと、思つた程でもない、別に恐い事もないが、唯何となく貴い様な氣がする。

何時もなら大奧様が御自分でお膳を運んでお給仕を

して上げられるのですが、今日は親戚に不幸がおありとかでお不在でした。

給仕はいゝからとおつしやるので下つてゐると又お手が鳴る伺つて見ると、お燗をもう一本をつけて呉れつて被仰る。何時もなら錦手の小徳利一本でお止しなのに、今日に限ッて酔ひが足らないらしい。お顔も大分赤う色付いて被居る、でも命令ですからもう、一本お燗付て持つて行く明日は日曜と言ふので外へ下宿して被居る若旦那様のお兄弟が四人遊びに被來した。

お坊様達は、お叔父様々々と六疊の座敷は話聲やら笑ひ聲で、一入騒がしい。

とん／＼と又お呼びなさる。今度は御飯を呉れと妙な手付きで被仰る。私は直ぐたつで給仕をして上げて御飯が終むとお膳を下して、今度はお兄上様方にお茶を入れて上げて、食ひ掛をした御飯を急いで食べる。

眞實に奉公人は嫌なもの。御飯を食べる暇さへ碌にないのですもの、しかしこれが私のこの世に持て生れた運命だとあきらめてゐます。とはいへ私等の身に較べて、立派なお家の令嬢方のお身上を思ふては、眞實に涙の溢れる程羨ましい。

四時頃大奥様が一寸お歸遊して夕飯の仕度を命令。若奥様はまだ婦人會からお歸りがない中に、お寢ねしてゐらしたお子様は夢を破つて、泣き出した。私はお可哀想とは思ッたけれど、まづ聞かぬ風をして青物屋へ走つて人參と、芹を買ッて歸つて來た。

外戸を歩るくと、またフハリ／＼灰色の空から綿の様な雪が降ッて來るので吹く風は殊に寒い。

それから宅へ歸ッて夕飯の仕度、芳どんの大根洗ひもすんで一休し、私に手傳ッて呉れる。

薄暗い洗場が出し抜けにパッと明るくなると、後ろに電燈が點いて居るので、こんなにおそいのかと思ふと仕事をする手が意外にはか取る。

若奥様が、婦人會からお歸り遊ばすと、大奥様は、今夜は先方の家で夜詰めをしなければならないから、歸れぬと被仰つて。

十時頃若旦那様は大分酔ふてお歸りなすつた。

私の寢るのは何時も十二時で、朝は寒くても暑くても四時か五時。

冬の海濱生活

芙蓉

十七日、荒ら寒い風にはら〳〵落葉した庭を掃いて居る所へ、七歳になる坊様が被來つて、僕も手傳つて上げようと、箒木振り廻し乍ら被仰る、ごみでもお眼へ這入ると、いけませんからおやめ遊ばせとお留め申しても、耳にも入れず、颯々と掃いて被居る、何時の間にか、ポチ迄來て切角掃き集めた落葉の中を駈廻つて散らかして仕舞ふ。

初冬の柔い日影を、あびた座敷の方で、高い笑聲がしたから振り向くと、ふき清められた障子の硝子越しに旦那樣のお顔が見える、坊様も夫れと氣付いて、やつお父樣だつと被仰り乍ら駈けて行つてお仕舞ひなさる、旦那樣は七人もお在りの、お子樣の内お孃樣は只一人、其のお孃樣が病氣上りで、母上樣や弟樣と一緒に、此地にお出なので、旦那樣は横濱の本宅から、毎週土曜日か日曜にお越しに成つて、お孃樣をお慰めなさる。

お孃樣や坊樣のやうに、兩親揃ふてお在りの方は、眞實に幸福だと思ふ、あゝ私のお父さんは何故おなくなりなされたらう、お父さんさへ被居つて下されたなら、此樣境遇には成るまいと思ふと、急に情無くなる、木場で角信と云へば、隨分巾を利かした老舗であつたけれ共、兄さんは放蕩の揚句、おかれ持つた儘行衛不明、平常からお弱い小い兄樣は、春をも待たずお果てなさるし、店は左前に成る、それや是やを苦にして、お父樣も床にお就きなさる、店の方は益々面白く無い事ばかり續く、お母樣や私が夜の目も合はさず看病した甲斐も無く秋の末次兄樣の跡おふて黄泉へ行つてお仕舞ひなされた、彼の當時を思ふと身がふるへて、お父樣のお顔が髣髴と浮ぶ、悲しさの餘り天を恨んだ事もあつた、神樣は私をお試驗なさる心で、斯うした辛い悲い思をおさせなされたのかも分らない、さうして私の曇つた心を、みがいて下さるお考へに相違ない、艱難汝を玉にす、とか云ふ事を聞いたことを思ふと始めお恨み申したことが恥かしい。

旦那樣は是非參會しなければ成らぬ會があるとて、二時過ぎにお歸濱、お孃樣や坊樣が、電車迄送つて被行るので、私もお供する、末の保樣が、僕もお父樣と一緒に往くのだと被仰つて、可愛い眼をしばたゝいておむづかりなさる、皆々で賺し宥めて私が負つてうちへお連れ申す。

菊をいけるからと、お孃樣が被仰るから、私は裏の花畑へ行つて、切つて來て差上る、枝がどうの、花が如何のと叱言云つて、花や葉をむしり取つたり、びし〳〵折つて、捨てゝお仕舞ひなさる、菊こそ可愛さうに、お孃樣の氣みぢかには驚いてしまふ。

ちやうど座敷の掃除が濟んだ頃、皆樣風呂からお上りになつたから、手を清めて、お給仕をする、臺所の後仕末して、お清さんと一緒に、お湯に這入る、毎晩の事だからずつと洗つて先へ上る。

雨がはら〳〵庇を打つ、波の音が能く聞えて、可厭に淋しい晩だ、風

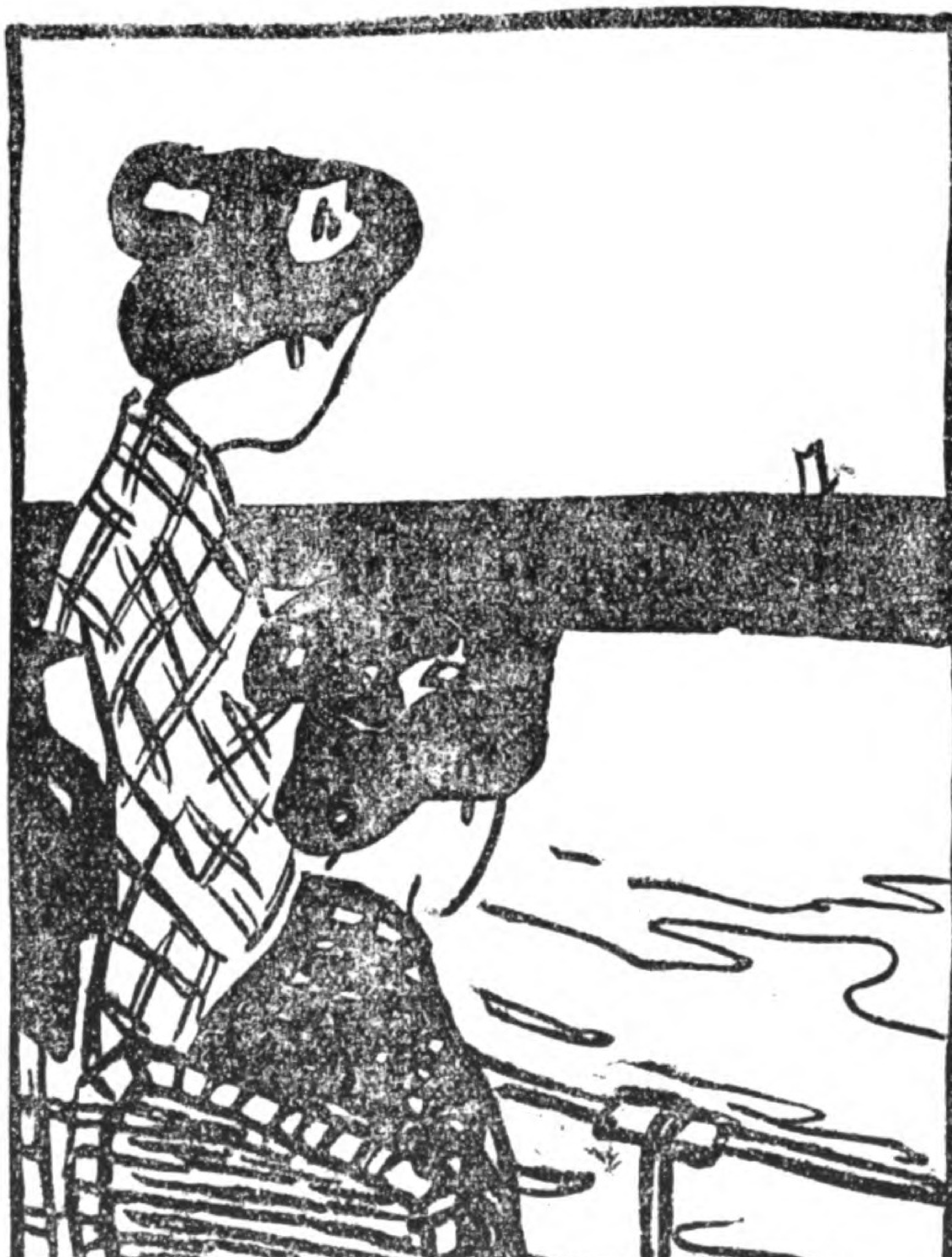
下の灯を消して、横に成ると、一人でに瞼がくつ付いて仕舞ふ。
廿日、縁側の戸を開け乍ら、沖の方を見ると、今朝は帆影も霞で見えない、近い江の島迄、面紗紙にぼうつとして居る。
奥からお目敏い坊様の聲が聞え出す、朝御飯一撥きした後、暖かさうな所で洗ひ物する、ポチが赤糸や青糸でかゞつた手まりを、何所からか咬へて來てじやれて居る、洗物を竿に掛けて居る所へ、お耳さんお孃様のお召だよとお守りのお里さんが呼ぶ、急いで座敷へ行く、最うお髪が奇麗に出來て居た、お孃様のやうに襟足の長く奇麗な方は、此の丸髷が大層佳く似合ふと思ふ、御用を伺ふと、御湯を取つてお吳れとおつしやるから、今日は何所へお出になるのだらうと思ひ乍ら、湯殿へ行つて、金盥に湯を取つて上る、夫れから御念入のお化粧の手傳ひして、荒い御召の縞に、菊を縫取つた羽二重の丸帶、お納戸がかつた色の羽織を、背後からふうわりお着せ申す、奥様の仕度も出來てお兩方お揃ひで鎌倉の親戚へ、お出懸けになる。
寂れて居た、座蒲團を日向に干して、ぬぎ捨てのお召をたゝむ、坊様方は里やがお付き申して、好村様へ遊びに被行つてお留守、廣い家の中が寂寞として居る、ポチ迄寂しがつて、縁先へ鼻を乘せて、クウクウいつて居る、今來た繪葉書をお孃様のお部屋へ持つて行く、机の上の小さい花瓶に挿してある山茶花が、佳い色に咲いて居る、側に有つた「女學世界」を口繪から一枚々々開けて、内所で拜見する、坊様が奥様を探す聲がしたから急いで茶の間へ行く、時計を見ると、十二時廻つて居る。
午後お里さんの代りに、坊様連れて濱へ遊びに行く、上の坊様は私等の云ふなど一向お聞入れなさらず、下駄や足袋をぬらしてお仕舞ひになる、末の坊様は貝を拾つたり、砂を掘つたり餘念なく、遊んで被居る、私は暖かい砂の上に坐つて、緑靑の様な海の面を見つめて居る、伊豆の大島が、水の上に浮出した様に、明瞭と見える、昨夜の西風は何所へ吹き去つたのやら、姿も見せない。
亡なつた次兄さんに、面白いお噺聞き乍ら眠つて仕舞つた事や、私の大切にして居た人形を、弟にこはされて、泣いて默らなかつた事や、淺草公園へ行つて、玉乘りを見せて頂いたりした、子供の時の事が、走馬燈のやうに胸に浮ぶ、恍惚として追想にふけつて居た。
吉や歸らうよと被仰つた聲に、はつと追憶の夢からさめる、坊様連れて家へ戻ると、お兩方共お歸りになる、おみやげの坂下の力餅を、お茶受に頂く、お母様は此の力餅が好物で、毎年夏長谷へ行くと、屹度召上つたつけ、お母様も四五年お口になさらないから、私一人で頂いて仕舞ふのは、何と無く濟ないやうな氣がする。
晩にはお孃様のヴアイオリンを伺ひ乍ら、縫懸けの羽織を縫ふ、私等は聞耳を持たないから、矢張り琴や三味線の方が面白いと思ふ、奥様紅茶を、とのお聲に立つて、熱いのを差上る、裏で妙な音がするから出て見ると、ポチが垣根の外から、爪でばりばりやつて居る、開けてやると、悦んで尾を振つて飛び付く。

見上ぐれば、空一面ダイヤモンドを振り撒いたかと、思はれるばかり、星がきら〳〵光つて居る、優しい笛の音が、幽かに風に送られて來る。

廿三日、此の頃迄奇麗だつた庭の木も、あらかた落葉して淋しく成つてしまつた。

手速く朝の用事を濟して、堀先生の許へ、お嬢様の藥取りに行く先生笑ひ乍ら、何すぐ癒ると被仰る、今朝の樣子では、たいしてお病くも無いやうだつた、藥持つて座敷へ行くと、先刻奥様のお上げなされた、桃割がお氣に召さないで、お嬢様は癇癪を起して被居る、私の顔を御覧になるが早いか、頁や元結切つてお呉れとはさみをお出しなさる奥様に氣を紛れて、もじ〳〵して居ると、何なぐづぐづして居るのと最う眼の色から髪迄變つて居る、奥様は、友さんの好い様におしなさい、さあ早くこはしておやりと言ひ捨てゝ、彼所へ被行つて仕舞ふ、私は恐る恐る、梳いて上る、やけに廂を出して丸髷にお結ひなさる、お嬢様には桃割れよりも、矢張り廂の方が、善くお似合ひなさると思ふ。

顔や姿が、お嬢様位に佳かつたなら、甚麽に嬉しい事だらう、美しい人を見ると、實に羨ましい、羨しいより妬ましく思ふ事が時々ある。



午後、横須賀の本多様がお見えになる。この方は此の春御親戚の海軍大尉へ嫁らした方で。お嬢様とは同窓の友、今迄口もきかず八ッ當りして、御機嫌の悪かつたお嬢様が急に別人

の樣に、冴え冴えした聲で笑ひさゞめいて被居る、私もよくお母樣に叱られて、怒つて居る時、お敏ちやんでも遊びに來樣ものなら、きまりの惡い程機嫌の佳くなつた事を思出して何となく可笑くなる。

お二人は學校の事や、お友達の事、小說や西洋の詩の事など、取り取りに、さも愉快さうに、談笑して被居る、後で本多樣の琴に、お孃樣のヴアイオリンで合奏なされた、すき透る樣な本多樣のお聲に、聞き惚れて仕舞ふ。

晚は奧の廣間へ、かるたが運ばれて、私等もお相手をする、幾度か組を組直して戰つたけれ共、本多樣やお孃樣に、拔かれてばかり居る、お里さんの敏捷いのに驚いた、最後に本多樣とお孃樣と一騎打になる、三度して二度迄お孃樣の勝、部屋へ下つてからお母樣の手紙を見る、晝の內に屆いたけれども、讀むひまが無かつたから——、さあ甚麼事が書いてあるだらう、兄樣の居所が分つたお報知ではないか、夫れ共、誰ぞ病いのか知ら、小さい胸は波立つて、封切る手もふるへ勝、手速く擴げて、讀み下すと、お母樣や弟や妹も、壯健で居るから心配をしない樣につて、まあよかつた、日增しに寒く成るから、ひゞの切れない樣に注意せよ、風邪引かぬ樣、身體を大切にして、忠實に勤める樣になど細々認めてある。

あゝお母樣は、是程迄に思ふて下さるのか、何時も變らぬ親の慈愛に胸ふさがつて、瞼にあふるゝ熱い淚はら〳〵、眞箇ならお側で朝夕の御用を爲なければ濟まないのだけれ共、それも出來ず、斯うして他家へ出なければならないから實に辛い。

兄樣の事は、何共書いてなかつた、私が未だ家に居た頃、彼の事は何とも言ふてお呉れでない、最う全然諦めて居ると始終被仰つてお出なされたが、お心の內では、矢張り案じてお出だつたに相違ない、お母樣も隨分不幸な方であつた、私のやうに氣の弱い者なら、とうに病氣にかゝつて仕舞つたかも知れない。

兄樣は何所の空に、如何して被居るやら、生死の程も解らない、人の噂では、遠い米國へ渡つて被居とか、何所にお出か、音信位して下されてもよさゝうな物だと思ふ、御先祖まつりが、立派に出來る樣に、もう一度もとの店に致度いと、始終心に思つて居るけれ共肝腎の兄樣があの通りだし、弟達は未だ相談相手にはならず、親戚はあつても賴みに成らないから、私一人の細腕では、如何にも致樣が無い、矢張り今の境遇に滿足して居なければ、成らない運命なのか知らと思ふと、心弱くも淚が止めどなく出て來る。



新聞記者の妻の一日

白薔薇女





十五日

朝八時半、やつと夫を送り出してしまつて、ホツト火鉢へ手をかざした。怎麼つもりで嫁いだのではなかつた、まあ何といふ世話のやける夫だらう、出勤する一時間も前から大騷ぎして……いくら男だつて自分で自分の身の周圍の世話ぐらゐ出來なくつて什麼するんだらう、今朝も彼してネクタイが自分で結ばらぬとて、子供見たいにむづかつて大騷ぎするんだもの、彼で「峡中第一流の記者だ、今に中央文壇へ出て一活動やるんだ」などゝお酒の後では屹度被仰んだから、ほんとうに呆れてしまふ、でも妾も悪かつたのだ、少し許り文學に趣味を持つて居たばかりに、紙上で度々發表する文藝論や小説や新體詩などが妙に氣に入つてしまつて、怎麼事にならぬ前から心私に崇拜して居つたんだから仕方がない、先方では妾二三度「女學世界」や「女子文壇」へ投書した作品が入選した頃からして、多少今の夫に名を知られて居つたし△△新聞で募集した短篇小説へ妾のが當選して今の夫が評をして下さつたりした事が緣故となつて、今斯うして同棲する事になつたのだ。

近頃何となく冷やかになつた樣な氣がしてならぬ、否妾の僻み心だ新體詩や小説で彼程の熱情を御謳ひなさる方だもの、何とて情がないなどの事があらう、妾が暖かな眞心を捧げたならば屹度彼の詩人肌の熱情を注いで下さるだらう。文士は狂熱である代りに時とすると氷よりも冷やかな事もあるらしい、否愚痴はいふまい何事も妻たる妾の心掛によるんだから、それにしても御舅さんや御姑さんは何時も御優しくして下さるんだもの誠に有がたいと思つてゐる、「久枝、辛棒してくれ彼は彼いふ性だからな、お前が然うして忠實にしてくれるので俺は甚麼に嬉しいか知れぬ」と被仰る度に沁々妾も嬉れしくなつて知らず〱つひ涙が溢れるんだもの、でも新聞記者の妻なんて隨分辛い事がある樣だ、此間も近所の人の惡口が一寸投書欄へ掲載た時にも、本人は眞赤になつて夫の所へ談判に來る、固より責任のない投書欄の記事だもの夫も好可減に應待して歸してしまつたが、歸る時に「闇の晩もあるぞ」つて恐ろしい顔して出て行つたが、心配でならぬので夫に樣子を訊くと「何彼等が敵し得る者か」つて氣にも止めて居らぬらしいが、若しや夫の身に危害でも加へられるやうな事があつてはと、近頃心配でならぬ。

片附が濟んでからお園を連れて買物に出た妾の仕度をするやうにと

御町の貫島呉服店へ色々誂へた、若し豫算を超過したら實家のお母樣に御願するんだ、番頭共が妙にチヤホヤするのも所謂こはもてゞあるまいかと思へば堪らなく嫌になる。

歸りに銀座の高木さんの奥さんと、途此頃轉任して來た梅田といふ銀行員の奥さんとに行き違ふた、行き過ぎてから「熊谷樣の奥樣なのよ、△△新聞の主筆なんですよ」「あら新聞記者？まあ何か惡口書かれやせんでせうか」つて私語いてるんだもの、何が其麼に恐い事があるものか、あゝ新聞記者つて斯うも敬遠されるものかと、つくづく情けなく思はれた。

あゝ妾も去年の事に結婚してから、既う殆んど一年、どうやら此頃身體の具合も變だし、若し姙娠ならばお舅さんやお姑さんは甚麼にお喜びなさるだらう、でも何だか耻かしいやうな氣もするし又愈々お産といふ時の苦痛も心配になる、あゝ是で女として妻としての天分も遂げられるのか、然し女は苦しい辛いものだと沁々思ふ。

よく夫が口癖のやうに「偉大なる人は先づ苦悶せざるべからず」つて被仰るが、妾もどうやら煩悶に陷つたらしい、煩悶といへば大袈裟だが、ほんとうに彼の事は心配になる、如何に夫が正義の爲とはいへ妾が幼少い時から教はつた彼の先生を彼麼に攻撃するんだもの、あんまり酷ど過ぎると思ふ。

「情實に拘泥するやうな意久地無しぢやない」と被仰つたが、それや成程新聞記者が私情に驅られるやうぢやならぬにしても些と酷ど過ぎた、最う彼の先生にやお目に掛かれやせぬ。

しかし此頃のやうにあゝ忙しくちや仕方がない、家に居ても一日中ろくに口も聞かぬ事もある、朝出て行つて遲く歸へつて來る御飯は？と言へばすんだとそつけなく被仰つて直ぐに書齋で書き始めるんだもの、昨夜あたりも二時迄もお寢みなさらぬ、彼ではお身體の爲によくないし、何だかあまり情愛がなさ過ぎるやうな氣もする。甚麼に苦勞な事があつても辛い事があつても、夫さへやさしく可愛がつてくだされば、それこそ甚麼にでも辛棒するんだけれど。オヤ郵便が來た、生徒といふものはまあ可愛いものだ、妾が學校を退職てから既う一年にもなるけれど、未だ忘れずに慇麼に手紙をよこすんだもの、おゝさうさう今度街へ出たら、久しぶりに學校へ寄つて先生方ともお話して行かう。生徒も甚麼にか喜ぶだらう、否先生方も妾が新聞記者の妻になんかなつた者だから、以前の樣にお心置きなくお話なさるまいだらう、考へて見ると、情けなくつてならぬ、慇麼事思つて居ると、靴音がして巡査が來た、いつもの戸口調査でもないやうだ。

未だ御歸宅になりませんかといふ。

はあと答へて火鉢を出すと、白い手袋を脫して、鬚を捻りながら手をかざす。心配でならぬからして何か御用ですかと訊く。

昨日の新聞に取消が出た事に就いてゞすれといふ、つゞいて、什麼も署長の言ふのには其裏面に其何か……あるやうぢやから調べて見よと言ふのですがれと妾は聊か腹が立つた、事實の相違で社が取消をするの

に不思議はないではないか、△△新聞の記事とさへ云へば、直ぐ夫で書くかのやうに思つて居るが、そりや主筆と云へば責任はあるに違ひないが、他にも澤山記者が居つてやる仕事なんだもの、さう一々愚圖々々した事も言はれやしない、とは夫が常々被仰る所だが實際さうだ、間もなく巡査は歸つたが心配でならぬ、よもやとは思ふけれど……

十六日

明日は加藤家の園遊會に招かれたからお前も同伴に行かないかと何時にない事を被仰る。行つても見たいやうな氣もするし、厭なやうな氣もするし、行くとすれば、彼の着物では既う流行遲れだから耻しいわ。昨日誂へたのをもつと早く誂へればよかつたのに、行かないことにしよう、女が交際場裡の花と謳はれて喜ぶやうな者へは間違つて居る、家事の整理も出來ないやうで交際も何もあつたものぢやない。

又昨日の巡査が來た、胸がギクリとする、巡査は笑ひながら昨日の件はもう解りました、決して御心配ないやうに、もとより公明なんですから、何卒御主人によろしく……、と、マアやつと安心した、それ見た事かと云ひたくなる、後が恐ろしいものだから這麼事いふて來るのだ。

あゝ之で一安心した。

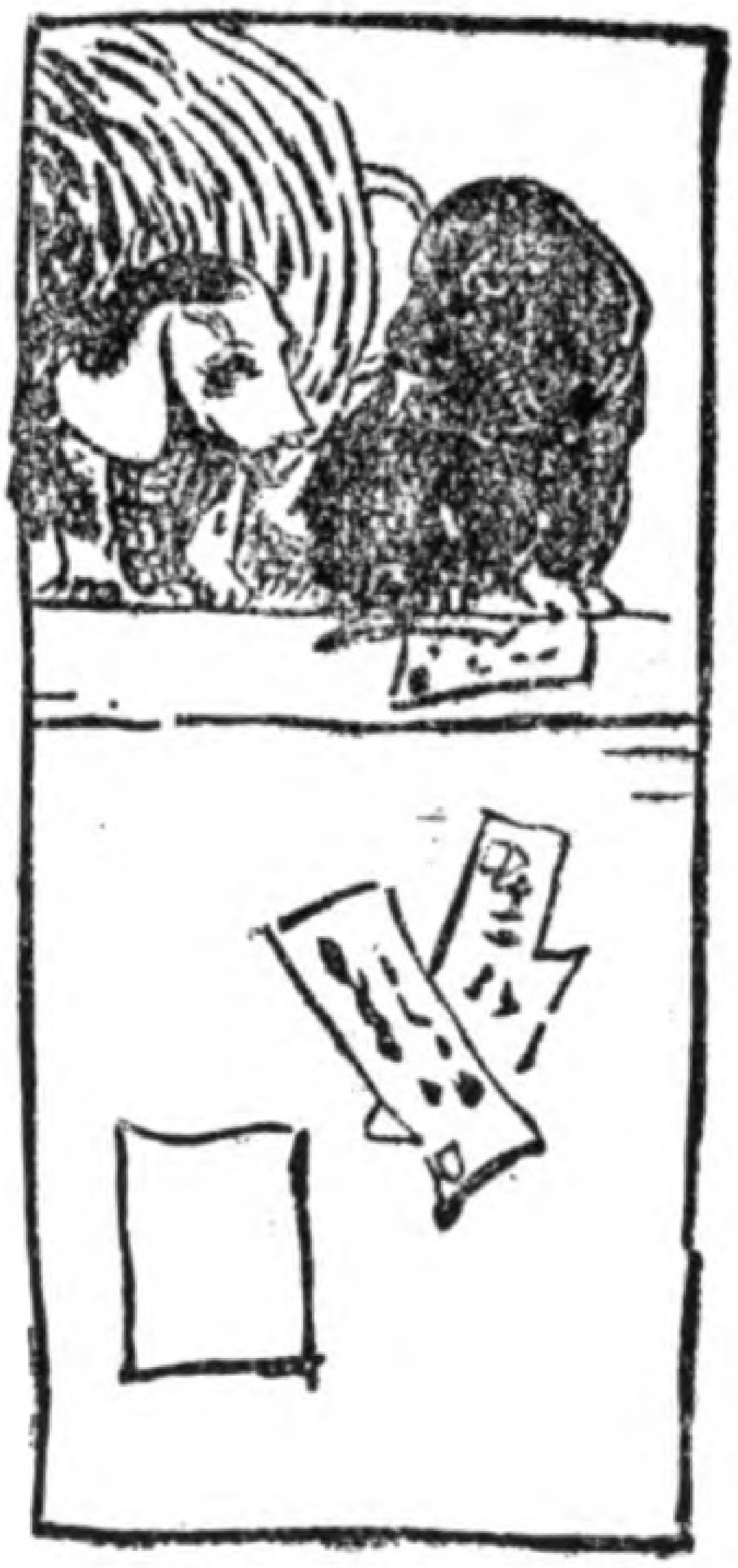
それでも此頃は夫も彼の記事に就ては、どうやら心配してゐるやうだ、同業者でありながら他の新聞では夫が書いた彼の事件に就いて、反對の態度を執つてゐるんだもの、實際どちらにもそれ〴〵理屈はあるんだから仕方がない。始めから多少の批難は免れまいと夫も被仰つたが、是程議論が沸騰しようとは思はなかつた。けれども書いた記事に就いて少しも反響がないよりかもいくらかよいとおもつた。

あゝ既う今年も僅になつた、年の内に一度實家の方へ行つて來なくちやならないし、秀子さん所へも行きたいし、ほんとに忙しくて仕樣がない、秀子さん所の赤さんも既う餘程大きくお成りだらう、でも彼の秀子さんは幸福だ。妾等と共に女學校を出ると、直ぐ彼の大尉の許へお輿入り、軍人は活潑で嘸ぞ面白いだらう。夫見たいにむつつりやはありやしない。記者なんて這麼に人に惡く云はれようとは思はなんだ、社會の耳目とか指導者とか、多大の敬意を表してよい筈の新聞記者が、社會からは蛇蝎視されて居るんだもの、詩人の心情は美くしいものだ、やさしいものだと思つて居たのに、嫁て見れば彼麼變人で少しも愛情がないんだもの、いや妾がわるいのだ是からは力めて夫の心を和げるやうにしよう。

正月には又何か長篇の小說をお書きなさるやうだが、昨夕一寸初めを見た所では、何だか妾の心のうちを見すかされたやうな氣がして耻かしくもあるし、忌々しいやうでもある。でも自分の妻をモデルにして小說にするなんて、あんまり酷いやうな氣もする。………

老孃日記

あふひ



三日。けさはどうしたのか朝寢して了つた、十時打つと英子と省一が來たので、二人きりかと尋ねると、午後から母さんが來る、叔母さんにお土産だと言つて、青柳の栗饅頭を持つて來た、九ッと七ッの子供に此樣に重い包を持たせて、おまけに電車で來たと言ふ、姉樣も隨分思ひ切つた事をなさると可愛想で堪らない。大きい伯母さんにお逢ひかと訊けば、いゝえ叔母さんの處へ一番先きに來たと、二人が口を揃へて言ふ、やつぱり親身の者は違ふと感心して了つた、それぢや義理が惡いから二人を連れて嫂さんのお居間へ行くと、此處には誰も居ない、茶の間で聲がする、默つて聞いて居ると、嫂さんと姪夫婦とが大森へ梅見に行く相談らしい、構やしない入つて直に、『富田の姉樣が午後から來ますつて』と嫂さんの顏を見ながら二人の子供におじぎさせた、よくまあ來たねと嫂さんは愛想よく笑つて、『折角のお出だから、私は止めやう、お前達だけで行つてお出でなと生憎だと云ふ風が見える、『それぢや母さんに留守して貰らつて、貴女も行きませんか』と武田(姪婿)が私に勸める、一緒に行けと云ふなら始めから相談してもいゝものを、何時も私は除け者だからつまらない『左樣ですか』と言つて行つたらば先ではどれ程迷惑するかしれないから、此處は外交的に斷わらなけりやならない、『寒いからね、梅見より家に居て溫かにして、まあ旨いものでも食べた方が結構なの』と言ふと『御隱居樣だね』と嫂さんは笑ふ。私だつて行き度には定まつて居る。姪夫婦は遂先月香港から來たばかりで、また直ぐ引返さねばならぬ體だ、思ひ立つた

折に行かなけりやあ時が無くなつて了ふと、嫂さんと三人で晝飯も早々出掛けた。

嫂さんは子供が二人あつたとは言へ、廿三の年から若後家を通して、かなり喧しかつた母樣にも、よくしてくれると悦ばれた位、溫順しい確固した人で、世間では評判の善い人であるがどうしてまあ娘にばかり、彼樣に甘いのかと、傍で見てジリ〳〵する事もある、今日も、お化粧するのにも、やれクリームとか粉おしろいとか、幾度も〳〵なすりつけて、一時間も掛つて漸くバラ色の頰が出來上る、丸髷にリボン櫛さす、おまけに派



手なお召のコートを着た處なぞ、私に言はせたなら奥樣といふよりは、女優と言つた方が適當だ、鏡と首つ引の娘の時代とは違ふ、老けた亭主を持つた今の身なら、少しは考へてもよからう、また武田も氣の知れない人だ、惡くすると娘の樣に見える若い女房を持つて、言ふ儘にさせて自慢顏して居る、私でさへさうなから、蔭ぢや人が何と言つて居るか分りやあしない、美しい許が能ぢやないよと光子に言つてやらうかと思ふけれど、何と云つても自分は獨身者、直に妬むと思はれるのも辛いから默つて居る、其でなく

も、賣れ殘りだの、厄介者だのと光子なぞも老嬢なぞと惡く云ふさうな、私も好きで斯うして居る譯ぢや無い、若い時は體が弱くつて、緣談があつても始から取合はなかつた、さんざ案じて下さつた母さんが亡くなられて、世の聲を聞いた今、體は昔と違つて丈夫に成つたし、いざさうなると緣は遠くなつて、偶にあれば繼子の二三人もある處、位置がよければ夫は不身持で妾があるとかいふ、といつて何時までも厄介者は厭だ、光子と違つて同じ姉弟でも茂は、親切に同情してくれる、相談人があゝいふ風だから幸福とは云ふものゝ、まだ十九の學生だ、まだ彼の子も嫁を貰ふ時に成れば、私はやつぱり邪魔者にされる、思へば情け無くなつて了ふ。

富田の姉樣がいらしつた、艶々した丸髷が美しい下町風の處がある、「嫂さんはお留守？」と何時でも優しい、「今日は武田の夫婦と梅見に行つたのですよ」と何だか味方が急に出來た樣で嬉く成つた、姉樣は折角來たのに出掛るとはあんまりだといふ樣な顏が、ありありと見えた、夕飯には鴨を料理させて、姉樣と子供達と食事した、これで亡母樣さへゐらしつたなら、昔の樣で樂しからう、久振でゆつくりしたと喜んで御歸りに成つた。

十時過ぎて、大森から三人歸つて來た、少し雪がチラチラして來たせいか、寒さが强く成つたといつて、車から降ると、サア火だとか、お風呂だとか大騷だ、光子は河豚の提灯を見せて「叔母さんにお土産よ」と言ふ、馬鹿らしいいつまでも子供の樣な女だ、けれど御亭主はそれが頗る御自慢なのだから仕方が無い、私は部屋に入つて寢て了つた。

四日。ゆふべの内にすつかり雪が積つた、きのふ日向のよい處へ出してやつた紅梅が、鉢も埋まつて了つた、咲き掛つた花が見えない位になつて居る、遂忘れて居たが可哀想に枯れて了ひはしないかしら、玄關から門までの間を、威勢のよい車夫の辰吉が道をつけて居る。

晝過ぎ武田は電話が掛つたといつて、急に外出した。

『叔母さん、久振りで琴を逡つて頂戴』と光子が言ふ、松竹梅と千鳥を合せた、一生懸命で彈いたからと少し赤く成つた頰を兩手でおさへて居る、私がまだお下げを結つてやつた子供の時分は、此美しい血色と人懷かし相な眼付を、どの位可愛いと思つたらう、その光子が片付いてから、妙に素氣なくなるし、私も前ほどに情は無くなつて了つた。

夜に入つて辰吉が空車を引いて歸つて來た、旦那樣は木挽町の花屋だと言つてゐた、とても今夜は歸るまい。十一時近く成つたので、松に被布の縫ひ方を敎へて居たけれど、何だか氣が濟まないので、嫂さんの居室へ行くと、嫂さんも光子も浮かぬ顏して居る、嫂さんは少し位道樂しても、腕のある男の方がいゝと、いつでも武田をお賛に成る、光子も自分の亭主程えらい人は無い樣に思つて居る、けれどやつぱりこうなれば心配なのだらう、『お寢みに成りませんか』と訊いてみた、『今寢ようと思つてね』と讀み掛けの新聞を下に置いて、『光、お前も今の內寢んだらよからう、歸つて來たら起して上げるから』と何處迄も甘い、『私まだいゝの』と剛情を張つて居る、夜が明けても歸つて來はせぬと思つたが、私はお構ひなしに寢て了つた。

五日。目が覺めると、緣側の戶を松がソロ〳〵明けて居る、『武田さんは歸つたかい』と尋ねてみた『いゝえ、お歸の御樣子はありません』と氣の毒だと言ふ樣な顏して居る、いくら働きのある男かしらないが妻に夜明させて待たせて、自分ばかり面白い思をして何が樂しからう、馬鹿々々しい事だ、私はたとへ夫婦共稼ぎでも、あんな厭な苦勞はしたくないと思ふ。

並木さんから手紙が來た、愈々結婚を申込む事に定めたと書いてある、もと家に書生して居て、今こそ中學の敎員に成つたが、嫂さんの眼から見たら、全くの貧乏書生だ、嫂さんの意趣とは大違ひだけれど、姑もなし小姑も無し品行も正い、極々堅氣な代りに、家も無ければ財產などあらう筈もない、私は小さな借家に居て、臺所しても氣樂の方がよいと考へて居る、此話を申込だらば、嫂さんや光子が何と言ふだらう、年の

若い貧乏者の處へ嫁ぐかと笑ふかもしれないが、並木さんの方へは譯を話して置いて、富田の姉樣に話を定めて貰はうか、何だか笑はれるのも悔しい。

十時、武田は歸つて來た、聞けば昨夜は横濱に用事があつて、どうしても歸られなかつたといふ、嫂さんも光子もそれを信じてか、どうか、揃ひも揃ふて上機嫌だ、よくもまあ、ゆふべの沈んだ顏が、彼樣に出來たものと驚いて了つた。

化粧の進步

紐育の時事新報には昨年の婦人界と題して婦人社交界の傾向を論じたる中に化粧進步に就て左の如くいへり。

有體に申すと日本の婦人方（米人を指す）是迄化粧法が如何にも拙でした、其有樣を細かく觀察しますると、丁度十年ばかり前の若き人の化粧は濃厚に過ぎて娟々たる清艶の趣を失ひ、三十以上の年輩になると是れは又たあまりに粗雜になつて風情を缺く程でありましたが、漸々社交が頻繁になつて婦人も外出時になるに連れ、自然身粧を飾る樣になり、年老つた婦人も著しく化粧が丁寧になり、皆な整へることに注意するやうになつて來ましたが、併し未だ餘り上手な化粧法とは申せず、從つて園遊會の折など葉越しの淡い光線を受ければ、幾分か美しくも見えましたが、直射する光線を浴びて立つ時には、皮膚に塗ふ白粉が斑になつて可惜輪廓の整つた顏も美しい目鼻立ちも、其美を殺がるゝの憾みあり、況して血色華かなる西洋人と並び立ちては、殘念ながら花の美の彼に奪はるゝことを感ぜざるを得ませんでしたが、昨年頃から皆さまのお顏が大變に奇麗になりました、是れは確かに化粧法の進步した證據で、彼の美顏術を始め學理を應用して精製した西洋の化粧品等が與つて力あることゝ思ひます、何はさて措き婦人の容姿のうるはしく見ゆると云ふことは、外國人との交際頻繁なる社交面に立つ人の爲めに大變に結構なことゝ思ひます、左れはと申して又た注意しないといろ〳〵の弊害が生じませう、其中差當つて申したいのは、元と化粧の本義は清淨にして自然の美を保つと云ふにあるのですから、他人の見て居る前などで白粉を附けたり紅を附けたりすべき筈のものではありますまい、然るに多くの人の集會する場合に室の片隅若しくは木陰などで懷中鏡を出して窃と顏を直ほして居る夫人令孃のあるのを屢々見受けますが、自分では人を避けて居るつもりでも他人の目には好く映ります、所謂頭隱して何にとやら隨分見つともなく嫌味にも感ぜられ、折角花のやうな姿にも床しい香が添はなくなつては、何の風情もなくなりませう、化粧が上手になつたのは誠に結構ですが、同時にこんな弊の生ぜぬ樣にしたいと思ひます。

妻女賣買の奇習

臺灣人は支那固有の風習として金を以て妻を買ひ求めるなり、上流社會は申すに及ばず、下等社會に至るまで、苟くも妻を娶らんとする者は、皆價を以て聘するなり、其額は其社會に依り、身分によりて等差あれど、少きも、數十圓、乃至數百圓、多きは數千圓などあり、これを聘金と稱して花嫁の家に贈るを例とす、中等社會以下に於ては嫁を人の妻に賣りて其聘金を得て、老後の安樂をなすものあり、されど、彼等はこの身代金を儲くる事を以て決して己れの利得とはなさず、必竟生れて以來の養育費の一部を新郎が償ふものとして、金を出されば娘は與れぬものと定まれるなり、殊に下等社會にありては、なるべく娘を美しく仕立て高く賣らんと考へ、貧乏の割合に美しき衣服を飾り、化粧を凝らさしむるなり。

臺灣人の觀念には妻てふものは終世の苦樂を共にするといふよりは、寧ろこの女は何百圓出した財物なりと思ふ者多きやう見ゆ、尤も實際は相應に妻は妻らしき義務をも負はせ責任をも持たせ居れど、此女は何百圓買したりといふ觀念は失せざるなり、娘の親も亦それと同じく、娘を人の妻として恥かしからぬ樣躾けをして置かねばならぬとは考へず、人の妻に賣る爲に少しでも價の高く賣れるやう奇麗に作つて置くといふ風あり、されば如何に下流社會の娘にても容貌さへ美しく、風姿高尚に出來居る時は割合に高く賣れるなり。

さて是れ等の賣買とて別段市場の定まり居る譯にはあらず、大方は娘の親が主となりて其親戚、朋友の助言を用ゐるなどして自から妻の價を定むるなり、故に其娘を妻に迎へんとすれば、まづ其金を用意せざるべからず、否らざれば如何に當人同士の情交成り立つとも、其親が決して承知せざるなり、されば甚だしきに至りては、例へば三百圓の聘金なれば其の中額百五十圓を前以て渡し置きて約束を定め、其後の中額は中年乃至一ヶ年の後に夫婦共稼ぎにて送り、全部皆濟の曉に及びて、始めて結婚の式を擧ぐるものもあり。

中流社會以上の家にありては、妻を娶るに新郎の親が其聘金を出す故新郎自身には何の苦勞もなけれど、貧賤なるものは自から働らきて何十圓、又は何百圓かの金を作らざる間は、如何に老年になりても、妻を迎ふる事が出來ず、故に若き者は概して仕事に勤勉し、而して其所得は一文も無駄費ひせずしてこれを蓄へ置き、斯くして五年なり七年なりの後其間辛苦して貯へたる汗の塊を一擲して美しき妻と代へるなり、故に若し、若き中に放蕩などして貯蓄の出來ざる者は何年經ても獨身の寂しき生活を送らざるべからず。

さて又買はるゝ女の身に取りては隨分憐れむべきものも少からず、始めの評判にては一人前の男振りにて相應の財產もあり、生涯安樂に暮らし得ると思ひの外、定めの聘金を受取りて來て見れば存外貧乏にて、一家をわびしく暮すもあり、或は又最初より花婿の身柄も分り居るも聘金が立派に揃へて出したる爲め否々ながら嫁に行くもありといふ。

患者並びに病家の心得て置くべき一般智識

東京看護婦會長　大關和子

▲氣六ケしき病人の看護

醫師の命によつて看病婦を雇ふた時は、凡て病人の事は看病婦に一任して責任を負はせねばなりません。看病婦も醫師と同じく身命を献げて其の職に從事して居るのですから、安心して任せるが宜しう御座いますよく心迷ひがして看病婦を取り替へる人がありますが之は最も不得策で御座います、素より不熟練の者や看病婦としての責務を全ふせぬ者は、交代させるのは止を得ませんが、世の多くの氣六ケ敷病人は、看病婦が責任を全ふしようがせまいが、そんな事には頓着なく交代させる事があります。これは實に困ります。派出の際、會よりは、白衣を着して門を出る以上は自身に非ずして會の代表者なり一言一行注意して職責を全ふすべし、如何なる重病に附き添ふも、いかに氣六ケ敷病人に附き添ふも、天命と思ひ、自身の斃るゝまでは忍耐して務むべしと能く言ひ含めてあるので、献身的に職に從事し正實につとめて居る者を、取にも足らぬ事の爲に返されては同僚には面目なく、氣の弱き看病婦等は歸會する事の出來ぬ事があるのみならず、第一病氣の爲になりませぬ。

▲看病婦に對する病家のお叱言

五六年前の事で御座いますが、或る貴顯の御宅へ赤十字福島支部卒業の看病婦を令孃の看護に出して置きましたところ、五六日も經と交代を出す様醫師より命せられました。其過失は何かと問ひますと、言葉が通じかねる、との事でした。然し、此の看病婦は、高等女學校卒業の上永く病院に奉職し、人品も學技も揃ふて居る者で、決して言語のわからぬといふ程の事はあ

りませんでした。又これまで多く試めして見てゐるのに高等女學校を卒業して居る者に、言語の分らぬ程の者はありません。そして、病人のために獻身職に従事して居ることは平常の行狀によつて判つて居ります其人に對して私は交代は出されませんから、醫師に其旨を通じて交代を出さずに取戻しました。正義の爲にはいくらでも戰ふといふ私の精神ですから。又或時病家へ派出中の看病婦が病氣故交代を遣す樣との事でしたから、同等の看病婦を差出して先の看病婦を引せました。すると此度の看病婦が氣に入らぬ者と見え、不熟練故交代者を遣せとの事でありました。先の看病婦は地方の病院卒業で地方の免狀を有して居る者、後の看病婦は慈惠病院卒業で決して不熟の者ではありません何れも一等の資格ある者でありますが、二等との病家よりの申込でありました故一等を減じて派出させたのであります。然るを前述の如き次第でありましたから不熟練とのことゝに對し交代者を出さずに取戻しました。併し人には好き不好がありますから、別に看病婦に落度は無いが病人の氣に入らぬから交代者を出だせと申さるゝ時は、假令如何なる事情あるにもせよ、病人といふ言に對して、直に交代させますが、何とか難くせを付けて交代と申されては、看病婦の精神に對して交代は出されません。故に萬一看病婦が氣に入らぬ時は宜敷其邊を考へて頂きたいのです。看護婦會として看病婦を養ひますに、難病ならば歸會せよ、八ケ間敷病家に忍耐するに及ばずと申す人はありますまい。獻身職を全ふせよと申し付けるは當然の事でありますよし申付られませんでも、獨立の資格ある看病婦として、其覺悟無くして何うして職を全ふせられませう。獻身とは其字の如く病人のために身を獻げて働くのであります。然れば病人ゟ看病婦を雇ひし上は、看病婦を自身と思ひ、自分の思ひ通り腹臓なく何事でもして貰ふ方がよろしう御座います。

▲病人の意に任せられぬ事柄

然れど看病婦には各病症に對して、堅く守らねば

ならぬ嚴則がありますから、例令病人がいか程望みましても、醫師の命に背き法則を破る事は出來ません。破れば病人の害になりますのみならず、看病婦としての信用にかゝります。例令ば腸窒扶斯病には、

一身體の安靜、二精神の平和、三食物流動性、四冷罨法、五豫防として消毒

此の五ヶ條は堅く守らねばならぬ要點であります。然るを病人が求めると申して固形の食物を與ふる時は、腸出血を起して一命にかゝります。看病婦として申譯がありません。又冷罨法を怠りては下熱せざるのみならず、心臓痲痺の下に斃るゝ事があります。精神の平和を失ひ喜怒哀樂の情を起させる時は、必ず熱の昇るものであります。病人が求めるといひて身體の安靜を缺き、あちらこちらと動かしたり、其まゝ便器によられぬといひて起て便器にかゝらせる等の事があつては腸出血を來し、又は腸の穿穴等といふ治しがたい難病に陷ります。職務上死を以て詫るも尙足りません又消毒法を怠りて家族に傳播させる等の失態がありましては、啻に病家へ不親切のみならず、政府に對し職責を全ふせざる罪に服さねばなりません。然れば看病婦の責任を全ふするために、或は病人の意に從がはれぬ時も偶にありませうが、それは職責を全ふするためですから許さねばなりません。

▲人の知らぬ看病婦の苦心

然うして腸窒扶斯の病人は重症になると、腦が惡くなり、自分の智識で物を辨せざる樣になります。さうすると家族の者が傍から何とか指揮さるゝ事がありますが、これは看病婦の最も困る所です。尤とも看病婦のする事を信じかねる時は、不安の點を遠慮なく質問せらるゝ方が宜しう御座います。大切の病人を依賴するのですから、信じ兼る人に任せては置れぬが道理です、假令ば重病人に、朝洗面の際楊枝を使はせ、又頭髮を梳り或は身體の洗拭等、害あると思はるゝ事に就ては質問して說明を聞かれし方が宜しう御座います。口中を不潔にする時は、口中に黴菌が棲息し、食物と

共に胃中に入り、胃病を起す恐れがあります。のみならず昨日まで自分で楊枝を遣ふて居りしに、急に容體が惡いといひて楊枝を遣はせなければ、自分でも容體が惡いのだと悟り、精神上大いに害を蒙ります。故に看病婦は凡てを考へて承知の上で、病人の心を害せざるために、出來ぬと知り乍ら、さあらぬ體で出して見る時がありますから、何事も看病婦に任せて置く方が宜しう御座います。

昔は病人と云ふと髮も結はず、洗拭もせずに居ましたが、今日では衞生のため營養と、排泄に充分注意いたさねばなりませんから病症により害なき限りは髮も梳き、洗拭法も出來る丈施行致します。頭髮を梳くのは頭部の排泄を盛んならしむるため、又全身の洗拭をいたしますのは皮膚の排泄を盛んならしめ、酸化作用を助ける目的であります。人の身體は、食物中より得たる種々の性分が、血液となりて身體至る所に循環し、大氣中の酸素を取りて體中にありて燃燒を起し、其の力によりて全身の生活機關は運轉し生を保つのであります。譬へて申せば竈で火を燃し、湯を沸す樣なものです、薪を入れて火をつけても、口を閉たり、煙突を掃除しなかつたりして、排泄を惡くする時は、決して火は燃えません。夫れと同じく皮膚は數億萬の口があつて、人體に最も要用なる酸素を吸入し、又燃えて出來た炭酸及び水蒸氣等を排泄させるのであります病人だと申して洗拭法を怠つてはます／＼身體は弱くなり、弱くなれば尚更疾は增長して來る道理であります。看病婦が清潔法を行ふのは酸素吸入の目的であります。又消毒法を嚴重に致しますのは啻に他人の傳播を恐るゝのみならず、すでに侵されてある病人自身に害なき樣つとむるのであります。健康體にさへ侵入せんとねらつて居る病菌ですから、勿論病體に入るは易き事であります。看病婦は常に此の無形の病菌を敵として戰つて居るので、此の戰に打ち勝つのは消毒法と清潔法を充分施行するからであります。消毒の法により黴菌を撲滅し、清潔法によりて充分酸素を吸入し血液の循環を盛んならしめ、體質を健全にいたしますれ

は、萬一病菌を吸入しても燃燒に依て殺されて仕舞ひます。此等の道理によりて看病婦は醫師の命を奉じて小心注意してつとめるのですから意に解せざる處は遠慮なく質問し、適當なる答が出來なければ、其時は其事を遠慮なく會の方へ通じて、交代を命せらるゝも止むを得ません。然し重症患者は三等乃至等外では間に合ひません。三等でも等外でも多少の素養はありますが、經驗に富んで居りませんから、病人の意を滿足させる事が出來ぬかも知れません。然し重症でなければ左程敏腕家の必要もありますまいから、至誠を以て忠實に勤る者なれば良として使ふて頂きたいのです。

△何んな風に看護婦を使ふてよきか

又偶〻看病婦を頼みに來る方が看病婦のために、女中を雇ひ置く事は出來ぬから、自分の事は悉皆して貰はねばならぬといふ方がありますが、そは尤の事で、看病婦雇ひ入れた爲に女中や下男を使ふ事はいけません。然し重症にして、傍を離るゝ事の出來ざる、假令ば喀血患者であるとか、又は精神病、其他重症にして離れられぬ場合は、看病婦の爲す事迄助て貰はねばなりませんが、さうでない限りは何でも病人と自分の事はさせねばなりません。故に遠慮なく申付て、使ふ方がよろしう御座います。又或は看護婦が權式ばるとか、容體ぶるとかで、使ひにくいと申さるゝ方がありますが、不幸な病人に同情をもつて看病の業に從事する者が、權式ぶる筈もなく、又容體ぶる筈もなからうと思ひますが、若しあるとすれば「古語に無くて七くせ」と申す譬がある通り、其人のくせと思ひます。さういふ人がありましたら、獻身的思操に免じ矯正して使用して頂きたいのです。敎へても矯めても直らぬとせば、そは看護婦の精神に悖る者ですから其時こそ責任ある所へ忠告せられた方が宜しう御座います。斯かる不都合な看病婦の爲には幾人でも交代者を出さねばなりません。たしか十年位前の事でした。或病家で看病婦と女中とを一つにして使ふて置きました。それ故常に臺

所の板の間で御飯を食べさせられて居りましたが、或時看病婦が病家で看病婦の使ひ方を知らぬと申せし由を主人が聞きまして、看病婦の使ひ方を病家で知らぬのか、又看病婦が看病の仕方を知らぬのか會頭に答辯を求めて見んと申されましたさうで、實に赤面したと言つた人があります。今日では左樣の看病婦はあるまいと思ひますが、若しありし時は遠慮なく會に忠告して交代者を求むるが宜しからうと存じます。自己の價値を知らずして看病婦の假面を粧ひ、權式ぶつたり、容體ぶる樣な看病婦を女中と同樣にでも、使ふて下さるのは、却つて病家の惠みです。

▲内所で數人の診察を受くる不利

病人が餘り長くなりますと病家では心迷ひがして、何の考も無く主治醫を取替る事があります。又は代へぬまでも兩方から藥を貰ひ、あちらのは呑せぬとか、こちらのは呑せぬとかいふ事を聞きますが之れは實に不利益で御座います。若し主治醫の診察を疑はるゝならば、充分に質問し、倘解し兼ぬる事があるならば、事情を明して相談なさつて斷るとも代るともした方が宜しう御座います。而して又他の醫師の診察を受けらるゝには、必ず主治醫の紹介に依る方が宜いと思ひます。それを主治醫に內所で、親戚より見舞だとか、何とか口述をつけて診察を受ける方がありますが、是れでは診察を乞はるゝ人も公然處置も出來ませんから、診察を受けても無益です。そして斯樣な所へ出合せた看病婦は實に迷惑の次第です。私は主治醫の代る時は、直に看病婦を引上る樣にして居りますが、之れが爲に病人の病に障る事が無いでもありません。こは病人の罪でもなく、醫師の責でもなく、又看病婦の過失でもありません。皆病家の迷ひからです。此等に就ても十分御注意を願ひたいもので御座います。

職務に對して忠實を盡せる看護婦の物語

まつ子

隣の家で藁を打つ音に目を醒す。今朝の寒いこと。床を離れるのが惜しいのでもぢ〳〵して居ると、側に寢て居た長井さんが今日は朔日よ早く起ませうと云はれたので、掛聲してはね起きた。外には最早學校通ひの子供の唱歌をうたひながら霜柱をふる音。午前九時頃入院患者の繃帶交換をして居ると、玄關で勇ましい郵便の一聲。受取て見ると美くしい繪葉書。とみ子さんからなので、早速讀で見ると何時ながら面白い事許り。私が先日田舍の冬景色も却々によいものだと書てやつたら、それが羨ましいと云てよこされた。都に行くとやつぱり田舍が懷しいものと見える。長井さんが、不意に『私大變な事が出來た』と云はれたので、ふと氣が付くと友は今實家から來た手紙を持て私の前に立て居る。長井さんのお母樣が病氣で手が足りぬから、一日も早く歸宅してとの事であつた。三とせの長の年月一日も離れずに苦樂を共にみとりの業をいそしみし其人と、今別れ樣とは思はなかつたので私は只悄然とした。先生も困たな、然し病氣とあれば致方もないと仰せられ、午後別れの紀念にと二人して寫眞を寫しに行く。門を出ると雪がちら〳〵降て來た。

午後四時歸院して見ると、前膊の復雜骨折の患者が來て、六號室に入院して居た。骨折後最早三四日を過ぎたのださうな。炎症、疼痛、發熱、共に甚だしくて却々の重症。夕方の檢溫に行つたら、付添の老母が枕元にしよんぼりと坐つて居たのが、何となく哀れに見えた。體溫は三十九度、大そう苦しさうなので、頓などのませた。

未だ五時にならぬのに、看護室はもう薄暗くなつて、吹雪の音は絕へず窓の戸を音信るゝに友は明日の出立の荷作りに何かと忙しさう。その夜は送別のしるしにと先生を始め、皆樣で茶話會を開いたが、兎角話は打濕り勝であつた。午後九時半枕に就いた。

二日、木枯の音にふと目醒むればもう六時、七時半

頭掃除が終たので髮を結で居ると、昨日入院した患者が烈しく痛めて昨夜少しも眠むられなかつたと云ふて來た。見ると創液で繃帶は大變に汚れ炎症も少し増した樣。早速先生に伺ふと、朝飯が濟んだら直ぐに繃帶を取つて見て、事に由たら切開せねばなるまいとの仰せ。八時半頃先生がお出ましになつたので、早速彼の患者を呼んで繃帶を解て見ると、炎症は最早上膊の下端迄進んで居る。



先生は創傷が不潔で有つた爲め惡性のフレグモーネを起したのだと云はれて、早速ナルコーゼをかけて都合四ケ所切開せられたが、是れでも炎症が進む樣だと、上膊から切斷せねばなるまいと、付添の老母に話をして置て、明朝迄樣子を見る事にした。後で老母に訊くと、此の患者は實子で、家には年若き妻と幼き子

供とがあるとか。元よりさゝやかな農民故、財産などは無いとの事。萬一手が無くなつたら此先何をして餘命を送るのであらう、本當に哀れの者であると思ふて、自分の今の境遇の幸ひなのを神樣に感謝した。そして此不幸なる患者のために出來るだけ盡さうと思つた、十一時車が來たので友はいよ〳〵出發。私はもう胸が一ぱいになつて何とも云はずに見送つた。親しき友も同じ思ひに言葉はなかつた。

午後彼の患者を檢溫して見たら三十九度五分、炎症も疼痛も少しも去らぬ。先生は最早切斷するより外に治療の仕方が無いから、よく〳〵患者に云ひ聞かせよとの仰せ故、病室に行て右の事を話し、今未練を殘して治療を怠つて貴い一命をみす〳〵捨つるのは神の御心にそむく事を叮嚀に云つて聞かせたら、患者も共に涙に暮れて聞いて居たが、先生の御見込みなれば何とも致し方がありませぬ故、如何樣にもよろしい樣にと、樣子の如何にも哀れなのに、私も思はず貰ひ泣した。九時六號室へ行て見て萬一夜中に苦しい事があつたら起しに來てと老母に云ふて、自分も寢についた。外は木枯の音物すごく、隣の家で小犬が今宵の寒さに親犬の乳房を思ひ出したのであらう、一しきり哀れな聲で鳴き立てたが、其れも止むで後は只耳に入るものは枕時計の音のみ。不幸なる患者の上に御惠を與へ給へと神に祈りつゝ、いつしか夢路をたどりつ。

三日、お寺でつき出す鐘の音に目を醒した。今日は風もないが空は變らぬ雪もよひ、診察時間になるとすぐ六號室から呼に來た。昨夜も痛めたさうな。指の先は最早チアノーゼを起して居る。先生は一目見られて、最早仕方がない切斷しようと仰せられた。此一言は如何に患者の胸にひゞいただらう、暫らく無言のまゝ、痛ましい迄腫れ腐つた己が手を見つめしが、覺悟や定めけん、付添の老母も共に此上は一時も早く手術して此苦痛を取り下されよとの答にさらばとて、先づ患者を再び病室に送り、午後の手術と云ふ事にして患者の妻子に此事を知らせる爲め、車夫を自轉車で患家へやる事にしたが、あいにく雪がチラ〳〵と降て來た。患家

迄は四里程あるのださうな。私が車夫にマアさぞ寒むいだらうにねと云ふと何これしきの雪、氣の毒な病人の爲めと思へば何でもないとハンドル取る手も勇ましく走り出した。心なき車夫でさへ不幸な人の爲には此寒さを物ともせずに働くものを、まして慈善事業に從事して居る私等が、不幸の人の爲めに働くのは神の御心であるとしみ〴〵思はれた。

　午後一時頃から手術室の準備をする。看護婦の手が足りないので何だか今から氣がもめる。午後二時準備も終たので患者を呼で來ると、豫て覺悟はして居るものゝ屠所の羊もかくやと許り、力なき歩みにも其胸の中の苦しさは知れるものを、强ひて笑顏つくるもいとど哀れを增した。私は魔睡器を手に取たが。何だか自分の後の方で『少しまて』と云はれる樣な氣がして屢〻ためらつて居ると、先生が『おいどうした』と云はれたのでハツと正氣にかへると、患者は最早覺悟の目を閉ぢて身動きもしないで居る。神よ哀れなる此人を守り給へと心中に祈りつ。午後三時半無事に手術も終り、患者を病室に送り、湯温婆など入れ老母に何くれと注意して置て、それから手術室の後かたづけをする。四時半檢温を取りに行たら、患者も醒覺して居て、何くれと禮などを云つた。老母は枕元に下うつむいて居たが、お念佛唱へる聲が、かすかにもれた。定めし不幸なる我が子の爲に、助けを佛に願ふのであらう。さても幸薄き老母が身よ。九時寢る前に出血の有無を見に行くと、患者は最早痛みも去つて夕飯を食べたと云ふて喜で居た。何事も命有ての物種故もはやあきらめて療治をするが專一だと云ふてなぐさめたら、老母も有難うございますと目には涙の露を宿して居た。出血も無いし、此分では先づ安心。長井さんの處へ今日の手術の有樣などこま〴〵と書いて、お母樣のお見舞をいふて送つた。アヽもう眠くて目が閉ぢさうだ。

　フト見ると手術患者が繃帶を眞赤にして其端からは血液が滴つて居るので思はずアツとさけんだ。其聲に目が醒めて見たらア、夢であつた。流石に後出血がおそろしいと思て寢たものだから、こんな夢を見たのだ



らう。何だか氣味が惡いと思ひながら目を閉ぢたが、氣になつてねむられないのでそつと床を出て、病室に行て物音をさせぬ樣に患者の繃帶を見たら全く夢であつた。繃帶は少しの汚れもなく、患者は安眠して居る。夢でよかつたと氣がゆるむと、最早何處へどう寢たのやら。

四日、今日は朝から此頃にない好天氣。然し朝は却々寒い。晝頃には暖かくなると云ふので先生は梅の鉢を持て彼處此處と日當りのよい處を見つけて歩るいて居られる。アヽ私もすつかりわすれて居た。此頃二三日忙しいので福壽草に水をやるのを。八時頃檢溫に病室へ行くと、各病室で同じ樣に、昨日は大働きでさぞおつかれでしたらう病人は先生や貴女方のお蔭で助かるのです、などゝ云はれるので、私は今更に自分の責任の如何に重大なるかを感じた。さうして我身の樣な不束者にも安心して身をまかせる不幸なる人の爲に有るだけの力を盡さうと思つた。朝の中に昨日切斷した手を埋めようと思つて穴を掘てもらひ、又更めて此手を見るにつけてもアヽ此手、三十七年の長の年月或る時は親の爲に或ひは妻子のために如何に働いたのであらう。其勞働のおもかげは今も尙ほあり〳〵と殘て居るものを。折から空には鳴き渡る雁の二聲三聲。

食物消化の話

節齋

近頃の人は何でも滋養物々々と、唯旨い物さへ食へば、それで身體が壯健になるやうに思つて居るのは、大間違、人間は御馳走を食ふよりはまづどうすればよく消化れるかといふ事を考へねばならぬ、只無暗に、旨い物を食つたからとて、身を働らかせずば、滋養物の大部分は消化れずに排泄されて仕舞ふ、これでは折角の御馳走もお椀から直ぐに便所へ運ぶのも同じ事だと或る衛生の大家が申されたが、全くこれは爭はれぬ事實である。人間が身を働らかせ、心を働らかせて、食物を消化すのは生物自然の約束であるが、其約束を實行する前にまづ消化はどういふ順序に依つて行はるるかといふ次第をこゝに説明して見やう。

多くの人は食物の消化は專ら胃中で行はるゝ樣に考へて居る樣であるが、決してそんなものではない、消化といふと大層簡單な作用のやうに思はれるが、其實はなか〳〵複雜なもので、今それを詳細に説明しようと思へば圖解などしてかゝらねば十分とは行くまいから玆にはざつと大體の事に就て述べやう。

扨我々の食物は御承知の通り、蛋白質、炭水化物、脂肪、無機鹽類の四種に大別してある、これを口で食し、胃腸で消化すので、是等の機關を消化器といふのであるが、この他にも肝臟あり、膵臟あり、いづれも消化には大關係を持つもので、假りにこれを消化の副機關ともいふべきものである、まづその順序を説き明せば、

其一　口中の消化

口は消化器の入り口、即ち門である、こゝには四つの小さな腺から絶えず唾液を分泌して腔内を濕はして居る、食物が口へ入るとまづ齒で嚙みこなされ、唾液のはたらきを受ける。この唾液といふものはアルカリ性のもので、食物の中の可溶性の無機物を溶かし又脂肪に對しても幾分か乳狀にする作用を持つて居るが、只蛋白質に對しては何の働らきもせぬのである。そこで

この唾液で重に消化されるものは專ら澱粉類、即ち米麥等である、即ち飯を長い間嚙んで居ると、幾分か甘い味がして來るのは全く唾液の力で澱粉が砂糖に變化して行くからである。又甘い物を食つた後に時として酸味を感ずる事があるが、これは、唾液中の微生物が砂糖にはたらいて醱酵を起すからである、食物が嚥み下されて食道を通つて胃に這入つて玆に胃の消化が始まるのである。

其二　胃の消化

胃は第二の消化機關である、其の内部の粘膜には澤山の小さな腺があつて、食物が入つて來ると直ぐにそこから胃液を出して其の筋壁の活動によつて食物と胃液とをよく捏ね交せる、胃液は鹽酸を含んだ液であるがこれは重に蛋白質を消化するのである、蛋白質は鹽酸とペプシンとの共同作用で、いろ／＼複雜な變化をして遂にペプトーンになる、このペプトーンは溶解性の蛋白質であるから、胃壁を通じて吸收せられて人體を養ふのである。彼の食後に果物を食へば消化を助けるといふのは、これは果物の一種爽快な味で胃液の分泌を促がすからである。

若し消化の最中に多量の湯水を飲むと胃液が薄くなつて其の働らきを微弱にするのは當然の理である。

一體この胃液の中にはペプシンの外にレンニンといふものがあつて、乳汁を凝固まらす働らきを持つてゐる、彼の乳兒が時として凝まつた乳を吐く事があるのはこの爲めである、但し胃では澱粉と、脂肪は別に變化を受けず口中から運ばれた儘である。

胃はこの重要な消化作用をする外に又防腐、殺菌の役をもつとめる、我々共が普通食物を食ふと、數多の微生物が一緒に飲み込まれるけれども、胃液の酸性の爲めに大概は殺されるか、又は其の力を失つてしまふ若し胃が弱くて酸性の力が微弱だと、是等の微生物を殺す事が出來ないので、これが爲めに種々なる害毒を受ける、即ち傳染病に感染するのは微生物の害毒を受けたのである。のみならず、防腐作用が十分でない時は、消化も又妨げられて營養不良になつて身體は益

益衰弱する、故に傳染病を防ぐにはまづ胃を强くする事が第一である、それ故此の殺菌作用はなか〳〵重要なもので、或る大醫の説に胃は消化の器ではなくて寧ろ殺菌の器であるといふ事を唱へ出した位である。

併しながら、食物全體の消化の六七分は全く腸の方で營まれるものである、故に腸は最後の消化器であつて、然かも最も重要なる機關であるが、腸が消化機關として大切なる丈け、胃の殺菌作用が如何に重要であるかといふ事が考へられる、彼の恐るべきコレラ、チプスの如きバクテリヤも胃さへ强かつたならば其胃液で殺してしまい、最早無能力のものとして腸の方へ送る事が出來る、要するに胃は元來が消化といふよりは殺菌の器でペプシンが鹽酸と共に蛋白質をペプトーンに變ずる性質を備へたのを利用して殺菌作用と消化作用とを兼ね行はせるのである、それから一轉して腸の消化作用に移るのである。

其三　腸の消化

前述の如く胃で消化を受けた食物は泥狀になつて漸漸腸に流れ込んで腸の消化液の作用を受けて充分の消化を致すのである。さてこの腸の消化液はアルカリ性でこれは膵臓から出て來る膵液といふものが其働らきを爲すのである、實に腸の消化液は澱粉、蛋白は勿論脂肪其他の食物の全成分に作用もので、消化の大部分は腸で行はれるのである。

さて膵臓から分泌する液は十二指腸のところで小腸に注いで、澱粉を砂糖に化し、脂肪を分解し、蛋白質を消化する作用を有して居るのである。まづ胃の中を變化なく通つて來た澱粉は膵液に遇ひ、こゝで甚だ强大な作用を受けて、遂に砂糖に變じて吸收せられるのである。蛋白質は又膵液の中のトリプシンといふものの爲めに消化せられてペプトーンとなる（特に此時出來るペプトーンをトリプトーンと呼ぶ）、胃の消化の時にはペプシンは鹽酸と一緒になつて蛋白質を消化するが腸の塲合にはトリプシンはアルカリ（炭酸曹達）と共に蛋白質を消化する、膵液は胃液に比べると蛋白質を消化する力は非常に强大でペプトーンの外に種々の益

素分を含んで居る分解物をも生ずる、この膵液はアルカリ性であるから時としては腐敗的の變化も起すことがあつて、惡臭を出す事がある、すべて腐敗的の現象はアルカリ性の時に起り易いものである。

膵液の中には、またステアプシンといふものがあつて、脂肪に作用をする、脂肪の消化は他の物の消化と大いに違つて居る、彼の蛋白質がペプトンに變るといふ樣に成分が變るのではない、只膵液の作用を受けると極微細な脂肪球になつて、原の儘で吸收されるのである、體溫でステアプシンが脂肪を分解して脂肪酸と膵液の中にある炭酸曹達とで食物中の脂肪を乳狀にする、且又この脂肪酸の一部はアルカリと化合して石鹼となつて、この石鹼の溶けた液が微細な脂肪球の表面を覆ひて互ひにくつつくのを妨げて吸收する便利を與へる、膽汁も又この作用を助けるのである。

膽汁は肝臟から分泌する金赤色のアルカリ性液であつて、十二指腸の所で膵液と同じ口から注入するのである。併し膽汁は消化液ではない。膽汁は脂肪吸收を助けるものである尤も膽汁が脂肪を溶かす力は微弱なものであるが、膽汁の中にある酸類の鹽は幾分か脂肪球が腸壁を通じて吸收せらるゝのを容易くさせるのである、其外この膽汁は大いに防腐力を持つてゐる又膽汁は腸の初めて胃から來る酸性の泥狀を中和してペプシンの作用を止め、腸の消化に適する樣にして送る、最近の研究に依れば、膽汁は澱粉の消化を大に速かならしめるといふ事である。

小腸は又その粘膜からアルカリ性の腸液を分泌する腸液は蛋白質と脂肪とには作用かない、けれども澱粉を麥芽糖に變ずる力を以て居る、そして葡萄糖にも蔗糖にも變する。

さて小腸の消化が終ると內容物は漸々大腸に移つて行く、大腸はおもに吸收作用をするのみであつて其の粕がすなはち大便となつて排泄されるのである。

大腸はアルカリ性であるから微生物の蕃殖に最も適して居る、隨つて微生物の作用も消化作用に並行してゆく、彼の牛馬や、羊の如き草食動物がよく草の纖維を

消化して行くのは全くこの微生物の作用が行はれるからである。

併し人間は草食動物でないから決してその必要はない、又小腸でも通常膽汁のために腐敗的の變化が起らないが大腸の方では此の變化が起つて惡臭を發し、又酸性醱酵を起して酸を生ずるのである。

右說くところの生理は頗る複雜した關係を以てゐるやうであるけれども、よく其順序を辨まへて見れば成程消化の原理はこういふものかといふ次第を知る事が出來て衞生上に少からず裨益するのである。

神經衰弱の手當

神經衰弱症の原因は最も多數で最も複雜なものであるが、この原因中には直接に除き得るものと間接に除くより外に方法のないものとある、今其重なる原因を擧ぐれば、

△疾病――梅毒、十二指腸蟲、鼻カタル、貧血、子宮病、膽石――等

△中毒――酒、烟草、珈琲、茶、コカイン、阿片、モルヒネ

△精神的の原因――業務の多忙、過度の勉强、失望、落膽、悲哀、憤怒

△養液減損――永時の授乳、房事過度、手淫、遺精

以上の原因から來たものは直接に治療を加へるか、又は其害を憚れば自然除去する事も出來るが、遺傳の神經質であるとか、不良の教育に原因するときは間接に原因治療を加へるのである。其方法大略左の如し。

△重病後の衰弱――腸胃消化强壯をはかる藥劑を與へ、食慾を進め、消化し易き滋養分を取らしむる事

△神經質の衰弱――神經質は大槪虛弱、脂肪不足、皮膚蒼白なるものなれば體質を改善する方法として滋養食餌を取らしめ、睡眠を計り精神の安靜法を講じ神經の過敏を除き生活狀態より改良して漸次に原因驅除を圖るべき事

△教育上の原因――不良なる教育に原因するものは漸次教育的看護法を行はざるべからざれば其方法は複雜なり

以上の如く直接間接の原因療法を施すと同時に對症療法も必要であれば精神療法も亦必要である。

便利で心地よき臺所の設備

ケロッグ夫人述

ケロッグ博士夫人は、良人と協力して、米國ミチガンにバツトルクリーク病院を經營し、醫學界に聲譽高き婦人であります。此の病院は、模範的病院として其の組織設備の整ふて居る事は、米國にも多く類を見ぬ程ですが、これは全く夫人が病院内部の監督の任に當り、周到なる注意を以て職務を處理し、設備を整頓して行くからです。同病院には料理學校と實驗的臺所との二つの附屬事業があります。何れも夫人の理想を實現したもので、料理學校は年々多數の卒業生を出し、實驗的臺所は日々七百人の患者に食餌を供給して居ります。されば夫人の理想は今や汎く米國の家庭に實行されて、夫人は廚房改良の先達、進歩せる料理法の師範として多大の尊敬を拂はれて居ります。

夫人が料理と臺所に就ての理想を要言すれば、總て學理を應用して衛生の道に適はしめようと云ふのであります。故に一品の料理、一部の設備、一個の器具も、皆多年の研究と實驗に基ゐて出來て居ります。

博士夫人が料理、臺所に就ての研究の範圍は殆ど世界に亘つて居ります。我が日本の臺所の長所短所の如きも精密に觀察研究せられ、又常食とする米の性分より炊飯の方法まで仔細に研究實驗せられ、且つ米を洋食化したる幾種の珍料理法を案出するなど實に周到なもので、我國人は却つて夫人に依りて米の炊方などを敎はられればならぬ位です。

そして夫人の臺所改良說や、料理法は風俗、食物材料、家屋の構造等を異にして居る我が日本の家庭にも直に應用が能るのが妙で、その研究がいかに深くして且つ實用的であるかゞ分ります。夫人の料理法は後に紹介するとして、先づその臺所研究談から始めませう。

臺所は一家の主腦であります。それを多くの人は家屋の附屬部の樣に心得て、いかに狹くても、いかに暗くても一向意に留めず、其中で平氣で貴重な食物を取扱ふて居ますが、之れがそも〳〵誤つて居ります。臺所は、一家の主婦料理人が一日中最も多くの時間を費す場所ですから、居間や座敷と同樣に、明るく、淸潔に、立働きに便利なやうに造らねばならぬ道理です。婦人は、その一生涯の多くを此の臺所にて消費するの

ですから、之を居間と同樣に居心の善きやう、働きに便利なやうに、設備をするのは取りも直さず自分の爲で御座います。

▲臺所の大體の構造▼

臺所には光線が最も必要で御座います。光線を導く窓はいくら多くても構ひません。出來得るならば、其の天井をも溫室の硝子張屋根の樣にしたいものです。次には空氣の流通が必要で、常に空氣を轉換させて、煮燒より生ずる臭氣を一掃しなければなりませぬ。いかなる不衞生家でも、寢室に於ける空氣流通の必要な事は知つて居ませうが、臺所の空氣の流通は、寢室よりも一層大切です。之を等閑にすると、臺所より發生する惡瓦斯は、其室のみならず、家中に不快な臭氣を帶べる空氣を送り、長い年月の間には全家に一種の臭氣を染込ませます。家の人は臭氣に慣れて左程感じますまいが、外來の人には直ぐ其の臭氣が鼻に付いて不快な感を與へます。臺所に臭氣をもたせて恁う云ふ事になるのは、一つは構造の如何にも因りますが一つには主婦の心掛け如何に因る事と思はねばなりませぬ。

臺所の構造は寒暑に應じて適度の溫度を保ち得る樣にし、空氣の流通を善くし、光線を充分に引き、其の內部は、無暗に足を運ばずとも用が足り、立働きに便利に、狹きに失せず、廣きに過ぎざる樣にありたいものです。臺所の廣さは戶棚、勝手道具の置場所は別として立働きの場所は普通縱二間、橫二間半位で澤山です。家族が多いからとてそれを廣くする必要はありません。

さて臺所仕事は家庭の仕事として一番樂しみ多い仕事であるのに、人々のこれを厭ふのは何した理由かと云ふに、つまり不潔にしたり、暗くしたりするからで、若しもこれを清潔にして塵を留めず、器具は常に磨いて、美しく輝いて居るならば、何人でも進んで臺所仕事に當るでありませう、之を厭ふのは、畢竟仕事をするのが厭なのでは無くて、不潔な臺所に出るのが不快なのですから、此處は是非とも清潔にして置かねばな

りませぬ。

▲臺所を裝飾する事▼

居間に幅物を掛けたり、額を掲げたりして、裝飾に意を用ゐるのは、つまり目や心を慰めて居心を好くする爲です。故に居間と同樣に、一日の何時間を費す臺所も、この裝飾は必要でせう。然し、幅物や額は、烟に燻ぶつたり裂けたりしますから、臺所には向きません。臺所には自から臺所向の裝飾があります。窓に脊寄した蔦蘿をからませたり、又は邪魔にならぬ場所に草花の鉢を飾つたり、花瓶に花を挿して煖爐の上に置いたりするのが宜しいかと思ひます。斯くすれば殺風景な臺所を美化し、仕事の勞を慰さめ、衛生上から見ても効能は少くありません。これは勿論必要と云ふわけはありませんが、出來るものなら御注意なさるがいいと思ひます。

▲清潔にする設備▼

臺所を清潔にするには、濕氣の通らぬやうに床下にコンクリートか瓦を敷き、床板は隙の無き樣にし、且つ亞麻仁油を浸込ませて表面に光澤をもたせ、拭掃除に便利な樣にする事が肝腎です。そして木製の器物や板には假漆を塗て置くが宜しい樣です。斯うして置けば脂が附着く樣な事があつても、濕つた布で拭けば直ぐに除れます。壁はペンキ塗にするが宜い樣です。土の壁では不潔物がコビリ着ても拭ふ事もできず、何かにつけて非衛生に流れます。

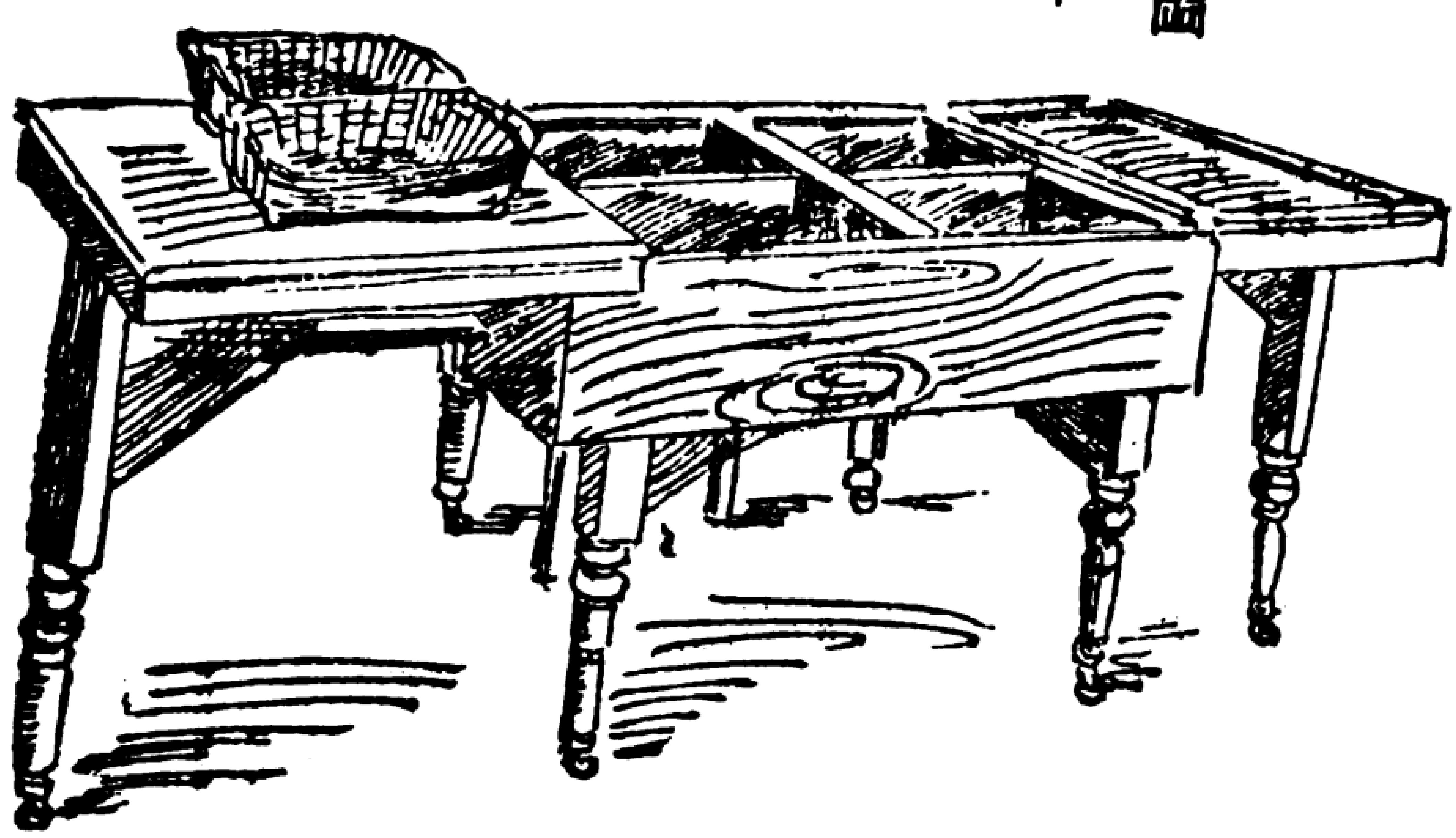
そして臺所用具は、整頓し易く、清潔を保ち易いものを撰ばねばなりません。戸棚は成るべく多く備ふるが可い。そして鍋は鍋、皿は皿と器具の種類に依て別にして仕舞つて置けば、其の出納に便利で、勞を省く事が少くありません。戸棚の戸は滑戸が宜しく、又戸棚は据ゑ付けのものよりは、四脚を附け、脚の下部には車を附けて自由に動かされる樣にして置く方が便利で、時々器具を整理したり、掃除したりするのに重寶です。食物貯藏用の戸棚は、風通を好くして置かぬと

忽ち黴菌の巣窟になつて仕舞ひます、風通を好くするに就ては、蠅や、塵芥の侵入を防ぐ金網を、前の戸のみならず上側にも張る事が肝要です、押入造でも動かす事の能ぬ戸棚ならば、風通の金網装置も出來ぬから、その代りに烟突の様な筒を附けて、外氣を流通させます。

▲臺所必要の常備品▼

臺所には時計を必ず一個備へねばなりませぬ。煮焼には一定の時間があるのに、其の都度座敷へ時計を見に行くのは甚だ不自由なわけですから。次に石板と石筆と海綿を備付て、石板の一面には日々の買物を記入、一面には一日間或は一週間の獻立表を記入て置く事が必要です。臺所には手帳よりも石板が重寶で、それに海綿を備へ置けば何度でも拭消す事が出來ます。此の様にして置けば、厨房を掌る者が召使であつても、命令は石板にちやんと記入て置くから、一々主婦に質問する世話がなくて、時間の經濟になります。

一圖　卓子代用洗槽

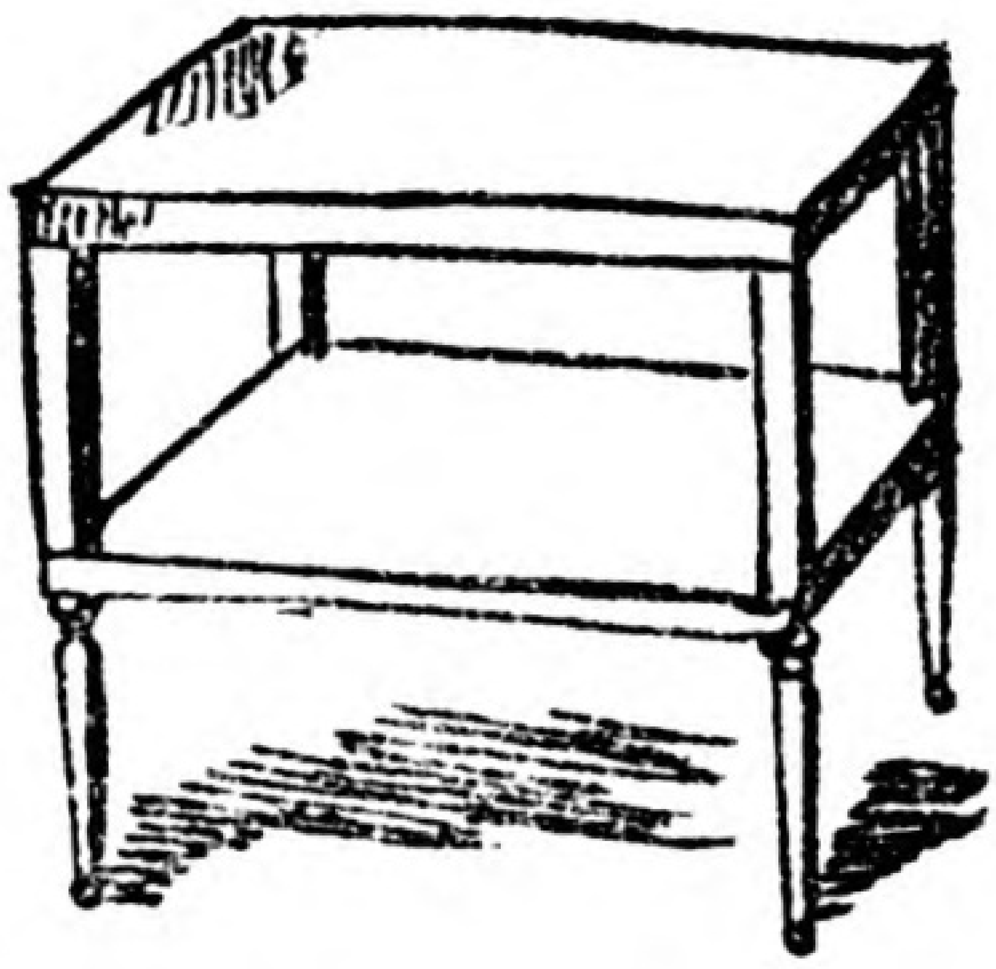


▲便利なる棚と卓▼

棚は、吊棚又は壁に造付の棚の何れを問はず、自由に上下の出來るやうな装置にして置くが便利です。厨房用卓は適度の大きさに造り、動かし好いやうに其の脚に車を附け、表面は亞鉛にて覆ふが宜い様です。卓に抽斗を附けると、其中が不潔となり易く、整理にも不便で、衛生にも害があります

から、寧ろ附けぬ方が可い。其の代りに一日度々使用する器具だけを板羽目に懸け得るやうにして置くが便利です。これは僅少の經費で出來ます。器具は露出にして置く方が清潔法に叶ひ、使用時にも早く見出せて便利です。

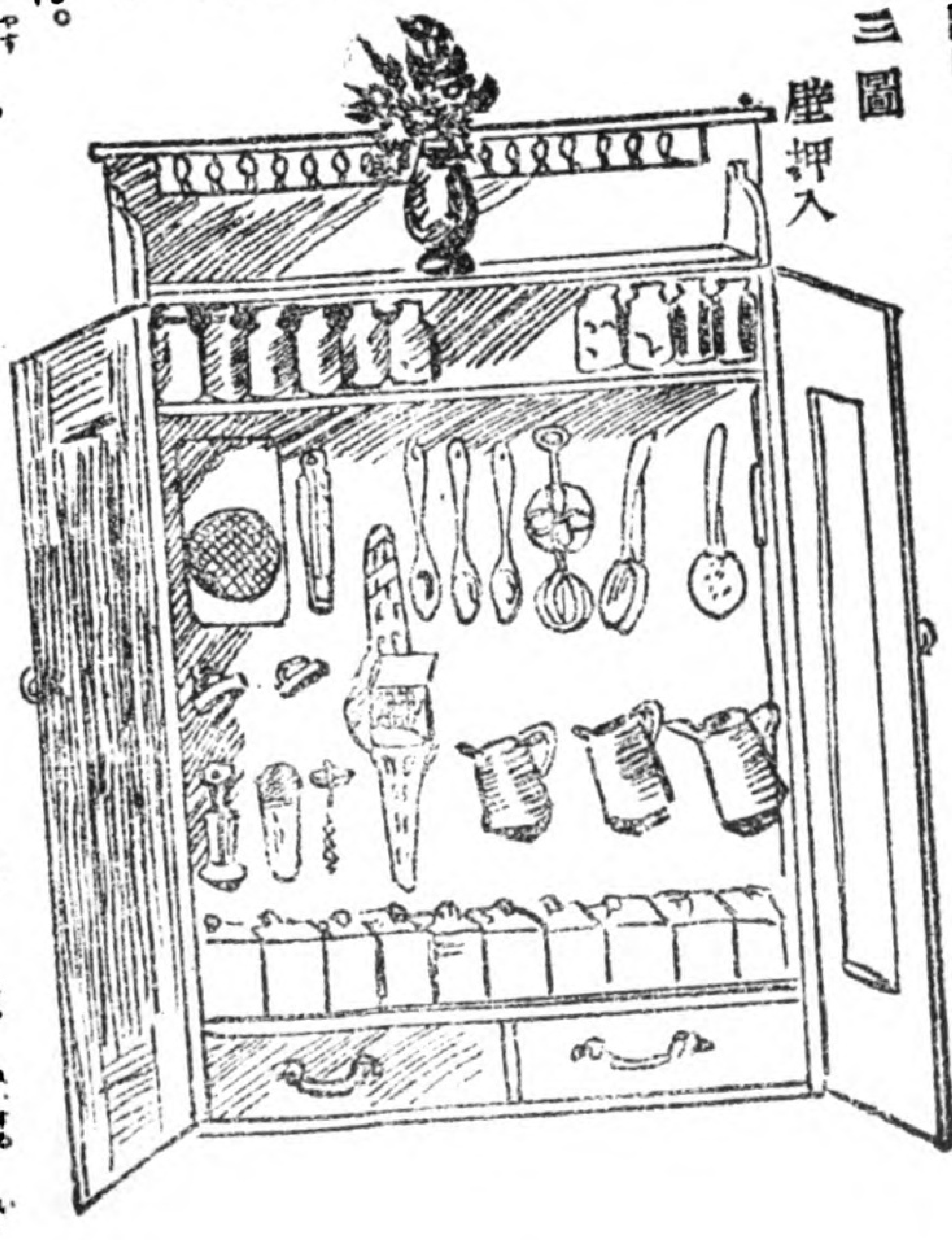
二圖 輕便盆



▲卓子兼用の洗槽▼

洗槽は、大きい方が好いのは云ふまでもありません然して內部を錫或は銅の平なもので張ると、洗ふ時に陶器の破損する心配がありません。陶器の洗槽では洗ふ時に器物が相觸れて破損し易く、又木の槽では不潔物が浸み、惡臭が着て、衛生上に害があります。一圖に示す卓子兼用の洗槽は、私の新考案に成たもので、圖の如く區劃を設けて洗ふ器具を別ち、蓋を閉ちると卓子に代用が出來ます。內部の表面には亞鉛を被せ、各脚には皆車を附けて運用に便にしてあります。上に置いてあるのは洗つた皿の排水を入れる器です。テーブルの表面は堅き木にて造り、四方

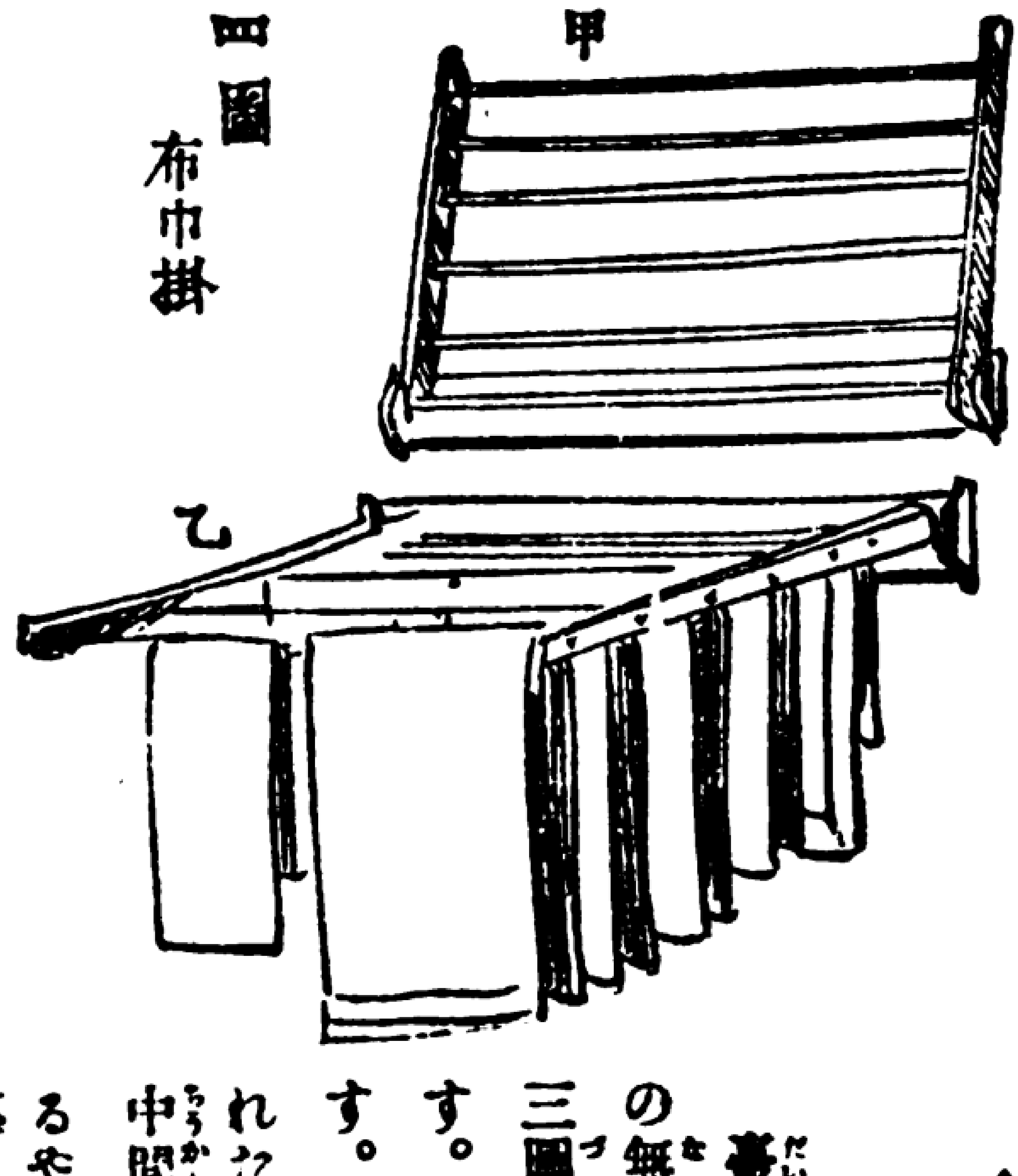
三圖 壁押入



に溝を刻みて、水が槽内に流れ込むやう排水の道をつけてあります實驗する所では非常に便利で御座い升。

▲新案の輕便盆▼

第二圖に示すものは、假に輕便盆と名けてあります。これも私の新案で、四脚には車を附けて何人にも容易に轉じ得る樣になつて居ります。之れに汁などの溢れた時拭き易いやうに、亞鉛を被せたら尚結構です。二重の卓子となつて居ますから、空皿を下部に置き、食物を容れた丼などを上部へ置き出す時は臺所から直ぐ客間まで轉がして行き、下る時は又客間から臺所へ轉がして來るから、給仕人は何人分の役目を一度で足す事が能きます。これは食卓としても使用する事が出來るのみか、臺所だけで用ゐても、戸棚から、一つ一つ皿や其他の器具を運び出す面倒を省き、一つで用が足ります。これは是非一二脚を臺所へ備へて置く必要があります。



四圖　布巾掛

▲食器を入れる壁押入▼

臺所が狹くて、戸棚を置く場所の無い時は、壁に凹所を造り、第三圖のやうな押入を造れば便利です。これを壁押入と名けて居ります。即ち上部と下部とは食品を容れたる罐や壜のやうなものを置き中間に匙、洋杯などを懸け得られるやうに造り、これをストーブの傍などに置くと都合が宜しい、これには適當の装飾を施す事が出來ますから、臺所の飾りともなります。

▲新案の布巾掛▼

皿壷の出納に布巾は數々必要で、これは何時も乾いて、且つ清潔で無ければなりませんが。頻繁に使用されるので、乾燥が遲く、それに兎角置場所に困るものです、之れに就ての私の考案は、第四圖に示す布巾掛で、壁に突着て造り、不用の時は、甲圖のやうに壁面に疊み寄せて置く事が出來るものです。布巾を掛け置く場合は即ち乙圖のやうになります。掛場所が廣い上に布巾の間に空氣が自由に流通しますから、乾燥は極めて速かです。

▲洗滌に必要なる刷毛▼

器具の洗滌に際して、最も必要なるものは刷毛です刷毛程安價で必要なものはありません。鍋の外部や手の附いた洋杯などは、手で洗ふのは困難なもので、これは是非刷毛が無ければなりません。其他凸凹した飾りのある洋杯等を洗ふ爲に小さな刷毛が必要で、齒磨楊子を代用するのも重寶です。之を馬鈴薯、里芋など を洗ふのに使用して手の汚るゝ事がない等色々德用な事があるから、是非とも大小幾個の刷毛を備へて置かねばなりません。之を使用した後は能り乾かして掛けて置くか、又は金網の箱に入れて置くかしなければ、直に厭な臭氣が附きます。獨り刷毛に限らず臺所道具は總て使用後の始末が肝腎で、それを怠ると保が短いばかりか、黴菌などが附着する恐れがありますから、念に念を入れて始末しなければなりませぬ。

◎寢所の燈火は火の用心からいつても、衞生からいつても、消して眠るがよい、この習慣を小兒の時から附けるが一番です、冬の長い夜は自然燈火も長い間燈されるので、時とすると其油煙を吸入して眠つて居る事があるから、成る可く枕元に置かず、足の方で用心のよい所へ置いて、行燈にするか、ランプなら二分位迄にして、其ランプ相當に出して充分に心の燃えるやうにして置かれたい、丸シンや五分シンは引込ませて置くと心がよく燃えないで、其油煙が室の空氣に混じると猶々空氣が惡るく、吸ひ込むで害になるのである。

懸賞 諸國珍菜 晩餐料理

秋穂益實選

第一等　鴨料理（五百目にて五人前）

茨城　本田靜枝

△ふくろむし（二百目）

二百目位の小鴨一羽の毛をぬき、毛焼をなし、頭、足を切りすて、腹の眞中を二寸程庖丁目を入れ、皮の破れぬ様、骨をぬきて、生醤油につけ置き、別に豆腐一丁を能くつぶし、ゆでゝ固くなりたるを上げ、ざるに入れて水氣を去り、更に之を鍋に入れ、それに砂糖、味醂を少しづゝと醤油とを甘かげんに入れ、汁の無くなる迄たきつめ、扨て前の鴨を上げ醤油氣を去り、組板の上に載せ、腹の眞中にゆで玉子五つの皮をむきて両端を切りたるものを竝べ、其の縁に前のいり豆腐をつめ、口を糸にて縫ひ合せ、布巾にて巻き、両端を固くくゝり、其の上を又すだれにて巻き細き繩にてくゝり、之を二十分間蒸して上げ、すだれを除け、布巾の儘にて味醂、醤油、砂糖を入れ、十分間炊きて下ろし、殘りの汁を、別の鍋に入れて少し煮つめ、其中へ葛を入れ、どろどろにたき、それを鴨を一人前二切宛位に小口に切り、糸をとりたるものに刷毛にて、玉子に着かざる樣にぬり、皿に盛る。

別に馬鈴薯四個の皮をむき、柔かくなる迄湯煮し、水氣をさり、裏漉にかけ、西洋辛子、サラダ油、砂糖、鹽を少し入れ、よくねり、酢を入れて、あしらへにする。

△かもしんじよう（二百目）

鴨二百目を肉挽にて挽き、擂鉢に入れてよくすり、それに鹽小匙一杯、玉子白味二個、味醂五勺を入れて又すり、裏漉にかけ、又擂鉢に入れ、長芋二十匁を、わさびおろしにて、すり入れ、能くすり、それに鰹のだしを一合入れ、どろどろになる迄すり、方形の器に入れて、三十分間蒸す。

上等の鰹のだしをとり、醤油と、砂糖とを入れてたき、煮たちたる所へ葛を少し入れて又たき、前に蒸したる、しんじようを一人前三切宛位に切り、右の葛あんをかけ、その上へわさびを摺りて載せて出す。

△鴨素麺（百目）

鴨百目を肉挽にて挽き、擂鉢にて能くすり、裏漉にかけ、又擂鉢に入れ鹽大匙一杯、砂糖大匙一杯、味醂五勺、片栗二十匁、玉子白味一個及び長芋の上等二十匁をわさびおろしにて摺りたるものを入れ、此の六品を能くすり、鍋に湯を沸騰せしめ、その中へ出すりか、錻葉にて製せる物に穴の五つ明あるものかに先きにすりし身をつめて、細き棒にて、押し出して入れ、浮けば、ざるに上げる。

別に上等の鰹のだしをとり鹽少量と、醤油を少し入れ、つゆをつくり

置き、又糸三葉三把を湯煮し、扨て前のそうめんを皿に盛り、その上に湯煮したる、三葉を、適宜に切りて載せ、つゆをかけ、ふきのとうを一寸焼き、吸口にして出す。

評、説明は親切にして料理法巧妙なり。

四等　大根料理（一頁目にて五人前）

尾張　大島次子

大根一本三百五十匁内外、太さ四寸位の物三本を水にてよく洗ひ、葉際の處と尻の細き部を切り捨て、一寸位の輪切りにす。頭の方にて此の輪切を八つ取り、殘りを五分角位の算木に切り、籠に入れおく。さきに取りおきし八つの中にてなるべく不同なる物を、三つより拔きて皮をむき、五厘位の厚さに縦に切り、それを極く薄くせんに打ち、小桶に入れ、鹽をふりかけ、一寸壓をかけおく。殘りの五ツは梅花形に切る是れは一寸手練を要する。先づ紙にてその形を切り置きて、大根を五分位の厚さに輪切りになし、それを五角に切る。而して角と角との中程にて一分程えぐりて角を切りおとす。能く切れる小刀などにて工合よく形を作る。

梅花形を切りてその中央を小刀にて圓くえぐる。大抵一分位外かは殘し底も切りぬけぬ様なす。

△梅花蒸

牛肉か豚肉（魚肉にても可）三十匁を細かに切り、（肉挽器械にてなすも可）、味醂、砂糖、醤油にて煮付け置き、玉子四ッ破り、よくかき、白砂糖中サヂに一パイ、鹽小サヂに半分入れ、又かきまぜ、而して梅花形を蒸籠に並べ、煮付けおきたる肉を五ッに割りてえぐりたる中に入れて、上よりかき玉子を大サヂにて八分目位に入れ、蒸す事四十分餘（先に算木形に切りなきたる大根も是れと同時に蒸しおくと）膳に上す時は深皿に盛りて菊のしほから二ッ三ッそへる。

△大根味噌あへ（普通の味噌七分白味噌三分の割）

白胡麻を炒り、柚の皮少々細かにきざみ、一緒に擂鉢に入れてよくすり後に右の味噌を入れよく〳〵すり、裏漉しにかける。水一合鍋に入れ、白砂糖よき程加へ、火にかけ、味噌も入れて木杓子にてよく煉る。味噌が煮立ちたらば先に蒸したる、算木形の大根を入れ、かき交ぜて皿に盛るなり。

△大根三盃酢

若人參一本を一寸位に切りて、薄くせんに打ち、鹽おしをなし置きたる大根にまぜ、よく水にて洗ひ、しぼり上げて三盃酢をかけて出す。（三盃酢は味醂、酢、醤油、何れも火にかけ冷したる物を同位に合せたる物なり。）

評　大根料理としては巧妙なれ共、家庭料理としては少しく手數を要するの感あり。

四等　大根料理（一貫目にて五人前）

岡振　野口鶴代

△吸物

大根二百目程皮をむき、薄く短册に切り、ざつと湯煮をなし、豚肉中斤ばかり極く薄く切りて、煮へ湯をくゞらせ置き、味噌汁をうす目に仕立て、昆布だしにして右の大根と豚肉を入れ二十分ばかり煮て用ふ。

△猪口

大根三百目程細く薄き短册に切り、鹽にて能く〱もみ、水にて洗ひ、きつくしぼり置き、別に南京豆五合位皮をむき、よくすりて砂糖鹽にて味を付け、酢を少く入れて、とろ〱になし、それに前の大根を入れてあへる。

△皿

大根のふとき處を八分位の輪切となし、角だちたる部を圓め、庖丁にて凹みをつくり、其中に鶏肉を能く〱たゝき、玉子を一ツ混ぜたる物を入れ、深なべに入れて水を入れ、五時間位煮て、能く柔らかになりたる時、醤油をさして三十分も煮て用ふ。

評　料理法簡單にして且つ猪口に南京豆を用ゐたるは妙。

大根（一貫匁にて三品づゝ五人前）

尾張　森ます子

△椀（ふろふき）四百匁

大根の皮を去り、一寸程に切り、また三日月に切り、昆布と鰹節の煮出しをかぶる程に入れ、大根にさはらぬ様にして細火にて四時間位煮る。別に岡崎味噌五十匁をよく擂り、裏漉しにかけ、砂糖十匁、味醂五勺を入れて煮つめ、それへ卵の黄五つを焼きて細かに叩いたものを、鍋の卸し際に入れてかき混ぜる。さて大根がふつくりと能く煮へたればそれを椀に盛り、前の味噌を小皿に入れて共に出します。

△皿（ソツプ煮）四百匁

大根の皮をむき、一寸五分位の輪に切り、大根の間々に鶏の骨を細かに切つたものを入れて、順序よく、なるべくつぼ深き鍋に並べ、水をたつぷりにして四時間程煮る。充分よく煮へたれば別に鍋に大根の煮汁三合ほど取り、それに砂糖少量、味醂一合、醤油一合を入れ、その汁にて大根をくづさぬ様に煮つけ、皿にもりて出します。

△酢のもの（二百匁）

大根の皮を去り、千突にて突き、（千突といふは切干大根を突く道具なり、この道具無ければ千六本にきりてもよろし）、鹽を少しふりてかきまはし、一時間ほど置く。別に干柿十個を細かくきざみ、味醂と酢を少し入れて、これも一時間ほどつけ、それより擂鉢にてよくすり、前に鹽にて漬け置きし大根の水を

よくしぼりてこの汁と共に和へ混ぜて小皿にもる。

評 大根料理としては結構なれ共蜜柑を用ゐざるは惜し。

四等 蜜柑料理（三十五個にて五人前）

紀伊 松島千枝

○魚味噌燒

みかん 五個
いわし 二十五尾
卵 二個
味噌 二十匁
生薑 少々

まづ蜜柑の枝つきたる方三分ばかりの所より切り落し、汁をしぼり、內の實をぬきとり、別にいわしの骨をぬき、すり鉢にてすり、味噌を入れて更に能くすり、卵をわりて入れ蜜柑の酢少し、砂糖少々を入れて能くすりまぜ。尙生姜をおろしてまぜ、之を先にぬきとりたる蜜柑五個の中につめ、周圍より能く燒くべし。

○楠公すし

みかん 七個
針魚 一疋

飯五合に酢を合せ、（先にしぼり置きたる蜜柑の酢も加ふ）、之をさまし置き、別に針魚を細づくりとして酢に浸し、又蜜柑の皮を去り縦に二つに切り、更に薄く輪切りとし、總て飯をにぎりつけ、下に針魚を中にて菊水の形とし、紅生薑を添へて供す。

○蜜柑糖

みかん 十三個

皮を去り、二分位の輪切りとし。とかしたる砂糖の中に入れ、飴にかきまぜながら、とろ火にて煮つめ、暫く冷し、更に砂糖にてまぶし、皿にもりて出す。

評 蜜柑料理としては面白し。但し蜜柑を用ゐざるは惜し。

等外 めじ一尾（七百匁）

兵庫 石原まつ子

先づめじの頭を取りて三枚におろし、皮をむきておく。

一 吸物 めじ二百五十匁、ゆで三つ葉二把

魚肉を擂鉢にてすり、（內五十匁は燒物の附け合せに用ゆ）、少量の鹽にて味をつけ、適宜の大きさにまるめて湯煮し、三つ葉を一寸五分程に切りたるを添て椀にもり、清汁を注ぎかけ、吸口にそぎ柚子を添て供す。

二 燒き物 めじ三百匁、胡麻一合五勺、玉子一個

魚肉を五つに切り、醤油にひたし、串にさして燒き、別に胡麻をいりて擂り、醤油、味醂にてゆるめ、玉子を溶きて混し、之を燒きたる魚にぬりてあぶり、串をぬきて皿にもり、尙別に大根の皮をむき、二寸程の管に切り、之をたてに持ちて一分位の厚さの色紙形を五枚つくりて、湯煮

で、味醂、砂糖にて味をつけ、扨て前のめじのすり身を醤油、味醂、砂糖にて味をつけたるを心になして巻き、一個を四つ程に切りて、一人前となし、焼物にそへて出す。

三ぬ　た　めじ残り全部、うど五本

魚肉を一分か二分程につくり、うどの皮を去り、一寸程の短册に切り、水に浸してあくをぬき、布にてしぼり、之を別に味噌をすり、砂糖、酢にて味をつけたる中へ魚肉と共に入れて、能くまぜ、小丼に入れて、きざみ生姜を載せて出す。

評　先づ結構々々。

生椎茸（四百匁にて五人前）

鹿前　中尾結子

○吸物

生椎茸百五十匁の傘丈を取り、根茎を除き、之を一分位の厚みに短册切りとし、別に絹漉生豆腐を同じく短册に切り立て置く。扨て深鍋に鰹節を煮出し、酒と醤油にて味を附け、煮立ちし時に右の生椎茸を入れ、五分間後に生豆腐を入れる。此時上葛十匁を水にて固まりなき様にとかし豆腐の煮上るを待ちて之を入れ、手早く鍋を下ろしてすぐ椀に盛る。其頭を小さく刻みてはなし物に用ゆ。

○附焼

先づ醤油一合に味醂五勺砂糖少々を加へて附汁を拵へ置く。扨て生椎茸百五十目分の傘を取り、根茎を除きて、初め生焼に焼締り、二番乃至三番焼と返す〳〵に附焼きして、焼上げたる時に、小口切に切立てゝ、花鰹をかけて皿に盛りて出す。

○玉子包

先づ生椎茸百匁と前に使用の残りの根茎とを共に細々小さく刻みて醤油と味醂にて風味よく鍋にて煎り上げ、之を鉢に取り上げ、それに芹を少し刻みてふりかけ、よくかきまぜ置く。次に大玉子五個を丼につぶしてかきまぜ、之にメリケン粉を匙一杯程入れ、食塩少しと味醂少しとにて味を附け、猶かきまはして後ち厚焼鍋にて焼き、中焼の頃に前に煎り上げし品を入れて包み、之を狐焼きとし、焼き上りて後五人前に切り分け、皿に盛る。

評　椎茸料理として結構。

鰤一尾（七百匁）

横濱　鈴木みつ子

○膾（百五十匁、大根、人参、うど、生姜）

先づこけをふき、頭を去り、三枚におろし、腸を出し、冷水にてさつと洗ひ、薄身を取り、毛抜にて小骨をぬき、内百五十目程を取り、塩をふりかけ置く。

平たき皿に酢二勺と塩少々を入れ、其中に右の肉を三十分ほど浸け、後ち取出し、刺身の如く庖丁す。

大根、人參をなるべく細く千六本に切り、鹽にてもみ、水にてさつと洗ひしぼる。

うどの皮をむき、短册に切り、水にはなす。右の品々を皿に盛り、其上にうすく切りたる生姜をのせ、甘酢をかけて出す。

甘酢は味醂六勺を煮返し、酢一勺五分、醬油極少々入れ、煮立たせて冷ます。好により砂糖少々入るも差支なし。

○鰤あんかけ　（二百五十目）

少々厚めに刺身のやうに切り、十一切れづゝ位にわけ、竹の皮を敷きたる蒸籠に入れ、二十分間むし、皿に盛り餡をかけ、卸し生姜を添ふ。

餡は煮出し七勺に、醬油一勺、砂糖少量を入れて煮立せ、葛（茶匙壹杯）を水にて溶き、其中に入れよくかきまはして煮る。

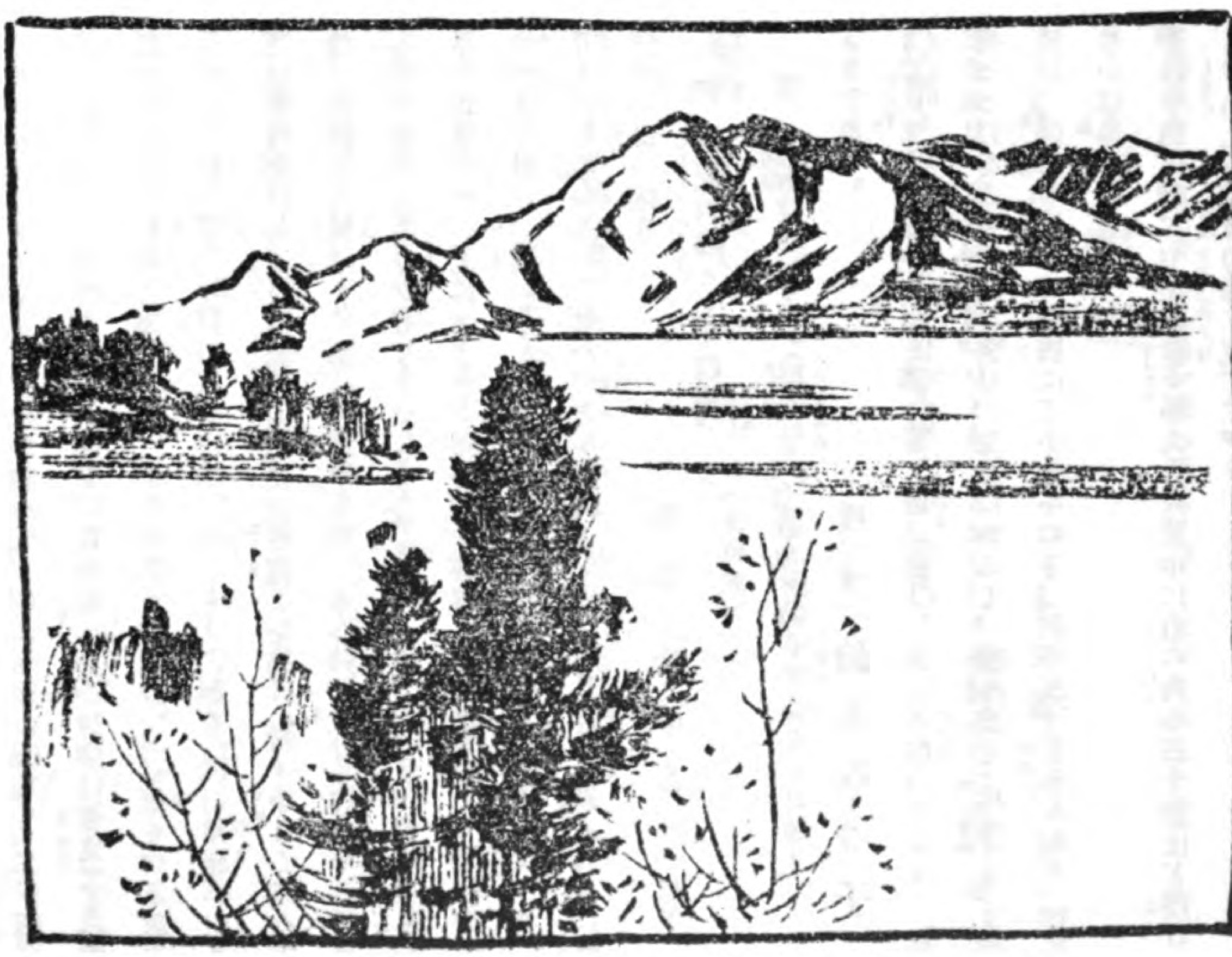
○汁　（三百目）

深鍋に水をたつぷり入れ、先きの頭及び骨をいれ、三四時間文火にかけ、殘の肉は金網にて燒き、さい形に切り置く。

並味噌五十匁を裏漉にかけ、右のスープにて溶き、（少々濃目）、煮立せ花かつをゝ少々入れ、椀に盛る時魚を入る。

藥味に小口葱、茗荷、しその實、陳皮みそ、海苔等を小皿に盛りて出す。

評　普通の仕方にて結構。



鷄卵の珍料理法

△たまご羊羹――まづ黄味と白味とを分ちて別々に擂りつぶし、其黄身の方へは食料青粉を擂りあはし、白味の方へは紅を擂りあはし兩方共適宜の砂糖、少量の葛粉、微量の食鹽を加へ更に充分擂り合して後、別々に型に入れて羊羹の形となし蒸籠に入れて蒸すなり。

△柚子卵――殼のまゝ茹で、殼を去り黄身と白身とを合せ擂りつぶし、適宜に砂糖と少量の擂したる柚子と少しの鹽とを加へ擂り合せ適宜の木函に入れて押蓋をなして押し固むるなり、柚子の香氣ありて風味よし。

△丸打卵――まづ美濃紙にて細長き形の嚢をこしらへ砂糖の分量を加へたる卵を攪きまはし、漏斗にてこれを合の紙嚢に注下して熱湯中に入れ煮たる後冷水に入れて外面の紙を剝ぎ去れば圓切の煮拔卵が出來上るなり。

△海苔卷卵――卵を薄燒となし其の未だ溫氣を失はざる内に火どりたる淺草海苔の上に展ばしとも〴〵に卷き、暫時押しつけて後適宜の寸法に切りて供す。

△つみいれ卵――まづたまごを型に入れ團子ほどの圓さとなして燒き、汁の實又は旨煮などの料となす。

△油揚卵――たまごを割りてよく攪きまはし、これに饂粉少許を加へ、更に混せあはしてべと〳〵となし匙にて適宜に掬ひ取り、熱油に入れて天麩羅となして食す。

△磯燒卵――たまごを解き海苔を焙りて揉みたるを適宜に和せ、型に入れて燒くなり。

△蒲燒卵――海苔を適宜に長方形に切り其一面には解かしたる卵をぬりつけ、油揚となしたる後更に稀醬油に浸し、焦げ付ぬ樣に炙るべし、一寸した肴に妙なり。

△母子卵――鷄肉をきざみ鍋に入れて煮、醬油と砂糖にて味をつけ、これを笊に移して液氣を去り、又鷄卵を普通の仕方によりて三分位の厚身に燒き、其上面の全く固まらざる内に右の鷄肉を其面にまきちらし、直ちに火より取り卸して徐かに卷き輕く壓すなり。

△青海燒卵――青海苔を焙り揉みくづし、粉となし水

嚢にかけて篩ひ、これと鶏卵と混せ合して炙型に入れて焼くなり。

△淡雪鶏卵＝＝これを作らんには豫め松魚節の煎汁にて汁液をこしらへ、これを煮立てゝ更らに鶏卵の蛋白分を別器に移し、茶筅様のものにて充分これをかき廻し、器中のもの全く泡花となるを待ちて右の液を注すべし、其狀恰も春野の淡雪のごとく、其味淡泊にして一寸風味あり。

△かき鶏卵＝＝これは「卵とぢ」と大同小異にして唯異る處ろは稍その液を多量にして葛粉汁をひき卵を入れて後充分にこれを掻きまぜるも決して液の濁らぬ所ろが特色なり。

△五色卵＝＝鶏卵を殻のまゝに湯煮し、其の殻を剝ぎ去りて黄と白身とに分け、別々に擂鉢に入れてすりつぶし、これに砂糖で味をつけ、白味の半分を分けて取りこれに食料青粉を擂りませ更に食料紅を加へたものと青粉を加へたるものとの各一半を取りてすり和る時は都合五種の色彩を得べし。

△ふきよせ卵＝＝たまごを茹で黄身と白身を分け、裏漉しにかけ、まづ白身を箱につめ、其上に黄身を詰めぎつと押して蒸籠に入れて蒸すなり。

△鶏卵豆腐＝＝玉子をよく解き、かきまはし、鰹節の煮汁に味醂醤油を合せたるを玉子の半分程に入れ、なほ十分にかき廻して丼に盛り、蒸籠にて蒸し揚るなり。

△きみ酢＝＝玉子を茹で黄身ばかりを裏漉にして、酢に少しの鹽とを入れ、ざつと煎り鍋か、海老又はさより、きす、甘鯛など當座酢の魚を仕立るごとくにして箱に入れ右の黄身酢をかけるなり。

△玉子しんじよ＝＝よき葛粉を水にて解き、玉子を擂りませ、味醂醤油を加へ、鉢に入れ、蒸籠にて蒸すなり、豆腐のごとく固まりたるを金杓子にて掻きとり、葛あんかけにてもよし、又其時の野菜を取合せて椀盛にもするなり。

低唱微吟

桃園主人

ムラ〱心に邪の波が寄せて來た時に私は必度昔からの敎へとなるべき詩歌を靜に口吟する。私が事に失敗した時或は憂き艱難に會した時なども亦た然するのである。それは丁度佛敎信者が口にナムアミダブツを唱へるのと一般である私は斯くすることによりて再び安心と希望とに着くことが出來るのである。――その中で諸孃のためにと撰んだのが左の數首である。

一、八雲立ついづも八重垣つまごめに
八重垣つくるその八重垣を　素盞嗚尊

大意、明けし、つまごめは妻籠めてなり。

こは素盞嗚尊が櫛稻田姬を娶りて、これから新世帯をし給はんとして出雲の國に宮を築き給ふ折から、八色の雲のうら〱と立ち昇り行くを見て詠ませ給ふた歌である。三十一文字の短歌の源はさることながら本邦愛情に厚き夫婦の美德は今も猶その流れを汲んで居るのではあるまいか。されぱまことにやさしき歌として味ふべきものである。

二、萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草
いづれか秋にあはではつべき　平家物語妓王

大意、萌え出づるも枯るゝも同じ野べの草なればいつか一度は秋にあふて枯れ果てればならぬといふ意。

歌の意は誠に悲觀的である。私はこの歌を口吟むとすぐ悲しい小波が胸一杯に漂ふて來る――といふは畢竟この歌に何等かの眞理が含まれて居るからであらう。東坡が人間榮耀風前塵と觀じ佛者が生者必滅の理を說くもまた已む得ないのである。さるからに諸行無常之れが人生と悟道して見ればさて富貴も羨しからず、貧賤も悲しむに足りない。結局心は安らかになつて來る妓王が半生の夢醒めて嵯峨の奧なる山里に柴の庵を引き結び念佛三昧に後生を願ふ心まことにあはれげなれ

ど彼の「宿かさぬ人のつらさをなさけにて朧月夜の花の下ぶし」と世俗を脱する處に眞の安心と幸福が至るのではあるまいか。また萬葉集家持の歌に「咲く花はうつろふ時あり足引の山菅の根し長くはありけり」とあるなどよく〱味ふべきである。近來女子の虚榮心高くなり行きて何人も一時の花に憧憬するを見ては私はすゞろ彼等の行末が悲しうなつて來る。

三、春の夜の暗は文なし梅の花色こそ見えぬ香やはかくるゝ　素性法師

大意、春の暗い夜であれば花は見えぬけれどよい香がするので梅花が咲いて居ることが自然判明るといふ意。文なしは條理のわからぬこと、香やはかくるゝ、やはは反語はかくれやうか決してかくれはしないといふこと。

婦人はその仕事から云ふても陰氣であり其心ばへも常に柔しくて謙遜なるをよしとするのである。つまり婦人の全身は夜の布につゝまれて居る。彼れらは其髪の装飾に其服装に其臉色に全力を盡して居ることは著しいに違ひ無い。されどかくて彼れらの眞價は益ゝやみに導かれるのである。何となれば世に光榮を歌はれ名譽を博することは決して外見から來るものでないからであるされば花の面がけはなけれどつゝむ心の床しきまにまに何んとはなしに人を引く力があるといふことを忘れてはならぬ。たとへ隠れたる仕事でも全力を以て盡すべし。されば世間は案外公平である。其の文もなき暗にも身の光は自然煥發する時が來るであらう。唯誡むべきは「不レ患レ無レ位。患レ所ニ以立一。不レ患レ莫ニ己知一。求レ爲レ可レ知也。なることをぞ。

四、我が袖の玉と拾ひてつゝまばや打ちつけられし石も瓦も　拾遺集

大意、明けし。

婦人は心狹ければにや、一寸氣に障ることでもあればそれがまたいま〱しうて居ても起つても居られぬといふ仕末。あなにくし、あなうらめし、あなかなし、などいふことは婦人の専有語ではあるまいか。されどよく〱自省せよ。然らば罪は案外己れにあることを見出すであらう。「右の頰を批ば亦左方の頰をも轉じて之に向け」とは耶蘇の敎である。比べ思ふべし。



苦樂交々 老婦人の懷舊談

紅涙女史



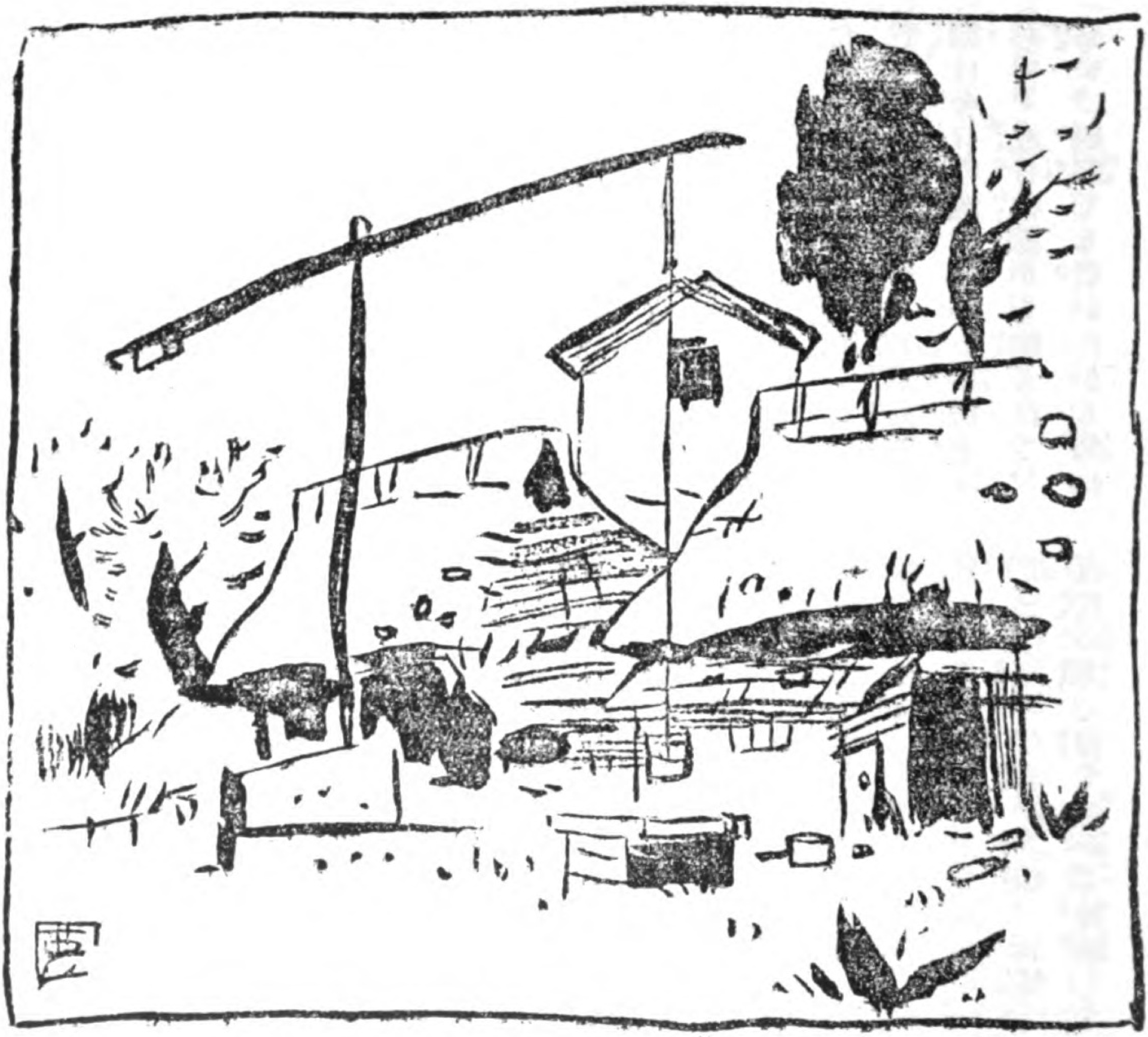
私の實家は、九州の小倉在の、田舍ながらも元一國の城主であつた△△の子孫、私の育つた頃でも、△△城と申してまだ城趾も殘つて居りまして、土地の名も家の姓をそのまゝの△△村と申します。その頃私の父親は大庄屋をつとめ、下女下男も澤山に使用て隨分盛に暮して居りました。私は其總領娘で、大層父親から可愛がられて、娘時代はまづ何の苦勞も知らず誠に呑氣に育ちました。併し父親が可愛さ餘つて、だんだん年頃になる弟もあり、何う致したとて私は嫁入せねばならぬ身體ですのに、それを手離なすのが嫌で、分家でもさせようか、嫁にやらうかやるまいかと案じた揚句、彼方此方より降る樣な縁談も、身分はよし身代もあり當人も難は無ささうなが、どうも兩親揃ふて居つては、まして鬼千疋の諺にもある小姑が三人もあるから、アレでは此娘が苦勞をするであらうからとか、身代もよし八ヶ間しい姑もなしさし向ひの氣樂さうなれど、當人がちッと承知がならん、それに元の生れが賤しいから身代に目がくれて大事の娘をやつたのぢやなどゝ云れては家名にもかゝはる、などゝ八ヶ間しい詮議立。元の家柄をのぞんで私には過ぎた樣な話も多かつたのですが、皆何の彼のと難癖つけてお流れにして仕舞はれた。

その中に年の方は遠慮なく老けるし。口にこそは流石に出しては云はなんだが、心ではエゝもう好い加減に嫁にやるならやる分家さすなら分家さすと早く極りをつけてくれゝば好いにと思ふた事もありました。イイエさうお笑ひ遊ばすな、これは本當に少しも秘さん

處で私は二度も三度もしみ〴〵さう思ひました。これ程に勿體つけた私の縁談ですから定めし不足の無い立派な處へ行つたらうと思召ませうが、これが相縁奇縁とでも申しませうか父の友達で蘭法醫をして居られた亡夫の處へしかも二度目の嫁として廿六の暮に貰はれて來ました。その時はもう亡夫は丁度五十二の、實父とは一ッ下の花婿樣。平素は誠に優しいニコ〳〵とした叱言一つ言はぬ好い人でしたが、一つ落度がありますと能うも〳〵あの樣に覺えて居られたものぢやと思ふ位前々の手脫を並べ立てゝ叱られますので、毎日の事もそれは〳〵心配で殆でまア親と亭主を一緒に持つて居る樣な心地がしてなりませんでした。

此家の家内は、私達夫婦と、その時七十五になられて居つた姑と、先妻に子供が無かつたので十三になる男の子を養子にしたのがありました。處が其の養子と云ふのは男の子ではあり、惡戯も激しいので、姑樣のお氣にかなひませんで、隨分惡いには違ひ御座んせんが、それはもう可哀想な位八ケ間しく叱られますので餘りに不憫な事と思つて何彼につけて私が陰へ廻つてかばうてやりますと、子供は正直なもので、母さん母さんと私計りをしたひました。さうされますと憎まうとて何うして憎まれませう。すると又それが姑樣の御氣に逆ふので、終ひには私迄も目の敵にされて仕舞つて辛い思ひも致しましたが、老る年はあらそはれぬものか、氣丈夫な確かりした方でしたが、七十七の時からフト中風になつて床につかれました。平常しやんとした方であつたのが、急に身體の自由は利かなくなつて一々人手を借らねばならないのですから、だん〳〵疳は強くなる計りで、時にはお菜が氣に入らぬとて自由の利く手で傍の鍋を投げて熱い粥が膝にかゝつて火傷なさつた事もありました。何の彼のと何うやら日を重ねて暮す中、私は子は無いものとあきらめて居りましたのに、何うした拍子か、參つて六年目に、フト妊娠つて生れましたがアノ伜です。サア今迄に眞の孫と申者の顏見た事も無い事とて、其喜びなされ樣と云つたら……。いよ〳〵妊娠と分つた時からは、今迄の御

樣子は何處へやら、利かぬ身體をじれつたがり、何をしては不可ぬ、彼を食べては、乳に惡いと、大切に〳〵して下さいますし、夫の喜びは又改めて申までもなく、今迄に覺えぬ嬉しい樂しい月日を送るうちに孫が出來たので、過度の喜びは病體に障つたのか、急にがつかりなされて、彼子が生れて百日程過ぎて、丁度床に就きなされてから丸三年目に、眠る



樣に死亡られて仕舞ひました。

養子はもう年頃に成ましたからそれぞれ修業させまして、私達夫婦は只幼い人の成人を樂しみに暮して居りました。その頃は今の樣にお醫者樣の良いのが御座いませんから、家業は長崎仕込の蘭法醫と云ふので、彼方からも此方からも引ッ張り凧の樣に呼びに來られる、御領主樣へも上ると云ふ樣な風で、目の廻る程流

行りますし、弟子も澤山に出來ますし、トン／＼拍子の大繁昌、金も出來るし、田地も買ひ、山も出來たし致しましたので、地面内の南の方に大きな谷がありましたのを大工事を起してつぶして家を立てました。此の家を立てるについて、今の方に此の様な事申しても皆迷信者と仰有ッてお笑ひなさりませうが、昔の人はヤレ星廻りがどうの方角が惡いのと委しくしらべますものですから、親類の者などは、南は八方塞りだからよしたら可からうと大反對を申しましたが、一酷な質の人でしたから、己れの地面に己れが家を建てるに何がたゝるものか、そんな神様があつてたまるものか、主人の言ふ事を諾かん様な神様は地面外に追出して仕舞ふさ、なんて申まして、花壇をつくるやら、家も可なりのを普請致しましたし、先づ私共の分際としては豊かな樂しい暮しを致して居りましたが、人間萬事塞翁が馬とやら、昨日の淵は今日の瀬戸、好い事計では過されぬものと見えまして、或日往診から歸られて、今日は何とやら心地が惡い、風邪でも引いたかも知れぬ、と床につかれたが原因で、だん／＼熱氣が高くなり、様々に手を盡しましたが、遂々其頃「シヨウカン」と申す病の爲めに死亡られて仕舞ひました。尤も此時に親戚の者などは人の云ふ事を用ゐぬからそれで惡かつたのだなどゝ申しましたが、まさかさうでも御座いますまい、これも壽命で御座いましたのでせう。

その時私は丁度三十三の厄年、泣いたとて、悔んだとて、死亡つた人の生きかへらうでもなし、それよりは幼い人を立派に育て上げて父親が無いからなどゝ人様に笑はれぬ様にしなければならぬと覺悟をして氣をとりなほし、葬式なども、人様の御親切をおかり申して兎に角すませて仕舞ひました。サア私一人になりましたら、これが世間の人情で御座いませうか、もう色色と今迄世話してやつた者などでも、腹の立つ事には手の裏を反へす様な仕打ち、殊にひどいのは、亡夫の兄となる本家から、お爲めごかしに、私に、お前はまだ三十早々の若い身體、再婚も出來る身だから、子供は私の方で育てるから歸家してもらひ度い、と申ます

が、私は今更實家へ歸らうとは思ひませぬ、別に暮しに困つて貴兄方の御世話になる事も御座いますまい、まあどうやらかうやら過して行けませうかと思ひますから、御親切は有難う御座いますが此のまゝ亡夫の後を續けませうと覺悟して居ります、それに養子も成人して居りますし、引き續いてやつて出來ぬ事もあるまいと思ひますから、折角の思召では御座いますが。と堅く〳〵申ましたら、何がさて目指す處は財產なのですから、女子供計りでは危いから財產は此本家で見てやらう、など〻親切づくめで申ましたが、私も養子も頑として渡しませんでしたと、それを根に持ちまして何の彼のと難題計り申しますので、私もこれにはホト〳〵弱りまして、實家へも相談しましたら、實家の父などは大變に立腹して、大悶着の果しが御座いませんので、色々と考へました末、私も五月蠅くなりましたから、養子にもよく申ふくめまして、折角亡夫のこしらへた田地も山も一切取られる事を承知の上で、本家へやつて仕舞ひましたのです。さうしますと、それにも飽き足らず、此方がすなほに出たのを好い事にして、色々と云ひ草つけて、裏につんである普請用の材木迄スッカリ誤魔かしてとられて仕舞ひました。殘つたのはほんの私が嫁入りする時に化粧料にと持參した少し計りの山と田地と住んで居る居宅計りとなりました。



實家からは、女子供計の世帶は辛いものだ、惡い様

にはせんから實家へ歸つて來いと、再三再四申してはくれましたが、今更子供をつれて實家の弟嫁に氣兼するのでもなからうし養子も最うどうやらかうやら後つぎの出來ぬ事もあるまいからと、弟の志に甘へて、殘つて居る私の山と田地を相當の價で買ひ戻して貰ひ幸ひまだ片づかずに居た私の末の妹を養子の嫁にもらつて、矢張りそのまゝ亡夫の後をついで暮すことになりまして、ヤレ此れで一安心と思ひましたのも束の間で折角まとめた若夫婦の間がどうも思はしくなくて苦情の端へ間もなく、それに子供も出來ず、結婚さして四年の間グヅ〱言ひながら暮しましたが、とても末長くつゞかぬものと思はれたから、双方熟談の上、養子は本人の望み通りに離縁して別家さす事にして一段落をつけ、當分又妹と三人水入らずの暮しをして居りましたが、女にすたりはないなどゝよく皆さんが仰有いますが、まことにさうで、切髪をした私に、ヤレ嫁に行かぬかの、養子をせぬかのと、もう〱五月蠅く云はれますので、これと云ふも養子を離縁して女計り居るからであらうと存じましたから、又妹にすゝめて養子をしましたが、どう云ふものか矢張り不和で、ゴタゴタした末に又離縁。

一體此の妹は殆で男の様な氣質で、一寸した話が、養子の方で用を云ひつけても、エ、五月蠅いな、何を出せ彼を出せと、貴方も人間ぢや、手があるでせう、女の手計り借りたがるもんぢやないと言つた様な風で主人が怒りますと此方は負けて居らぬから、始終ゴタゴタが出來るので御座います。養子の身に取つては堪居り難くもなりませう。男嫌ひとでも申しませうか兎も角も妹は餘程風變りの人間で御座いました。

仕方なしに奉公人なども暇を取らせて又女世帯を張ります中に、フトした事から私は病氣に罹りました。色々に手をつくしても思はしく御座いませんので大心配の處へ、惡い事は續くもので、丁度例の長州と小倉の戰爭、寢て居る枕元へ鐵砲の玉が飛び込んで來るといふ仕末で、いくら病氣でも臥て居るわけには參りません、ザッと其處らを取りまとめ、家財道具は其儘に

して山の中へ逃げ込み、假小屋で幾日かを過しましたが、戰はだん／＼激しくなつて、此の小屋の中にも居られぬ樣になりましたので、別に何處と申す目當も御座いませんでしたが、筑前の國を指して出掛けました。筑前に參りますには國境にある杉谷山と云ふ大きな山を越さなければならぬので、子供の手を引き乍ら、道を急いで山の麓迄參りましたが、もう日はトップリと暮れ果て、餓じくはなりましたが、物賣る家も見當りませんので、とある百姓家へ行つて賴みましたら田舍の人の事とて、何もお口に合ふものは御座



いませんがと言つて快く麥飯とお漬物を出してくれましたが、此の位おいしく頂いた事は御座いません。草臥はしましたし、病氣の身ではあり、今夜は此處で泊めて貰はうかとも思ひましたが表を通る人の話に氣をつけるともう隣の村まで長州勢が攻めて來たと云ふ風評。サアかうしては居られません。宿の人も逃仕度なのです。それで子供にも云ひふくめて大決心をして、月明もない夜を、子供と二人此の深山を越す事にして、だん／＼と登つて行くと、切石を立てた樣に嶮はしい坂道で、老杉

老松の木の間をチラ〳〵ともれる星の明りを便りにして、だん〳〵と登つて行くと、突然ヅドンと云ふ大きな音、ハツと思つて思はず其處へペタリと尻餅をつきました。

すると麓の方からは、多くの人聲がして、もう下まで攻めて來た早く逃げねば不可ぬと云ひながら皆ドンドン逃げ出す樣子、サアかうしては居られぬと一生懸命、子供を引き立てゝ、道なき道を探りながら、尾花薄の繁る中を掻分々々逃げて參りますと、不意に後から襟首をしつかりと捉まへた者が御座います。（未完）

竹田宮妃殿下の御近狀

御成婚後間もなく御身重にならせられたれば、御心身の御安靜を第一とせられつゝあるは申す迄もなき御事にして、天氣晴朗なる朝夕は御園内の御散步あり、時には御平服にて附近を御微行あらせらるゝ御事もあり、さて高貴き御身の殊に今回は始ての御産にしもましませば、定めて御日常の御攝生も嚴かに御手重く愼ませ給ふなるべしとは、兼てより恐察し奉る所なりしに何事も皇族妃としての範園を出でさせられぬやうにとの聖意を畏み、高輪御殿の昨日には引換へて、多年御附添申上げ居りし田澤侍醫を召させられ御姙娠ありて後も、宮家より宮内省の婦人科醫相磯氏を御依囑ありしのみ、日々の拜診は田澤醫師承はり昨今は追々御臨月も近づきたることゝて相磯氏は一週一回位御見舞申上、倚ほ産婆は嘗て皇孫殿下御取上げの光榮を荷ひし岩崎直子に御命を下し給ひたりとぞ、御姙娠中の御攝生とても更に常人と異らせ給ひしことなく、醫師よりは只適度の御運動と御外出を禁め參らせしのみ、御經過は最初輕度の惡阻の爲に多少御心地常ならざりし日もありしが、頓て全く御治癒あり、其後は引續き至極御順調に渡らせられ御胎兒の御發育も申分なく御出産は多分二月紀元節前後なるべしとぞ申合へり、昨今御課業の御餘暇には和漢洋の英雄傳を御閲讀あり、或はお茶の湯の御遊びなど專ら御精神の修養につとめられつゝありと承はる。

我輩は下女である

下女の境遇に居る下女の心持

無名女

▲御飯の黒焦げ、洗濯物の山積▼

眠い眼をこすり〳〵、例によつて時計を見ると五時半である。驚いてお仕度にかゝる。都合よくお湯だけは早く沸いて呉れて、やれ〳〵と思つた甲斐もなく、とうと御飯を失策つて了つた。上の方が煮へる時分には、底はもう真黒で、鼻も向けられない臭さである。中まで黄ろくなつてゐた。何うしようかと思つたが、断然炊き直すと決心して、大急ぎでそれに取り掛つた。餘り馬鹿げてゐるので、奥様に謝罪る機會を失つて了つたが、一寸睨まれたやうだつた。すぐ謝罪ればよかつたのである。

湯殿の隅を見ると洗濯物が山のやうに溜つてゐたのには、今更ながらうんざりとした。もう腕が萎へて、他人のもの見たやうになつてゐる。つらい〳〵と思ひながらも、其實、大抵の事は辛抱も出來るが、何う考へて見ても洗濯ばかりはしたくない。厭だ。心から慄へる。けれども別に、此様な事をやらねばならぬ下女の境遇はつらいものだとも思つたわけでもなし、又、自分は何故こんな事をせねばならぬのだらうかとも思はぬ。そんな生温い境は通り越して、たゞ何かなし厭なのだ。何うあつてもしたくないのである。

然し、そんな事を言つて濟むわけでもないので、氣だけは死物狂になつて洗つて洗つて、洗ひ抜いた。それで何うにかやつと片付いた。

▲座敷乞食▼

お晝前にまた島屋が來た。よくチョコ〳〵やつて來る人だ。一體よその家を何と思つてゐるのだらう。來るのは別に構やしないが、何時も食事時を狙つて來るから、お仕度の調子が狂つて了つて、困るのは私一人

だ。それも延引ならぬ用事があるのなら、仕方ないが、何でも食事時にさへ來りや御飯が食へると思つてゐるのと見える。其癖くだらん話ばかりしてゐて、食ふだけのものを食つて了ふと、のこ〳〵然として歸つて行く。圖々しい人もあればあるものだ。あんな風にしてりやお米なんか買はないで濟む——ア、また例の根性が出て來たな。もう止めよう。あの人はあの人、私は私だ。あれはあゝいふ人として置けばいゝぢやないか。もう以後斷じてこんな事は思ふまい。下女根性ほど厭なものはない。この根性を捨てゝしまはなければ駄目だ。

▲屑屋屑屋▼

屑屋に、ありきりの役に立たないものを賣つた。私を奥樣々々と言つてゐる。廣い世界に私を奥樣と言つてくれるのは、恐らく此屑屋一人だらう。なんぼ何でも、奥樣か御三どんか、見たら分りさうなものだ。故意とこんな事を言つてるのかも知れぬと思ふと、急に我と我身が不憫になつて來た。もう屑屋を相手にする氣になれず、だまつて引込んで居た。錢を置いて行つたか何うだか見ようとも思はなかつた。

▲友の手紙▼

お三重さんから手紙が來た。此間の返事だ。字は大分うまくなつたが、相變らず不得要領な事をだら〳〵と書いてゐる。讀んで居ながら、ウツカリしてゐると何時の間にか分らん事になつて了つてゐる。一字一句よく噛みしめて、少なくとも三度は讀み返す必要がある。それでも實はよく分つてゐないのだ。何う言ふ事を私に知らさうと企てたのか、といふ位の事は分る。然し乍ら。こんな厄介な手紙でも、はる〳〵故郷の空から來たのだと思ふと、そゞろに懷しい。田舍の人は何故かう暢氣なのだらう。私が此間やつた手紙は、一週間程捨てゝ置いて、やつと書き上げた——一尺足らずのものだ。此頃は收穫で忙しい譯だらうに、何の屈托も無ささうだ。私もあゝ言ふやうに暢

氣になりたい。唯、このムシヤクシヤした暗い重い頭を、すツと透きとほるやうに明るくしたい。輕くしたい。出來る事なら、ピストルで一發、打拔いでもいゝ。一思ひにメスで剔つても更に苦痛ではない……といふやうな氣がする。

▲お孃さまの假病▼

二時頃、道江樣が急に腹が痛いと言ひ出した。奥様がお騒ぎになる程の事ではないが、と思つたが、醫者へ連れて行けと仰有るので、背負して三島先生の御宅へ上て診察して貰ふとだまつてニヤニヤ笑つて居らしやる。また今度も假病であつたか、と思ふとつひ顔が赤くなつた。それでも御藥を下さつたので、また背負して歸つて來た。道江様は何が面白くてこんな馬鹿げた事をなさるのだらう。親達が心配してるのが面白い――といふ



のにしては、まだ〳〵年が行かない。退屈しのぎに一と芝居打つてやらうか位の考なら實に罪深い業である。それを眞に受けて心配してゐる親ほど氣の毒なものはない。道江樣は何時でも斯ういふ風だ。こんな事が追々嵩じて來たら終ひには何うなるだらうと心配する。思はず「道江樣！」と呼んでみた。「お腹はまだ痛みますか？」何とも返事が無い。そのまゝ家に歸つて、早速寢かした。

▲癈兵撃退▼

暫くしたら、どこかの癈兵だと言つて、安物の石鹼を賣りに來た。何心なく、奥樣が今留守ですからといふと、そんな筈はない、慥に奥にゐる。見せにいつてくれ、と一寸強硬に出る。「そんな事言つたつて、居らつしやらないもの仕方がないでせう！」と此方も少々腰を强くする。そしたら「お前はお三どんぢやないか。お三どんなんかに用は無いんだ。早く奥へさう言つて來な、お前なんか駄目だ」と隨分な事を言ふ。つひだまつて居られなくなつて、「どうせ駄目でせうよ、用が無いなら早く歸りなさい。奥樣が居らつした所で、そんな石鹼なんか我家ぢや要りませんから。癈兵ならもつと軍人らしい態度で出てくるものだ」と言つて、障子をパッタリしめて了つた。「生意氣な……」といふ聲がしたが、そのまゝ歸つて行つた樣子なので、そつと明けて見ると、もう姿は見えない。急に怖くなつてきた。生意氣——さうだ。慥に生意氣だ。向ふも隨分癪に障つた事だらう。男だもの。むゝあんな事言ふんぢやなかつたと思つた。

お使に出た次手に、二圓六十錢奮發して、蝙蝠傘を一本買つた。此間、古いのを屑屋に賣つたら、六錢だと言つた。あまり馬鹿げてゐるので厭氣がさして、急に買ふ氣になれなかつたのを、今日思ひ切つて買つたのだ。

そんな事をしてゐたので、歸つたら五時過ぎだ。お湯を先に立てると、お仕度がおくれる。お仕度を先にすると、お湯が遲くなる。暫くまごついて、断然お湯

を先に立てる事にした。

▲電話借用難▼

食後、お隣へ電話を借りに行く。もうつく〴〵電話借りも厭になつた。これ程氣の退けるものはあるまい。電話位、貸したつて減るものではなし、貸す方では別に何とも思つてゐはしないのだ。けれども固より人に物を無償で貸してやつて別に御愛想するにも及ばんから何時でも木で鼻括つた樣な挨拶をしてゐる。それもいゝ。時々ヂロリと此方の顏を見る。其ヂロリが借りる方では厭なのだ。『またか!』とか、『よく掛けにくるな』とか言ふ意味にとる。どうも借りたくない。料金位、自分の懐から出してもいゝから、もう次から自働電話にしようと思つてゐる。でも矢張りそんな譯にはいかないので、厭々借りに行く事になる。濟むとヤレ〳〵と思ふ。もうぢき電話も度數制になるといふ話だから、恐らく隣なんかへ借りに行かんでもいゝやうになるかも知れない。新聞なんかぢや、頻りに攻撃をしてゐる遞信大臣樣も大分手古摺つて居らつしやる樣だが、私の爲めには度數制となるがよい――さうなつたら占めたもんだ――などゝ、また例の情ない根性を起してみる。

▲奥樣の當てこすり▼

けふは奥樣に二度ほど諷言を云はれた。實に馬鹿げてゐる。人間の性として、腹の立つた時には怒鳴るのが當然だ。それを我慢してまで諷言を言ふといふのは要するに言はれる方が馬鹿なんだ。馬鹿にされてるんだ。諷言は嫌ひだ。私はそれ程氣のサッパリした女であるとは思はないが、兎に角そんな事は言はれたくない。氣に入らん所があるなら、どし〳〵露骨に言つて貰ひたい。其方がスッパリしてゐて、同じ言はれるのでも氣持が好い……などゝ思ふ。併し乍ら、一歩退いて考へて見れば、それも矢張り例の根性に外ならぬ。諷言や厭味を言はれた時には、『そんな間緩い事を言つてる暇に、お前の此處と此處とはいけないから改めよ

とサツパリ言へばいゝぢやないか」と思つてゐる。其怒鳴られた時は何うだらう。「何も子供ぢやあるまいし、さうガミ／＼言はんでもよささうなものだ」と、きつとさう思ふに違ない。隨分人間は勝手なものだ。先達て讀んだ、マツタヌオーレルの女性觀に斯ういふ事があつた。人のこゝろは常に境遇や場合に逆はふとして居るものであると、ほんとにさうだ。併しこれも要するに例の根性——さもしい下女根性に過ぎぬ、といふ所に歸着する。

▲下婢の人生觀▼

私は果して下女なんかしてゐるやうな女だらうか。こんな生活はしてゐても、心まで下女にはなつてゐない意りである。實に私なんか、下女には過ぎた人間である、と自ら信じ自から斷言し得る、時に、自分は泥中の蓮である、と思ふ事がある。別に他にこれといふ見込のある人間ではないが、少くとも下女にしては惜しい女である、と自分で信じてゐる、氣狂？自惚？決して氣が狂つても居なければ、自惚れても居ない。けれども私といふものが、あすこの家のお三どん、としか映じない眼を持つた人々から、氣狂や自惚だと思はるゝならば、私は獨り隱れて、聲を呑んで泣くより外はないのである。

私の眞の人格を認めて（下女に人格も凄まじいが）たとへ爪の垢ほどでも、畏敬（ホヽ三千世界に下女を畏敬するものは恐らく飼犬のポチ位なものであらう）の念を以て私を見てくれる人、忌々しい事であるが一人も無からう。矢張り私は駄目だ。

そんな事を思ひ乍ら、夕飯を食べた。それは何うした機會か、醤油入を毀した。すぐ謝罪つたら、快よく許して下すつた——やうに思つた。

▲私は下女でないつもり▼

食後、別に用事も無いので、裁縫する。裁縫してゐると、妙に心が沈着く。其事を思ふと、洗濯なんか氣がはた／＼してゐるから、ロクな考が浮ばない。一日

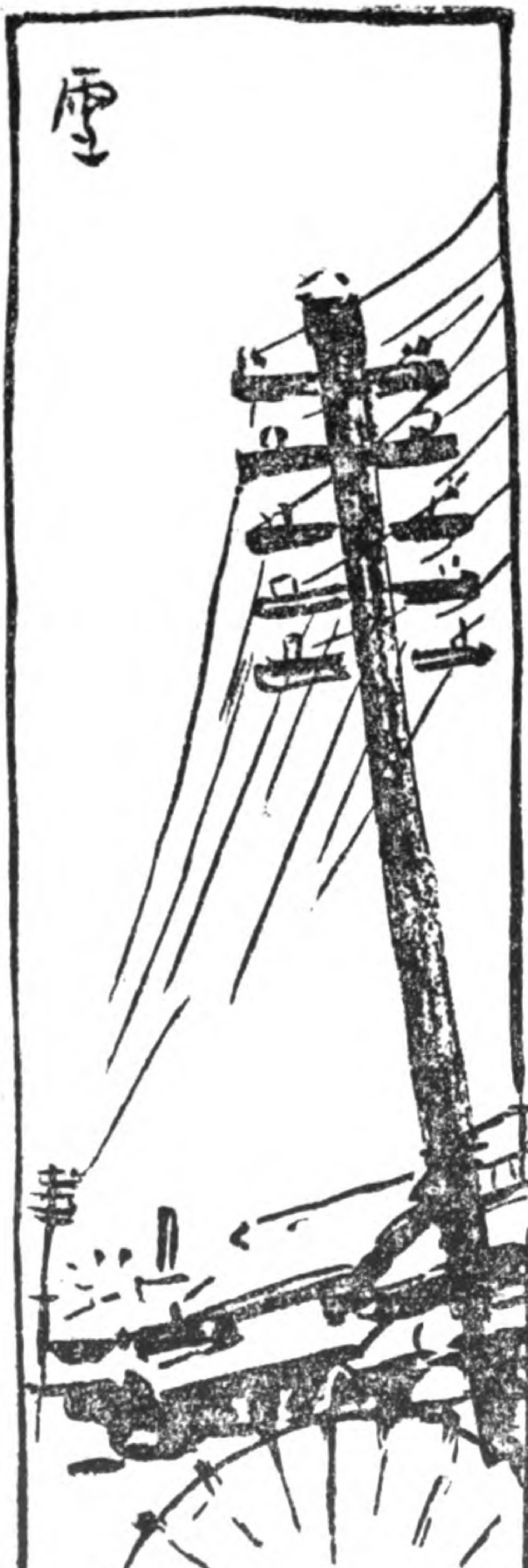
の不平、煩悶、苦痛、それ等を忘れるのは、裁縫をおいて外にはない。我も無く、人も無く、自ら我れと我が心の平穏なのに驚く位だ。

一生懸命にやつて、とうと道江様の被布を仕上げてしまつた。それを眺めた時、我知らず莞爾した。實に近來にない快感を覺えたのであつた。

それから手紙を書いた。近頃誰からも寄越してくれない。心細い限りである。定めし私が下女風情に落ちたのを見限つてかも知れない。で、いつそ何處へも出さず、捨てゝ置かうか、と思ふ。手紙を貰ふのは嬉しくても、返事を書くのが厭なのは、誰しも同じ事だと見える。

お三重さんへと、妹へと、二通書いた。何方を讀んでみても内容は同じだ。こんな事ではいけないが、と思ひ〳〵封筒に入れて、上書を書いて時計を見ると十一時五分だ。今日みたいに朝寢するといけないから、大急ぎで寢支度をした。

寢てから、硯箱の蓋をするのを忘れた事を思ひ出した。此頃は妙に何でも氣になり出した、この氣になるといふのが、既に尋常普通の下女でない證據かも知れぬが、十分ばかりモリ〳〵してゐたが、とうと起き上る勇氣は出なかつた。



電話交換手の述懷

「妾共は三十一年に始めて交換手になりましたが、其時分は電話の數も千三百個ほどで、交換臺が二十八しかありませんでしたし、機械も單式で樂なものでございました、ソレに加入者の方も眞面目で妾共は只電話といふものは面白いものだと喜んで作業に從事したものですが、只今のやうに電話も普及、通話も頻繁となつては別に辛いことはありませんが以前よりはズツト面倒でございます、またその時分の交換手は皆んな大きな立派な人ばかりで、妾共は始めて試驗を受けて採用の通知を受けた時には嬉しい氣がしましたが、二日目に交換臺の前へ連れて行かれてヘツドテレホンを頭から耳へ被つた時には恥かしいやうな、恐いやうな氣持がしまして、ウーツと練習をさせて呉れる人のする風を見詰めて居ましたが、唯モウ不思議なものだ、妙なものだ、ドウしてこんな機械で話が分るのだらう、とそんなことばかり考へてぼんやりして居ました、それでも段々日が經つて物の二十日もしますと、モウ馴れて大膽になつて、それからといふものは交換臺に坐るのが只面白くつて浮々と今日まで過ごしました、只今でもヘツドテレホンを頭に被つて居ないと身體に締りがないやうで氣持が惡うございます、そして以前は夜間の交換は男子の方に限りましたのが三十六年に晝夜とも女の 方で引受けるとになりました、宿直の番に當つたものは午後四時に出勤して翌朝七時半に歸宅しますが、總數三十五名で交代に執務して交代に睡ります、睡眠時間は六時間ですが、宿直の始まつた當時は就眠時間が來ても眠るどころの沙汰ではございません、お互に寄集まつて勝手な騒ぎをなし、片隅には布團が山のやうに積んでありますから、その布團にもぐつたり隠れたりしてアーアーいつて夜を明かしたものでございました、その代り翌朝家へ歸りますと他愛もなく寐込んで了ひます。

△火事時の迷惑

近頃ではモウさういふことは御座いませんが、この宿直の時には種々の出來事が起ります、第一に困りますのは火事のある晩で、サア火事だ、ヂヤン〱といふ場合には電話の加入者といふ加入者は言合はしたやうに交換手に火元をお尋ねになるのです、その時には加入者表示器が全部蓋が開いて御承知の小さいパイロツトランプ(加入者の呼び來りたることを示すもの)に一齊に火が點りますからその美くしさつたらございません、だが迷惑するのは交換手で七八ツ一時に蓋が開いてさへドレから先に繼がうかとマゴ〱するのに、斯う七八十のものが一緒になるのですから只面喰つて了ひます のそれを兎に角片端から應答して行く内には他の急用で通話を申込んで居る人から何故早く出んかなど叱言を仰しやりますし、馴れない交換手は應答に困つて泣き出すものもございます、ですから出火の際には寐て居る交換手まで起して總掛りでやりま

すが、火事は冬の方が多いので寒くはあり、眠たくはあり、隨分辛いこともあります、それから電燈の消えた時、水道の斷れた時なども同樣で兎に角何か出來事のある時には交換手は弱らされます。

△料理店よりの呼出

夜中の珍談ですが、一番困りますのは料理屋で御酒を召上がつてる方が藝妓などを電話口へ呼出してお話をなさる方があります、その時に對手の御婦人は交換手に「何卒五月蠅いからいくら呼んでも出ないと斷つて下さい」と賴みますし先方にその通り取次ぎますと「それあお前の呼び方が下手だから出ないんだ」と怒鳴られますので交換手は間に入つてドウすることも出來ない場合があります、それから困りますのは自働電話です、馴れない人はイキナリ五錢銅貨を穴へ入れて其の後でベルを鳴らす人が多いのですが、ベルを鳴らさぬ前に投入した電話料は無効ですから改めて今一度投入して下さいといふと「そんな無法なことがあるか」と承知なさらないのです、自働電話では尚一つ困ることがあります、それは遊廓内に設置してある自働電話のベルを鳴らして交換手を呼出し「君の名前を聞かしてくれの、聲が美いのと下らぬことを言つて揶揄はれるのです、馴れた交換手ですと體よく對手にならずに差措きますが馴れない人は正直に應答して弱らされることが度々です。

△活動の出來る時代

ソレから交換手として一番活動の出來る時代は十六歳位から二十歳までゞ教育の程度は寧ろ高いものよりも低い方が熱心になつて進歩が早いやうです、澤山の人について見ますと、衣服の着こなしがシッカリして身體の何處となく締つて居る人は何しても成績が宜しいやうです言語なども斯ういふ人の方が明瞭で仕事がテキハキと運びます、右は大阪東交換局に十年間勤續せる通信手淀見うた子、小島千代子兩女の感想として大阪毎日新聞に見えたるまゝを抄録す。

▲新年繪さがし解當者

▲岡山＝森本ひさ▲大連＝前島文子▲大阪＝山中つゆ子 ▲越後＝野本操子▲長野＝中村千恵子▲宮崎＝河野とく▲岩代＝星信子 ▲東京＝小坂ちよ子▲鳥取＝上村ゆき子▲伊豫＝渡邊梅子▲秋田＝高村喜榮子 ▲札幌＝細谷みよ子▲長野＝中村きし子 ▲京都＝長野ひで▲長野＝小河原しづく▲茨木＝菅谷子▲靜岡＝小島はま▲新潟＝池はま▲臺北＝牛山たけ子



和歌

金子薫園選

〔天〕

和歌山　橋本てい

もの思ふ心ゆるがし木枯のふく夜は泣くに泣かれぬ思

評　「泣くに泣かれぬ思」は、げに沈痛胸を刺すのおもひがする。全體しつとりして女らしい心持があらはれて居る。

〔地〕

新田　芳賀しづえ

霞たつ野のいづこにか鳴く鳥を何ぞと問ひしむかし戀しき

評　詩情おぼろげな中に、やさしみも、懐かしみも含まれて居る。

〔人〕

大阪　梅村あい子

をさな子に添乳なしつゝ歌集讀む母うら若き春の宵かな

評　春のともしびが若き母なる人の頬にはえて居らう。「春の宵」はいかにもふさはしい。

秀逸

岐阜　酒井とみ子

うす日する野川の岸の枯柳おもひでばかりふた葉三葉ちる

越後　松永松葉子

霞立つ野邊の若草美くしき夢みむ折りのしとねとやせむ

牛込　平塚白百合

よき程の一うす雪にみがゝれて玉のやうなり白梅の花

大阪　蘆花

ともすれば何思ひ出の片頬笑み朧月見る春の夜の君

青森　三浦愛子

江の南青柳はろにかすみしぬ月も今宵はおぼろなるらむ

河内　高野靜枝子

雪きえて庭の小草は芽をふきぬうすら春日もまぶしきさまに

山形　神林みつゑ

わが友はこゝにねむれる御墓石まだこけむさず寒げに見ゆる

京都　武田とし子

春の雲うすむらさきにかげひたす夜あけの湖水うつくしきかな

豊後　立川つや子

何となくはかなさおぼえ扉に倚れば雲なき空へ夕鐘消ゆる

神戸　足立ゑい子

新しうくだかけなきて初ぞらはほの〴〵明けぬよろこびの色

佳作

○　安房　槇本房枝

この夜さむし旅の心もこほるけにくらき行燈の灯にむかひけり

○　赤坂　森　紫香子

雪の日の松に宿れる鶯飛びて一枝かはるみどりの色に

○　名古屋　中島とみへ

今朝見れば松の並木はしろ〴〵と雪しぬ青き湖うつ波よ

○　松山　河本梅子

おん君の留守の小窓に月洩れて寂しき涙凍る夜半とも

○　京橋　安河いゑ子

悲みをわかたむほどの人一人ほしとおもひぬそは少女にて

○　長崎　宮崎孝子

月冴えてたゞにあかるき大空や天つ少女の衣も見えむ

○　美作　しせい女

五年あまり消息たえし友より便りありければ

夢ごゝちふみ讀みをへて木犀の花の香をかぎ秋の日ありぬ

○　大阪　太平晴子

百千鳥さへづりかはし初春の日はうらゝかになりにけるかな

○　山城　上田花月

しかすかに軒のつらゝはとけ初めてうすがすむなり春來といふ日

○　豊後　桂木靜子

しろがれに黄金かされて冬枯の木草の中の氣高き花よ

○　美作　香本公子

戸によればみだれて長きうすものゝもすそに淡き夕月のかげ

○　大阪　秋田露

草枕旅のやどりも黄鳥の長閑に鳴けば旅としもなし

○　長崎　田家よしを

降る雪は積らば積れ積りてもみどりかはらぬ千代の松かな

○　長崎　豐島智惠子

降り積る雪にみどりは埋むとも松のみさをは千代もかはらし

○　長崎　田家磯子

若水をまだき汲まむと出でゝ見れば夜はまだくらし鶏のなく

○　信濃　小林義子

今朝見れば空うち霞み鶯の一こゑなきぬ背戸のあたりに

○　岩代　樹口ゆき子

大杉の梢にのころ星ひとつ影うすらぎて烏むれ立つ

○　伊勢　佐々木らく子

つれなさの友のそしりも御膝に注けばなぐさむ母はありしを

○　大阪　木村花子

淡雪の解けそめにける日あたりの梅の下枝に來て啼く鳥よ

○　神戸　鵜川たけの

山川の流れに澄める月かげをくだきて遊ぶ水鳥のむれよ

○　大阪　富永かをる

初日かげうつりそめたる若水に去年の面さへうつりてありぬ

○　紀伊　生馬龜代

母君と火桶かこみて歌がたりたのしかりにし夜の雪かな

○　名古屋　山村榮

よきほどに緑の色もあらはれて雪おもしろし庭松見れば

○　山梨　志村つた子

山鳳雪にかはりてさら／＼と笹の葉さやぎ夕べとなりぬ

○　岩代　木口よし子

榮の月に雪うちはらひ雪の日を木こりし里の翁は歸れる

○　下總　岩瀨不二野

とある家居うたうたふ聲すなり梅さく里の春の夜くれば

○　大阪　梅村愛子

君言はず我も語らず歌思ふ南の緣に梅の花ちる

○　紀伊　松島千枝

里の翁餘念もなげに畑打てるかたへの梅の一枝こはまし

○　神戸　足立あさ子

佐保姫のおしろいこぼれ落ちしかと山ふところの殘んの雪よ

○　埼玉　笠原政子

春ゆけば羽子つきかはす少女のこゑにぎはしゝ昨日にも似ぬ

○　本鄉　西岡古代子

さきつゞく花に後はかくろひて唄のみのこる江の南かな

○　名古屋　松久秋女

大前の松につもれる白雪のあなすが／＼し神のみこゝろ

○　山口　倉光芙蓉

我れとわがうさなぐさむとひく琴のしらべはいつかみだれにけりな

○　上總　なほ子

あの子の聲はとだえてしと／＼といそ松が枝に雪のつもるかな

○　越後　廣子

尼寺の軒にほしたる白衣にうつりよろしき紅梅の枝

○　陸前　佐藤たか子

幀照す月も凍らん霜夜道母戀しさにたゞひとりゆく

○　京都　三宅幹子

うたひつゝ羽子つく子らのそでにつれ匂ふや庭の白梅の花

○　伊豫　渡邊梅子

詩吟する君かあらぬか影淡し梅の盛りのたそがれの月

○　長崎　天野春子

まださきさく花もやあると里近き梅の林を今日もこそとへ

○　武藏　臼倉千代子

おぼろ／＼かすむ月夜の垣根道そこともわかず梅かをるなり

○　橫濱　鈴木まつ子

雪もよひきさらぎ寒の朝風に梅の花さき香をおくりけり

○　東京　吉岡龜子

鶯の音はいまやみて梅ばやしほのかに春の月はさすなり

○　陸奥　佐藤喜代

さらぬだになれぬ山路の雪わけてつく／＼旅をわびしと思ひぬ

○ 牛込 米子
静かなる籬のうちに樂しげに紡歌うたふ里の少女ら

○ 長崎 春子
思はじときみが文をもゆる火にやきすてゝなほ物思ふかな

○ 茨城 大山さだ子
そよ／＼と吹き來る風は春ながら寒けしいまだ花さかずけり

○ 伊勢 ひさ子
よきほどに雪ふりつみて門まつは繪にあるごときおもしろさかな

○ 周防 小野本貞子
木枯の風ふきたえてしろ／＼と雪は積りぬ門松の上に

○ 静岡 中村しか子
ふみまなぶ窓に香りてうれしきは梅さかりなる庭のはるかぜ

○ 信濃 林 咲子
尼君が法華經寫す朝窓の日なたにかをる紅梅の花

○ 徳島 多田すえ子
花に香にうちすてがたきものながら野ばらのとげのあないた／＼し

○ 大阪 河瀬つゆ
ふえ吹きて牛を追ひ行く牧童の笠にこぼるゝ野路の白梅

○ 本郷 月子
梅さけば島の外なる人さへもたま／＼來りさびしくもなし

○ 越後 古澤ふさ子
岩戸あけし神代の事も偲ばれて年立つ今朝の初鷄の音よ

○ 信濃 牧 登美子
あたゝかき垣根の外は雪とけてふきぞわづらふ一つ小車

○ 須磨 有村紫芳
うすごほりわりつゝ里のうなゐ子が市にひさぐと根ぜりつむなり

○ 岩代 城田市子
春立てば知るもしらぬも笑みかはし先づ大御代をほぐがたのしさ

○ 臺灣 林 箏子
そよ風にえならぬかをりふと見れば庭の白梅花咲く朝よ

○ 横濱 秋山 孝
うぶすなの森はさ霧のたちこめてかすかにきこゆ拍手の音

○ 神戸 美濃部ます
高砂の尾上の松にふりつもる雪は老木の白髪とも見て

○ 美作 性全峰代
香をかぎてそゝのかされし思ひ出によべ見し夢の名殘をぞおもふ

○ 豐後 加納豐子
手にかざす傘おもりけり路の邊の足にまつはる雪はらふまに

○ 青森 小林てふ子
里の子が若菜をあらふさゝ川の水のどやかに春となりけり

○ 越中 古瀬ゆき
野に山に梅の花咲き鳥が音も美し春は今來りけり

○ 芝 智恋子
ふり積る雪間に松の色見えて白にみどりに今朝美しき

○ 大阪 梅村愛子
われせちに亡き母しのぶ夕まぐれかすかにひゞく入相の鐘

○ 東京 三浦靜子
宮城野にあかぬ別れを告げてより萩さくごとに君をしおもふ

○ 岩代 長谷川よしの子
追羽子や浮世小路のさんざめき墨をし塗ると墨を逃ぐると

○　　横濱　吉川香都子

門に立てる親子乞食にものやりて母あるなしもうらやむ夕べ

○　　名古屋　高橋かき

霙ぞらのくるゝもわかぬ夕ぐれを寒げに渡るむらがらすかな

○　　名古屋　山根しげ子

裏琴のいへなるしらべなつかしみ立ちよる垣に鶯のなく

○　　名古屋　土屋たま枝

いつのまに雪や止みけん白たへの庭にさえたる月もましろく

○　　遠江　河村咲子

うら〳〵と昇る初日にてりそひて年立つ朝の雪の松かな

○　　佐世保　森民子

霜白うふけ行く夜半に嗄れし物うるおきな聲のあはれさ

○　　伊豫　渡邊椿子

咲くといふたより聞くだに嬉しきを封じてありぬ花の一ひら

○　　名古屋　星野ふさ子

うるはしきことばの花も添へられてたまひし梅のかをりえならぬ

○　　伊賀　岩瀬もと子

またの春はな咲くまではしらゆきをさくらとみつゝ來さしのばむ

○　　長野　百瀬ふじえ子

みやび男が月にうかれてゆくならむ梅の下道笛の音ぞする

○　　近江　中川はる子

年たつ日みやこははやうのどかなり大うち山をのぼる初日に

○　　岩代　圓谷清子

春の夜のおぼろにかすむ花そのにおりたゝすらし月の女神は

○　　本郷　著子

夕まぐれ旅につかれし僧ひとりたどる荒野をゆきは降りきぬ

○　　金澤　厚見喜久榮

つたかつらしげりしよりも分きかねつ雪にうもれし杣がかよひ路

○　　芝　磯部すゞ子

降りつもる雪に撓まずそゝり立つ峰の老松さても氣高し

○　　陸前　山形こう子

下萠は綠をいそぐ春の野にいつまで雪の消えず殘れる

○　　京都　佐藤清子

夕烏聲は彼方に消え行きてしづかにひゞく山寺の鐘

○　　四谷　伊藤柳子

更けぬれど森の狐の聲すなり霜夜の月のかげはさえつゝ

○　　牛込　平塚いと子

松もなほしづけき御代ないはふらむ枝もならさぬ雪の朝かな

○　　大阪　中西琴枝

狐なく野中の道に日は暮れてふむ影凄し冬の夜の月

○　　埼玉　荻野くに子

ゆたかなる年のしるしと門松もうづむばかりに雪つもる朝

○　　和歌山　和田厚子

ふりつもる嵐の山の今朝の雪所がらにや花と見ゆらん

○　　大阪　中野富子

朝日さす富士を見るこそうれしけれ動かぬ御代の年のはじめに



短文



甲賞 亡き友

山形 雪子

あてなく歩みを進て小川の邊に行くと、處々に氷が張つて、靜かに水がさゝやいて居る、サヤ〳〵と、あゝ此音は亡き友のさゝやきではあるまいかと思つた、白い雲の破れ間から今しも十三夜の月が半ば顔を出して居る、凝と見つめてゐると次第々々に全身が表はれた、サヤ〳〵サア、オヽと又下を見る、月が破れてキラ〳〵と水が漂うた、アヽ、之れだ、友は丁度こんな夜に此處で之を指して「清い圓かな胸も終ひに破らるゝことがありますわねえ」と淋しくほゝ笑んだ事があつたが、あゝ其時の顔は今猶目の前にちらついて居る、然し、友はもう此世の人では無い、幾年此所に待つても終に歸つて來ないのだ、そして私も幾年かの後には此所に來なくなるのだ、獨り此の小川の流れのみは何時までもサヤサヤと音たてゝ居るのであらう。

甲賞 別れ

山口よし子

あゝ盛衰は世の習ひ、とは云ひながら、情なや、長き年月住み馴れし我が家とは惜しき袂を分たねばならずなりぬ、我が幼き折は人も羨む許の暮しなりしを家運は月日と共に衰へ行きて、窓もる月影眺めやりては胸つまらせしことそも幾度ぞ、其れにもましたる今日の悲しさ、あゝかゝる別れのあらんとは、豫て覺悟はなしたれど、今宵となりては今更に名殘の惜まれて、涙は止めも敢へず、父上も母上も同じ御心にやおはすらん物をもいはで、只悄然となし給ふ、げにも定なき浮世かな、今宵は尚我家なれどあすよりは某の邸なり、たとへ我等は去り行く共、亡き祖父君の御魂は、とこしへに此家にのこりますらむ。

乙賞 お留守番

牛込 藤原むら子

ふと時計を見れば九時、此廣い家に私一人とは心細い、叔父上と叔母上は芝居とかへ入らしつたし、女中は皺入さぞ今頃は歸るのがつらからう一人おるすゐする私もつらい、しんとして時計のセコンドばかり大きく聞える外には時々カラン、コロン、と霜にさえる下駄の音、短文でも作つて見ようかしら、又例の通りではつまらない、昨日きた増刊でも讀みませう、アヽもう十時になる、そろ〳〵お歸りになるだらうドレおこたで

もこしらへて置きませう、さぞひへてお歸なさるだらう、明日又叔母上は頭痛なさらなければいゝが。

乙賞

つくろひ

淺草 雪村 操

硝子障子越にお庭の梅の一二輪咲きかけたのを眺めてゐると、お座敷では阿父樣の例の大きなお聲が手に取る樣正雄も今年は卒業するし、さすれば靜子の結婚も濟ましてわしも安心が出來るといふもの、彼れには女一通りの敎育も仕込んで有るつもりだし、親の欲目では無いが、第一柔順な性の娘だから、正雄の幸福だよ、アヽ……、おや噂をすれば影とやら貴方正雄さんがと阿母樣のお聲、やあお父さん御目出度と快活な正雄樣、靜子さんを、御呼申しませうかと女中の春が立つたらしい、妾は今更の樣に姿見の前で衣紋をつくろうて居ると、孃樣と春やが襖を開けた。

乙賞

姑の看護

靜岡 柏木喜久子

姑樣はもう三年越しの長の御病氣、此の冬になつてめつきりお弱り遊ばしたやうだ、此の頃ではもつたいないやうに何でも私の申し上げる事をアイ〳〵と聞いて下さる、今迄妾をさんざ苦しめなすつた姑樣とは何うしても思へない、醫者はとてもと言ふが何うかしてもう一度全快させて上げたい、一度でも姑樣をお恨み申した事がくやしい、骨ばかり高く、肉

と云ふ肉に落ち見るからにいたましい、お寢顔を見ては、一人ホロリとする。

丙賞

旗奪

高知 靜波

風は又一しきり吹き出した、最後の合同遊戲の旗奪は今や最中である見れば兩方の旗竿には各一人づゝ登り初めてゐる、竿の元では敵味方互に入りまじつて上なる人を落さん落させじと爭つてゐる、赤と呼び白と叫んで參觀人は狂氣のやう、上なる二人は孰れも今少しの處まで屆いてゐるが、敵の竿を動かすのは刻一刻とはげしくなる、木枯風は此の小勇士をためさんとてか有ん限りの勢もて吹く、竿は今にも倒れるかと思はれる二人は必死と竿にくみついてゐるが、其つかれた樣ははつきりと見えてかはいさうなほどだ、しかし味方の聲にはげまされた二人は今や一生懸命勇をふるつて、今一足とつき進む、其の刹那白は足ふみすべらしておちてしまつた、どつとあぐる喜のこゑ、中原の鹿は遂に赤の手に落ちた。

丙賞

入浴

神田 もと子

身の毛立つ身を、徐かに沈ませる、氣持が佳くて氣がボーツとする、夜明

け迄篤うして居たいと、誰やらの聲、高島田の娘の髷を一心に洗つてゐるお婆さんがある、あんな大きな人を、何だか可笑しい。彼方の隅では又お内儀さん風の人が、小僧に du やけのむし方の說明をしてゐる、「餘り利き過ぎますれ」と肥えたおかみさんが、仰山に立ち上る、水道栓の下にゐる奥様は「少し出しませうれ」と甲斐々々しく働く、「まああなた恐れ入りました」とやう〳〵落付く。「本當に熱すぎては却て溫りませんかられ」と痩せこけたゐる好らしい、島田娘の親が云ふ曇る鏡を拭き作ら赤てがらと蝶々髷が、頻りに白いものを塗つてゐる、番臺の主人も下足番の女もさつきから、まぶたが會合してゐるらしい。時計は今十打つた四五回目の火の番が表通りに當つて聞える。

丙賞

叔母の情

小石川 とめ子

それはお前だつて、辛いだらうけれども、何事も運と諦めて、最一度歸つてお吳れではないか、何も兄さんさへ、居らつしやれば、私が斯うまで言やあしまいが、親なき子だからと、人に後指される樣では、彼れ程お死になる時受合たのに、申譯が立ないからね。お前も其處をよく考へてそこは日頃のお前の氣性で、即答は出來まいから、明日迄にぜひ私の安心する如に返事をしておくれ、叔母が手を支て願ひます。さあ又、お叔父さんが、お歸りになると、いけないから、もうお歸り。と送くつてきて後姿を見ながら、お前も隨分不幸だね、

丙賞

春の夜

山口 岡本ふさ子

歌留多の友は歸りぬ、擬寶珠を右へ、河岸傳ひに、顏のほてりはさめて、手はいつしか埋火にかざされぬ、遠音の琴に耳をかしながら暫し恍惚、醒れば月は窓前に宵し。

今日來し文をとりまとめ、くりもて行けば、雪中の松神々しう畫かれたる迄に、墨色麗しう、日頃打絕えたりし學の友の水莖のあと、七年むかしの偲ばれていとなつかしうなん、あはれ新春の賜よ、かへし、なつかしき君が姿と仰ぐかな、みゆきをつみし天そゝる松。

丙賞

十三日の夜

大阪 靜江子

姉樣から賴まれた急ぎの仕立物が出來たので明日は一日ゆつくり雜誌でも讀まうと思つて、貸付の本屋へ往つて見た、「被入いまし」と迎へた店番のお婆さんの傍に、高く積んである增刊、「心の秘密」!、我知らずに手に取つた、胸はどきどき、頰はほてる、僅、二頁の目次を、一字一句も見誤るまいと目を移したが……あゝ駄目、矢つ張り駄目だつた、何うせ斯うと覺悟はして居ながらも、さてと成れば流石に口惜しい。散々頭腦をしぼつた揭句のあの日記も、選者の眼には反古同樣に見えたのだらうと思ふと、はづかしいやら情けないやら、我と我身に愛想が盡きた。

春の田舎

牛込　平塚いと子

水車が終日コトン〳〵と軋つてゐる、川添堤もいつか柳が伸びて、牛追つてゆく男の姿は繪のやうだ、傾きかゝつた水車小屋の南縁に、暖かい日を浴びて老婆が糸車を引いてゐる、軒先の紅梅は今を盛りと咲き綻びて下に立て掛けられた張物板に折々花びらが散る、晴れた空には鳶がのどかに舞ひ里の子の揚げた凧が二つ三つうなつてゐる。

片割れ月

大阪　淺田たつ子

身が凍つてしまひ相な寒い夜に、戸外に辻占賣のあはれな聲がした表へ出て東を見ると、ポッチリと黒い影が見えて、灯の暗い提灯がフラリフラリと揺れて行く、可哀想と思つて僅かばかり買つてやつた、片破月は雲に隠れつ、雲を出でつして、途切れ〳〵に白い冷たい光を町に流してゐる。

三つの急須

東京　山内經子

母君の去年の暮求給ひし折、小供も多ければ、そゝうも多からうと部屋用ゐとして三つの同じきうすをくだされて、蓋が割れても、身がこはれても同じ方が都合がいゝのと仰せられしを、蓋のみ二つ割り一組のみになりたれば、大切に使ひ居しに、今日の煤掃にて又蓋をわりぬ、身のみ三つのこりし此きうす、あすは母様がおいでゆゑお目にかけよう何とおつしやるだらう、きつといつもの様にお腹をかゝへて大笑ひなさるだらう何だか目に見えるやうだ。

夕の庭

東京　清香

終日、木枯吹き荒れて、隣界の一本柳、今は骨ばかりほそ〳〵と、いと寒げなり。池の小波をさまりて、水底深く、浮雲の影のみうごくよと見るまに、夕日影いつしか西にかくろひて、あたりやう〳〵ほのぐらう、一本残る白菊の、さても淋しき庭の面かな。

かどぐち

大阪　しづえ

軒洋燈に謡見と書いてある小路の角の家に餘り好い音がしてゐるので恐る〳〵格子先に寄つて、覗ふとまばゆい様な電燈の下に譜見臺を前にして四十恰好の髯のある先生らしい人と、若い廂髪の婦人とが立つてゐる、何でも住吉踊の稽古の方らしい、我を忘れて聞き惚れて居ると、軈て曲も終つて、婦人は楽器を袋に收め譜本の風呂敷包を抱へて、丁寧に頭を下げた「ぢや、明日は九時迄に間違ひなく、待つて居ますから」と、先生の聲、次いでガラ〳〵と中戸を開く音がした。

お化粧

兵庫　阪上芙蓉子

白粉の蓋をとると、プンと菫の匂がする、手の掌でゆるくといて、顔に塗

く、頭から首に濃くつけろ、熱いお湯に手拭を浸して、固く絞つて白粉の上を軽くなでると、浮いてゐたのがしつとりと肌につく、口紅をちよつとさして、髷と前髪に櫛を入れる、歯並が美しく通る、束髪の上をスウと撫でゝ前の方に白い櫛をさした。

若き母

日本橋　吉田さだ子

母様のお使で糸屋まで行く道で、六十近いお祖母さんが、よくふとつてゐる赤ん坊をお負て、よぼ〳〵して向うから來た、夫れと一緒に赤ん坊の母親で有らう、二十二か、三の人が來るすれ違ひ樣にふと聞いたら「お母さんもうじきですよ」と云ふ、呼何たる方だらう、自分は空手ですましてあるいて居る、夫れに引かへて年寄が子供をお負てやつとあるいているのに、やさしい言葉一つかけろ樣子もない、私はあんまりなのでふりかへつて見てつく〴〵思つた、眞の親か姑さんかは知らないけれど、あんな事が有らうか、お陰でよい學問をした、私が姑を持つたら決してあんな事はしまいと思ふた。

母の留守

埼玉　香津子

凍つた夜路にカラコロと下駄の音が響く、「もう母樣がお歸りなすつたのかしら」と思ひつゝ、私は雨戸を繰つた。凄い樣な寒月が養壽院山の骨計りになつた樹に懸つて居る、音の主はさつさつと行過ぎた、後風がピユー〳〵と悲しさうに吹き荒む、「おゝ寒……」ピッシャリと戸を閉て私は炬燵へ滑り込んだ、天井裏でカタ〳〵鼠が騒ぐ、今迄足袋繕して居た婆やはコクリ〳〵と船を漕ぎ初めた、あゝ斯麼晩に亡くなつた兄樣が被在つたら、屹度かう私を抱へて美坊……とか何とかいつて下さるだらうよくお隣の春ちやんが好きで、いつも三人して、お蔵の縁でおまゝ事したつけ、私は小さい時の樣に鐘ちやんと呼で見た、植込の 明 竹がさらさらと鳴る。何だか淋しい夜だ、

大晦日の夜

千葉　山口秋子

平常なら淋しい町だけれども、今宵ばかりは繼ふ樣に提灯が通る、大方鬼と成りて掛け取りに行く人々だらう、自分の家では貸しも無いが、借りがあつてペン〳〵と大切な頭をさげていゝわけする心配もない、これが一番の氣楽だ、來年もいゝ年を送りたいと思ひ乍ら神棚に燈明を上げると、踏んだ棚に冷めたいつやが見えて、燈明がハタ〳〵と揺れるそして小さい輪飾の根松の緑に新らしい年のかげが見える樣だ。

物音

阿波　多田すえ子

今夜は父樣は御留守だから、皆で氣をつけておやすみなさい、「しまりはいゝかい」といひながら、母さんは手燭に火をともしてずつと見廻はりをされた、もう皆やすんで一時も經つたと思ふ頃、それは〳〵大きな音がして井戸の中へ落こちたものがある、慥に人間に相違ない音だ、皆一寐にはれ起きた、第一番にかけだしたのは、兄さんだ、太い綱を持つて、見ると、上げてあつた、つるべも一緒に落ちたものらしい、中では非常にあせつてる樣子。

夢

北海道　波留子

「アツ母様」、ハツト自分の聲で目がさめる、ア、夢、夢だつたかしらけれどたしか今亡母様が私の枕元にお立ちなすつて、私がすがり付かうとしたらツトさけて、窓から外へ出て入らしつたやうであつたが、ア、もしやもしや亡母様がほんとうに入らしつたのではなかつたらうか、あゝそんな道理はないけれど、「恐ろしさも忘れてよろ〳〵と床をはなれた、閑くともなしに窓の戸くれば、外はぼんなくつがへす様な雨、「あゝ今たしかに亡母様は此窓から……」、身を窓から半分ものり出して、雨をすかして見たが何も見えぬ、星一ツ見えない、あまだれが竹の葉に落ちて物凄い、一間室をはなれて寢て入らツしやる繼母様の例に目ざめ給ひてか、ゴホンゴホンとしはぶきのお聲。

雪の朝

山形　阿部英子

昨夜は寒かつたが靜な靜な晩だつたから、今日は屹度お天氣だらうと思つて雨戸を少し明けてみると、驚いた、庭の垣根は銀にて作られ向ふの木立は化粧せる林となつて居る、マア奇麗と私は寒い事も忘れてみとれて居た。

別れ

埼玉　ふみ子

ア、もう明日の今頃は冷き〳〵寄宿舍の人となるのであると思へば、多年すみなれし家、又慈愛深き父母を後にして修業に出るのが妙にかなしくなつて思はずホロリとする、今迄仕事をして居られた母様が「ふみやまだ寢まないかい」と云ふて私の部屋をのぞかれた、アヽ此の言葉は毎夜聞くのではあるけれど、今夜は私も明日の別れがどんなに〳〵つらいかしれないよと言はれた様にひゞいた、アヽたつた一人子の私がゐなくつては、年老いし御身のいかに淋しい事であらう。

愛らしき文使

福井　片山千里

「姉さん之を御覽なさつてください」とて隣の雅夫さんが手紙を持つて來ましたから何だらうと思つて封を切つてみると、「今日は雅夫が泣かずに頭を剃らしましたから、美しい衣服を着せてやりました、賞めてやつてください、民子より」と書いてある、早速仰せの通り致しましたと返事を書き、扨て「雅夫さん、今日はたいさうおめかしですれ、そして頭まできれいにお剃んなすつて、何かあるんですか、しかし泣いたのでせう」と申ますと、にこ〳〵笑ひながら、「何もないんだけども、僕は泣かなかつていらいと云つて姉さんが着せてくださつたの……」

忘られぬ顔

豐後　立川つや子

妾はふと忘られぬ顔を思ひ浮べました。その中には喜びにいそ〳〵せるもの、切なさうなもの慍つたものが現はれました、惱めるのや苦しめるのや笑へるのもありましたが、わけて强う印象されたのは淋しい顔でした友の美津子様は、幼い時に母様を失つて繼母に育てられ、十六の春に

さる家に嫁入りましたが、秋にはもう歸りました、以來お母樣の顏に皺が伸びぬ、みつ子さんの眉もだん/\曇つて、卯の花咲いて五月雨る頃、紅の血を吐いて死にましたが、その死顏は誠に淋しいものでした。

あくる朝

尾張　長坂たつ子

知多半島の片田舍、木花咲耶姫尊を祈れる產すの神の邊にあるさゝやかなる一棟、之れぞ我が身が十七年の其の間、安々と生ひ立ちし懷かしき家である或る深夜の事、闇を破つて鋭く響く神樂の音に目を覺した、暫くにして止んだので、產の神樂たる事を知つたが、其の難產の人の身の上が案じられて殆んど寢もやらざる中にほの/\と明け放れた、旭が社殿へさして居る、小走りに鳥居を潜つて行つて覗いた、今朝は森々として昨夜の秘奏が尙耳に殘つて居る。

妹へ

香川　岡坂靜江

勇ちやん、此頃は霽夫はどんな樣子ですか、可愛がつてやるんですよ、昨日お人形と毛糸を送つたでせう、おとなしく父樣や母さまの仰る事をきいて、毎日幼稚園へ行つてると、今度の日曜にはお人形さんのべゞをお土產に持つてかへるからね、そしたら又姉さんと一緒に寢ませうね、それまでにたくさんお船やお籠や鶴やをこしらへて置くのですよ、さよなら。

朝の掃除

京都　小西直子

ぽん/\と、机の上をはらつて、窓の障子をあけると、今松の木をはなれたばかりの太陽の光が、座敷へ這入り、小さい/\塵は、金色になつて我れ先にとお庭の方へ出て行く。やう/\掃き終り障子をしめて、机のそばへよりふと窓を見ると、今まで疊の上を照らしてゐた光が障子を照らしてざくろの木に、雀の枝より枝へ飛んでゐるのが、うつすりとゑがかれてゐた。

虛榮病

滋賀　さみどり女

或ドクトル曰く「此病は婦人特有のもので流行地は主に都會である、尤も佛國は此の病の極に達して居る云々」と、ペストやコレラも恐しいが此の病程恐しいものはない、一度本病に罹つたならば、つまらぬ空想にふけり勝で、仕事や勉强はまるで手につかない、身に合ふ良緣があつても悲しいかな此の病に罹つてゐると忽ち退けられて終ふ、漸く病氣の治した頃は、年旣に老い衰れ一個の小町となる、何んと恐しいではありませんか、其の黴菌は繁華な土地は到る所に居ると云ふ、御要心!!。

寂寞

山城　上田いく

獨衣縫ふ燈火の下、聞ゆるものは時計の刻む音のみ、物すごき迄の靜けさに、つく/\とこし方行末の事ども思ひめぐらして、針の運びもあやしうなりける折しも餌をあさる狐のこゑ寂寞を破り、たちまち胸つぶれてそゞろ寒う覺えぬ、一こゑ二こゑとやう/\遠音に成り行きて、又元の寂しさに歸りしも、今片なりの一句ふと忘れて、いかに、すれども浮ばず、今の狐やもていにけむ、我ながらをかしく口惜し。

三日月の影さへ寒く小夜ふけてきつれなくなり冬の山里

新學期の前日

岡山　あき子

樂んでゐた二週間餘りの休暇が夢の様に經ちました。又明日からは苦しい袴にかためて寒い教室に入らればなりません、とかう一寸苦しいと云ふ邪念が浮びました。しかし梅の花の様につらい事も凌いで行かんと立派な花は咲かんと云ふ事も考へました。

大晦日

山口　岡本ふさ

今日が愈々大晦日、闇の中で仕事の順を考へながら文に添乳してゐると六時がうつ吹き荒む西風に、向岸の榎の枝が冬枯に凄く鳴る、そとおきて朝の用意にかゝる、夫は朝間に散髪に行かれた。朝食後髪結が來た、平常より不出來。もの日前はいつも悉うだ午前はお掃除に費した表座敷のしつらひは夫がなさる、神様と佛様とは例によつて舅様の受持。午後は例の如く屠蘇の用意をなす、毎年困るから掛は大抵前に拂つて置いたのに、新聞屋と牛乳屋が今日掛け取りに來る、今年は親戚さんと芳ちやんが手傳つたので運びがよかつた、夕飯も早くすます、文もおそばが好きと見えて皆の肩を傳り廻つて「ズー〳〵」とねだる。かう準備が調つて見ると「ゆきつもるおのが年をばしらずして……」何となく明日が待たるゝ。

島田髷

大阪　香鶴子

八疊の書齋で、東京の松子様に差上げる手紙を書いて居ると、障子を明けながら「香鶴さん」と姉様のお聲、「なに」と返事してふりかへつて見ると、にこ〳〵笑つてゐらつしやる「をかしいでせう私島田髷にいつたの」と云ひながら、白い手を頭にお上げなさる、「アラ姉様眞實よく似合つてるワ」「アラじようだんばつかり」とお顔をほんのりとなさつた。

虛榮心

鎌倉　なの花

此間見た美しい令孃達のぞろりぞろりと海の方へ行く姿が、あり〳〵と目の前に浮ぶ、自分はいつか虛榮の惡魔にとらはれた、ふと床をはね出て西の窓を開くと一輪の月が鎌倉山を照して實に美しい。

眞紅の羽子

尾道　黒田かめ子

此間私が庭をはいて居りますと、落葉の中に赤い〳〵ものがおちて居るので、何心なくひらひ取つて見ますと、まア お正月にひれもすついて遊んだ羽子の一片なのです。何とも云へないなつかしい哀れな感じがしてあついキッスして其日の日記の間にはさみました。

新刊紹介

△英語世界叢書第貳卷 旅の恥　佐川春水譯註

英國に於て寫實小說家として文名を成せしアンソニーツロロイプ氏の Christmas at Thompson Hall を譯したるものにして、原文と和譯を對照し得る樣になし、其の下段に詳細なる註譯を附記されたれば、英語を研究する者に取りては却々都合よく出來居れり猶英語世界叢書の第一卷は小川尚氏の譯「戀と戰」あり。定價金各參拾五錢、博文館發行。

△新式初等佛語獨修　前田長太・前田雪子共著

本書は專ら佛蘭西語の初學者の爲に著されたるものにして、之を三篇に分ち、第一篇には綴字法と讀方とを敎へ、第二篇には讀本とすべき短文を記き、第三篇には日常必要の會話を掲げ、且つ夫々讀方と和譯を附記し、何等の素養無き者も讀んで能く了解し得る樣に編まれたり。定價金四拾錢、博文館發行。

△明治四十二年全國學校案内　高橋楽都武編

初めて山に入る者は道標あるを要し、舟行は豫め指針を備ふるを要す、本書は即ち學に就かんとする青年男女の爲に著はしたるものにして第一編に學校選定に就ての注意を述べ、次に全國諸學校の入學手續、學校の狀況、特色等を詳細に記るされたり、定價金五拾錢、府下巣鴨内外出版協會發行。

△大成造花講義　小澤會三著作

△實用新式造花切形　同上

前書は造花に用ゐる器具の話より、花の造り方、染色法、等造花術全體を挿繪に依りて記述したるものにして、定價金四拾五錢、後者は花を造る際に用ゐる花びら、葉等の雛形にして、一種一枚にをさめて、薔、すみれ、撫子等數十枚を一組と爲しあり。定價金貳拾錢、以上二書共神田美土代町日本彩葉會發行。

△お伽十二時　巖谷小波著

門松草紙、鶴の袋、不思議の土産等總て十二編のお伽話を收さめ、尚附錄としてお伽口演二篇を添ふ、表紙も挿畫も皆な美しく、本文は誰れが讀みても、面白し、定價金八拾五錢、神田富山町左久良書房發行。

△實地看護法　大關和子著

著者は看護の事に就ては深き智識と多くの經驗を有する人なり、本書は專ら看護婦の職に從事せんとするの人の爲に著したるものにして、三篇八十有餘章に收さむる所は、悉く專門家の心得置くべき事項なれども、事柄が事柄なれば、一般婦人が讀みても大に益する所あり。定價金七拾五錢、本郷區龍岡町吐鳳堂發行。

△三家庭　原田亮著

原書は英國第一流の宗教家ファーラ博士の作なりといふ宗教家の小說いかゞなものと思ひしに讀んで見れば却々數奇多趣味にして又運命の開闔頗る面白く書きなされ随分神出鬼沒を欣ぶ年少者の好奇心を滿足せしむるに足る好個の家庭小說なり、定價一圓、内外出版協會發行。

△臺灣寫眞帖　臺灣總督府官房編

本書は臺灣全島の都市、名邑を始め山川、城市、廳舍、廟宇等の著名なるもの及び物産工業風俗等あらゆる風物の寫眞を集め、一々圖解を附したるものなれば一見して臺灣全島の風物を窺ふべき好便覽なり。

懸賞募集

質素勤儉に就ての實驗

日常の生活に就て勤儉の模範となるべき記事を募る（〆切二月十五日）

上中下の社會を問はず、凡て一家の費用を節し、萬事經濟的に生活する方法を記述する事

註――都會に住する人は都會生活の習慣あり、田舍に住する人は田園生活の振合あり、又家々に依つて職業を異にし、收入を異にし、隨つて生活上社交上の地位も異なる次第なるが、それ等すべて其の境遇に應じ、事情に應じて自から工風し、自から實行しつゝある所を記して隨意に投稿せらるべし。

賞金

壹等　五圓　一名
貳等　參圓　二名
參等　貳圓　三名

（賞金は博文館發行圖書切符にて）

每月一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	金二十錢
四冊（三ヶ月分）	前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）	前金二圓八十錢

内（定刊數十二冊　增刊四回…一、五、九、十一月價格同一）

郵稅	
一冊	二錢

廣告料

廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	…	…	…	五十錢
四半頁	…	…	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	…	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

明治四十二年二月一日發行　第九卷第參號

編輯發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所（東京市小石川區久堅町百八番地）

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局
三百三番　二千六百二十番
千十八番　三千二百二十九番


千代田白粉
香油
千代田白粉と香油とは廿世紀式の新香料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令嬢に愛用せられ高評嘖々たり
白粉（大瓶卅五錢 小瓶二十錢） 水製 廿五錢
香油（大瓶卅五錢 中瓶廿五錢 小瓶十七錢） 特製 七十錢
東京馬喰町
山岸三之助
電話浪花三七九三

玄（後付の一）

（女、後付の二）

女（後付の三）

諸名家并に各從軍記者分著

訂正 日露戰史

第四卷既成發行

(後付の四)

全部四卷—洋裝四六二倍判

總クロース背皮金文字入製本頗堅牢

紙數各七百二十頁以上

定價一冊金壹圓貳拾錢

小包料金拾六錢

●日露戰鬪地圖—諸將軍題字—戰況實景寫眞畫挿入

●第一卷 ▲第一 日露初期の海戰 ▲第三 第一軍初期の活動 ▲第四 第二軍初期の活動

●第二卷 ▲第五 大孤山上陸及第四軍初期の活動 ▲第六 第三軍初期の活動 ▲第七 遼陽の包圍攻擊 ▲第八 沙河の大會戰

●第三卷 ▲第九 旅順要塞攻陷戰 ▲第十 奉天大會戰前記 ▲第十一 奉天大會戰後記 ▲第十二 北征陸海軍戰記

●第四卷 ▲第十三 海軍第一期作戰の成功 第一編 遼東半島の封鎖 第一章 總説 第二章 旅順口の強行偵察 第三章 大連灣の掃海 第四章 陸軍掩護 第五章 通信遮斷 第六章 敵の掃海事業 第二編 旅順艦隊の逸出 第一章 六月二十三日旅順港外の海戰 第二章 封鎖至嚴、敵艦隊苦悶 第三章 八月十日黄海大海戰 第四章 逸竄露艦の處分 第三編 浦鹽艦隊擊歷 第一章 總説 第二章 封鎖宣言前の姿勢(敵の變行、我の攻擊) 第三章 玄海の悲劇 第四章 韓海の陰雲 第五章 太平洋上の敵艦隊攻擊 第六章 蔚山沖の大海戰 第四編 敵國東洋艦隊の全滅 第一章 大戰後彼我對抗の姿勢 第二章 陸戰重砲隊の組織 第三章 攻圍軍の第一二回總攻擊 第四章 陸戰重砲隊の擴張 第五章 陸戰重砲隊の敵艦驅逐策 第六章 攻圍軍の第一二回總攻擊 第七章 海陸總攻擊と陸戰重砲隊の掩護 第八章 攻圍軍の第三回總攻擊 第九章 二零三高地の占領と戰局の大發展 第十章 セバストポリ擊沈 第十一章 敵艦隊兩軍巨砲の威力 主力の殲滅 第十二章 殘敵の處分 ▲第十四 日本海大海戰 第一編 海戰前記 第一章 露艦隊東航の前半程 第二章 露艦隊東航の後半程 第二編 海戰本記 第一章 二日間の激戰 第二章 各艦の戰況 第三編 海戰後記 第一章 聯合艦隊の凱旋 第二章 觀艦式 第三章 佐官以上の殊勳者 第四章 日露聯合艦隊の組織 第五章 波羅的艦隊の末路 第六章 日本將校の海戰談 ▲第十五 戰時の外交 第一編 交戰中の外交方面 第一章 日露兩國の外交態度 第二章 日韓關係の改造 第三章 戰爭と關係したる國際問題 第四章 局外諸國の向背 第二編 講和の顛末 第一章 講和論の由來 第二章 米國大統領の提議 第三章 會商地及兩國全權委員 第四章 講和談判の經過 第三編 三箇の新協約 第一章 日英新協約 第二章 日韓新協約 第三章 日清新協約 ▲第十六 戰時の後方勤務 第一編 通信機關 第一章 電信及電話 第二章 軍事郵便 第二編 輸送機關 第一章 鐵道隊の變遷 第二章 輕便鐵道の敷設及改築 第三章 鐵道作業の困難 第四章 運送船 第六章 輜重輸卒及補助輸卒 第三編 經理 第一章 戰時財政の運用 第二章 軍用手票 第四編 衛生業務 第一章 日本赤十字社の功績 第二章 敵の傷病兵及俘虜待遇 第三章 日露戰役の衛生業務 第四章 戰地の救護班及海上勤務 第五章 患者の輸送 第五編 國民の後援及外人の幇助 第一章 篤志看護婦人會 第二章 外人の幇助勤務 ▲附錄 ○黄海及蔚山沖海戰參加艦艇及重要人名表○帝國海軍公報○日露兩軍公報○外交公報○中立問題に關する米國政府の聲明○マハン大佐の海戰意見○日本海海戰詳論○露艦隊大敗の眞相○東郷提督の戰術○朝鮮海峽の海戰○曠古の大勝○日本海海戰の教訓○露國戰艦顚覆の原因○英米輿論一斑

東京日本橋區本町三丁目 博文館

學生座右の銘

東京高等師範學校長
孔子祭典會委員長
文學士 嘉納治五郎君序
學習院教授兼東京
高等師範學校講師
文學士 有馬祐政君編

孔子言行錄

全一冊

洋装三六判總クロース
美本紙數四百八十頁
口繪孔子尊像子思顔子曾子像
正價金六拾五錢
小包料八錢

時運の推移、社會の趨向は、篤學謹厚なる有馬文學士をして本書を成さしむ、文辭簡潔にして意味深長、眞に大聖の音容に接するの想あり、附するに諸弟子及子思の言行錄を以てし、一々詳密なる註釋を施して立ろに領解せしむ、精神の修養に最上の資料たると共に、文字の習熟に最良の指針なり、此二方面に志ある人は必ず座右に供すべき無比の寶典なり、

前文部次官 澤柳政太郎君序
學習院教授兼東京
高等師範學校講師
有馬祐政君編

孟子言行錄

全一冊

洋装三六判總クロース
美本紙數六百九十四頁
口繪聖堂に安置せる孟子肖像
正價金九拾錢
小包料八錢

曩きに孔子言行錄を著はし經書研究上に精神修養上に偉大なる鴻益を學生間に與へたる有馬文學士は是れと同一なる主趣に依り孟子を直譯し且つ解註を加へ題して孟子言行錄として之を公にせり惟ふに孟子は文辭秀逸議論快利誠に千古の大文字なり近時の銷沈せる士氣を作興し冗煩なる文詞を矯正せんには本書の甚だ必要なるを知らん

販賣用電話本局二六二〇番　東京本町　博文館　振替口座東京二百四十番

月分新派句選

内藤鳴雪翁題句　巖谷小波君序文
結城素明　齋藤松洲　兩畫伯插畫
有田風蕩之編輯

内容

▲特色なきものは平凡也▲

▽第一　節物時令を新暦十二ヶ月に分配し其所屬を明にしたること
▽第二　題名をいろは順に排列して索引に便ならしめたること
▽第三　題名に傍訓を配して初心者に讀み易からしめしこと
▽第四　太陽暦に節物を配したれども陰暦即ち舊暦を便とするものの爲めに舊歳事記に據れる分屬を題名下に注したること
▽第五　新題並に多く用ゐられざる題は成るべく之を收容し後進の不便を避けしむることを力めしこと

▲現代俳句の精華▲

全一冊四六判横綴
石版表紙洋製美本
紙數六百〇四頁
正價金五拾錢
郵稅六錢

東京　博文館　本町

この一巻を携ふれば
俳句
は何の苦もなくできる

内藤鳴雪翁題句
中村不折君插畫

俳諧例句 新撰歳事記

今井柏浦君著

本書の用途

▼…俳句の題を案ずる時、其題が四季の何れに屬するかわからぬ時…▲
▼…又た其題が天文に屬するか地理に入るべきかの疑義ある時…▲
▼…又た其名詞がわかつてゐても其意義形態性狀等のわからぬ時…▲
▼…又た其題の文字がわかつてゐても其音訓の讀み方を知らぬ時…▲
▼…俳句を作るときに題の説明と古人の句を對照して參考とする時…▲

總クロース
摸範的美本
六百二十頁
△正價▽
七拾五錢
（郵稅六錢）

（後付の六）

痴遊 伊藤仁太郎君講演

明治元勳 井上侯實傳

目次

⊙緒言⊙御殿山燒打⊙洋行の內命⊙横濱を出帆⊙渡航の苦心⊙倫敦⊙歸朝⊙和議の不調⊙犬武士⊙窮餘の和議⊙意外の遭難⊙高杉の再起⊙兒玉の懺悔

全一册

洋裝四六判
紙數二五二頁
正價參拾五錢
郵稅六錢

小山內薫君著

演劇新潮

俳優は讀め！興行主は讀め！好劇家は讀め！

この書は學問の書に非ず、議論の書に非ず、研究の書に非ず。舞臺の組織より俳優の技藝に及び、俳優の技藝より脚本の解剖に及び演劇一切の實際的新思潮を平明なる文章もて叙せる趣味の書なり。

年若き著者が鬱勃たる演劇革新の心願は十數葉の美しき挿畫と共にこの書の紙間に收めらる。

全一册

洋裝四六判總振假名
紙數三百九十頁
正價金五拾五錢
郵稅六錢

東京本町 博文館

女（後付の七）

女(後付の八)

胃活

右は明治二十七八年戰役後我國民の體格に付て余等大に感ずる所あり即ち日本人の普通病なる胃病患者を救濟する目的を以て學理と實驗とにより共同研究の結果發見したる胃病の新藥にして效能確著誠に驚くべし之を廣く天下に弘布し世の胃病患者を救はゞ實に大日本國民の幸福なり

陸軍軍醫監正五位　長瀬時衡　印
陸軍藥劑監從六位　石塚左玄　印
海軍軍醫少監從六位　日向次作　印
海軍大軍醫正七位　横井太郎　印
陸軍大軍醫正七位　門倉梅三郎　印

◉胃弱家の根本療法……胃活或は胃活錠は根本より胃の疾病を治し消化液の分泌を促し胃の運動を盛にし以て造化の妙機たる消化機能を活潑ならしめ之をして食物の消化を完全にし鹽酸の作用に依て胃中に入り來る細菌を滅殺せしむる力あるものにして一時的消化藥其他の通常健胃藥と異れり

理想的



健胃劑

(注意)

◎醫藥用胃活錠……は胃活に二三の新藥を加味し目下歐米に賞用せられつゝある新式の錠劑にして重に醫藥用として作られしが今回一般の需に應ず而かも其體裁高尚優美にして飲むに水を用ゐず携帶に便なり

胃活と胃活錠効能

◎溜飲◎胃弱◎慢性胃弱◎胃加答兒◎消化不良◎胃痛◎食慾不進◎宿醉◎食傷◎腸滿◎胸痞◎胃痙等一般の胃病に著大の効能ある靈藥なり論より證據二三週間分を試めし玉へ

▲定價▼

胃活	胃活錠
壹圓	壹圓
六拾五錢	五拾錢
四拾五錢	貳拾錢
二拾五錢	

●全國無郵送料●

女學世界

第九巻第参號

（明治四十二年二月一日發行　毎月一回一日發行）

（明治卅三年十二月廿五日　第三種郵便物認可）



（定價金貳拾錢　郵税貳錢）

VOL. IX.　（東京市日本橋區本石町三丁目博文館發行）　No. 3